

第2章 最初の赴任地——鳳翔での3年間

[第2章その一]

嘉祐5年 [1060年]、蘇軾25歳。

嘉祐6年 [1061年]、蘇軾26歳。

■ 【02-1-001】 賀歐陽枢密啓

【解題】前の章で見たように、蘇軾は、父の蘇洵、弟の蘇轍とともに嘉祐5年 [1060年] 2月に都に到着し、実際に官職を授かるための審査を受けた上で、兄は河南府福昌県主簿、弟は河南府澠池県主簿の職を授かった。都からさほど遠くない中都市の事務局長のような職務で、それは科擧の最終試験の成績に見合ったものであったのだが、歐陽脩や楊旼らは、そのようなありきたりの処遇では2人には役不足で、特別試験の制科を受けさせて、もっと高いレベルからスタートさせるべきだと考え、制科の実施を朝廷に働きかけた。楊旼は歐陽脩と近い関係にある朝廷の高官で、2人のために何かと尽力してくれた。2人は任地に赴くことを辞退し、事態の推移を見守ることにした。楊旼は兄弟のために制科を実施すべきだとする根拠として、2人が書いたものを朝廷に提出した。蘇軾は50編の小論文を出し、それは服喪中に書いた『春秋』に関するものであったと推測されている。こうした運動が実って、翌年の秋に試験が行われることになった。その一方で、4月8日に恩人の梅堯臣が都で亡くなっている。梅堯臣は官員としては低い地位に留まり、都の片隅で質素に暮らしていたので、歐陽脩を始めとする著名人が続々と弔問に訪れるのを見て、近隣の人々は何かと驚いたと伝えられている。兄弟は都の南側の懷遠駅に住み、家に閉じこもって試験の準備に専念した。父は息子たちとは一時期離れて郊外の雍丘に住んだようで、8月に秘書省試

校書郎こうしやうろうの官を授かった。欧陽脩ちやうべんや趙抃ちやうべんの推薦によって特別に官職を与えられたのである。趙抃は父子にとっての恩人として後にしばしば蘇軾の詩文に登場する。欧陽脩は11月に枢密副使すうみつふくしに任命された。国防副大臣のような重職である。この項の表題に掲げたのは、枢密副使就任の報せを聞いての祝賀状で、伯父の蘇渙そかんのために代筆したものであるとされている。祝賀状は一定の形式に則って重々しく書く必要があり、蘇渙は蘇軾が書いた方がより立派なものができると考えたのだろう。形式ばった荘重な文章を訳すのは訳者の能力を超えるので、一部だけを見ておく。なお、父の蘇洵もこのときに祝賀状を書いている。

【訳文】

伏して審つまびらかにいたしましたのは、王庭おうていにおいて御恩を拝し、兵府へいふを署事しよじされますとのこと。[「伏して審らかにする……」]という書き出しは祝賀状の決まった形式で、蘇洵の書き出しは、「伏審光奉帝詔、入持国枢」である。要するに、欧陽脩が枢密副使すうみつふくしに任命されたことを聞いたと冒頭に記しているのである]

これは、儒者にとって大きな誉れであるだけでなく、実に天下にとって特別に祝うべきことでもあります。…[以下に、国の機構は軍事を司る部門と、民事を司る部門に二分され、文官が軍事部門を指揮するのは容易ではないのだが、欧陽脩であれば文武の二職を兼ねることができて、人々を喜ばせるであろうと述べる]……

私は遠く離れた郡を守っておりますが、いま都近くたいけんに寓居し、大賢たいけん〔欧陽脩のこと〕が登用されましたことを窺したいふい、士大夫が歡ぶのに率先して、そのお祝いを申し上げるものであります。

【補足】[最後の一文は、蘇渙そかんがこのとき衡州知事こうの任務を終えて、次の職務を授かるまでの間に都に滞在していたことを示している。蘇軾が伯父に会ったのは、恐らく13年ぶりで、伯父と次のような会話をかわしたと伝えられている。蘇軾が、政治の要

誦を伯父に尋ねると、伯父は、「そなたが書いた『^{けいしょうちゆうこうろん}刑賞 忠厚論』[→作品番号 01-2-012]の通りにすればよろしいであろう」と答えた。蘇軾は、「私は文章を書くことな
らできますが、政治の実際はまだ学んでいません。どうしたらよろしいのでしょ
うか」。「そなたは試験の場で一つの論文の題を与えられ、すぐにそれに対処し、これ
よいと考えがまとまったところで筆を下し、それがついに佳^よい文章となった。政治
もそれと同じだ。ある事柄が目の前に持ち上がって、まだ何が問題であるかを見破
ることができていないうちは手を下してはならない。すっかりわかって後に実行する
なら、錯誤が生じたりはしないのだ」]

■ 【02-1-002】次韻水官詩

【^{かゆう}解題】嘉祐5年は勉強に明け暮れるうちに終わり、嘉祐6年も秋まで勉強に専念
した。5月に、^{せい か}制科を実施するよう働きかけてくれた楊^{よう}旼^{でん}が^{りゅう と かくちよくがく し ち かんいん}竜^{りゅう}図^と閣^{かく}直^{ちく}学^{がく}士^し知^ち諫^{かん}院^{いん}に昇任
すると、蘇軾は祝賀状を書いて贈った。7月、父の蘇^そ洵^{じゆん}は^{は ぶんあん しゅ ぼ}霸州文安^{ぶんあん}県^{けん}主^{しゅ}簿^ぼを授かった。
実際はそこに赴任するのではなく、^{そうしよ}宋初^{れい}以来の礼の変遷についての記録をまとめる仕
事に携わることになった。同じころに、伯父の蘇^そ洵^{かん}は^り利州知事として赴任することが
決まり、蘇軾兄弟は都の西郊外で伯父を見送った。蘇洵には人を引きつける独特の魅
力があつたのだろう、都での交遊^{じょういん}範囲^{はん}はますます広がり、^{かいれん}淨因寺^{じょういん}の^{だいかくぜんじ}懷璉^{かいれん} [大覚^{だいかく}禪師^{ぜんじ}]
という名高い僧と懇意となり、^{とう}唐の時代^{えんりつほん}に^{えんりつほん}閻立本^{えんりつほん}が描いた画をプレゼントされた。そ
れは水官^{すいかん} [水神]を描いた画で、国宝級といってよいほどに価値あるものだった。蘇
洵はその謝礼として一篇の詩を作ったのだが、さすがにそれだけでは釣り合わない
と思ったのだろう、蘇軾にも同じ韻で詩を作らせて謝礼を2倍にした。蘇軾の詩には短
い序文がある。

【訳文】

じょういん じ だいかくぜん じ かいれん えんりつほん すいかん へんれいこう そじん れいしょ
 浄因寺の大覚禪師懷璉は閻立本の水官の画を編礼公[蘇洵のことで。礼書の編集に当たって
 いたのでこのようにい]に贈られた。編礼公はその謝礼として詩を贈り、私にも詩を作るようにい
 った。私は頓首再拝して次韻し、二篇の詩を録して一卷として大覚禪師に献じた。

こうじん ことわり
 高人[自然の理に通じた人]は画を学ばずとも、
 天性のままに絵筆を用いることができるのだろう。

泳ぎの上手な人は、
 水というものをよく知っているので、
 初めて船を漕いでも巧みに操れるという。

えんりつほん
 閻立本は元来は儒者で、
 文章の妙に通じた先人を慕い、
 画はたまたま戯れに始めただけだった。

好んでいつしかやめられなくなり、
 筆の勢いは翻る風のようにあった。

とう たいそう
 唐の太宗皇帝はあるとき池に舟を浮かべて遊び、
 珍しい水鳥が水に戯れるのを見て、
 一人に詩を作らせ、閻立本に画を作らせた。

閻立本は家に帰ると、子に向かっていった。

「私は学問をした人間でありながら、

今日は画によって天子のお召しを受けた。

おまえたちは決して私のように画を習ってはならない」

時に太宗皇帝は四方の平定を成し遂げ、

南の国からは白い雉が、西の国からは青い蓮が献上された。
そのときのありさまを閻立本は水神の集まりになぞらえて描いた。
竜にまたがって天に昇ろうとする神が皇帝、
大亀の背に乗って左右に従うのが大臣、
熊や豹のような面々は異国からの使者だ。
唐の太宗皇帝の功績はまさしく神のようであって、
後世に並ぶ者がなかった。
しかし、その唐朝にも亡ぶときがきて、
あまたの盗賊が国土を偷み合い、
都は三日間の猛火に包まれ、皇室の至宝は煙と消えた。
天の神には天官、地官、水官がいて、
閻立本の画は水官を描いたものであり、
しかも神のわざによるといってよいものであったから、
天もこれを焼かせてはなるまいとしたのだろう、
火より脱出させ、東に出て、いまや宋の都にきたのである。
都の貴人はこの画を乱かり、
あの手この手で大覚禪師に話をもちかけた。
高僧は一切心を動かすことなく、
我が父が頂戴することになった。
あまたの宝物を積んだところで高僧のお心にかなうべくもないので、
父は一篇の詩をもって返礼とし、
画の前に清らかな紙片を置かせていただくものである。

【補足】[このころ兄弟はひたすら勉強に励んでいたのだが、一説によると、試験の

当日が迫るなかで、蘇轍は病に倒れ、一時期は受験をあきらめかけたという。李廌^{り たい}の随筆『師友談記』[→作品番号 01-2-005] がそのことを伝えている]

【訳文】

李廌^{り たい}：『師友談記』^{し ゆうだん き}

東坡^{とう ぱ}[蘇軾]はこのようにいわれた。

「弟とともに制科の招集^{せいか}に応じて都に行く、試験を受けようと集まってきた者が大勢いた。ある日、宰相^{かんこう かんき}の韓公[韓琦]が客人と話してこのようにいわれた。『蘇君兄弟がいて、敢えて兄弟と競おうとする者がいるのはいったいどういふものだろうか』。この語が伝わると、十人中九人までも試験を受けずに帰ったのだった。

東坡はこのようにもいわれた。

「国の定めとして制科の試験は八月中旬に行われるとされていた。弟はまさに試験を受けようとしていて、ある日、突然病に倒れてしまった。弟は自分の状態から判断して、試験には間に合わないと考えた。韓公はそのことを知ると、すぐに朝廷にこのように奏上された。『今年、制科の受験生を招集したのは、ただただ蘇軾と蘇轍の声望が高いからであります。いま聞けば、蘇轍はたまたま病気に伏せて試験を受けられそうにないとか。この兄弟の一人が受験できないとなると、衆望に反することになりましょう。病の癒えるまで試験を延期するのがよろしかろうと思います』。お上はそれをお許しになった。韓公はしばしば人を使わして弟の様子を尋ねられ、もう万全であると聞かれると、試験を実施した。こうしておよそ通例よりも二十日間も延期したのだった。これより制科は九月に実施されるようになったのである。

このことは、宰相^{りよ きちゆう}の呂微仲が、「制科はどうして秋の末に行われるようになったのでしょうか」と尋ねたことから、東坡が話したものだ。このように聞いて、呂微仲は「韓公はまことに賢人でありましたな。深く慕わしく思います」と、いった。

【補足】[蘇軾自身がこのように語っているとのことであるから、事実であったと思

ってしまうのだが、考証家はかなり疑わしいとしている。次の項目で見ると、蘇軾兄弟が受けた制科せい かはいつも通り8月に実施されている。蘇軾は座談の名手で、聴衆の反応を見て、話を面白く飾ることがよくあったようだ。科挙の試験で捏造まがいのことをしてしまうくらいであるから [→作品番号 01-2-012]、座興で話に尾緒を付けるくらいはお手の物であったのだろう。それを聞いた人が、さらに面白く味付けして記録したということも大いにありうるだろう。蘇軾にまつわる楽しいエピソードはそのようなプロセスを経て伝えられてきたものであるので、安易に鵜呑みにするわけにはいかない]

■ 【02-1-003】 形勢不如徳論

【**解題**】 8月17日に、呉奎ご けい、楊旼よう でん、王疇おう ちゆう、王安石おう あん せきが試験官となって、秘閣ひ かくにおいて制科せい かの一次試験が実施された。そのときの科目名は賢良方正能直言極諫科けんりょうほうせいのおちよくげんきよくかん かであった。6篇の論文が課せられ、王介おう かい、蘇軾、蘇轍の3人が合格した。ここに訳すのはそのうちの1篇で、「形勢けいせいは徳とくに如しかず」[戦略的に見て、地理的、社会的な形勢が最大の決定要因ではなく、徳こそが最も重要である] というテーマについて論じたものである。

【**補足**】 [以下に制科せい かで蘇軾が書いた論文を幾篇か読んでゆく。いずれも我々にとっでは、訳者の力不足もあって、読みやすいものではないので、読み飛ばしていただいて少しもさしつかえない。それでも敢えて訳文を掲げるのは、儒者としての蘇軾の思索の在り方がここに端的に表れていると考えるからである]

【訳文】

「天の時あまの時は地の利ちのりに及およばない。地の利ちのりは人の和ひとのわに及およばない」

と(『孟子』)にあります。これは、形勢は徳に及ばないということを行ったものです。

呉起[戦国時代の軍略家]は、

「(国の守りの要は)徳にあつて、(地形の)險しきではない」

と、いいました。

司馬遷は、いくら形勢[地理的条件に加えて、情勢の流れも含めている]が強かろうとも、仁義を根本としなければならない、と述べています。

儒者が兵[軍事]を議論するときには、必ず以上の言説をもとに据えます。ここでは、遺された問題を拾って、この議論を補いたいと思います。

形勢の説には二つあります。

第一は、人が形勢をつくるということで、三代[夏、殷、周の三王朝]において諸侯を封じたことがその例であります[「封じ」とは、領土を与えて領主にする事]。天子と天下との繋がりは、微妙かつ危ういものです。歎んで一つに合して、去ることがないときに、君臣の関係が成り立ちます。臣が善いことをすれば君は賞し、悪いことをすれば罰し、君が与える米穀によって臣は食べ、臣の功力は君のための役を為します。このようなときに、君臣の勢いははなはだ強固であります。しかし、ひとたびその関係が崩れて、臣が去って返らなくなるなら、それは寇仇の間柄となります。強者が起つて君は攻められ、智者が起つて君は謀られ、君はあたりを彷徨して四方を顧みてもはや何を恃みとしたらよいかわからなくなってしまうのです。このようなときに、君臣の勢いははなはだ危ういのであります。先王[三代の聖君主]は君臣関係の固さも恃むには足りないものであつて、その危うさはゆるがせにしなければならないことを知つて、諸侯を封じて、親族と賢臣を相互に混せて配置し、天下の形勢の在り方を示したのでした。(晋の時代に)劉頌は「よく国を為す者は、勢いに任せて、人には任せません。勢いに任せるとは、諸侯を封じることで、人に任せるとは郡県に賢臣を派遣することです。賢臣によって郡県を厳しく管理することは、小さな政の理であつて、大勢を危うくします。諸侯に邦の統治を任せることは、多くの相違が生じるように見えて、遠く固い慮りがあることなのです」と、いいました。以上が、人をもって形勢とするということであ

あります。周が衰えたのは、諸侯が^{しろう}乱いままに振る舞っても制御できなくなりましたからで、平王以^{へいおう}降の時代でも、諸侯が王室から去ったわけではありませんでした。徳が衰えて、人の形勢をもってしてももはや救えなくなったからであつたのです。

第二は、地が形勢をつくるということで、秦、漢の都を(自然の要害に囲まれた関中にある長安に)建てたことがその例であります。秦が天下を取ったのは、天下の人々^{しん かん}が心服したからではなく、臣として服従させたからでした。富で圧倒し、力で撃ち、それでも服従しない邦に対しては、詐術をもってその君を囚らえ、その将を虜とするなどして、^{とりこ}かるうじて天下を得たのでした。秦の臣下として朝貢した者も、かつて戦場に骨をさらした者の子孫でありました。これでは長く泰然としていられるはずがなかったのであります。漢が天下を取りましたのは、秦ほどには暴力的ではありませんでしたが、仁義に基づくものでは決してありませんでした。この当時^とにあつては、諸侯に大国を与えるのでなければ、功臣の望みに応えることができませんでした。諸侯が大きければ、都は安らかではいられません。その勢いとして、地理的に強固な関中をもって天下に臨むしかなかったのです。堯、舜、湯、武のような^{ぎょう しゆん どう ぶ}聖天子[つまり先王]といえども、その徳によって一日で天下の信を得ることはできません。荀子^{しん}が^{じん し}いように、天、地、人の三者が合しなければならぬのです。秦や漢は地をもって形勢としたのでしたが、その衰えたときには、大臣は勝手に命令を出し、危うさはその内側から起つたのであつて、関中の形勢をもってしても国の衰えはど^ううすることもできませんでした。徳が衰えて、地の形勢をもってしてももはや救うことはできなかったのです。三代、秦、漢の君が、その後世を慮^{わづらい}て、患のための備えをした点では、十分ではなかつたということはありませんでした。しかし、衰亡に至つたのは、常に慮りの外から出たのでした。これこそ形勢は徳に及ばないということの明らかな証ではないでしょうか。

『易経』に「神にして之を明らかにするは、其の人に存す」[神妙な理が明らかになるのは、人が存在することによる]とあります。人が存在するなら徳が存在し、徳が存在するなら、諸侯がなくても安らかであり、障壁がなくても固いのであります。

【補足】[この論文を読んで、なるほど与えられた論題に対して明快に答えていると

納得するのは、我々にとってはかなり難しい。我々に理解できるのは、論題に関連する古典が適宜引用されていること、議論の道筋が整理されていること、そして、道徳性を重んじる儒学の伝統に則っていることなどであろうか。採点基準もたぶんそのようなどころにあったのだろう]

■ 【02-1-004】 孟子論

【**解題**】^{せい か}制科の^{おうかい}一次試験に合格した王介、蘇軾、蘇轍は、8月25日に^{そうせい でん}崇政殿において、^{じんそう}仁宗皇帝の御前で制科の最終試験を受けた。歴史と政策を論じた25篇の小論文を提出し、^{こしゆく}胡宿、^{ちんこう}沈遯、^{はんちん}范鎮、^{し ぼ こう}司馬光、^{さいじょう}蔡襄が試験官として審査した。その結果、蘇軾は三等で、^{おうかい}王介と蘇轍は四等で合格した。制科の最終成績は一等から五等までであって、四等以上が合格で、慣例として一等、二等を付けることはなく、特な優秀な人だけが三等になった。^{そうだい}宋代を通して三等で合格したのは4人だけで、蘇軾の前には^こ呉育がいただけだった。この制科の試験によって、蘇軾はエリート中のエリートであると認定されたのである。25篇の小論文から幾つか選んで読んでおこう。最初に見るのは^{もうし}孟子についての論文。孟子といえは、^{こうし}儒学の本道を守って、孔子の学問を継承発展させた人として知られているが、孟子が高く評価されるようになったのは、ちょうど蘇軾が活躍し始めたころからであった。

【訳文】

昔、^{こうし}孔子は^{えい}衛の国から^ろ魯の国に帰ると、^{さんだい}三代から伝わる旧聞を^{れい}網羅して、礼についての細則、いわゆる^{きょうれいさんびやく}「経礼三百、^{きょくれいさんぜん}曲礼三千」について研究しましたが、その説を究め尽くすことはできませんでした。

孔子は弟子の^{しこう}子貢に、

「そなたは、私のことを、たぐさんのことを学び、それを識る者たと思ukaiり」

と、尋ねました。子貢が、

「はい、そのように思います。違うのでしょうか」

と、答えると、孔子は、

「違うのだよ。私は一をもって貫けななのだ」

と、いったのでした。

天下の人々は、孔子のこの言葉に従うのは非常に難しいと受け止めました。孔子が何をもって貫いたのかを知ることができなかったからです。堯、舜、禹、湯王、文王、武王、周公が定めた法度、礼楽、刑政に始まって、当世の賢人君子による書物もあれば、あまたの工の技芸もある上に、中国国内だけでなく外国までも含めたなら、とにかくたくさんたぐひの事柄がありすぎて、とてもすべてに考察を巡らせられるものではないのですが、それらの全てを胸の中に並べて、乱れることなくすっきりと現れ出るものこそが、まさに貫く一であるのでしょう。広く学んで乱れず、深く思っても惑われない、それは天下の至精しせいでなければとてもできないことなのであります。

しかしながら、そもそも六経りくけい〔儒者が特に重んじる六種の古典〕を研究して、『詩経』や『春秋』に至ると、聖人の道の始終、本末には一つの条理が具わっているとわかってきます。王化おうか〔天子の徳による教化〕の根本は、天下の人が行いやすいところから始めるということにあります。天下の人はもとより父子の関係といふものがあるのを知っています。父子が互いに害そごない合うことがなければ、すでにそれは十分に孝なのです。天下の人はもとより兄弟の関係といふものがあるのを知っています。兄弟が互いに奪い合うことがなければ、すでにそれは十分に悌ていなのです。孝と悌があれば王道の備えとしてすでに十分であって、それは深遠で見るのが難しく、苦勞しても行うのが難しいような事柄では少しもないのです。それで、『詩経』が教えているのは、歌ったり舞ったりして楽しみつつ、万事に及んで正しさを失わないようにさせるということだけであるのです。しかしながら、聖人が甚だ畏れていたことがありました。ひとたび容かたちが失われると礼は廢れてしまい、ひとたび言ことばが失われると義は亡んでしまいます。君臣が互いに攘みだし合い、上下が互いに残そごない合うようになると、天下は大いに乱れて、初めから道はなかったかのようにな

ってしまいます。それで、『春秋』は事件の細事にまで立ち入って深く疑わしいことを究明して、決してしてはならないことをはっきりとさせたのでした。『詩経』を見なければ王道がたやすいことはわからず、『春秋』を見なければ王政が難しいことはわからないのです。

孔子が亡くなってから、もろもろの弟子はそれぞれに聞いたことを書き記し、そのどれもが孔子の学の源流を得たものではなく、それらの主張には最も大切なことが欠けていました。孟子^{もうし}だけは、『詩経』に深く通じ、『春秋』をよく理解していましたので、孟子の説くところは、まことに大まかなところから始まりながら、極めて精緻なところに至り、天地全体に満ちて四海を自在に覆うほどに広大で、しかも細微に至るまでびたりと合っているのです。広くて漏れがなく、緻密で揺るぎがなく、その中に必ず守るべきことがあって、後の世に匹敵するものを見ないのであります。

孟子はこのようにいいました。

「人を害おうとは思わない心を大きくして行くのなら、仁はそれでもう十分なのである。盗みしようとは思わない心を大きくして行くなら、義はそれでもう十分なのである。言ってはならないようなことを言うのは、言^{ことば}で盗^とるものである。言うべきことを言わないのは、や^{ことば}り言^{ことば}で盗^とるものである。どちらもつまり盗みと同じなのである」

盗みをしないのなら、義はそれで十分なのです。言ってはならないこと言い、言うべきことを言わないのは、その罪は盗み以上のものになるのです。

ですから、私は、孟子について、まことに大まかなところから始まりながら、極めて精緻なところに至り、天地全体に満ちて四海を自在に覆うほどに広大で、しかも細微に至るまでびたりと合っていると述べたのです。後世の孟子を観る者は、必ずここを見なければならぬのであって、ここを観れば十分なのであります。

【補足】〔(1) この小論文は、孔子^{こうし}の後の儒者として孟子^{もうし}が最も偉大であると称えているのだが、その論理構成は我々にとって必ずしもわかりやすいものではない。最初に「一^{いち}をもって貫く」という孔子の言葉を掲げて、その「一^{いち}」を孟子が明らかにして

いと論述するなら納得しやすいのだが、それでは当たり前すぎるのだろう。つまり、身近で行いやすところから始めて天下の統治に及ぶのが儒学の基本原理としたのが孟子であると素直に説くのでは、書く者も読む者もさほど楽しくないのだろう。十分に教養がある人々にとっては、丁寧に説き尽くされるよりも、思惟を飛翔させる刺激を与えてくれるものの方が喜ばれるのだろう。蘇軾の文章にはそのような傾向があるといえるだろう。(2) 初めのあたりで、堯、舜、禹、湯王、文王、武王、周公と列挙しているのは、儒学が伝統的に特に重んじてきたいわゆる聖人〔先王〕の面々である。堯、舜、禹は古代の伝説的な聖天子で、堯も舜も自分の息子ではなく、賢人を選んで後継者とした。禹は洪水を鎮めて国土を安全にした人で、これ以降は世襲が一般的になる。湯王は殷王朝を開き、文王と息子の武王は周王朝を開いた。周公〔周公旦〕は武王の弟で、武王の没後に、武王の息子を補佐して天下を治めた。この7人の名は、蘇軾の詩文に頻繁に登場する]

■ 【02-1-005】 樂毅論

【解題】これは、中国古代の戦国時代〔秦による全国統一前の分裂期〕の武将樂毅を論じたもの。樂毅は小国の燕の昭王を助け、隣の大国の齊に対して軍事的攻勢をかけ、あと一步のところまで追いつめる活躍をした。蘇軾の原文は種々の歴史的事実を前提として書かれているが、ここの訳文では大意がわかるよう適宜補足した。

【訳文】

為政者が徳をもって天下を治めるのを「王道」といい、武力をもって治めるのを「霸道」といいます。「王道」を用いて「王者」になった例としては古代の三人の王が有名であり、「王道」を用いることができなくて「覇者」になった例としては春秋時代の五人の王が有名です。

ある人は、「王道を用いようとするならば、もしそれが成功しなかった場合でも、一步下がって覇道を成し遂げることができるであろう」と論じています。本当にそうなのでしょうか。五人の覇者がもしも三人の王者の真似をしていたなら、ただ単に大失敗するだけだったのではないのでしょうか。

私が考えますに、王道というものは小さく用いることはできないものなのであります。大きく用いれば王者になりますが、小さく用いたならば亡ぶだけなのです。

昔、徐の国の僇王は、仁義を重んじて王道政治を志し、民衆を戦争に動員するのをためらいました。そのために、敵国の侵入を防ぐことができず、結局は国を亡くしてしまいました。宋の国の襄公も仁義を重んじて王道政治を志し、人の弱みに付け込むのはよくないことであるとして、戦闘の好機を自ら逃し、国の命運をかけた戦争で大敗してしまいました。

二人はなぜ国を亡ぼすような失敗をしたのでしょうか。二人が実際に行ったことと、二人が求めたものどがかけ離れていたからなのです。二人は王者であるとの評判を得たくて、王道を矮小化して用いただけなのです。天下の人々の評判を気にするのではなく、徳によって天下に正しい統治を及ぼせる者だけが、真の王者となり得るのです。

この二人とは逆に、王道などは念頭になかったけれど、剛毅にして果敢にも迷わず事を成し遂げた者がいました。その一例が范蠡です。越の国の王の勾踐は艱難辛苦の末に呉王の夫差を破りました。越王の軍に包囲された夫差は懸命に命乞いをし、越王は夫差を憐れに思い、赦してやろうとしました。そのとき范蠡は、呉王の使者を追い帰して軍を進め、夫差を自殺に追い込み、将来の禍根を絶ち切りました。もう一つの例が張良です。漢の高祖は、旗色が悪くなった項籍が戦闘を止めて東に引き上げようとしたとき、自分も戦闘を止めて西に帰ろうとしました。項籍と天下を二分することで満足しようとしたのです。しかし、張良は、「天が項籍を亡ぼそうとしているのです。いま急襲し、それを逃してはなりません」と言って高祖に戦わせ、ついに項籍を撃ち取って天下を統一しました。

この二人は、ちまちまとついに取れない仁義を守ることを、大きな成功を勝ち取ることよりも優先させはしなかったのです。

楽毅がくきはいかなる人物であったのでしょうか。戦国時代の英雄の一人であったといえるでしょう。しかし、王道が大きなものであるということを知りませんでした。王道を聞きかじっただけで、自分も使ってみようとしたがために、我が身を破綻させてしまったのです。

楽毅は、燕えんの昭王しょうおうが自分を全面的に信頼して用いてくれたことに応えようと、宿敵せきの斉国に攻め入り、五年にわたって敵地で戦い続け、斉国の七十余りの町を占領し、残る敵の拠点はニカ所だけとなりました。そのとき昭王が死に、息子けいおうの恵王けいおうが立つと、斉国の間者かんじやく [スパイ]は、「楽毅がたった二つの町をくずぐずいつまでも征服しないのは、斉の地で独立して王になる機会を伺っているからだ」との偽の情報を燕の国に流しました。もともと楽毅の存在を煙たく思っていた恵王とその取り巻き連中は、別の將軍を派遣し、楽毅を本国に召還しようとした。楽毅は帰国すれば殺されてしまうかも知れないと恐れ、隣の国に亡命しました。楽毅がいなくなると、斉国はたちまち息を吹き返し、占領されていた土地をこことく取り返し、昭王と楽毅の努力は虚しく消えてしまったのでした。

このことから、燕の恵王が愚かで、間者のいうことを信じたために、楽毅の事業は不幸にも成就しなかった、楽毅自身の軍事的失敗ではないと、多くの人は論じています。

私はそのようには考えません。もし昭王が死ななくて、間者が放った偽の情報が無効であったとしても、楽毅はきっと失敗したに違いないのです。どうしてそのように考えるのでしょうか。

第一に、燕国が斉国を併合することは、当時、秦国しんこく、楚国そこく、晋国しんこくなどの列強にとって利益にはなりません。燕国は百万と号する軍団を外に出して、残る二つの町を攻めて、数年かかって決着がつかずいました。大軍が長く外に出ていけば、国は疲弊し、必ず事を為そうとする者が内に出てくるものです。国の内側が乱れ、そこを外から攻めたならば、いかなる名将であっても防げるものではありません。

第二に、楽毅はわずか二つの町を、百倍の兵力で攻めて、数年がかりでも勝てずいたのは、その智力が不足していたからではありません。楽毅は聞きかじりの王道を用い、仁義の心で斉国の民衆を己に靡かせようとしたからでした。一気に攻めて斉国の民衆の怨みを買うことになるのを避け、王道を用いたとの評判を立てたいものだと思っているうちに、長い時間を使ってしまったのです。

楽毅のその考えには根拠がなかったわけではありません。斉国の民衆は、斉の昏王の横暴に苦しんでいたので、もしも楽毅が一度戦鬪を止め、法令を整え、税金を安く、斉の民衆を村落に帰還させて、安定した暮らしを保障したならば、一体誰が斉国ために立ち上がって戦おうなどと思ったりしたでしょうか。それこそが王道というものなのではないでしょうか。

しかるに、楽毅は百万の軍団を率いたまま、斉の民衆が心服するのを待ったのです。これは、斉国にじっくりと国土回復の謀^{はかりごと}を為させるための時間を与えただけであつたのです。

この当時は戦国の世でした。軍事的に強いところが弱いところを併呑することが普通に行われていました。楽毅が斉を攻めて滅したところで、誰も非難できませんでしたが、楽毅が王道を真似てみせたところで、それを褒める者は誰もいませんでした。

つまり、王道を大きく用いる者は王者になるが、王道の何たるかを心得ずに形ばかり用いたのでは、失敗しても覇者になるということではなくて、結局のところ王者にも覇者にもなれず、ただ天下の笑いものになってしまうのです。

【補足】〔(1) 蘇軾は歴史を論じるのを好んだ。この論文には蘇軾の史論の特徴がよく出ている。一般的に流布している見方に対して異説を提示し、それを意外にも儒学の基本的な理念に基づいて論証してゆくのである。独自の見解を提示できないのなら書く意味がないということであろう。(2) 楽毅の名は作品番号 01-2-013 ですで見ている。そこでは、楽毅が燕国を去ってからはもはや活躍できなくなってしまったことを惜しんでいて、それは楽毅に対するごく普通の見方であつた。蘇軾が歴史上の人物を詩文に引くときには、必ずしも同じ評価で一貫しているわけではなく、あるときには賞賛し、別のときには非難するということもある〕

■ 【02-1-006】 韓非論

【解題】 儒家から見て、仏教はむろんのこと、道家 [老子や荘子の学問] や法家も、

国の安定的統治を妨げる異端であった。これは韓非^{かん び} [韓非子^{かん び し}] を代表とする法家を批判した論文。徳治主義を唱える儒家に対して、法家は法治主義を唱え、緻密な法律と厳しい刑罰で民衆を縛ることによって天下は永続的に統治できるとした。その説を採用した秦^{しん}の始皇帝^{し こうてい}は天下を統一することに成功したのだが、あまりに過酷な法治主義は、どうせ刑罰によって殺されてしまうくらいなら反乱を起こした方がましだと、民衆を過激な行動に走らせ、秦は短期間で亡んでしまった。蘇軾はこの小論で、法家の淵源は道家にあったとする見方を提示している。

【訳文】

聖人が異端なるものを憎み、力を尽してそれを排除しようとするのは、異端が天下を乱すからではなく、天下の乱れから異端が出てくるからです[逆にいえば、異端をなくすには天下を乱さないようにすればよいのであって、それをするのが聖人であるという意味]。

昔、周が衰えたときに、(道家の)老聃^{らうたん} [老子^{らう し}]、莊周^{そうしゅう} [莊子^{そう じ}]、列禦寇^{れつごこう} [列子^{れつ し}]のような連中が出てきて、それぞれ虚無やら淡泊やらを論じて浮ついたとんでもないことを言い出し、とちらかったり逆立ちしたりして、ついにはあるはずもないところへと行ってしまいました。その道^{みち}による者は、雲をつかむような訳のわからないことになって、富貴の楽しみを忘れ、死も生も等しいとして、天下を治めるなどということは志したりしないで、世間から高く遠くに出て、心を自由に放ち、それによってもはや憂いはないとしたのでした。これは聖人の道ではないにして、それに意^{こころ}を用いたところで、天下にとって悪をなすものではありませんでした。

老聃^{らうたん}が死んで百年余り経って、(法家の論者である)商鞅^{しょうおう}や韓非子^{かん び し}が出て、書物を著し、天下にとって最も大切な^{けいめい}のは刑名[実体と名称を一致させること]を嚴重にすることでであると主張しました。秦はその説を用いて天下を統一したのですが、陳勝^{ちんしょう}と呉広^{ごこう}の乱によってたちまち亡んでしまいました。(法家のために)民衆の教化は行きわたらず、法ばかりがたぐさん残され、秦の王室は祀られず、そして天下は

害毒を被ったのでした。

後世の学者は、そのようになったのは申不害しんぶがいや韓非子の罪であることは知っていますが、老聃や莊周がそのようにさせたことは知りません。それはどういうことなのでしょう。

仁義の道は、夫婦、父子、兄弟が愛し合うところから生まれ、一方で、礼の法や刑罰の決まりは君臣が上下互いに畏敬し合うところから生まれたものであります。愛し合うなら忍びない心があり、畏敬し合うなら敢えてしないところがあります。敢えてしないところと、忍びない心が合わさって、その後には聖人の道がその中に存在することになるのです。

老聃や莊周は、君臣や父子の関係などは、川や湖に、ふわふわと浮き草が流れてたまたま出会っただけのものでしかないことを論じています。父であっても愛するまでもなく、君主であっても畏敬するまでもないのです。君主を畏敬しないで、父を愛さないのなら、仁は心に抱くまでもなく、義は勧めて行くまでもなく、礼もがく楽も教えるまでもないのです。仁、義、礼、楽はすべて用いる必要がないとして、天下を無に置こうとするのです。それで本当に天下は治まるのでありましょうか。商鞅、韓非子は、その説によっては天下を治められないと知って、しかし、天下を治めることを軽んじ、生と死は等しいとする術については老聃や莊周から得て、残忍な統治法を何ら疑いなく敢えて取ることにしたのでした。

もしも、人を殺すのも忍びないことではなく、仁はなすまでもないもので、仁をもって民を治めることはできないとするのなら、人を殺すのは不仁ではなく、不仁であっても天下を乱しはしないということになります。そうであるなら、天下を挙げて己の為すがままでよく、刑罰として刀でも鋸でも斧でも鉞でもまさかり施していけないものはないということになります。昔、孔子はその言葉でさえも軽々しく発することは一日もありませんでしたし、天下のどれほど小さなものであっても畏れるに足りないことはありませんでした。それがもはや天下でさえも小さなものと見なし、天下を治めるなど為すまでもないことだということに(道家とそれを受け継いだ法家が)してしまったのです。こうして、軽々しく人を殺すようになってしまったのでした。

司馬遷しばせんはこのように書いています。

「申不害は生真面目に名と実について論じ、韓非子は基準を設けて事情を分析して是非を明らかに

しようとし、その行き着く先は、残酷で恩愛の少ないところ到了ってしまった。そのもとは老子の道にあったのだった」

これがかつて読んだときに、物事は思いがけないところで感応し合うことになるのだと考えました。老聃や莊周の後に、その禍は申不害や韓非子となって現れたのです。三代の衰えから今に至るまで、聖人の道を乱した者の弊害はすでにたくさんあり、またそれが終わったわけではありません。ですから、またどこで何が為されるのかわからないのであります。

【補足】〔(1) 蘇軾は、老子や荘子の思想の強い影響を受けているが、儒者として公的な見解を述べるときには、ここで見るように道家を厳しく批判している。(2) 第3章で見るように、王安石が国政の大改革を提議すると、保守派の人々は王安石の改革案は法家の思想に基づくものであるとして激しく批判した。王安石の改革案は数々の新たな法を作り、それに基づいて種々の施策を実行して国家を富ませて行こうするもので、確かに法家思想に基づいて秦が採った富国强兵策と類似する面もあった。ただし、それは表面的なものでしかなかったのだが、保守派は執拗にステレオタイプの批判を繰り返したのだった〕

■ 【02-1-007】留侯論

【解題】次は留侯を論じたもの。留侯は先の「楽毅論」で少しだけ触れられていた張良である。張良は劉邦〔漢の高祖〕を助けて天下統一を成し遂げ、留の領地を授かったので留侯と呼ばれる。

【訳文】

古の豪傑とされるような士は、必ず人よりも勝れて堅い心根、すなわち「節」を備えていました。

人の情として我慢できないものがあります。匹夫〔並みの人間〕は恥辱を加えられたなら、剣を抜いて

起ち、身を奮って闘います。これは「勇^{ゆう}」というほどのものではありません。天下には「大勇^{たいゆう}」というべきものがあります。突然目の前で事が起こっても驚かず、理由なく恥辱を加えられても、大勇のある者は怒らないのです。心の内に抱くものはなほは大きく、志すところがなほは遠大であるからです。

張良^{ちやうりやう}は橋の上にいる老人と出会い、いろいろと振り回された末に軍書を授けられたといわれています。それは非常に怪しいことのようにありますが、秦^{しん}の世に隠れた君子がいて張良を試してみたといことがなかったとはいえないでしょう。老人が何を考えていたのか、微かに見えるところから推測^{いしよ}するに、古の聖賢が世の人々を戒めたのと同じ意味のことがその根本にあったのでしょう。世間の人々はそういうことをきちんと考察しないで、軍書はまがいものだったと決めつけるのは誤りなのであります。そして、本当に大切なのは、実はその書物ではありません。

戦国時代の終わりに、張良の母国の韓^{かん}が亡ばされ、秦がますます盛んになったときに、秦は首を切る刀と煮殺す釜^{かど}を使って天下の士を意のままに動かそうとしました。そのため罪なく殺された者は数えきれないほどでした。秦は法をはなはだ過酷に用いたので、その鋒先は触れることもできませんし、その勢いは逃れようがなく、どれほどの勇者であつても手も足も出ませんでした。

張良は怒りに耐えられず、我が力でもって一発ぶちかまして、思いを晴らそうと、始皇帝^{し こうてい}を暗殺しようとした。そのときに張良は紙一重のところ死なないですんだのですが、非常に危うかったのです。

大金持ちの子は盗賊によって殺されることはありません。なぜなら、金などよりもその身が大切であつて、盗賊のために死ぬなどありえないのを知っているからです。張良は世を蓋うばかりの才能^{おの}をもっているのに、古の名宰相^{はかりごと}のような謀を用いるよりも前に、単なる刺客となつて死んでしまわなかつたのはまことに僥倖^{おん}でありました。それこそが、橋の上の老人が張良のことを深く惜しんだ理由なのです。老人は尊大かつ傲慢に振る舞つて張良の意気を挫き、よく忍ぶことができるのをみた後に、大事^{だいじ}を成し遂げられると見なしました。それで老人は張良に「こやつ、教えがいかがある」といったのです。

その昔、楚^その荘王^{そう}は鄭^{てい}の国と戦つて破りました。鄭の主^{あるじ}は荘王の前に完全服従の姿で現れ、我が身と国を荘王に委ねました。荘王はいいました。「人に対してこれほどへり下ることができるのだから、き

つとその民に信頼されてよく治めることであろう。莊王は鄭の主に今まで通りこしてよいと許しました。その昔、越の国の王は会稽で呉の国の王に敗れました。それから三年の間、倦むことなく呉の王に徹頭徹尾仕え、報復の機会がくるのを待ったのでした。

相手に報いてやろとの志があって、しかし相手に下ることができないのは匹夫の強がりでしかありません。だから、かの橋の上の老人は、張良には才能が十分にありながらも、その度量が不足しているのを憂い、その若さ故の強く鋭い気分を挫いて、小さな怒りを耐え忍んで大きな謀をさせるよう導いたのでした。

張良と老人は平生から馴染みだったわけではありません。偶然出会い、老人は張良を下僕のようにこきつかい、それでも張良が平然としていたのは、後に秦の皇帝も張良を驚かすことができず、楚の項籍も張良を怒らせることができなかったおおもとがそこにあったからです。

漢の高祖と楚の項籍が天下を争い、最終的に高祖が勝利して項籍が敗れました。その理由は、耐え忍ぶか耐え忍ばないかの違いだけでありました。項籍は忍ぶことができなかったので、即座に戦い、百戦して百勝し、軽々しくその鋒先を用いました。高祖は忍ぶことができ、その鋒先を大切に養い、項籍が疲れるのを待ちました。これは張良が教えたのです。高祖と行動をともしていた韓信が自立して王になろうとしたとき、高祖は怒りを発して、そのことが言動に現われ出ました。これを見れば、高祖には剛強で忍ぶことのできない気分があったことがわかります。そのときに張良がいなかったならば、高祖は韓信と無用な戦いを起してしまって、最終的な成功を果たすには到れなかったであります。

司馬遷は張良の事跡を史書に著し、張良のしたことは驚くばかりに偉大であったけれども、その顔や身のこなしは婦人のようであったと伝えられていて、姿と志気が一致しないのは奇妙であると考えました。しかし、これこそがまさに張良が張良であった所以であるのでしょう。

■ 【02-1-008】 賈誼論

【解題】 ここでは、前漢時代の天才、賈誼を論じている。賈誼はわずか 22 歳で、文

帝の側近として用いられ、数々の意見を具申した。しかし、宰相等に憎まれて数年で左遷されてしまい、賈誼は己の不遇を屈原くつげんに重ねて傷んだ。3年余りの後に、文帝に呼び戻されて、再び数々の意見を具申したのだが、憂うることがあって33歳で亡くなってしまった。蘇軾は、儒学の本道に基づいて国家の基本政策を堂々と論じた偉大な先人として、この賈誼と唐代の陸贄とうだい りくしをしばしば挙げているので、ここでこの論文を読んでおきたい。ただし、ここでは賈誼を厳しく批判している。やはり、敢えて異論を提示しているのである。

【訳文】

困難は才能の有無にあったのではなく、才能を自分で適切に用いられるかどうかにあったのです。

惜まれるのは、賈誼かぎには王者を補佐する才能が十分にありながら、それを自分で適切に用いられなかったことあります。

君子は、取ろとするものが遠くにあるときには、必ずじっくりと待ち、成し遂げようとするのが大きいときには、必ずじっと耐え忍びますいひよ。古の賢人で、事を成就させる才能がありながら、ついにその万分の一も行うことができなくなった場合に、それは必ずしもそのときの君主の罪たというわけではなく、時には賢人自身に原因がありました。

私が観るところ、賈誼さんだいの論は三代の論といえどもそれ遠く過ぎるものではありませんでした。君主として漢の文帝ほどの立派な皇帝が上にいながら、それでも賈誼の論は用いられることなく、賈誼は若くして死んだのでした。ならば、堯や舜のような聖人がいない限りは、天下は正しいことがきちんと行われぬないということなのでしょうか。

孔子こうしは聖人でありましたが、天下を遍歴して、己を用いてくれる国があるかどうかを試しました。そして、極端に無道の国でなければ、懸命に努力して政治を支え、たった一日でもよから王道による政治が行われることを願ったのでした。楚の国に行こうとしたときには、先に弟子の子夏し かを行かせ、さらに再有ぜんゆうも

行かせて、国の様子を探りまし。君子が仕えるべき君主を得ようとするときには、それほどまでに慎重に勤めるものなのです。

孟子が齊の国を去ったときには、さらに三泊してから日中に出て、なおも、「王はまた私を召そうと願っているかもしれない」といったのでした。君子が君主を棄てて去る時の忍び難さは、これほどまでに厚い思いがあるのです。そのとき、弟子の公孫丑こうそんちゆう〔これは蘇軾の誤記で実は充虞じゆうぐ〕は、「先生はどうして悲しげにされているのでしょうか」と、問うと、孟子は、「いま天下を安らかにできる人かゝるとしたら、私を置いて他に誰かゝりようか。私には悲しげにしている間などはないのだ」と、答えました。君子はこれほどまでにその身を大切にすることなのです。ここまでしても用いられることがなく、果たして天下をともに治めるに足る君主かゝらないとわかったならば、もはや遺憾に思うことなどないのです。

賈誼についていえば、漢の文帝が賈誼を用いることができなかったのではなく、賈誼が文帝を用いることができなかったのでした。

遡れば、周勃がしゆうぼつ〔呂氏の乱を鎮めて〕天子の璽を握って親しく文帝に授けたことで、文帝は天子の位に就いたのでした。灌嬰は数十万の兵を率いて、劉氏かんえい〔漢の皇室〕と呂氏りゆう〔外戚〕の雌雄を決したのでした。二人とも高帝りゆうほう〔劉邦〕に仕えた旧将でありました。文帝と旧将との関係は、君臣であるという以上に、父子ないしは骨肉、手足ほどの強いつながりがありました。賈誼は洛陽らくようから出てきたばかりの若者で、わずか一朝の間に、旧将を棄てて、国政について新人と謀るというのは、実に難しいことでありました。

賈誼としては、上に文帝という立派な君主がいて、その下には周勃や灌嬰のような立派な大臣がいたのですから、それらの人々とゆっりと親しくして深い交わりを結び、天子には疑われることなく、大臣には忌まわしく思われることのないようにしてから、天下を己の思うように治めて行くようにしたならば、十年を過ぎることなくその志を得たはずで、ところが、立ち話をする程度の短い間に、にわかに国政について痛哭するような勢いで見解を披露してしまったのです。

賈誼が都を追放されて湘水を通り、屈原を弔うために作った賦を見ると、悲しみ悶えて、躍り上がって

遠く^へに挙^あがりたいとの思いが記されています。その後、自ら傷み、泣き続けて、ついには若死^{わかし}にしまったのでした。つまり、逆境^{ぎぎ}によく対処^{たいじょ}できる者ではなかったのです。謀^{はかりごと}が一度用いられなかったからといって、この先二度と用いられないわけではありません。静かに世の変化を待つことを賈誼は知らずに、自分で自分を害^あってしまったのです。嗚呼、賈誼の志は大きく、しかしその度量は小さく、その才能は余りあるほどでありながら、その識見は足りなかったのです。

古の人で、世俗を高く超えた才能のある者は、必ず世俗から離脱しようとする欠点がありました。それでは、聡明で睿智に溢れて惑^{まど}うことのない君主でなければ、十分に用いることができないのでした。昔から、苻堅^{ふけん}が庶民の中から王猛^{おうもう}を見出し、たちまち旧臣を斥けて、王猛と天下のことを謀ったのを賞賛しています。匹夫でしかなかった王猛が天下の半分を攻略するに至ったのは、苻堅の決断によるものでした。

私が賈誼について以上のように論じたのは、賈誼の志が大きく、それが成し遂げられなかったことを悲むからであります。また、君主が賈誼のような臣を得たならば、ときに度量に小さいところがあって、ひとたび用いられなくなったならば憂い傷んで病んで死んでしまうというさがあると、君主に知っていたきたいからでもあります。そして、賈誼のような者には、己のすることをよく謹んでもらいたいからでもあります。

【補足】〔(1) 蘇軾は人を驚かせるのが好きである。冒頭の11文字で、「非才之難、所以自用者実難」[才の難きに非ず、自ら用うる所以の者実に難し]で、読む者をはっと思わせて、ぐいと引き寄せている。(2) この賈誼論は後の蘇軾の振る舞いを暗示するかのように興味深い。蘇軾は賈誼のことを「不善処窮者也」[善く窮に処せざるもの者なり]と評している。蘇軾自身が逆境に置かれたときどのように処したのか、この後の章で見ることになる]

■ 【02-1-009】 教戦守策

【解題】これは政策を論じたものの1篇で、平和を維持するには民衆に軍事訓練を施

して自衛能力を高める必要があると主張している。

【訳文】

現在の民衆の患い^{わざ}はどこからくるのでしょうか。安きを知って危きを知らず、安逸に走って労苦に耐えようとしないことからです。この患いはたとえ今は見えていなくても、将来は必ずはっきりと見えるようになるで
ありましょう。いまその対策を採らなければ、将来は救いようかなくなってしまうのです。

昔の偉大な為政者は、「兵」^{へい} [武器および兵士]をなくすことはできないと考えていましたし、天下が安定していても戦^{いくさ}を忘れることはありませんでした。秋と冬の間、民衆を引き連れて獵を行い、そこで武を指導し、進み方、退き方、留まり方の作法を教え、鐘や太鼓や旗による合図を習わせて乱れずに行動できるようにしました。そのようにして、いざ切ったはったの事態になっても民衆が怖がらないようにしたので、盗賊が異変を起こしても民衆が驚いて大混乱に陥るようなことはありませんでした。

ところが、後の世においては、学者が机上^{かみじ}の空論を展開し、兵をなくすことをもって王者の最も優れた行為であるとして、天下が定まると、甲を仕舞い込み、数十年もするうちに軍を用いることはすっかり
廃れ、民衆は日に日に逸楽に流れてしまいました。そこに突如として盗賊が現れ出ると、民衆は恐れ
慄き、流言に驚き、戦わずに逃げ去ったのです。

実際に、唐^{とう}の玄宗皇帝^{げんそう}の治世の後半には、天下は大いに治まっていたのではなかったでしょうか。民衆は太平の楽しみに^{たけ}ふけり、遊戯や酒食の中で過ごし、剛き心も勇氣もすっかり鈍って消え去り、腰抜け
けとなってまったく奮わなくなっていました。だから、安祿山^{あんろくさん}なるつまらない男がひとたび出ると、その世情に
乗じて増長し、四方の民衆はただ走って逃げるか、急いで囚われの身になるしかなかったのです。これより天下は分裂し、唐の皇室は衰微してしまいました。

このことについて少し論じてみましょう。天下の勢いは譬えれば人の身体のようなものです。王公、貴人は、自身の身体を養うこと至れり尽くせりでありましょう。それなのに普段から病が多いことに苦しんでいます。農民や身分の低い者は一年中辛苦してばかりいるのに、かえって病気にはなりません。風雨、霜

露、寒暑の変化は病が生じるもです。農民や身分の低い者は盛夏にも力を込めて作業し、冬にも身を寒さに曝し、その筋肉や骨はいつも衝撃にさらされ、その肌はいつも寒さ暑さに侵されているので、霜露にも風雨にも慣れて、寒暑の変化も身体に毒となることはありません。王公、貴人は大層な屋敷に住み、外に出るときは駕籠に乗り、風が吹けば皮の上着を着て、雨が降れば傘で蓋って、患いを慮っての道具の備えが十分でないことはありません。患いをひどく恐れ、それに備えることかまはなはだ過剰であるので、少しでも意のままにならないところがあると、寒暑の変化が身体に入り込んでしまうのです。だから、その身を本当に養う者は、上手に患いから逃れようと、身体に労苦を味あわせ、歩行、動作においてその四体を寒暑の変化に慣れさせるのです。それによって、身体は剛健、強力となって険しいところを渡っても損なわれることがないようになるのです。民衆もまた同じです。

今、天下は久しく泰平で、民衆は驕って急情となり脆く弱々しく、婦人や子供が家から出ずに籠っているのにも似ています。だから戦闘について論じたりするだけで首を縮めて震え、盗賊の名が出ただけで耳を覆って聞かないとします。そして士大夫も用兵について言おうとしません。用兵について言えばそれが民を乱し、次第に乱れが大きくなってしまふと考えています。それはあたかも畏れることかまはなはだくて、養うことが過剰であるのと同じではないでしょうか。

そもそも天下にはいつでも意外な患いがあるものです。愚者は四方に事が無いのを見ると、変事などもうありは無いと思ひ込んでしまいます。しかし、いまは四方に事が無いわけではありません。我が国の北には遼国りょうこく、西には夏国かこくがあって、この二国に対して我が国は毎年百万をもって数える歳幣さいへい [平和を維持するための経済支援]を贈っています。二国に奉仕する我が国の財力は有限であり、それを求める二国は満足することが決してないので、その勢いの延長上には必ずや戦が生じるに違ひありません。戦が必然の勢いであるときに、我が方が先んじなければ、彼の方が先んじるであります。それは西から出なければ、北から出ることでしょう。予測できないのは、遅いか早いか、遠いところからか近いところからかであって、いずれにしても免れることは決してないのです。

兵を用いることがどうしても免れられないときに、徐々に用いられるようしておかないで、民衆を安楽無

事の中に置いたままにして、ひとたび事が起こってから、初めて民衆を危うい場に行かせようとしたならば、その患いはきつと予測できないことになってしまふであります。だから臣は、最初に、安きを知って危きを知らず、安逸に走って労苦に耐えようとしないと指摘したのです。これこそが天下の最も大きな患いであると臣は考えるものであります。

臣はこのように提案いたします。士大夫には武勇を尊尚させ、兵法を講習させます。庶民でお上の仕事に就いている者には行陣の決まりを教えます。盗賊を取り締まる役を担う者には剣や鉾の術を授けます。一年の終わりに人々を役場に集めて、古の武芸試験のように、勝負をさせ、勝ち負けによって賞罰を与えます。このようにすることが久くなるならば、民衆は軍法によって事に従うようになるでしょう。しかし、議論を建てる者は、故なく民を動かし、軍法で脅かすと、民衆は安らかでなくなってしまうといふことでしょう。臣はそうでなく、このようにすることこそが民衆を安んずるものであると考えます。天下は兵を去ることはできません。何か事があつたときには、用兵について何も教えていない民衆を駆り立てて一体どうやって戦おうとするのでしょうか。故なく民衆を動かし、小さな怨みを引き起こすかも知れないことと、備えをしないことと一体どちらが危ういのでしょうか。

いま兵士として集められている者は、傲慢にも驕り、しかも国家に怨みを抱く者が多くいて、民衆を圧迫し、国に不法な要求をさせています。なぜそのようなになっているのでしょうか。その連中は、天下の内で戦を知るのは我等だけだと考えているからです。もし、民衆に兵を習わせたならば、このような連中も対抗する者がいると知って、その驕った気分が挫かれて悪だくみをしなくなるでしょう。

利害の判断ははなはだ明確なのではないでしょうか。

【補足】〔(1) 宋の人々にとって、唐の世を揺るがした安祿山の乱は常に回顧しなければならぬ歴史的な大事件であった。とりわけ蘇軾が生きた時代は宋の極盛期に当たり、唐の玄宗皇帝の時代とまさに対比され、太平のうちにも国家衰亡の危機が迫りつつあると常に警戒しなければならないのだ。〕(2) 宋の統治機構は、その根幹を士大夫〔科挙に合格して官僚になった者、およびそれに準じる者〕が占め、文官優位で

武官は軽んじられた。宋は東アジアの超大国であっても軍事的實力ははなはだ心もとなく、北の遼国りょうと西の夏国かからの圧迫に常時苦しめられ、遼国との間では多額の歳幣さいへいを宋国が贈ることで平和が保たれていた [→作品番号 01-2-007]。蘇軾はこの論文で歳幣は民衆にとって負担になっているとしているが、実際には平和が持続されていることによる経済的利益の方が大きかったようである。(3) 蘇軾はこの論文で宋軍の規律が乱れていることを指摘しているが、蘇軾の死から20年後に宋江そうこう [後に『水滸伝』の主人公となった人物] が反乱を起こしたときに、民衆は宋江の反乱軍よりも正規軍による略奪の方をより恐れた。(4) 蘇軾がここで主張した民衆に軍事訓練を施して国防と治安に当たらせるという考えは共有する者が多くいた。後に王安石おうあんせきが主導する国政の大改革で「保甲法」として実施されるようになる]

【補足】 [制科の試験委員の一人であった王安石おうあんせきが、蘇軾の論文をどのように見たのかということ、邵博しょうはくの随筆『邵氏聞見後録』が伝えている。邵博は、当時の著名な学者であった邵伯温しょうはくおんの次男で、邵伯温は、司馬光しばこう、呂公著ろこうちよ、范純仁はんじゆんじんといった著名人と親密な交遊関係があつて、『邵氏聞見後録』という随筆にそうした人々の言行を詳しく記録している。邵博の『邵氏聞見後録』は父の作品を継いでやはり各界の人々の言行を記録し、両随筆とも信頼性はかなり高いとされている]

【訳文】

邵博しょうはく：『邵氏聞見後録』

東坡とうぱ [蘇軾せい か] が制科に合格すると王安石おうあんせき は呂公著ろこうちよ に尋ねた。

「蘇軾が制科で記した政策論をどのように御覧になりましたか」

呂公著が褒めると、王安石はこのようにいった。

「どれも戦国時代の遊説家の文章の類であります。もし私が試験委員であったならば、きっと不合

格にしたはずです」

王安石は後に『英宗実記』[英宗皇帝の時代の公式記録]を編集したときに、蘇洵は戦国時代の縦横家の学の風があったと記した。

【補足】〔(1) 王安石は制科の最初の試験の委員を務めたが、最終試験の委員ではなかったので、この評は最終試験で提出された25篇の論文のうちの政策論についていつているのだろう。(2) 戦国時代の遊説家〔縦横家〕の代表は蘇秦や張儀で、切れ味鋭く人々の耳目を驚かすような議論を展開して、諸侯を説き伏せる弁論術に長けていた。蘇洵や蘇軾の文章には確かにそのような傾向がある。一方で、蘇秦や張儀の師匠であった鬼谷子を蘇軾が厳しく批判している詩をすでに見ている〔→作品番号 01-1-037〕。自分のことは自分ではわからないのかもしれない。(3) 邵博の『邵氏聞見後録』の記事は信頼性が高いとされているが、この項については若干注意が必要かもしれない。蘇軾のエピソードは往々にして話を面白く飾っていることが多くあり、それに加えて、政治的党派性からくる偏見が混じっている恐れも多分にある。次の章で詳しく見るように、王安石は国政の大改革を提案し、蘇軾も含む多くの人々が反対した。しかし、王安石は神宗皇帝の支持のもと、かなり強引に改革を押し進めた。それ以降、改革派〔新法党〕と保守派〔旧法党〕の激しい抗争が繰り広げられるようになり、政敵に対しては事実とはかなり異なる事柄が言い広められることも少なからずあった。特に、王安石については偏見に満ちた記録が数多く残されている〕

■ 【02-1-010】 答李端叔書

【解題】蘇軾が受けた制科の試験は「賢良方正能直言極諫」という名称のもとで行われた。つまり、賢良方正で、皇帝に対して直言して強く諫める能力がある者を選ぶという主旨で実施されたものだった。蘇軾がその名称をどのように受け止めたのか、

19年後の元豊^{げんぽう}3年〔1080年〕に記した手紙から伺い知ることができるので、その手紙の一部をここで見ておこう。これは李^り之儀^{しぎ}〔字は端叔^{あざな たんしゆく}〕という若い友人に送ったもので、そのときにはまだ直接の知り合いではなかったのだが、後に深い間柄になる。

【訳文】

……私が若いころに書物を読み文を作りましたのは、もっぱら科挙を受験するためでした。すでに科挙に合格すると、その次を貪るようこそ望み^{せいか}、制科も受けました。制科に合格して私は何をしたのでしょうか。そのときの制科の科目の名は「直言極諫^{ちよくげんきょくかん}」でありました。その意味するところは何かというと、古今の事例を参照して是非を議論することにあります。人というものには自分のしていることが知られずにいるのを残念に思うもので、私は制科に合格したからには、実際にそれにふさわしいことをしていると知られたいと思ひ、多くのことを論じて今に至りました。そのために罪を得てほとんど死ぬばかりとなりました。これはまさに昔漢^{かん}の高祖^{こうそ}が「口先だけで官職を得た奴め」と罵った相手と同じで、真に笑うべきことであります。

……

【訳文】〔この手紙は、まさに「直言」のために罪を得て黄州^{こう}に流されていたときに書かれたものである。つまり、逆境に置かれたときのものでありながら、いたずらに悲嘆することなく、己を客観視して自嘲している。賈誼^{かぎ}〔→作品番号 02-1-008〕とは大きく異なっている〕

■ 【02-1-011】空塚小児

【解題】蘇軾^{せい かつ}は超難関^{せいか}の制科に合格し、しかも宋^{そう}が始まってから 2 人目の第三等の優秀な成績であったから、その名は一躍官界に鳴り響いた。合格と同時に蘇軾^{せんしよほう}は簽書鳳翔府判官^{せんしよほう はんくわん}を、蘇轍^{しやうしゆうぐん}は商州軍事推官^{じすいかん}を授けられた。どちらも地方都市の幹部クラスの職で、特に鳳翔府は政治的、軍事的に西方の重要な拠点で、初めて官職を授かる者と

しては破格の処遇であった。ここで見る短文は制科に合格して鳳翔に向けて発つまでの間に書かれたと推測されている。

【訳文】

富弼ふ ひつが青州知事せいになると、そのころ河北かほくの地は大きな飢饉に見舞われ、民は争って富弼の庇護を求めて青州に逃れた。その中に、赤ん坊を背負った夫婦がいて、まだ青州に着かないうちに、飢えに迫られ、このままでは生き延びられないと、道の左側にあった塚とさの空洞に赤ん坊を棄てて立ち去った。その後、飢饉がおさまり、夫婦は帰郷することになり、その塚をまた過よぎった。せめて赤ん坊の骨を拾って帰るとすると、塚の中で赤ん坊はまだ生きていて、しかも棄てたときよりも太って元気であった。赤ん坊は父母を見ると這って出てきた。塚の中を見ると、そこには何もなく、ただ蛇や鼠が出入りできそうな穴があって、車輪ほどの大きな蝦蟇がまがいて、蝦蟇は穴の中からしゅうしゅうと気を吐き出しているのだった。思ひに、赤ん坊は塚の中にいて常にこの気を呼吸していたので、何も食べなくても健やかであったのだろう。それから赤ん坊は食べることなく、六、七歳まで育ち、肌は玉のようにつやつやとしていた。その父はその子連れて都みやこにきて、小児医ちようけいの張荊筐に見せた。張荊筐は、「靈力のある生き物は土に籠ることができます。燕、蛇、蝦蟇などがその例です。土に籠れるものは食べなくても平気で、食べずに長生きをします。塚にいたのは千年も生きる蝦蟇であったのでしょう。この子に薬を与える必要はありません。もし、食べることもなく、娶ることもないままであれば、きつと長生きをして道を得ることでしょう」と、いったので、父は喜んでその子連れて帰った。いまはどこにいるのかわからない。

嘉祐六年[1061年]に張荊筐が私に話してくれた。

【補足】〔(1) 富弼が青州知事であったときに、備蓄米を大々的に放出して飢えた民を救ったのは有名な話で、五十万人余りがそれで生き延びたといわれている。(2) 燕が土に籠る生き物であるとされていたのは、秋になると土に籠って、春になると出てくると信じられていたからである。(3) 「道を得る」とは、道教の真髓まゐを究めること、

つまり仙人になるという意味である。蘇軾がこのような奇談をどこまで真実であると信じていたのかよくわからないが、好んでいたことは間違いない]

■【02-1-012】馬正卿守節

【**解題**】蘇軾は鳳翔府ほうしょうに赴任するために嘉祐6年〔1061年〕11月19日に都を発った。そのとき、家族の他に馬正卿ばせいけい [字は夢得あざな ぼうとく] という風変わりな人物も連れていた。馬正卿は蘇軾よりもわずかに8日だけ若く、科挙を目指して勉強していたのだが、なぜか官界入りを目指すのではなく、蘇軾の従者になることを選び、鳳翔府へと同行した。後に、馬正卿は蘇軾にとって一大転機となるきっかを作り、そのころに馬正卿についてのこの短文を記している。

【訳文】

杞き [雍丘ようきゅう]の人の馬正卿ばせいけいは都の太学たいがくの年長の組の学生だったが、はなはだ潔癖で気骨があり、学生仲間からは好かれず、教授連中からは敬遠されていた。私は若いときにたまたまその下宿を訪ねたところ、壁とほに杜甫の『秋の雨の嘆き』の詩が書いてあった。それを見ても、そのときは特に何も思わなかったのだが、馬正卿は間もなく太学を辞めて、二度と世に出ようとしなかった[よって、都の人々に己が理解されない苦さを杜甫の詩に託したのだと知れた]。馬正卿はいまや白髪で、やはり困窮しているが、節せつを守ることはいまも変わらない。馬正卿の字は夢得あざな ぼうとくである。

【**補足**】そうだい [宋代には各地に官営の学校があり、都の太学たいがくは高位高官の子弟の学びの場となっていた。学生のほとんどが科挙を目指し、特別に熱心な教授がいるところ以外は、教育機関としてそれほどの役目を果たしていなかった。馬正卿ばせいけいは両親を早くに失ってひどく貧乏であったが、恐らく親類の支援によってであろう、太学に入學し、国家有用の人物になろうと励んでいた。非常に真面目であったために、周囲から浮き上

がり、とうとう退学してしまった。蘇軾が馬正卿の下宿を訪ねたのは、制科せい かの受験勉強に励んでいた嘉祐か ゆう5年〔1060年〕の終わりのころであったと推測されている。どうして、馬正卿に会ってみようと思いついたのか、一つ推測できるのは、そのころは父の蘇洵そ じゆんは雍丘よう きゆうに住んでいたもので、蘇洵が馬正卿のことを耳にして、息子に教えたのかかもしれない。馬正卿と会ってどのような話をしたのかわからないが、杜甫の詩が壁に書いてあるのを見ただけで、蘇軾はその人物が確かであると知ったのだろう。馬正卿もまた蘇軾に惚れ込んで、官員になるよりも蘇軾のために尽くそうと思ったのだろう。蘇軾は馬正卿を使用人としてではなく、一人の友人として迎えたようであるが、詳しいことはわかっていない]

■ 【02-1-013】 辛丑十一月十九日、既与子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之

【解題】蘇軾は都を発つと、城門を出てからもしばらく同行してきていた弟の蘇轍と別れ、馬上でこの詩を詠み、弟に送った。兄弟が長期間にわたって離れ離れになるのはこのときが初めてであった。弟も兄と同時に官職を授かっていたのだが、何らかの事情で赴任は留保されていた。一説によると、蘇轍せい かが制科の試験で書いた論文の中に現在の政治を諷する文言があるとして、朝廷のとある高官が立腹し、蘇轍を官職に就けることに疑義をさしはさんで辞令を交付させまいとしたので、ごちゃごちゃいわれるくらいなら任官などするものかと、蘇轍は、父を一人残して都を離れることはできないとの理由で辞退したとされている。国家のいかなる大事よりも親孝行の方が優先順位が高いと認識されていたから、親孝行を理由に挙げれば、皇帝の命令を断つても咎められることはなかった。表題にある「鄭州西門」とはどこなのかということについていくつかの考証があるが、我々にとっては都から少し出たところで弟と別れたということがわかりさえすればそれで十分であろう。

【訳文】

酒に酔ったかのような、
ゆらゆらするこの感覚。
僕の心はふわふわと抜けて、
君の馬に追いつかろうとする。
君と一緒に父上のもとへと戻って行けない僕は、
置きどころを失ったこの心を、
誰と慰め合ったらよいのだろうか。
酔いの醒めぬままだに坂を登り、
どうとうこて振り返る。
波打つ丘が広がる。
際立って背の高い君のことだから、
黒い帽子が丘の高低の間に上下するのが見えるのではなからうか。
寒さが身に染みるようになったこの時季に、
薄い衣でやせ馬にまたがる君の姿を、
僕はいつまでも探し求める。
同道する者がいう。
「道を行く人々は誰もが楽しげに歌い、
家の内にいる人々は誰もが楽しげに話しているではありませんか。
どうして若旦那だけが苦しげなのですか」
僕は酔いから引っ張り出され、
「人生に別れは必然だ。

ただそれだけのことなのだよ

悲しみは僕だけにあってはならず、

楽しみはほかの人々だけにあってはならない。

すぐにもう一つの必然を僕は思う。

歳月とはたちまち去ってしまうものだ。

君と二人、

夜の雨をしみじみ耳にしなから、

ともしび 灯のもとで今を昔と語り合うようなときが、

必ずあると、思っただけのいい……。

このことをわかってきているのならば、

君も高位高官に昇ろうとは決して強く望んだりはしないはずだ。

【補足】〔1〕この訳文は原詩には忠実ではない。原詩では「童僕怪我苦悽惻」〔童僕どうぼくは怪あやしむ 我われが苦はなはだ悽惻せいそくするのを〕とだけあるのを、2人の会話としてかなり引き伸ばしている。会話の相手としては馬正卿ばせいけいを想定している。馬正卿はこの後長く蘇軾の詩文に登場することがないので、訳者としてはここで口をきかせてみたかったのである。「童僕」とは少年の使用人で、26歳の馬正卿を「童僕」と呼ぶのはふさわしくないのだろうが、詩は必ずしも事実を忠実に表現するものではないであろう。(2) 終わりの数行は、蘇軾兄弟にとって重要なキーワードとなる「夜雨対牀」〔雨やうの夜たいしやうに牀べつどを並べて一緒に眠る〕を詠んでいる。兄弟せいかが制科の受験勉強に励んでいたある日のこと、弟とうは唐の韋応物の詩を示して、「試験いおうぶつが終わればきつと別々の任地に赴かなくてはなくなるでしょう。それでも、必ずまたこの詩にあるように『夜の雨をしみじみ耳にしなから語り合う』ことをしましょう」といった。制科に合格することは兄弟の大きな目標であったが、合格後には必然的に兄弟の別れが待っていた。父の蘇洵そじゆんと伯父

の蘇^そ洵^{かん}の兄弟は、親の喪に服するときでもなければ会うことがなかったのを間近に見ていたので、兄弟で会えるのが希になるのを早くも弟は悲しく思ったのである。(3) この詩をもって蘇軾は習作段階を脱したと見られていて、多くの選集はこの詩を冒頭に掲げている。原詩に忠実な訳を知りたい方はそちらを御覧いただきたい]

■ 【02-1-014】和子由澗池懷旧

【**解説**】鳳^{ほう}翔^{しょう}へは陸路をほぼ真っ直ぐに西に進む。都から200キロ弱で河南^か南^{なん}府^{らく} [洛陽]に至る。長い歴史を誇る古都で、引退した高官など多数の著名人が住むところであるのだが、ここで蘇軾が誰かと交流したといった記録は残っていない。さらに数十キロほど進んだ澗池^{けんち}という町に着くと、弟からの手紙が先回りして、それには『澗池の旧^{むかし}を懷^{おも}う』と題する詩が添えられていた。「旧」とは、これより5年前の嘉祐元年 [1056年] に、科擧の受験のために父に連れられて上京したときのことをいう。そのときの旅は、ちょうど今回と逆向きに、鳳^{けい}翔^{しょう}、京兆^{ちやう}府^{あん} [長安]、澗池、河南府を經由して都に至ったものだった。弟の詩には、兄と別れたときのことや、5年前に澗池の僧房に宿をとり、その壁に詩を書いたことなどが素直に歌われていた。兄はその詩に次韻して、同じ韻を用いるという制約がありながら、全く趣の異なる詩を生み出している。

【訳文】

この世にあまねく存在する人生なるものは、

何に似ているだろうか。

大空を飛ぶ雁がふわりと降りて、

融けた雪にちょこんと付ける足跡か。

泥の上に爪の痕が残っても、

雁は西に飛んで行ったのやら東に飛んで行ったのやら、

見当を付けることさえできない。

あのとき灑池めんちの寺にいた老僧は、雁が飛ぶはりにこの世を去り、

真新しい墓だけが遺されている。

僧坊の壁は崩れ、かつて題した詩を見ることもできない。

あのとき僕等の前にあったのは、

長く遠く遙かな道だった。

折悪しくも、乗ってきた馬に死なれ、

からりて貧弱な驢馬を手に入れたものの、

その嘶きはまことにわびげに聞こえたのだった。

【補足】〔(1) 弟の詩の第一句と第二句は、「相携話別鄭原上、共道長途怕雪泥」^あ〔相携たずさえて話して別れる鄭原の上り、共に道いう長い途ながに雪泥みちを怕せつれるを〕で、都の郊外で別れたときに、冬に時期の旅の厳しさについて心配したことをごく普通に詠んでいる。兄が次韻した詩では「人生到处知何似、应似飞鸿踏雪泥」^{じんせいいたところし}〔人生じんせい到いたる處ところ知しらん何なにに似にたるかと、應まさに似にるべし飛とぶ鴻おとりの雪泥せつを踏ふむに〕で、いきなり卓抜な警句で人を驚かせる。蘇軾の詩才が一気に爆発したもので、しかも次韻の詩であるというのが二重に人を驚かせるのである。(2) 蘇軾のこの詩には、自身の注で、「かの歳にに二に陵りょうで馬が死んでしまい、驢馬めんちに乗って灑池に至った」と記されている。科挙の受験生は官営の宿舎がある場合にはそこに宿泊できるという特権が与えられていたが、旅費は全て自弁であったから、多くの受験生はそれを用意するために大変苦勞し、貧乏人でありながら郷里の人々の支援によって上京して合格できたという佳話がたくさん残っている。蘇軾の家は先祖から受け継いだものと母の努力によって暮らしに困るよう

なことはなくすんでいたようだが、親子 3 人の旅は恐らく様々な人の支援に頼ったものであったろうから、旅の途中で大切な馬に死なれてしまったのは、前途に不安を覚えさせるような出来事で、驢馬の嘶きが普段とは異なって重く心に響いたのであろう。もしも科挙に合格していなかったならば、親子 3 人の人生は全く異なるものになっていた]

■ 【02-1-015】 次韻劉京兆石林亭之作、石本唐苑中物、散流民間、劉購得之

【解題】 任地先の鳳翔へと急ぐ旅ではあったが、京兆府 [長安] では少しばかり留まり、その地の人々との交流を楽しんだ。これは知事の劉徹 [字は原父] が詠んだ詩に次韻したもの。劉徹は蘇軾よりも 17 年先輩で、28 歳で科挙に合格し、早くから中央政界で活躍して大臣候補と目されていたが、宰相と衝突するなどして、このころは地方官として各地を転々としていた。博学で知られ、特に歴史に詳しかった。劉徹は歐陽脩と親しい関係にあったので、蘇軾がどのような青年なのか見てやろうと待ち構えていたのだろう、次に見るように、2 人は意気投合し大いに歓談したのだった。この詩の題は、「京兆府知事の劉徹の石林亭での作に次韻した。そこにある石はもとは唐代の庭園にあったもので、散り散りになって民間に流れて行ったものを、劉知事が買って集めたものである」。栄華を誇った唐の都は、唐末の戦乱で何度も戦火に包まれ、唐朝の滅亡とともに地方の中都市に転落していた。

【訳文】

かつての都は日々に荒廃し、

往時に還ることはもはやない。

やんごとなき方々の庭に置かれていた石は、

散り散りとなったものの、
なお人間界には留まっていた。
一人の好事家がここにくると、
それを買って蓄え始め、
石の重さも道の遠さも厭わずに石林亭へと曳いてきた。
塵の中に埋もれていた石も、
ここにくるとすぐにもと通りになって、
ある石は氷雪に削られた顔をしかめ、
ある石は痩せ細った肩をそびらかし、
ある石は青々と水をしたたらせるかのようになった。
唐の世に、奇石を好んだある人が、
石に等級を設けて刻印したのだが、
ここにあるのはさためし最上級のものばかりだ。
思えば、これらの石は、
ある人が失えばある人が得て、
集まっては散じ、散じては集まり、
いつまでもいつまでも循環を繰り返して、
結局のところ環の外に出ることはないのだろうか。
人間界もまた変転を繰り返す。
自然の要害に守られたこの地に、
漢の都も唐の都も置かれ、
王朝は隆盛を極め、そして滅び去った。
これらの石はかなり重いものがあるとはいえ、

都を囲む山々に比べたら羽根のような軽さだ。

転々とし続けるのもやむをえないのだろうか。

酒を酌んで石に向かって問いかけようとしたものの、

答えの出ないような問題は、

そっくり放り出すのがよいと思うのであった。

■ 【02-1-016】 書黄州詩記劉原父語

【**解題**】 このときの劉敞〔字は原父〕との交歓について、遙か後年の元祐4年〔1089年〕に書き記した短文があるので、それを見ておこう。

【訳文】

昔、鳳翔府の役人になったときに、長安を過り、劉敞に会った。

劉敞は私を数日間引き留めて劇飲した。酒酣のときに、劉敞はこのようにいった。

「昔(三国時代に)、(魏の)陳矯は、(知事の陳登に招かれて役人になり、陳登のために魏の都に)行き、帰ってくると、陳登から『都でのわしの評判はどうであったろうか』と聞かれて)このようにいいました。

『あちこちで人々が論じるのを聞いたところ、知事殿は驕慢でうぬぼれていると思われているようにした』。すると、陳登がいに、『家の中が和やかで徳があって行いもすぐれていることでは、わしは陳紀兄弟を尊敬している。淵の水のように清らかで、礼にかなった振る舞いもしっかりできていることでは、わしは華歆を尊敬して

おる。清らかな行いを修めて悪を憎み、知識があって義を具えていることではわしは

趙昱を尊敬しておる。広く知って記憶力が強く、人より抜きんでて優れていることではわしは孔融を尊敬しておる。雄姿が傑出して王霸の才略があることでは、わしは劉備を尊敬しておる。尊敬する相手がこ

れただけで、どして驕慢でありえようか。いま挙げた人以外のちまちました連中が何をいおうか、何も気に掛けることなどありませんのた』、と

そして、劉敞は天を仰いで、大きく嘆息した。

ここに劉敞の雅趣を見ることができたのであった。

私は後にこう黄州こうにあって、このように詩に詠んだ。

「平生我亦輕余子へいぜい おれ ま よし かる [平生 我も亦た余子を軽んじ]、

晚歳誰人念此翁ばんさい だ ひと こ おきな おも [晩歳 誰が人か此の翁を念わん]」

これはまさしく劉敞のことを思って詠んだ句であった。

このときに劉敞は亡くなってすでに久しく、弟の劉攽りゅうはんはなお存命であった。劉敞と語るたび、私の心は強くカづけられた。

いまはその人までも亡くなり、もはやこれほどの俊傑の人を見ることはできないのである。悲しいではないか。

【**解題**】 [(1) 劉敞りゅうしょうが語ったとして書かれている言葉は、『三国志』さんごくしに記されている文章そのままである。劉敞も蘇軾も歴史に精通していたので、ごく短い言葉を交わしたただけで2人には通じ合ったのだろうが、ここでは敢えて詳しく記している [あるいは後人の補筆であるのかもしれない]。そこに引用されている陳登ちんとうの言葉は、尊敬する人物を多数挙げつつも、実はそれらの人々の美点を全て自分は具えていると、この上ない自負心を示したものである。劉敞は蘇軾と会ったときは不遇の時期で、心に強く思うところがあったのだろう。(2) 引用されている詩は、蘇軾が黄州こうに流されていた元豊5年 [1082年] の作で、大意は、「かつて自分は (劉敞あるいは陳登のように) 他の連中を軽んじていたのだが、いまやこの老人を思ってくれる者などいないのである」と、流謫中の孤独感を詠んでいる。(3) 最後に名が挙がっている劉攽 [字は貢父こうほ] は劉敞の3歳下の弟で、やはり歴史に精通して、後に『資治通鑑』しじつがんの編集に加わっている。劉攽は、蘇軾の親しい友としてこの後何度も登場するようになる]

■ 【02-1-017】 与楊濟甫

【解題】蘇軾は12月14日に鳳翔府ほうしょうに到着し、いよいよ官員としての日々がスタートした。到着の日付は、翌月に故郷こきやうの楊濟甫ようせいほ [→作品番号 01-2-044] に送ったこの手紙から知ることができる。

【訳文】

お別れしてから三回年が改まり、貴君を思うことがますます強まります。この新春を迎えて、佳き日々を過ごされ、皆様いずれも安らかにあります。

私は前月十四日に鳳翔ほうしょうに到着し、十五日には着任の届けも終わりました。……

いま、范元はんげんが帰るに当たって、お手紙を差し上げる次第です。これから気候がよくなりますので、きっとよいことがありますでしょう。

【補足】はんげん [范元が何者であるのかはわからないが、成都せんとや眉州びの役人ないしは商人で、ちょうど鳳翔ほうしょうから帰るところだったのだろう。成都と鳳翔は大きな山地を挟んで数百キロ離れているが、都から見れば、成都と鳳翔はほぼ隣同士である]

■ 【02-1-018】 鳳翔八観

【解題】このときの鳳翔府ほうしょうの知事は宋選そうせん [字は子才あざな しさい] で、同じ年の8月に赴任してまだ間がなかった。前任の知事が汚職で左遷されたために、そのようなことが繰り返される恐れのない人物として宋選が選ばれたのだろう、清廉で温厚な人柄で、蘇軾が希に見る優秀な成績せいせいかで制科に合格したことを重んじて、かなり優遇してくれたようだ。新任の官員でありながら蘇軾には時間的余裕があったようで、早速鳳翔周辺の文物を見て回り、『鳳翔八観ほうしょうはっかん』という8首連作の詩を詠んだ。これは、青年蘇軾が渾身の力を込めて作ったもので、これによって詩人としての名が一躍天下に轟きわたったのだっ

た。序文が添えられている。

【補足】〔原詩は、恐らく当人にはそのような意識はなかったのだろうけれど、あたかも己の才を誇るかのように、晦渋にして含意に富んだレベルの高い詩句を縦横に駆使しているためにかなり難解である。訳詩は、含意を説明的に露わにしたり、重厚な詩句を軽々しい言葉に移し替えたりして、つまり「ずっぱ訳」の典型となっている。この訳詩に不服な方はぜひ原詩と向き合ってください〕

【訳文】

序文

『鳳翔八観詩』は鳳翔で観るべき八つものについて記した作品である。昔、司馬遷は会稽山に登り、禹穴を探るために千里も遠しとせずに訪れ、李白は七沢を観るために荊州に至った。この二人は世が谷に流れるのを悲しみ悼み、古の人を自分で見られないのを傷み、その遺迹をひとたび観るためだけにこれほどまでに勤めたのだった。鳳翔は秦の文物と蜀の文物の交わるところで、士大夫が朝夕に往来するところである。この「八観」はいずれも町から歩いて行ける場所にあるのだが、好事の者でもなかなか全てを遍く観ているわけではない。それでこの詩を作り、古のものを観ようと思っていてもこれを知らない人に告げようとするものである。

【解題】『鳳翔八観詩』の第一首は、鳳翔府の孔子廟に保管されていた石鼓について詠んでいる。石鼓とは、高さが2尺、直径が1尺ほどの加工された花崗岩で、鳳翔近郊の野原に10個ころがっているのが唐の時代の初めに発見された。表面にごく古い形態の文字が刻まれ、古代の文化を知る貴重な物として大切に扱われ、現在は北京の故宮博物院に第一級の文化遺産として保管されている。

【訳文】

其の一 ^{せき こ}石鼓

季節は冬、月は十二、年^{しんちゆう}は辛丑。

政治に携わるようになったばかりの私は、

^{ほうしゅう こうし ひょう}鳳翔の孔子廟に詣でた。

昔から聞いていた石鼓がここにあり、

いま初めて見ると、

蛇かじぐざくに走りまわった痕のようなものがついている。

じっと観察し、指を使って腹の上でそっくりになぞってみる。

それを読み上げようとして、

唇が貼り合わされたかのように何もいうことができない。

^{かん けい いりこえ}唐の韓愈は古を好み、この石鼓を見て、

自分は生まれるのが遅かったと嘆いた。

それから二百年以上も経ったいま、

当てずっぽうに点や線、^{へん つくり}偏や旁を見つけようとして、

一つか二つだけなら、それかとわかるような気にもなれるであろうか。

これまでに解説されたのは、

「ワシノ車ハツヨイゾ、ワシノ馬モツヨイゾ、

魚ハコトトル、柳ノ小枝デソラヌクゾ」

残りの八つか九つはほとんどわからない。

太古の青銅器の破片がごろごろするなかから、

どうにか見分けられるのは鼎^{かなえ}の脚だけであたり、

天上界に細かに散らばる星のなかから、

どうにか見分けられるのは北斗だけであったり、
イボやらタコやらカサブタやらかぐちやくちやくになったなかから、
どうにか見分けられるのは肘やら膝だけであったりで、
つまりは、雲や霧の向こうに月を、
あるいは、雑草がぼうぼう生い茂る野原に一本だけの稲を、
見出そうとするようなものだ。

石鼓は百回の戦火をくぐり抜け、
かつては文字を発明した伝説の人たちと語り合いもし、
名書家とされた人々を教え導いたりもしたのだが、
千年の間にただ一人ぼっちになって、
もはや友とする相手はいなくなってしまった。

回顧すれば、遠い昔、乱れた政治に人々はほとんど愛想をつかし、
聖王、賢臣の出現を待ち望んだときに、
天は周の宣王とその老臣を生んで、天下を立て直させた。

東方では虎のような猛将が争いを鎮め、
北方では犬のように諸民族が素直になつた。
宮殿には白い狼や白い虎が次々に献上され、
功臣が並んで参内するとたくさんの恩賞が与えられた。
勇ましく太鼓が打ち鳴らされ、将軍に耳目が集まったときに、
雅な音楽を奏して歌おうと思った者はいなかったのだが、
どのようなわけかは知れず、
宣王を讃える『鴻雁の歌』が流れてきたのだった。

その歌が石鼓に刻まれたのだろうか。

それまではおたまじゃくしのような形をしていた文字が、
そのときに改められたのだらう。

宣王いさおの勲は偉大であるのに、石鼓にはあえて誇るようなところがない。

周ぶんの文王から遠くないこのころには、

奥ゆかしい真心かなお伝わっていたのだらう。

刻まれた年を示すような字を探そうとしてもないし、

まして、刻んだ人の名は記されるはずもなかった。

その後、周が衰えると、

七つの国が競い合った末に、秦しんが天下を手にした。

始皇帝しこうていは儒学の経典を放り投げさせ、

民衆に法律だけを学ばせ、

先祖を祀るための道具は片付けられ、

刑罰に使う鞭や手かせ、足かせの類が並べられた。

始皇帝を補佐したのは李りし斯という人物で、

始皇帝が山に登るたびに、功業を讃える文章を作って石に刻ませた。

「皇帝ハ四方ノ国ヲ巡ッテ凶暴ヲ連中ヲ滅ボシテ人民ヲ救ツタ」

そのような手放しの賛美は前にも後にもないことだった。

始皇帝によって儒家の経典は焼かれ、石鼓も砕かれそうになった。

周が滅んだときに、王者の徳の象徴とされた九鼎きゅうていは川に沈んだ。

始皇帝は万人を使ってそれを掘り出して自分のものにしようとした。

暴君は己の欲望を満たすために人民の力を使い尽したけれど、

神聖な九鼎は秦に汚されることはなかった。

石鼓はどこで始皇帝の横暴から逃れたのだらうか。

天が鬼神を遣わして守ったのだろうか。

世の興亡は百変し、富貴はつかの間でしかない。

物質それ自体は変化を免れ、名といものは朽ちることはない。

物の道理をよくよく考え、

人生の長さが石鼓の寿命とは比べようもないのを思っ、

私は深く嘆息するのだった。

【補足】〔(1) 詩の始めに韓愈の名が挙げられているのは、韓愈も石鼓を実際に見て、それを詩に詠んでいるからである。それは韓愈の自信作で、非常に有名な作品であった。韓愈は唐のなかごろの人で、詩文および儒学の復古運動、つまりルネッサンスを主導した。蘇軾の作品を読む上では、儒学の正統は、おおざっぱに言って孔子、孟子、韓愈、歐陽脩の順に受け継がれてきたと理解しておくのがよいだろう。それほどに偉大な先人である韓愈を意識してこの詩を作ったので、蘇軾が力むのも当然であった。

(2) 蘇軾はこの詩で、石鼓は周の宣王のころのものであろうかと歌っているが、現在では、それよりもずっと新しく、戦国時代の秦の24代公主の献公のときに作られたものであろうとする説が有力となっている。この詩で、石鼓は始皇帝の横暴から奇跡的に逃れられたと歌っているが、始皇帝は秦の31代公主であった。それはそれとして、古代の遺物として貴重であることには変わらない]

【解題】第二首は、「詛楚文」について詠んでいる。「詛楚文」とは「楚を詛う文」である。秦の穆公のときに、和平の約束が秦と楚の間で結ばれたのだが、楚の次の代の王が一方向的に破ったので、それを秦の人々が呪ったとされる文章である。蘇軾自身の注で、その由来は次のように記されている。「鳳翔の開元寺の土の下から（詛楚文が刻まれた）石碑が得られ、いまは知事の執務室に置かれている。秦の穆公は雍棗泉の

祈年観 [豊年を祈る社] のもとに葬られ、いまその墓は開元寺の東南数十歩のところにある。つまり開元寺はかつて祈年観があった場所に建てられたのだろう。淮南王 [劉邦の第七子の劉長] は (罪を得て) 蜀に遷される途中で、雍において病で亡くなったとされている [実は自ら絶食して死んだ]、その雍とは長安に近いそこではなく、ここの古い雍であったのだ。開元寺は唐の玄宗皇帝が勅命で各州に建てさせた寺で、現在も幾つか残っている。後半の淮南王のことは、この詩とは直接関係のない豆知識である]

【訳文】

其の二 詛楚文

高く聳える開元寺を見上げると、
 古代の祈年観がぼんやりと想像される。
 その古い建築は地上から空しく消えてしまったが、
 古い石碑は土に埋れて破れずに残った。
 石碑に刻まれた詛いの書は判読可能ではあっても、
 長い間に字法がすっかり変わってしまった。
 その詞は次のようだという。
 「秦の嗣王 [穆公の次の公主] は贄を神前に供えて申し上げる。
 先君穆公の世に楚の先君と互いに守ると約束し、
 神に誓って万代にわたって叛くことはないとした。
 しかし、楚の嗣王は敢えて多くの悪事を為し、
 胎児を刳り出したり罪のない者を殺したり、
 親族を捕らえて獄に繋いだりした。」

それはかの桀や紂が天下を乱したのと変わらない」
このように楚が盟に背いたことを詛ったのであるが、
私が聞いているところでは、
むしろ古代の秦の風俗こそが、
背中に冷や汗をかくことなく平然と人を騙すというものであった。
秦に騙されたのは、
休戦を結んだばかりの場で捕まってしまった衛の公子伋だけではなく、
鬼神までも欺かれたのだった。
その秦がどの口で楚を詛ったのやら、
遙か千年余りを隔てたいま、
私を大いに笑わせてくれるのである。

【補足】 [この詩の終わりで蘇軾が笑っているのは、秦に対して連綿と続いてきた偏見に基づくものであろう。周朝の後半期に、文明圏の外側と見なされていた西方で秦が勃興し、東方の諸侯を脅かすようになった。南方の楚もまた新興勢力で、一時期は楚と秦の実力が拮抗し、両国が牽制し合うことで、東方の諸侯は比較的安泰でいられた。秦の9代公主であった穆公はそのような時代の人で、楚と同盟関係を結ぶことで、東方に圧力をかけることに成功した。穆公が死ぬと主だった家臣が200名近く殉死し、国力は一時的に衰え、楚に脅かされるようになり、このような呪いをかけたのだらう。最終的に秦は始皇帝のもとで天下統一を果たしたので、その軍事力に屈服させられた側には秦のことを悪くいう記録が多く残され、強固な偏見が形作られたのだらう。司馬遷の『史記』を初めとして、秦に関する歴史の記述は、秦の敵側からの見方に基づくものである]

【**解題**】第三首は、開元寺かいげんじにあった王維おういと吳道玄ごどうげんの画を見て詠んだもの。二人とも唐とうの玄宗皇帝げんそうの時代に活躍した人で、王維は詩や画に優れ、吳道玄の画は唐代第一と評価されることが多い。

【**訳文**】

其三 王維おういと吳道玄ごどうげんの画

吳道玄ごどうげんの画は鳳翔ほうしょうのどこにあるか。

普門寺ふもんじと開元寺かいげんじである。

開元寺かいげんじの東塔とうとうには王維の筆の痕も残っている。

私はそれらの画を観て、

吳道玄と王維に優る者はいないと思った。

吳道玄の画は、雄々しくも奔放で、

大海原に波が翻るかのようだ。

吳道玄が手を下すと、

風が吹き、雨が飛び、

筆がまた到る前から、その勢いに万物が吞まれてしまう。

吳道玄が描いたのは、

高く聳える沙羅さらか双樹そうじゆの間へと、

五色の雲から朝日がさしこみ、

釈迦しゃかがまさに涅槃ねはんに入ろうとして、

寂滅じゃくめつを説いている場面。

菩薩ぼさつたちは泣き、

衆人は手をこまねき、

千万の異界の者が悲嘆にくれている。
王維はもとより詩に優れ、
それは水辺に草が放つ芳香のよう。
この壁画を観ると、
その詩と同じ清らかで、まことかにもっている。
画かれているのは釈迦の十人の弟子、
みな鶴のように痩せ、
その心は火の消えた灰のように静まり返っている。
門の前にふた群れの竹があり、
雪や霜のような気節を真っ直ぐに貫き通し、
無数の枝や葉が交差して乱れ動き、
それらすべてにその本質を見てとることができる。
呉道玄の作品は絶妙であるけれど、
画の巧みさで論じることができるだろう。
王維の作品は形の外から得た画で、
仙界の鳥が自由に飛びまわるかのような。
二人ともに神技であるのだが、
王維に関しては画を論じるのをやめて、
口を閉ざすしかない。

【補足】[蘇軾が芸術において具象よりも精神性を重んじたことがこの詩から読み取ることができる]

【解題】第四首は楊^{ようけい}恵^し之^しが作った維^{むい}摩^ま詰^{まつ}の塑像を見て詠んだもの。詩の題にあるよう

に、塑像は鳳翔府の天柱寺にあった。楊惠之は唐代の人で、初めは画業に励んだのだが、ライバルの呉道玄ごどうげんに劣るのを憤り、筆を棄ててもっぱら塑像に打ち込むようになったといわれている。維摩詰ゆいまさつは釈迦しやくかの在家の弟子で、病気になったときに文殊菩薩もんじゆぼさつが見舞いに訪れ、二人は仏道について奥深い問答を交わした。この詩はそのことを踏まえて詠まれている。

【訳文】

其の四 維摩詰の像。唐の楊惠之が作った塑像が天柱寺にある
 『莊子』によると、子祀、子輿、子犁、子來の四人は、
 「頭が無で、背が生で、尻が死という者がいたら友だちになりたいものだ」と、いつも笑って言い合っていたという。
 あるとき子輿が病気になり、子祀が見舞いに行くと、
 子輿はひよろひよると歩み出てきて、水辺に立って自分の姿を映し見た。
 子輿の肩は頭のとっぺんよりも上にそびえあがり、
 背中は大きく湾曲し、顎は臍の下に隠れていた。
 そのありさまはかつて笑い合っていたものに近かった。
 子輿は言った。
 「造物者は私をどうしたいのだろうか」
 子祀は言った。
 「君をそんなふうにした造物者を憎んでいるのかい」
 「自分の体がこれよりもっと変わったところでそれはそれまでのこと。
 どうして天を憎んだらしようか」

楊惠之の維摩詰像は、

龜のごつごつとした骨格をからからに干したかのようで、
あたかも子輿を思わせる奇怪さだ。

子輿も維摩詰も、

つまりは道の奥深くに達した至人しじんで、

自分の体の変化など浮き雲が移り行くのと同じと見て、
生とか死とかの境界を超えたところにいたのだろう。

世の中には、堂々した身体を備え、

病ということではないのに、

心を疲れさせてしまっている者が少なくない。

維摩詰は精神が完全な状態にあって、

千人の猛者がかかってきても笑いなから退けた。

ある人が、いかなる法をもってそうであるのかと尋ねると、

維摩詰は首を垂れたまま言葉を発しなかった。

問うた人は心の内で了解した。

そのときと変わらずに、維摩詰の像はいまも言葉を発しない。

この古びた像に、

村の爺さん婆さんは目をくれず、

野鼠が髭をかじったりもする。

本来なら、この像の前で大悟するはずであるのに、

無言の師弟となるうとする者はいまもないのである。

【補足】 [この詩は維摩詰ゆいまきつの像が主題であるのに、蘇軾は最初そうしに荘子の寓話を引いている。仏教が印度から伝来したときに、中国の人々は道教の哲学的諸道具を応用してその新しい外来思想を理解しようとした。蘇軾は少年の頃から道教の經典に馴染んで

いたから、やはり道教を媒介として仏教に接近しようとする傾向が顕著であった]

【解題】第五首は鳳翔^{ほうしやう}の町の東にあった東湖^{とうこ}について詠んでいる。東湖は周囲が一里ほどで、景勝地であった。

【訳文】

其の五 東湖^{とうこ}

私は蜀江^{しよくかう}のほとりに生まれ、

清らかな川は藍よりも青く澄んでいた。

いま塵で濁ったこの世間を走りまわっていて、

耐えられない思いになることもある。

岐山^{きざん}のふもとのこの風光ときたらどうだろうか。

山はあっても赤く禿げ上がり、

川はあっても白とぎ汁のようだ。

たまたま町の東に足をのばし、

ふと門をぐってみたところ、

その先が何やら奥ゆかしい雰囲気^{きふうき}に包まれていて、

小さな湖があった。

この水だけは澄んで故郷を想わせ、

うっとり夢見心地になった。

水の源は山の高いところにあり、

波を立てて走り、地をひたして走り、

東の丘にぶつかって、

ことごとくこの湖に呑み込まれるのである。

そのありさまは、青い竜が山に寝そべって、

清く甘い水を湖に吐き出していると見ることもできようか。

いずれここに蓮の花が開く季節になったら、

夕べの涼を求めて舟を出し、

ざわざわと蓮の葉を分けて湖の中心へと入ってみよう。

葉が風に翻り、遠くも近くもわからず、

世間とのつながりをすっかり忘れて、

ゆったり息つくことができようか。

たちまち晴れて、たちまち雨が降り、

水の深いところには魚や亀、

水の浅いところには巻貝や二枚貝、

それこそようよ浮いたり沈んだり、

餌をやるまでもなく、糸を垂らすまでもなく、

すぐさま籠がいっぱいになるまで採れるであろうか。

聞^きくところでは、昔むかし周^{しゅう}の世が始まったときに、

青い鳳^{ほう}が岐山^{きざん}に棲みつき、この池に飛んできて水を飲み、

いろどり豊かな己の姿を湖面に映したという。

鳳^{ほう}が好む梧桐^{こうむ}がいまもここにあり、

樹の太さは一千年の齡^{とわい}があるかのようだ。

いまは鳳の姿はなく、鷹やら鶉やらを見るだけだ。

私は遅く生まれ過ぎたのか。

鳳^{ほう}について記した古^{いにしへ}の書物は時の彼方にぼんやりとかすんでしまった。

それでも、私は古の意こころを好んでここに遊び、
 鳳の詩を古の人のように詠んでみたいと思う。
 ここ鳳翔ちやうあんは長安を守る三つの町の一つだった。
 湖のほとりて飲んで、酔って歴史を談してみようか。
 鳳はおそらくこのところの王朝の興亡などには関心がないだろう。
 もとの門にもどると、
 道行く人はここで馬を止めることもなくひたすら通り過ぎて行く。
 どのような用事に追われて、
 湖に目を向けようともしないのか。
 私がいまここでこられていられるのは、
 幸いにも知事殿がおおらかに見てくださっているからだ。
 ならば、一日に二度ずつここにきて、
 そのまま三年の任期を満たしてしまおうか。
 暮れ方の鐘や太鼓の響きを聞きながら、
 連日、千鳥足で町へと帰って行くのだ。

【補足】〔(1) 終わりのあたりで、鳳翔府知事の宋選ほうしょう そうせんに厚遇されていることについて触れている。それが例外的な特別なものであるのを蘇軾は承知していたのだろう。(2) 「三年の任期」とあるように、中央から派遣された官員の任期は原則として3年間であった〕

【解題】第六首は、鳳翔府ほうしょうの町の中にあつた真興寺しんこうじを訪れて詠んでいる。真興寺は五代十国時代だいじっくの終わりにから宋代そうだいの初めにかけてこの地を治めていた王彦超おうげんちやうが建てたものである〕

【訳文】

其の六 真興寺の高閣しんこう

真興寺の高閣に登る。

遠くの山や川も、近くの町並みも、

ぼんやりとしたひとつの形に溶け込み、

上を飛ぶ鳥の声も、下を行く人の声も、

ほのかなひとつの響きに溶け込んでいる。

ここの高さはどれほどであるのか。

背を伸ばして落ちる日を見送った後で、

手を伸ばせば流れ星をすくい取れるだろうか。

この閣は誰が作ったのか。

南の山から木を切り出し、

すっかり赤禿山にしてしまったのが王彦超おうげんちょうだ。

王彦超の往時の姿を写し取った画がこの閣にある。

黒い鉄のような顔面、

切れ上がった眼差し、

身の丈はさながらこの高閣と競うかのようにであった。

昔の人は横暴をほいほいまにし、

今の人を驚かせる大きな事業を成し遂げた。

この閣は昇るだけでも息が切れて苦しいのに、

建設に携わった人々の労苦はさぞや耐え難かったであろう。

さあ、この高閣を見るがよい。

作った人は果たして勇者にして英邁であったのか。

【補足】[前の詩でもこの詩でも、鳳翔^{ほうしやう}周囲の山が赤い禿山^{はげやま}になっていることを詠んでいる。その全てに王彦超^{おうげんちやう}の責任があったわけではないだろうが、大規模な建築等によって山の自然のバランスが崩されてしまったのである]

【解題】第七首は、町に北側^{りもてい}にあった李茂貞の庭園を訪れて詠んだもの。李茂貞は、唐^{とう}の末期から五代十国時代の初めにかけて鳳翔^{ほうしやう}を本拠地とした軍閥の長で、唐の皇室を手玉に取って天下に号令をかけようとして力及ばなかったものの、混乱の世を巧みに乗り切って地方政権の王として生き延びた。

【訳文】

其の七 李茂貞の庭園

朝のうちに馬にまたがって町の北へと行く。
 東に向きを転じると、
 青々とした竹が高く伸び上がり、
 その下に赤い門がある。
 壊れかけた塀に囲まれた古い家。
 鞭を挙げて扉を軽く叩くと、
 谷間に低く音がこだまする。
 馬より降り、門から十歩ばかり進む間に、
 早くも九回は目を向けて見るべきものがある。
 いろいろな花が四方に咲き乱れ、
 百種の鳥がさえずり合っている。

谷の水が西から引かれ、

塀際を音を立てて巡り、

東の林へと入って行く。

その奥に緑に包まれた窓が見える。

竹と水は清らかさを競うかのようで、

その間に一羽の鷺が立っている。

ひとかかえ百尺もあるうかという松の巨木があり、

その幹に歳久しく経た青い鱗が縮こまっている。

これほどの松はこのあたりに珍しく、

ちやうあん
長安の周囲でこれ一本であるのかもしれない。

橋を渡って流れの南に行くと、

道の左右に高い木が多くあり、

日の光が淡くさざざられ、

りん
凜とした空気が蓄えられている。

東の四角い池では、

野生の鳥と飼われている鳥とが入り混じっている。

私は問いかける。

「この庭園は誰が築いたのですか」

「その昔、李將軍が世の衰えに乗じてこの地で威を張り、

民衆からさまざまな口実で税を徴収しました。

課税を免れたのは、一杯の粥、一杯の汁だけ。

耕作地を取り上げてこの庭園を築いたのです。

なりわい
生業を失った人々は、

李將軍が怖くて泣くことさえできませんでした。

いまほうしやう鳳翔に名高いこの大庭園ために、

破滅した家は千を数えたのです。

勇壯を誇った李將軍の戦衣いくさごもにはいまでは風がわき、

ここで飲んだ美酒はむなく消え、

李將軍は我々からその名を呼び捨てにされ、

冷笑されるだけとなりました」

この地に来た私は、李將軍と違い、

吹けば飛ぶような小役人だ。

それが李將軍の庭でぶらぶらと遊んでいられるのだから、

人生というものはどうなるかわからない。

李將軍のような力などはないこの私でも、

後世の人から笑われるという点においては、

同じということになってしまいかねない。

いつか俗世間の事柄からすっきり解放されて、

清らかな風光にひたり続けていたいものだ。

【解題】第八首は、しん ぼくこう秦の穆公の墓について詠んでいる。秦の穆公は、第二首の『詛楚
ぶん文』の詩で触れられていたように、ようたくせん きねんかん雍橐泉の祈年観のもとに葬られ、その墓とされる
 ものが残っていた。

【訳文】

其の八 しん ぼくこう 秦の穆公の墓

町の東の一角にちょっとした泉があり、
そのかたわらしん ぼくこうに秦の穆公のたとされる小さな墓がある。
当時はここに町はなく、
昔の人は泉を目印に墓を訪れたのだらう。
穆公が死んだ後に、
特に優れた三人の重臣が殉死した。
人々は三人を失って深く悲しみ、
それから国は病み疲れてしまった。
だから、穆公は後始末をきちんとしておかなかった愚かな君主だったと、
歴史家からは批判された。
だが、穆公はかつて敗軍の将を罰しなかった。
戦に敗れたのは、自分が欲深く領土の拡大を求めたからで、
将軍のせいではないとして、
その才能を惜しんで起用し続けた。
そのことを思えば、
有用な人物を冥途の旅の道連れにするようなことを、
穆公は果たして望んだらいたのだろうか。
三人はそれぞれの気持ちから殉死したので、
誰も止められなかったのではなからうか。
昔々の人々は、たった一回の食事の恩でも、
意気に感じると己の身を殺すことも厭わなかった。
いまはむろんそのような人を見ない。
いま見ないから、昔もいなかったはずだと、疑ってはいけぬ。

遠い昔の人には会うことができない。

だから、いまの人は古の人の心が理解できない。

そのことを私にまたた傷むばかりである。

【補足】[儒学において、殉死は極めて不道德な行為であるとされ、秦の穆公しん ぼくこうの死後に多くの人々が殉死したのは、当時はまだ中華文明の圏内に完全には入っていなかった野蛮な国での野蛮な出来事であったとするのが一般的な見方であった。しかし、敢えて異論を唱えるのを好む蘇軾は、この詩で穆公を擁護している。しかし、このような解釈は殉死を美化することにつながりかねない危険性がある。孔子は墓こうしに人形を埋めることさえも強く嫌った]

■【02-1-019】次韻子由除日見寄

【解題】弟の蘇轍じよじつが除日[大晦日]に詠んだ詩を送ってきたのでそれに次韻した。終わりの部分に「詩成十日到」[詩は成りて十日で到る]という句があるので、弟の詩は翌年の1月10日に届いたのだろう。都ほうしやうから鳳翔まで10日間というのは驚くべきスピードで、実際にその通りであったのかもしれないし、兄のもとに着くように大晦日より前に詠んで送ったのかもしれない。いずれにしても、大晦日の当日に兄弟が瞬時にやりとりをしたとして読むのが最もよい鑑賞法であろう。

【訳文】

しかない役人としての仕事が僕を西へと駆り立てたとき、

君と遠く別れるのがさほど惜まれたわけではなかった。

いまになって、この次に会えるのが遠いことが憂わしくてならず、

一年が終わり行くのを惜しむ心のゆとりはない。

酒を酌んで強いて楽しもうとしても、
このあたりのご馳走は羊のスープに熊の干し肉とかで、
飲んでも食べても、気分は冷や冷やとしたままだ。
子どものころの年越しかしきりに思い出される。
指折り数えると、すてにとつくの昔だ。
行ってしまったことは、放った矢と同じ、
いまさら追いかけるものではない。
あれから得たものは、あれから失ったものを償ってくれない。
時の推移に感じ、事の変化を嘆くばかりだ。
そんなことを思っていたら、
役場の年老いた小間使いがやってきて、
「鬼やらいをやんべえよ」
と、いう。
そのかくしゃく矍鑠としたありさまは驚くばかりだ。
もしかして、いまのこの愁いが鬼の仕業であるのなら、
ひとつここは小間使いを煩わして、
厄払いをしてもらうのがよいのだろう。
寒く凍てつくいまに、
梅や杏の枝を手にとってみると、
小さな幼い芽は麦粒くらいしかなく、
花はいつ開くとも知れない。
華やかな春の到来が遅いと嘆いてはいけぬ。
春の次には夏がきて、幼いころは過去となって、

花の終わった後にはもはや顧みられなくなってしまうであろう。

人生はただ楽しむべきだと、古の人^{いにしへ}がいった。

名声などどうでもよいではないか、ともいった。

どうして僕はこも多くのことを感じ、

身を焦がさなければならぬのか。

油が、油であるが故に我が身を炙^{あぶ}らなければならぬのと同じなのだろうか。

君の詩がきて、

遠くから僕の心を言い当ててくれ、

胸の内をゆるやかにしてくれた。

まざまざと君の顔を見るような気がして、

すぐそこに君がきているのではないかと疑われるほどだ。

兄はちっぽけな役人になったばかりだが、

かたじけなくも知事殿をお手伝いする仕事をいたたいている。

知事殿の御厚意で官舎の北側に池を掘ることになり、

川から青い水を引いてくるつもりだ。

いずれはその池に臨んで酒を飲みつつ、

ゆったりと日を送るようなこともできるであろう。

君の詩に和して詠み始めてみたけれど、

僕の詩は力が弱く、君の詩と競ったならば、

負けた罰として首をちょん切られてしまうことだろう。

君の詩は作られて十日でここに着いた。

これから一カ月に一篇の詩を寄せ合うのなら、

千里の距離など何でもなく、

憂愁を軽擲^{なげう}ってくれることだろう。

【補足】 [(1) 「役場の小間使い」と訳した原語は「府卒^{ふそつ}」。府の役場で雇っている卒
[使用人] である。(2) 「鬼やらい」と訳した原語は「馭^く讎^ど」。中国では古くから大晦
日に魔物を追い払うことが行われ、それが日本の宮中に伝わって「追讎^{ついな}」となった。
「鬼の仕業」と訳したけれど、原文では「魔^ま」となっている。中国の「鬼^き」は日本の
「鬼^{おに}」とは異なり、死んだ者の霊で、生きる者に対して必ずしも悪さをする存在では
ない。生きる者と「鬼^き」は様々な交流をする隣人同士である。(3) 池を掘ると詠んで
いることについては後に詳しく見る]

第2章 最初の赴任地——鳳翔での3年間

[第2章その二]

嘉祐^{かゆう}7年 [1062年]、蘇軾^{そしよく}27歳。

■【02-2-001】鳳翔到任謝執政啓

【解題】年が改まってすぐに、鳳翔府^{ほうしょう}に着任したことを報告するこの手紙^{しっせい}を執政 [宰相] のもとに送った。このときの宰相は韓琦^{かんき}と曾公亮^{そうこうりょう}であったが、蘇軾のこの手紙は韓琦に宛てたものだったと推測されている。この手紙は一定の形式に従って書かれていて、また地方行政の問題点にも触れていて、いずれも訳者のよく理解し得ないものがあるので、ここの訳文はかなりレベルの低い「ずっぱ訳」である。蘇軾が当時の地方行政の問題点を理解して、その弊害を改めたいとの意欲があったことは読み取ってほしい。

【訳文】

右の蘇軾が申し上げます。

宰相府を去りましてより、たちまち歳月が改まり、そちらからの風に恋しさを募らせております。

前月十四日にこちらに到着し、翌日には任務に就きました。私は凡才でありながら、特に選んでいただいて、小さな県の小さな役から大きな府の要職を授かり、自身を顧みて、この幸いに恥じるばかりであります。

謹んで着任して以来、日夜、誰よりも励んでおりますが、ただ願うのは過ちの少ないことであります。かねてより宰相殿には格別の御庇護を賜り、深く私のことを知ってくださっておりますので、ただ自重すべきと心得ております。

任せていただいております仕事は、府の五つの部署の文書の管理で、その中には衙司^{がし}〔法に関する部署〕があり、それが最も重要であります。また、ここでは、木や竹を筏に組んで渭水^{いすい}、黄河^{こうが}に流す仕事や、軍の食糧を西の国境地帯に運ぶ仕事もあります。毎年のように起こる大河の氾濫を防ぎ、あるいは官吏が交易に不当な課税をするのを取り締まらなければなりません。官の政治が不公正であると、民業は春の氷のようにたちまち融け崩れてしまいます。賦税を減免する制度はありますが、民の負担の百分の一も軽減することができません。民を救う術がないのでは、座して取じるしかできません。民の困難のために何かできるのなら、この職務にあって怨むところはないのであります。

【補足】〔手紙の後半では、鳳翔府^{ほうしょう}の民衆が、材木を都に送ったり、食糧を前線に送ったり、治水工事をしたりと様々な賦役を負担させられ、さらには官の不公正な行政によって苦しんでいることを指摘している。後に王安石^{おうあんせき}は、民衆から労働力を徴発することを改め、税を徴収してそれで労働力を雇用するやり方に変えようとした。保守派は民衆の税の負担が重くなるとして猛反発した。ただし、実際に負担が重くなるのは富裕層^{したいふ}で、士大夫は概ね富裕層の仲間入りを果たすことに成功していたので、その反発は必ずしも正当なものではなかった。蘇軾は保守派の一員であったが、この点に関してはやや違った立場を取るようになる。鳳翔府での実務経験などから、民衆の実態をよく見ていたからであろう〕

■【02-2-002】 壬寅二月、有詔令郡吏分往属县減決囚禁。自十三日受命出府、至宝雞、虢、郿、盩厔四县。既畢事、因朝謁太平宮、而宿於南溪溪堂、遂並南山而西、至樓觀、大秦寺、延生觀、仙遊潭。十九日乃歸。作詩五百言、以記凡所經歷者寄子由

【解題】この詩には長いタイトルが付けられている。「壬寅^{じんいん}〔嘉祐七年〕^{かゆう}二月、郡の役人を郡に属する県に派遣し、牢獄に監禁されている囚人を減刑するよう^{みことり}の詔が下された。私は指令を受けて十三日に府を出て、宝雞^{ほうけい}、虢^{かく}、郿^び、盩厔^{ちゆうしつ}の四県を回つ

て、任務を果たした。それより太平宮たいへいきゆうに参詣し、南溪なんけいの溪堂けいどうに宿泊し、南山なんざんに沿って西に進んで、楼観ろうかん、大秦寺だいしんじ、延生観えんせいかん、仙遊潭せんゆうたんに至り、十九日に帰った。五百言の詩を作って、見てきたおよそのことを記して、弟に寄せた」。天災等に見舞われたときに、それは皇帝の失政を天が咎めるものであると受け止めて、天の怒りをほどくために囚人を減刑するような措置が取られることが時折あった。皇帝の命令を受けて、鳳翔府に属する十県のうち四県を蘇軾が担当して回った。四県は鳳翔府の南部に位置し、蘇軾はこの機会を利用して、そのあたりの名所、旧跡を訪ねもした。その旅程を蘇軾自身が詩に詳しく付記しているので、それを先に見ておこう。

【訳文】

○十三日、武城鎮ぶじょうちんに宿った。俗に、諸葛孔明しょかつこうめいが築いた石鼻寨せきびさいだといわれているところがある。この夜、宝雞県ほうけいで火事があり、三十里を隔てた武城鎮からも見えた。宝雞県には雞爪峰けいそうほう、竜宮寺りゅうぐうじがある。

○十四日、宝雞県から虢県かくに行った。聞くところでは、太公望たいこうぼう（が世に出る前に釣りをしていた）磻溪はんけい石が県から東南十八里にあって、両膝をついて竿を投げた痕が残っているという。

○十五日、郿県びに至った。県には董卓城とうたくじょうがあり、長安ちやうあんに似せて作ったので俗に小長安といわれている。この日遅くに、郿県から清秋鎮せいしゅうちんに至って宿った。道の途中で太白山たいはくざんの下を過った。伝え聞くところでは、太鼓を鳴らし角笛を吹いて山の下を行軍して通過すると、きっと雷雨になるという。山の上には湫ぬまがあり、はなはた靈験があるとされている。今年は干害が心配され、湫の水を取って雨乞いをするところが論じられている。

○十六日、鞏屋県こうしつに至った。山に近く、土地が肥え、気候がよくて作物が早く育つ。県には官竹園かんちくえんがあって、十数里にわたって竹が途切れずに続いている。

○十七日は寒食かんしよく〔冬至から105日目の節句〕であった。鞏屋県から東南に行くこと二十里余り、太

平宮に詣^{へいきゆう}て二聖^{にせい} [宋の太祖皇帝と太宗皇帝]を描いた画を拝見した。太平宮は、太宗皇帝の時に、道士^{ちゆうしゆしん}の張守真のもとに神が降^{くだ}って天の命令を記した符を授けたことから、ここに建てたものである。その神が翊聖將軍^{よくせい}とて封^{ほう}じられ、その神殿がある。この日は、監宮^{かんきゆう} [太平宮の管理人]の張杲^{ちゆうこうし}之と舟を南溪^{なんけい}に泛^{うか}べ、溪堂^{けいどう}に留^{とど}まって宿^{とど}った。

○十八日、終南山^{しゆうなんざん}に沿って西に行き、藍^{らん}屋^{おく}県^{けん}の知事^ちが部下^{かんとくえん}を連れて見送^{みおく}ってくれた。近くの官竹園^{くわんちくえん}には時々虎が出るという。この日、崇聖^{すうせい}観^{かん}に遊^{あそ}んだ。俗に樓^{ろう}観^{かん}とも呼ばれ、尹喜^{いんき}の旧宅^{きゅうたく}であるという [尹喜^{いんし}は西に旅する老子を留^{とど}めて、その著作を書き残させたとわれている人物]。山のほとりには、老子が経典を授けたという台^{たい}がいもある。張杲^{ちゆうこうし}之とともに大秦^{たいしん}寺^じに至^{いた}り、朝食をとって別^{わか}れた。太平宮の道士^{ちゆうしゆうし}の趙宗有^{ちゆうしゆう}が琴を抱^{かか}りて大秦^{たいしん}寺^じまで見送^{みおく}ってくれて、『鹿鳴^{ろくめい}』の曲を弾^ひいてから立ち去^さった。さらに西に延生^{えんせい}観^{かん}に至^{いた}った。延生^{えんせい}観^{かん}の背後^{きさき}の小山^{こやま}には唐の玉真^{ぎょくしん}公主^{こうしゆ} [叡^{えい}宗^{しゆう}皇帝の娘]が修道した遺跡^{いせき}がある。山を下^{くだ}って西に行くこと十数^{じゅうしう}里^りで、南に黒水^{くわくすい}谷^{こく}に入^いった。谷の中に潭^{たん}があって、仙遊^{せんゆう}潭^{たん}の名がある。潭のあたりには三つの寺があり、高い峰^{みね}に寄^より添^そい、清らかな溪^{せき}に面^{むか}し、翠^{みどり}の樹林は深く、怪石が数えられないほど多数ある。潭の水は、繩^{なわ}に石をつけて測^{はか}ってみたが、数百尺でも底に達^たしなかつた。石を投^なげ入れても、徐^{おもむ}に落^おちて行^いって、しばらくしてから見えなくなった。とにかく清く澄^{すみ}んでいるのである。中興^{ちゆうきゆう}寺^じに宿^{とど}った。中興^{ちゆうきゆう}寺^じには玉女^{ぎょくじよ}洞^{どう}があって、洞中の滝の水ははなはだ甘い。翌日、泉の水を二つの瓶^{かめ}に酌^{しやく}んでから帰^{かへ}り、郿^{まい}県^{けん}に至^{いた}り、さらに翌日^{つぎしゆう}に鳳翔^{ほうしゆう}府^ふに至^{いた}った。

【訳文】

皇帝陛下は、都から遠く離れた地で、水害、干害があったと聞かれ、

未決囚の釈放をお命じになった。

僕は各県にその詔^{みことり}を伝える役人の一人となり、

山に入って名勝を尋ねる機会も得た。

(十三日に)鳳翔^{ほうしゆう}府^ふを出たばかりのときは、

何やら重い気分であったのだが、
 広々とした大地を行くうちにそれは消え去った。
 夕暮れ近くに小さな町ぶじょうちん[武城鎮]に着き、
 高いところしよかつこうめいに登って諸葛孔明に想い馳せる。
 険しい絶壁に寄り添って、
 青い水が激しく流れ、遠くへと去って行く。
 夜中に急を告げる声が盛んにするので、
 見ると、空に横たわって火の気が浮かんでいる。
 遠く遥かで、何の火であるのかはわからないが、
 風が強く吹いていて、火の勢いはおさまりそうにない。
 (十四日の)暁ちんそうに陳倉県ほうけい[すなわち宝雞県]に入ると、
 昨夜の火はここで起こったもので、
とうだい唐代ほいしよるうに建てられたという売酒楼はそのままであったけれど、
 煙や煤に包まれて町中は混乱し、
 役人たちが叫びまわっている。
けいそうほう雞爪峰にはゆかしい霧困気の朝焼け雲がかかり、
りゆうぐうじ竜宮寺の堂宇は静まり返っている。
 南の山々だいさんかんは大散関へと連なり、
 そこから吾が州しよく[蜀のこと]へと帰って行くことができる。
 もしも行くことすれば行けないことないのであって、
 自分はまだししの間だけここに留まっているのだ。
 道を転じてせいかく西甌へと進み、
 また転じて小さな河洲を渡る。

聞きくところでは、太公望たいこうぼうゆかりの磻溪石はんけいせきが、
渭水いすいのほどりにあるというので行ってみると、

蒼い崖の下がその跡たとか。

太公望には天下を釣ろうとする大きな志があったから、
釣り糸はりに鈎などは付いていなかったのだろう。

(十五日に)東に向かつて鄆鳩びんこうを過る。

(後漢ごかんの終わりに)軍閥ぐんたつの長の董卓とうたくは長安ちやうあんに似せてこの城を作り、

己の身はこの城に守られて永久に安泰だと思っていたのだが、

その横暴を憎む伍孚ごふに刺されそよになり、

ついには腹心の呂布りよふの白刃のもとに倒れ、

鄆鳩には丘のように積まれた黄金だけが空しく残ったのだった。

かねてから太白山たいはくざんの名を聞いていたので、

隊列を止めて、しかと眺めることにした。

山の下で太鼓を叩き角笛を吹く、

風雷が至るとされているが、果たしてそうなのだろうか。

岩の崖は見るからに険しく、

氷を刻んだかのような容貌である。

このあたりでは春に日照りがあっても、

麦が稔らない憂いはないという。

山には靈驗れいげん豊かな湫しゅうがあって、

それを守る竜は怠けもので居眠りばかりしているので、

湫しゅうから水を偷ぬすんで瓶かめに酌しやくんでくるなら、

雨が降るのである。

(十六日)、^{ちゆうしつ}整屋県には優れた林泉があり、

^{しよく さんせん}蜀の三川と気象がよく似ている。

山が近くにあって、小麦、大麦の成長が早く、

水に臨んで竹が青く並んでいる。

(十七日に)^{たいへいきゆう}太平宮に詣でると、

^{たいそ たいそう}太祖皇帝、太宗皇帝が天命をお受けになったお姿が描かれ、

侍臣は武人の冠を載せ、^{じよがく くご}女樂は箜篌[樂器]を抱いている。

秘殿の金の鎖を開くと、

蛇のような鬚をはやした神人が、

黒い衣を着て巨大な剣を横たえ、

髪を乱して、二つの瞳を光らせている。

思いがけず^{かし ちようこうし}佳士[張杲之]に出会い、

美しく飾った舟と一緒に乗り、

竿を投じて緑の浮草を開き、

足を濯いで清らかな流れを乱す。

晩に^{なんけい}南溪のほとりに宿ると、

水辺の国の秋のような静けさである。

湖を^{めぐ}繞って木や竹が茂り、

一晩中^{さわさわ}颯颯と響いている。

(十八日は)^{ゆうすい}幽邃を窮めようと暁のうちに発ち、

虎を畏れて戈でも振り回したい気分で進み、

^{いんき}尹喜の旧宅に至る。

^{ろうし}昔、老子が西に行く途中で車を留め、

^{どうとくきょう}
『道徳経』[いわゆる『老子』の経典]を書き残したところである。

^{みち}
道を聞くやすがはまたあるにしても、

老子^{どうせん}[仙人になったこと]したのは遙か遠いこと、

風に乗って自然のおおもとへと帰って行き、

もはや世の変遷などはかゞろうほどにも思わないのだろう。

^{うきやく} ^{ちようそうゆう} ^{こころ}
羽客[道士の趙宗有]は私の意を知って、

山寺までの道も遠しとはしないで、

馬を繋いで琴を持ってきて^{ろくめい}『鹿鳴』の曲を弾いてくれる。

伝え聞くのは、^{ぎょくしん こうしゅ} ^{いわお}
玉真公主が住まわれたという巖の堂、

^{カーテン} ^{せいおうぼ}
風に幃幔が巻かれる奥に西王母の画がかかり、

落日のもとで玉真公主が愁いておられた姿を想い浮かべる。

谷に入ると木々が密に繁ったさまに驚かされ、

枝を牽き、蔓を牽いて坂を登る。

^{ほこ}
峰々が架を並べたように立ち、

翠の石を千段にも重ねた中に、

^{ふち} ^{せんゆうたん}
油のように静まり返った潭[仙遊潭]があり、

百丈の下に魚が遊んでいるのが見える。

かつては朝廷の使者がここにきて、

金の竜を投じて祈祷したという。

最も愛すべきは^{ちゅうこうじ} ^{せんめいどう}
(中興寺)の泉鳴洞で、

初めてその水を嘗めて見ると、喉に雪が入るような冷たさである。

その水を汲んで^{かめ}瓶に満たしたのは、

けがらわしいことを聞いてしまった耳を洗おうとするものではない。

たちまち思い出したのは、

君と蝦蟇がまはい培を訪ねたときのこと、

洞窟の中は温かく、冬であってもコート裘を脱いだのだった。

山や川の様子はそことよく似ていて、

水や石もそこと並ぶ美しさがある。

ただし泉があっても一緒に飲む相手がいないのだ。

【補足】〔(1) 最後の部分には、蘇軾自身の注で、「昔、弟と蝦蟇がまはい培に遊んだ。冬の季節であったが、洞中は温かくて二月か三月のようであった」とある。そのことは作品番号01-1-033で見ている。弟への思いを記して長い詩の結びとしたのである。(2) 散文調の自由訳では、最初に掲げた日誌をただなぞっただけのように見えてしまうが、原詩は含蓄のある語句を駆使して、日誌とは趣が大きく異なっている。とはいえ、散漫な印象は免れないだろう〕

■ 【02-2-003】新葺小園二首

【解題】蘇軾は鳳翔府ほうしょうの官舎に住み、建物の北側にある庭を自由に使うことを許され、修治してこの詩を詠んだ。この詩からも、宋選知事そうせんが蘇軾を優遇していたことが知れるであろう。

【訳文】

其の一

北の壁にそう短い竹がさわさわと鳴る。

雑草きひらを斬り披いたので小さな花が現れ出るようになった。

知事殿が、緑の池の水を分けることを許してくださったので、

西隣の人に、この庭の緑陰を自由に楽しんでよいと伝える。

あんず
杏の花が少女のように笑いかけてくれ、

鶯がからころと美しい音楽を奏でてくれる。

我が身は閑ひまであるので、

誰か美酒を勧めに来てくれるとよいのだが、

とりあえずは、

花の輝きと水の輝きが照らし合うのを眺めているとしよう。

其の二

三年が経てばここから立ち去る身、

それでもここを故郷とすることだってできるであろうから、

樹を植え、池を穿って、やたらと忙ししている。

わずかな楽しみのためにあくせく働くもおかきなものだ。

もしまたここに来るときがあるとしても、

そのときには、髪が真っ白になっていて、

かの庾ゆしん信のように、枯れてしまった柳を嘆く詩を詠んだりするであろうか。

かの山さんかん簡のように池でひたすら酔ってばかりいたお役人様かつていたことなどは、

もはや誰も覚えていないのだろう。

幸いにも、私が植えた木が切られてしまうことは心配しないでよい、

西隣の人には木々を大切にしようと約束してくれているのだから。

【補足】[詩の中ほどで、南北朝時代の庾ゆしん信と、その少し前の西晋の山せいしん簡さんかんの故事を踏まえて詠んでいる。庾信には枯れた楊を詠んだ『枯樹の賦』がある。山簡は「竹林の七賢人」の一人で、当時、西方の異民族の国との境に近かった襄陽じょうようの知事として赴任

したときに、国家多難の時期でありながらあまりにも無力であることから、町の近くの池に行っては泥酔するということを繰り返していた。「竹林の七賢人」の心理は、
げんせき
阮籍 [→作品番号 01-2-041] もそうであるように、非常に複雑であった]

■ 【02-1-004】 鳳翔太白山祈雨祝文

【解題】先の出張の際の日記 [→作品番号 02-1-002] にあったように、この年は日照り
りで、いよいよ干害の恐れが出てきたので、蘇軾そうせきは宋選知事の代理として太白山たいはくざんに行
って、雨を降らせてくれるよう神に祈った。この後しばしば見るように、雨乞いは地
方官の重要な職務であった。表題にある「祝文しゅくぶん」とは、「神に願いを告げる文」とい
う意味である。

【訳文】

たいはくざん
太白山の神に申し上げる。

西方の英偉の気が集まってできたのが太白山である。太白山の潤いきの気が集まってできたのが秋
たん
潭だ。秋潭の一杯の水があれば天下を潤すに足る雨になるという。ならば鳳翔ほうしょうの地だけなら潤すの
はわけないであろう。

さかのぼること去年の春より鳳翔には雨も雪もない。民衆の生命は何にかかっているのか。麦や稲だ。
あと十日も雨がなければ今年は凶作となる。食べるものがなければ民衆は盗賊となるよりない。土地を
治める知事だけがそのことを憂う役務を負っているのではないはずだ。神は座視してよろしいのか。
皇帝は神に礼を尽し、民衆は神を崇めてきた。それは何のためであったのか。今日のこのようなときのため
ではないのか。

神もよく考え、皇帝の心に背かず、民衆の望みを断たぬようにすべきであろう。

【補足】 [(1) 太白山たいはくざんは、黄河流域こうがと長江流域ちやうこうを分けて東西に連なる秦嶺山脈しんれいの最高

峰で、海拔は3767メートルである。蘇軾はその山頂に行ったわけではなく、麓にある社で祈り、中腹にある^{しゅうたん}湫潭で雨乞いのための水を汲んだ。(2) この祝文のおもしろいところは、神に平身低頭して雨を乞うというものでは全くないことだ。皇帝は天帝から天命を得て中国を統治している。その皇帝から民衆を委ねられているのが官僚としての蘇軾の立場である。一方で、太白山の神もまた天帝から天命を受けているのだが、神の称号は皇帝が^{ほう}封じるという形で与えられている。だから、蘇軾と太白山の神はほぼ対等の立場で、民衆に対する責任もほぼ同じようにある。それで、蘇軾は太白山の神に対して正々堂々とものを言っているのである。(3) この文章で、「^き氣」が集まって山や池ができたといっている。「氣」は中国の自然哲学上の重要な概念で、「物質+エネルギー」と考えてほぼよいのだろう]

■ 【02-2-005】 太白山下早行、至横渠鎮、書崇寿院壁

【^{たいはくざん}解題】太白山に行き帰りに見聞したことを幾つかの詩を詠んでいる。この詩の題は、「太白山の下を朝早くに進んで^{おうきょちん}横渠鎮^{いた}に至り、^{すうじゆいん}崇寿院の壁にこの詩を書いた」。横渠鎮は先の詩 [→作品番号 02-2-002] で2月15日に至った^び郿県の東五十里に、崇寿院はその南にあった。

【訳文】

馬の上は夢の続きの中、

朝日が昇ったのにも気づかなかった。

立ち並ぶ山々は、宿屋の部屋の屏風だと思っていたし、

落ち行く月は、宿屋の淡い灯火だと思っていた。

あたふたと^{ゆうり}郵吏^{おうきょちん}[横渠鎮の役人]を煩わせ、

老僧^{そうじゆいん}[崇寿院の僧]が安閑としているのに対して、
 勤^はめのせわしなさを愧^はじらいはからも、
 ここでまた遊びたい気が強くあるので、
 私がここに来たことをしかと憶えていてほしいものだ。

■ 【02-2-006】 留題延生観後山上小堂

【解題】先の詩 [→作品番号 02-2-002] で2月18日に至った延生^{えんせい}観^{かん}を再び訪ね、その
 後ろの山の上にある小堂^{ぎょくしんこうしゆ}でこの詩を記した。小堂は玉真公主が修道した遺跡である。

【訳文】

溪山^きの風光のありあまる好きに、
 いくら見ても心に満足することがない。
 上へ上と、ぎざぎざの峰を幾つも越える。
 深い谷の鳥がのぞかせる珍しい毛羽は、
 上の世界に去った仙女^{ぎょくしんこうしゆ}[玉真公主]の姿を想起させる。
 丹^{あか}い鳳^{おおとり}の乗った弄玉^{ろうぎょく}[昔の仙女の名]にも引けを取ることなく、
 月^がの蟾^がに駕^{じよう}す嫦娥を追って彼方の世界に行ったのであろう。
 (玉真公主が去った後は)谷^いの草^わや巖^{あるし}の花は主を失ったまま、
 暮れ方に、(玉真公主を慕うようにして)蝶が簾の間から小堂へと入ってくる。

■ 【02-2-007】 留題仙遊潭中興寺、寺東有玉女洞、洞南有馬融讀書石室、過潭而南、
 山石益奇、潭上有橋、畏其險、不敢渡

【解題】先の詩 [→作品番号 02-2-002] で同じく2月18日に至った仙遊潭^{せんゆうたん}と中興寺^{ちゆうこうじ}

を再び訪ねてこの詩を詠んだ。詩の題には、「寺の東に玉女洞ぎょくじょどうがあり、玉女洞の南に馬融ばゆうが書物を読んだという石室がある。仙遊潭を通過して南に行くと、山の岩はますます奇やばくなる。仙遊潭の上に橋があるが、その険しさに畏れて渡れなかった」と書き添えられている。玉女洞とは、古い時代に仙女が住んでいたとされる洞窟。馬融は後漢時代の人で、山中に隠れ住む学者に師事して学問に励み、そのときの跡が石室である。

【訳文】

静かな潭ふちは百尺もの深さがあり、
一切の泥を交えずに澄み切っている。
山の木々が暗く覆って、
谷の鳥が啼いている。
ここはどこかと似ている……
蜀しよくの人である私がかつて遊んだ明月峡めいげつきょうか……
いま秦しんの地にいなからかの桃源郷とうげんきょうに来ているのか……
独り攀じ登り、
馬融ばゆうが書物を読んだという石室を覗き込み、
仙女に会えるかと思って、
洞窟の石の門を叩く。
山を愛する心がままだ足りないのたろう、
我が二本の脚で吊り橋を渡れずに帰ってしまった。

【補足】〔(1) 名月峡めいげつきょうは、かつて蘇軾が父と弟とともに都に向かつて長江ちょうこうを下った旅の途中で立ち寄ったものと思われるが、第1章で見た蘇軾の詩文はそのことについて

言及していない。(2) 作品番号01-2-024では、馬融ばゆうのことを嘲笑していた]

■ 【02-2-009】 楼観

【解題】楼観ろうかんもやはり先の詩 [→作品番号02-2-002] で2月18日に訪ねていたところ。盩厔ちゅうしつ県の東三十七里しゅうにあつて、周の時代いん きに尹喜の住まいがあつたとされていた。この詩には、「楼観しんの南しこうていに秦の始皇帝ろう しびょうが建てた老子廟しん けいていがあり、晋の恵帝しん けいていがそれを修復した」と、書き添えられている。

【訳文】

夕陽を受けて、

門前に古い石碑が臥せている。

川の流れを見送るように、

この石碑は世の変転を眺めてきたのであろうか。

ここを訪ねる人は、

晋しん けいていの恵帝しん けいていのことを静かに悲しむ。

恵帝ろう しびょうは古い老子廟ろう しびょうを修復し、

秦しん しこうていの始皇帝しん しこうていに学んで不老不死を得ようとした。

丹砂たん さ[硫化水銀]が長らく穴倉あなぐらにあると井戸の水が赤くなり、

白朮はくじゆつ[薬草]を焼くと香ばしい匂いが立つ、

いずれも不老不死の秘薬とされるが、

恵帝は毒にあたって死んでしまった。

神仙の道は遠い過去のものなのだろうか。

乱かしたら、この辺りの農夫も実はかつて老子の従者の子孫だったりするのだろうか。

【補足】[秦の始皇帝をはじめとして大勢の皇帝が不老長生の薬を得ようとして、怪しげな術士が作った薬を飲んだ。薬の原料には薬草や丹砂が用いられ、丹砂は猛毒であったから、薬を飲んだ皇帝は、例外なく健康を害し、精神を乱し、若死にした。術士は皇帝の死後に必ず処刑された。にもかかわらず、同じことが何度も繰り返された。蘇軾は理系人間であったと思わせるところが多々あり、薬学、化学に強い関心を持ち、薬草を採取して薬効を調べたり、丹砂を用いて不老長生薬を作ってみようとした。ただ、歴史を熟知する蘇軾は、不老長生薬を服すことには極めて慎重で、実際には飲まなかったようだ]

■ 【02-2-010】 郿塢

【解題】先の詩 [→作品番号 02-2-002] で、2月15日に近くを通過した郿塢について改めてもう一度詩に詠んだ。郿塢は後漢末の梟雄、董卓が作った砦の跡である。

【訳文】

董卓は、衣の下に厚く鎧を着るよう、
砦をかちがちに固め、
砦には黄金を多く貯め込み、
ここにいれば何の心配もないと考えた。
董卓に似る英雄はその後は誰も現れなかった、
何しろ、市中にさらされたその死骸は、
ばんばんに膨らんだ腹から脂が流れ出て、
臍に挿した芯に灯した火によって、
幾日も自分自身を照らし続けたのだから。

■ 【02-2-011】 礪溪石

【解題】先の詩 [→作品番号 02-2-002] で2月14日に近くを通った^{はんけいせき}礪溪石について詩を詠んだ。

【訳文】

^{ぼくし}墨子は天下を遊説してまわったので家の煙突に煤が付く間がなかった。

^{こうし}孔子は仕官の相手を求めて歩きまわったので席が暖まる間がなかった。

ところが、^{たいこうぼう}太公望は^{いすい}渭水のほとりて、

両足をぴったり岩につけてじっと坐っていた。

ある日、^{しゅう}周の^{ぶんおう}文王に見出されると、

^{ぶおう}武王とともに辛苦して天下を平らげたのだった。

そして、^{せい}齊の国へと赴任するに際して、

旅の宿でゆっぴり眠ってしようとしたら、

宿の主人に詰られ、

それからは夜も休まずに急いだのだった。

【補足】[終わりの部分は、ひとたび公^{おおやけ}の仕事に就いたなら、もはやのんびり朝寝などしてはならないということで、官職にある蘇軾自身の身の上を重ねて歌っているのだらう]

■ 【02-2-012】 石鼻城

【解題】先の詩 [→作品番号 02-2-002] で2月13日に見た^{せきびさく}石鼻寨について再び詩に詠んだ。

【訳文】

いまの平和な時に、

蜀しよくと魏ぎが戦った往時の趣はない。

道行く旅人はかつての寨とりでに目をくれることもなく急ぎ通り過ぎて行く。

北からの旅人はこの先で初めて険しい山道に出会うことになり、

南の蜀からの旅人はここで山々に見送られる。

私は暗いおぼろ月のもとで、

独り愁いつつ河を渡ろうとしている。

乱もここから西南[つまり故郷の蜀の方向]に行くなら、

風景がこことは一変して、

道のかたわらには青い竹が茂り、水がきらきらと流れていることだろう。

【補足】[最後の部分は、上の詩の続きで、官職にあつて自由にならない我が身を歌っているとの解釈に基づいて訳してある。鳳翔府ほうしょうから見て蜀しよくは南に連なる山の向こう側で、蘇軾がこれ以降に赴任するどこよりも蜀に近かった]

■ 【02-2-013】 太白山神

【解題】 以上の一連の詩は、太白山たいはくざんに雨を祈り、鳳翔府ほうしょうへと帰る途中で詠んだもので、のんびり名所を訪ねまわったわけではなかった。雨乞いの結果は果たしてどうであったのだろうか。これより数年後に書いたと推測される文章を見ておこう。

【訳文】

昔、扶風ふふう[鳳翔ほうしょう]で知事を補佐する職務に就いていたときに、ひどい早魃さうさつとなったので、父老ふらう[土地

の経験豊富な年長者]に、鳳翔府内で雨乞いをすべきところを尋ねると、

「たいはくさん太白山は至って靈験があります。昔から祈って応じてくれなかったことはありませんでした。ところが、近頃こうでん向伝師様がここの知事であったときに、せいみんこう太白山の神をほろ済民侯に封じよう朝廷に奏上しましたところ、それからは祈っても験がなくなりました。どうしてなのか全くわからないのです」と、いったので、私はそのことについて思案していたところ、とうかいようたまたま『とうだい唐会要』[唐代の制度を記した書物]を見ると、次のように書いてあった。

「てんぽう天宝十四年[755年]、ほうし方士[しんせいどう道教の術者]が朝廷に申し上げた。太白山のほうふ金星洞には宝符[天のお告げを記した符]と靈薬があるので、朝廷より使者を派遣してこれを獲て、山の神をれいおうこう靈応公に封じみことりる詔を下されますように」

これで山の神が悦ばなかった理由がわかったのだった[すでに「公」として封じられていたのに、改めて格下の「侯」に封じられたのでは神としては不満だったのだ]。

すぐに私はこのことを知事に告げ、山に使者を出し、雨を祈り、

「もしも応じてくださるならば、また『公爵』に戻すよう朝廷に奏上いたします」

と、山の神に申し上げ、かめ瓶にぬま湫の水を汲んで町に帰ってくるようにした。すると、水が届くよりも前に、霧が風によって運ばれてきて、旗が舞い上がり、ぼんやりと何かが見えるかのようであった。

それより三日間大雨が降り続き、その年は豊作となった。

私はその経緯を記して朝廷に奏上したところ、めいおうこう明応公に封じるとのみことり詔が下された。私はまた別に記念の文章を作り、神の廟を修理した。新しくなった廟で祀った日に、長さ一尺余りの白い鼠が現れ、供えた酒の上を走り、臭いを嗅いたが飲むことはなかった。父老は、

「あれは竜です」

と、いった。

か嘉祐七年[1062年]のことである。

■ 【02-2-014】 真興寺閣禱雨

【解題】上の文章では、^{たいはくざん}太白山に雨乞いしてすぐに雨が降ったように書いているのだが、実際はそれほど簡単ではなかった。蘇軾が太白山の神に祈ったのは2月の末ないし3月の初めで、鳳翔府では3月7日と3月16日に降雨があったものの大地を潤すには不十分であった。そこで、再び太白山に使者を出し、^{ぬま}湫の水を汲んで、3月19日に鳳翔府の^{しんこうじ}真興寺の^{そうせん}楼閣で宋選知事自身が雨乞いをするようになった。蘇軾はこのときには太白山には行かないで知事に付き従い、まず鳳翔府の町の外に出て、水が到着するのを出迎え、それを真興寺に持って行って神に雨を祈った。これはそのことを詠んだ詩。なお、真興寺については作品番号02-1-018の第6首で詳しく見ている。

【訳文】

知事は千人を従えて^{たいはく}太白の^{いの}神に禱る。

神は遠から一杯の清らかな水を貸してくれた。

すると、雲が暗く空いっぱい湧き出してきた。

雨の気配がいよいよ熟してきたのだ。

風がわずかに吹き出して袂がひんやりと感られる。

しかし、山に添う夕陽はまだ強く輝いている。

今年の秋の稔りはどうなるであろうか。

きと江南[^{こうなん ちやうこう}長江下流の南側の一大穀倉地帯]の地よりも米がたっぷり採れるに違いない。

■ 【02-2-015】 余自城中還道中、雲氣自山中来、如群馬奔突、以手掇開箆收其中。帰家雲盈箆開而放之、作攬雲篇

【解題】知事は^{しんこうじ}真興寺で雨乞いをした後に、再び町の外に出て、雨を降らせる雲が^{たい}太

はくざん
白山からくるのを迎えた。詩の題は、「町からまた道に出ると、群馬が突進するよう
にして山から雲気がきた。私は箆を開き、手で雲をその中に収めた。家に帰ると、雲
が箆の中に満ちていたので、それを放ち、『捲雲篇』の詩を作った」。

【訳文】

自然界の物の動きには、
必ずしかるべき時期というものがある。
星を観察してそれを見定めたので、
ここに知事殿に従うこととなった。
郊外の道で南の山から来た雲に逢い、
それは電光のようにすばやく下ってきた。
誰が指令を出したのか、
雲は次から次へと下ってくる。
竜が雲から雲へと飛び移り、
鳳おおどりが上へ下へと舞い飛ぶかのような。
東の郊外に散った雲は霧となり、
あるいは枯れた木に凍りついて実のようになる。
一つの雲が飛んで私に車に入り、
我が肘やら腿やらにからみつく。
それを箆はこの中に引き入れて据え置き、
携えて我が家に連れ帰る。
そして封を開いてそれを放つと、
伸びたり縮んだり変化する。

雲よ、君は山に帰るがよい、
むやみと官員を恐れさせないでくれたまえ。

■【02-2-016】代宋選奏乞封太白山神状

【**解題**】宋選知事が真興寺で雨乞いをする、以上の詩で見たように山から雨雲がきて、それから3日間にわたって雨が降り続いた。それで、宋選は、太白山の神を、唐の時代と同じように公爵に封じるよう朝廷に奏上した。これは宋選に代わって書いた奏上の文。この雨乞いには蘇軾が深く関わったので、すでに名文家として知られるようになっていた蘇軾が宋選の依頼を受けて代筆したのだろう。

【訳文】

鳳翔府郿県の太白山を仰ぎ見ますに、大地の一方を鎮める堂々の山で、古くから書物にも記載されております。案じますに、唐朝の天宝八年に詔によって太白山の神は神応公に封じられております。宋朝に至りまして、改めて侯に封じられ、済民の号が加えられました。

去年の九月より雨が降らず、冬を過ぎて春に及びました。農民は手を拱いて、饑饉を待つばかりで、穀類は今にも絶え、盗賊がまさに興ろとするばかりとなりました。臣は道に父老の声を得ましたところ、誰もが太白山には昔から湫の水があつて、それによって祈り請うならば必ず響き応えてくださるということでありました。そこで、日を選んで齋戒し、人を派遣して湫に臨んで水を取らせ、臣と百姓[種々の階層の民衆]数千人でその水を郊外で待っておりますと、空の模様が暗く変わり、東南より隆隆獵獵として先駆けてくるようなものがあり、ついに陰の気が満ちて、雲が満ち満ちて、車の蓋のよりに天を覆い、雲はそのまま散ることなく四方に広がり、変化して大雨となったのであります。雨は十分に行き渡って、陽の気が驕るのを破り、枯れていた小麦、大麦が立ち上がったのでした。鬼神の働きは目には見えにくいものではあります、この応答ははなはたはつきりしてあります。

臣が竊ひそかに考えますに、太白山の神の功いさおは極めて大きく、しかしその封爵はまた十分ではなく、昔は公であったのが今は侯であるのは、神としては地位を落とされたと考えて、人にそのことを知らせるために安らかではないことをしたのでありましょうか。この山が崇高でありますことは、五嶽ごがくに十分に次ぐものでありましょう。公爵を賜りましても、その功と比べて、過ぎるものではないのであります。

朝廷のしかるべき部署において詳しくこのことの可否を審議するよう、特に陛下の御指示を賜りますよう伏して請うたのであります。

【補足】[この奏上に応じて、朝廷が太白山の神を封じたのは、作品番号 02-2-013 で見た通りである]

■ 【02-2-017】次韻子由岐下詩

【解題】弟が詠んだ『岐下の詩』に次韻した作品。鳳翔府ほうしょうふの北東に古くから名の知られる岐山きざんがあり、「岐下」とは鳳翔府のことである。弟は、兄が官舎の裏手に庭を作っていると聞いてそれについて詩に詠んで寄せたのが『岐下の詩』である。宋選知事そうせんの厚意で庭を自由に作るのを許されたことは前で見ている [→作品番号 02-1-019]。弟と蘇軾の作品は、唐代に王維おういが自身の別荘である輞川荘もうせんそうにおいて親友の裴迪はいてきと唱和した一連の詩を意識したものであることは明らかである。王維の作品は五言絶句が二十一首で、蘇軾の作品はやはり五言絶句が二十一首である。ただし、王維の輞川荘は長安郊外の広大な土地を占め、蘇軾の庭は官舎の裏手のごくささやかなものである。規模に大きなギャップがありながらも基底にある心持ちは変わらないというところであろうか。序文が付いている。

【訳文】

私は岐下[鳳翔府]に来て月を超えてから、官舎あざまやの北の空き地に亭あざまやを作ることになった。亭の前[南

側]に長さ三丈の横池おうちを作り、池のほりに低いかき壁を巡らせ、堂どう[池の南の執務室であろう]にまで繋げる。堂の北側のきの厦の下に窓を開き、曲がった欄干を設けて池を俯瞰できるようにする。堂を出て南にゆく廊下を作り、官舎に繋げる。廊下の両側にも小さな池を作る。三つの池はどれもけんすい湧水から水を引き、蓮を種えてその中に魚を養う。池の周りには、桃、李、杏、梨、棗、桜桃、石榴、樗、槐、松、檜、柳を三十株余り植える。また一斗の酒を牡丹と交換して、亭の北にひとむれ植える。弟がそれについて詩を寄せてくれたので、次韻して和して答える。全部で二十一首である。

ほくてい
北亭

誰がこの低いかき壁を築いて、
吾が堂を取り巻くようにしていたのか。
新しい亭あずまやを作らなかつたならば、
微かな花の香りもわからないままであったのだ。

【補足】〔(1) この詩には、蘇軾自身の注で、「もとの堂には北側かきに壁があったが、それを取り除いて亭あずまやを作った」とある。つまり、堂の北側には壁に隔てられた空き地があるだけだったのだろう。(2) この一連の詩は、庭が完成したときの姿を想像して詠んだものであるようだ〕

おうち
横池

明るい月が我が池に入ってくると、
きらきらと真っ白な布になる。
この布がいつか黒く染まるのならば、
私が言葉を尽して、
太玄たいげん[物の根源は玄く奥深いものであること]を論じるまでもなくすむであろう。

【補足】[結びは、ある故事に基づくものであるが、訳者が知ったかぶりで解説したところで、腑に落ちるものではないだろう]

たんきょう
短橋

誰かが竹の白い敷物を用意してくれたなら、
あか朱い橋の上に寝そべて、
 樹の影が欄干の上を移り、
 波の光が橋の板の底で揺らくのを、
 感じながらひかな一日を過ごすのだ。

けんそう
軒窓

はくよう東隣には白楊がたぐさんあって、
 夜になって雨の音が激しくなった。
 窓の下で独り眠らずにいると、
 秋の虫が燈に向かって入ってきた。

きょくらん
曲欄

水の流れにあか朱い欄干が映り、
 水の明るい鑑をかがみ浮き草が乱す。
 橋の上にいる人はというと、
 水に浮かぶ朧を黙って見つめている。

そうち
雙池

けんすい
汧水は城郭に入ると、

さらさら
簞簞と千の家を巡って行く。

そうち
雙池ではその水を見ることはない。

「十里の花」をいっばいに漂わせているからである。

【補足】[江南の湖州には十里にわたって蓮の花が続く名所がある。それでこの末句では蓮の花を「十里花」と呼んでいる。小さな雙池に対して「十里」という表現に面白味がある。なお、蘇軾は後に湖州の蓮を実際に見ることになる]

か か
荷花

ほりほり
(蓮の葉は)田田と朝の陽をかえし、

ほりほり
(蓮の根は)節節と春の水に伏している。

し
平らに鋪かれた浮き草が乱れるのは、

しら
魚がちょこまか動いていることを報せているのである。

ぎょ
魚

そうち
湖[雙池]に魚を移したばかりのときは、

人が覗き込んでも恐れなかった。

し
釣り針の餌を識ってからは、

いくら見ようとしてもとんと姿がない。

ぼたん
牡丹

いつも残念に思うのは、

花の好いものが稀であること。

花数が多いのが佳いわけではあるまいに、
四十も枝がある牡丹とは。

その枝のすべたに柄杓のような大きな花がつくはずはないのに。

【補足】[蘇軾の注で、「四十余枝の牡丹花がある」と記されている。多数の花を付ける品種が作られたこともあるのだろう]

とうか
桃花

葉が出るのを待たずに花は争うようにして開き、
密に綴って枝をなくしてしまおうとしている。

沼に傍って水鑑みづかがたに移るのを覗こうとすると、
魚が驚き上がって水が橋に跳ねかかると。

り
李

すもも
李は、花びらの軟らかさでは梨に及ばない、
花びらの紅さでは梅に取じねばならない。

町の西の園には千葉李せんようりがあって、
淡く佇みつつ、実に織しなやかかつ穠たじやかである。

【補足】[蘇軾の注で、「町の西に千葉李せんようりがあつて茶蘼とび [薔薇の一種] のような花が咲く」と記されている]

きょう
杏

余寒あんずがおさまるところに杏は花を開き、
夏の始まるころに実を結ぶ。

かんちゆう ちゆうあん

関中[長安を中心とする盆地]には幸いにも梅がないので、
役場に和気を漂わせる役は汝が担っているのである。

り
梨

霜が降るころに紅く梨は熟し、
柔らかな枝は重さに耐えられなくらいである。
梨の実の特長は冷たくすることにあるが、
夏の渴きを除くことには間に合わなくて、
冬の氷の寒さを助けてばかりいる。

きょう
棗

住む人がどれほど老いれば、
なつめ
棗の樹は枝を交差するまでに大きくなるのか。
いまそなたはやっと細い軸ほどなった、
私の任期が満ちるころまでに瓜ぐらの太さになるであろうか。

【補足】[蘇軾の注で、「なつめ棗の樹は至って成長するのが遅い」と記されている]

おうとう
桜桃

ゆすらうめ
独りて桜桃の樹のまわりを巡っているのは、
酒が醒めて喉から肺が乾いているからだ。
枝の上の露を除いてはならない、
口に向かってたっぷりしたたせるままにしたいのだから。

せきりゆう
石榴

風流の意は尽きることがない、
 他の花がすっかり終わっても、
 なお石榴せきりゆうは残っている。
 その色は裳裾を染めてくれるし、
 その名は盃の楽しみを味あわせてくれる。

【補足】[蘇軾の注で、「石榴せきりゆうという名の酒がある」と記されている]

ちよ
樗

樗ちよは昔から神聖な樹とされているが、
 実際には樹上ひぐらしもずで蝸が鴟がひたすら鳴いているだけだ。
 土地の神は樗のために移動させられてしまったのだから、
 いささか供え物をしておかねばならないだろう。

【補足】[蘇軾の注で、「土地の神の廟おうちがあつて、樗のために覆われてしまったので、私は廟かきを牆の北側に移した」と記されている]

かい
槐

実を採ることも厭わずに、
 槐えんじゆを植えてからまだ間がないのに、
 忽然としてすでに木陰を作るほどになった。
 蝉は鳴いてもその姿は隠れて見えない。
 鶴でさえも枝の奥深く立っているのである。

【補足】[蘇軾の注で、「槐えんじゆの木の上に野生の鶴が三、四羽くる」と記されている]

かい
檜

南の山から無理やり持ってこようと、

ひのき い すい
檜は渭水の早瀬も越えてきた。

根付くかどうかまだわからないのだから、

からす かろさぎ
鴉も鷓も悪さはしないでくれたまえ。

しょう
松

まつ
古い松の木が生い茂って、

その実を食べるなら、

緑の毛で覆われて仙人にもなるという。

松は成長することに必ず節義を示すというが、

来年はとりあえず人を覆うくらいにはなってくれるだろう。

りゅう
柳

今年^{やなぎ}は自分の手で柳を植えた。

柳は私に尋ねた、

「いつの年にここを去るのか」

もしまたいつかの年に来るなら、

大きくなった柳からはらはらと葉が落ちるのを見て、

私は心を傷めることであろう。

■ 【02-2-018】 喜雨亭記

【解題】上の一連の詩にあった池のほとりの亭あずまやを、蘇軾きうていは「喜雨亭」と名付け、そのことを記念するこの文章を記した。

【訳文】

雨を亭あずまやの名に入れるのは、雨による喜びを記念するためだ。

何かによる喜びがあったときに、そのことをもって物に名を付けるのは遠い昔から行われていることである。喜びを忘れないためだ。事例は数多く、喜びの大小はさまざまであっても、忘れないためということとは共通している。

私は鳳翔ほうしょうにきて年が改まってから官舎の改築を始めた。建物の北に亭を建て、亭の南に池をうがち、水を引き、木を植え、休息の場にしようとした。

春になったばかりのころに、山の北側で空より麦が降った。占いによると、麦は雨の降る形を示し、豊作になるということであった。ところが、それからひと月を越えても雨がまったくなく、民衆は憂い顔になった。三月に入ってやっと一日だけ雨が降り、その九日後にもまた雨が降った。これだけではとても足りないと言った民衆はまだ心配が続けた。そして三日後にとうとう大いに雨が降り、三日間続いてから止んだ。役人は官舎の庭に集まって祝賀し合い、商人は市場に集まって歌い合い、農民は畑に集まって踊り合った。これまでの憂いは楽しさに転じ、病は癒えたのだ。そして私の亭はちょうどこのときに完成したのである。

私は亭において宴を催し、来てくれた客に向かって盃を挙げ、問いかけた。

「あれであと五日も雨がなかったらどうなったでしょうか」

「麦はまったく稔らなくなったでしょう」

「あれであと十日も雨がなかったらどうなったでしょうか」

「稲もまったく稔らなくなったでしょう」

麦も稔らず稲も稔らなければ飢饉に陥ってしまう。困窮した民衆は争いごとを頻繁に起し、盗賊の勢い

がさかんになって、私たちがこの亭に集まって楽しみをなさうとしてもできることではなくなってしまう。

始めは日照りであったけれども、天はこの民を見捨てず、雨を降らせてくださり、そして我らにこの亭での楽しみ事を与えてくださった。これらはみな天からの賜わりものである。忘れてよいものではない。よって雨をもって亭に名を付けるのである。

そしてこのことを歌おうと思う。

天が^{たま}珠を降らせてくれても、

凍える者はそれを身にまとえない。

天が^{ぎよく}玉を降らせてくれても、

飢える者はそれを食べられない。

雨が三日も続いてくれたのは、

誰の力のおかげだったのか。

民衆は知事が祈ってくれたおかげだといけれど、

知事は自分ではない皇帝の徳のおかげだとおっしゃる。

皇帝は自分ではない^{そうぶつしや}造物者のおかげだとおっしゃる。

造物者は自分ではない^{たいくう}太空のおかげだとおっしゃる。

太空とは^{めいめい}冥冥として名付けようもないものだ。

だが私は名を付けるという行為を^{あづまや}亭にはしたのである。

■ 【02-2-019】 読開元天宝遺事

【**解題**】春の後しばらくの間は蘇軾の詩文は途絶える。公務が忙しくなったのが主因であろうが、役所内での人間関係で少々つまずいて詩文を作る気分になりにくかったのもその一因であったかもしれないと推測される。人間関係については後で触れると

して、まず公務について記しておこう。夏に蘇軾は、南の山地から筏を流し出すのを監督する仕事に出向いた。これは民衆に過大な負担を強いるもので、蘇軾は非常に悩ましい思いに駆られたようである。秋には、^{ちやうあん}長安で行われた科挙の地方試験の実行部隊の一員として招集された。問題を作ったり、採点をしたりと責任のある仕事で、なおかつ試験期間中は不正が入り込む余地のないよう、外部とは一切遮断された場所に閉じこもっていなければならなかった。そのときに、同じ年の科挙で合格した^{しやうじゆん}章惇
 [字は子厚]と一緒になり、意気投合して、互いに親友と認め合う仲となった。仕事から解放されて、それぞれ元の任地に帰る途中で、2人はしばらく同行して短い余暇の旅を楽しみ、そのときの逸話が^{ちんこく}陳鵠の^{せいとうしゆう ききゆうぞくふん}隨筆『西塘集耆旧統聞』に記されている。
 陳鵠は^{なんそう}南宋の人で、交友範囲がかなり広がったようで、いろいろな人から聞いたことを記録している。

【訳文】

^{ちんこく} 陳鵠:^{せいとうしゆう ききゆうぞくふん}『西塘集耆旧統聞』

^{しやうじゆん} 章惇が^{しやうしゆうすいかん}商州推官であったときに、^{ほうしやう}蘇軾は鳳翔府の幕官となり、試験委員になるために^{ちやうあん}長安に派遣された。試験場から解放されたときに、二人は一緒に山の寺で飲んだ。すると、虎の声が聞こえた。二人は酒に狂っていたので、馬にまたがって虎を見に行った。数十歩まで虎に近づいたところで、馬は驚き、もう進もうとしなくなった。

蘇軾はいった。

「馬がこらしているのは、きっと理由があるのだ」

向きを転じて去ろうとした。

章惇は馬に鞭を当て、前に進もうとして、いった。

「私には私の道理がある」

虎に接近すると、銅の沙鑼どらを石の上に投げつけた。激しい音に虎は驚き、逃げ去った。

章惇は戻ってきて蘇軾そくにいった。

「君は私には及ばないな」

後に、章惇が奸計かんけいを巡らせた萌芽はすでにここに現れていたのだった。

【補足】[最後に「奸計」とあるのは、章惇しょうじゆんが種々の政治的陰謀を張り巡らせたことをいっている。ただしそれは、王安石おうあんせきが始めた改革を巡って改革派[新法党]と保守派[旧法党]の抗争が激しく繰り返された後に、保守派側からの見方として定着した評価に基づくものである。章惇が「奸」を為す者であるかどうかは別として、章惇と蘇軾はこのときからしばらくは厚い友情を結ばれたのだが、後に改革派と保守派に分かれ、章惇は改革派の腕利きとして、蘇軾をしばしば苦しめることになる]

【解題】この表題に掲げたのは、『開元天宝遺事』という唐代の開元および天宝年間の出来事を記した書物を読んだ感想を詠んだ詩である。その時代は玄宗皇帝の治世の終わりで、『遺事』には、天宝14年[755年]に勃発した安祿山あんろくざんによる大乱に関連する記事が多数収められている。安祿山の反乱は、唐の社会をすっかり変えてしまうほど大きな影響を及ぼし、唐王朝はその後も継続したものの、実質的には分裂の時代に入り、統一国家としての中国は宋朝の出現まで待たなければならなかった。

【訳文】

其の一

姚崇とうすうと宋璟そうけい[玄宗皇帝の治世の前半期を支えた名宰相]が亡くなると、

いろいろとまずいことが起こり、

人は官位を重んじるばかりで、

万人の命は軽く見られるようになった。

さくほう 朔方の老将おうちゆうし [王忠嗣のこ]は風流人で、

とばん 吐蕃の石堡城せきほうじょうを取れという皇帝の命令には応じようとしなかった。

【補足】 [古い中国語の「風流」は日本語とは全く意味が異なる。古いにしえから伝わる価値観を体現して、自在に振る舞う度量の大きいことをいう。王忠嗣おうちゆうしは見識のある武将で、西方とばんの吐蕃 [チベット系の民族] の石堡城せきほうじょうを攻め取るよう玄宗皇帝げんそうに命じられたときに、石堡城の守りは堅いので、たとえ奪えても失うものが多すぎると、首肯しなかった。玄宗皇帝は他の将軍に命じ、結局、王忠嗣が心配した通りになったのだった。この第一首は、玄宗皇帝の治世の後半期には、無定見の者ばかりか要職を占めるようになったことを歌っているのである]

其の二

ちやうあん 長安ちやうあんの東に広運潭こううんたんを穿つと、

都に入る船は百倍に増えた。

新装船が各地から続々と珍宝を運び込み、

そのめでたさを称えた『弘農得宝歌こうのうとくほうか』を皇帝の前で歌ったことで、

皇弟は高い官爵を授かったのだった。

其の三

琵琶の弦が早い調子に代わり、

かっこ 羯鼓かっこの音が高くなって、

勇ましい舞いが披露される。

この『羯鼓の曲』を献じたのは皇帝しんの姉である秦国夫人で、

皇帝が褒美に髪飾りを与えようとすると、

「大唐天子の姉でありますのに、まさかたどというわけではありませんでしょう」

と、いったので、三百万銭が下されたのだった。

【補足】[この一連の詩は、玄宗皇帝げんそうの後半期の種々の乱れを戒めとして、現代の諸問題に真剣に取り組んで行かなければならないという、蘇軾の問題意識を表現したものである]

■【02-2-020】祭伯父提刑文

【解題】8月1日に伯父そかんの蘇渙りが赴任先の利州で亡くなった。62歳であった。蘇軾のもとにその訃報が届いたのはしばらく後のことで、表題に掲げた祭文を作ったのはさらに後の翌々年であったのだが、ここで見ておくことにしよう。

【訳文】

嗚呼あ あ。我が先祖の後として、かつては、一世代上の方々が男も女も森の如く、あるいは雁が群れて飛行する如くに大勢いたのであります。ところが、三十年の間に死生を分かち、なおも契りを結ぶのはただ我が父と伯父上だけとなり、しかも二人は千里を隔てて遠く望むだけであったのでした。

伯父上は官員として全土を東奔西走され、家を去って家を忘れてしまったかのようでありました。一族に子供が生まれそして成長しても、伯父上とは互いに知らないままにいるという残念なことになっていました。官職を退いたならば、故郷に退いて家を築き、人々とともにあたりをぶらぶらしながら老いの日々を送ろうと決めていたのですが、嗚呼、伯父上はひとたび故郷を離れてからは、そのような志はありながらも、ついにこは遂げることができなかったのでした。

辛丑しんちゆう [嘉祐六年]の秋、私は都の西郊で伯父上を見送りました。暗い雨が蕭蕭しとすとと降り、川の水は滔とうと溢れるばかりでありました。伯父上はやつれた様子で別れを告げられ、しほば振り返って手を振

ておられました。まさかこのときの旅が幽明を隔てるものになるとは誰も知らなかったのです。

嗚呼、伯父上は生きてついに何をなされたのでしょうか。食べる間も惜しんで辛苦して勤めに励まれ、その身を厳しく律しられて、民衆のためになることをなさって、子孫のためになることはなさいませんでした。

いま亡くなられた後には、家はただからっぽの筐はこのようで、妻や女たちは粗末な衣服を纏い、息子や男たちは冬に薪を負って売りに歩かなければならないほどとなっています。誰が伯父の子孫のために優孟ゆうもう〔戦国時代の役者で、詳しくは後述〕となって悲しく歌うのでしょうか。私にはただこの文があるだけです。

【補足】〔(1) 蘇渙そかんは官員となってからは一生のほとんどを故郷の外で過ごし、蘇軾が初めて伯父に会ったのは 12 歳のときであった〔一作品番号 01-2-001〕。(2) 伯父との最後の別れとなったのは、嘉祐6年〔1061年〕の秋で、そのとき蘇軾兄弟は制科の受験勉強に励んでいる最中であった。(2) 最後の部分には、優孟ゆうもうの故事が引かれている。優孟そこくは楚国の宮廷に仕える役者だった。他の者たちは、優孟を蔑んでいたが、宰相そんしゆくごうの孫叔傲だけは優孟が賢人であることを知っていて、礼儀正しく接していた。孫叔傲が死ぬと、一切の財産を遺さなかったために、息子は貧窮に迫られて薪を売って歩かなければならなかった。その惨状を聞いた優孟は、楚王の前で亡き孫叔傲の真似を演じ、楚王に孫叔傲ことを思い出させ、それによって孫叔傲の息子は官職に就くことができたのだ。宋代の士大夫には、官員としての権限を使って私腹を肥やし、一族を繁栄に導いた者も少なくなかったが、蘇渙はそのようなことはしなかったようだ〕

■ 【02-2-021】 壬寅重九、不預会、独遊普門寺僧閣、有懷子由

【解題】この詩の題は、「壬寅じんいんの重九ちゆうきゆう〔九月九日の節句〕に、知事主催の節句の会に参加を求められなかった。独りで普門寺ふもんじの僧閣そうかくに遊び、弟のおもことを懐った」。この題と詩の内容から、この詩は翌日になって詠んだものと思われる。九は最も大きな陽の

数字 [奇数] で、それが二つ重なる九月九日は非常にめでたい日とされた。重陽の節句には、菊の花を浮かべた酒を飲んで長寿を願ったり、茱萸しゅゆの実のついた枝を髪に挿して魔除けにしたり、高い場所に登って遠く故郷を思ったりした。大切な節句であるので、官庁では長官が主宰する会が催されるのが通例で、鳳翔府ほうしょうでも行われたのだが、なぜか蘇軾はそこに呼ばれなかったので、町の東の門の外にある普門寺に独りで出掛けたのだった。

【訳文】

ここでは菊の花が開き、酒は美味である。

普門寺ふもんじから南に仰ぐ山の高みは、

いかに冷え冷えとして、

そのありさまを見るにつけ、

どうして僕は郷里に帰らずにいるのだろうかと思ってしまったのだった。

僕の心は、南に翔る雁かげとともに飛び去ろうとし、

山にかかる雲は、君を想う僕の涙を降らせようとした。

昨日は重陽ちやうようの宴を楽しむべき日でありながら、

それとは違うところがあった。

来年のこの日に健やかでいられるとしても、

人は必ず老いてしまう。

その昔、重陽ちやうようの宴に酔い、

帽子が吹き飛ばされても気がつかずにいた人がいた。

その人の振る舞いかおかしかったのではない。

それを見ていた人々の方は問題だったのだ。

陽気に笑えばよいのに、ひそひそそし誇ったのだから。

【補足】〔1〕後半では孟嘉もう かの故事が引かれている。重陽ちようようの節句にまつわるこの故事を、蘇軾は繰り返し詩文に用いているので、ここできちんと見ておこう。孟嘉とうえんは陶淵明めいの母方の祖父で、当時の政界の実力者であった桓温かんおんに仕えていた。ある年の重陽の節句に桓温は酒宴を催し、孟嘉もその座にいて酒に酔い、風によって帽子が吹き飛ばされても全く気付かずにはいた。人前で頭に何もかぶらずにいるのは非常に恥ずかしいこととされていたのだが、桓温は目配せをして、誰も孟嘉に教えさせないようにした。孟嘉が厠に行くと、桓温は一人の文人に命じて孟嘉を嘲笑する文章を作らせ、座に置いた。孟嘉は戻ってきてそれを見ると、平然としてたちどころに嘲りを解く文章を書き、それが非常に巧みであったので、満座の人々が感嘆した。（2）蘇軾はこの詩で孟嘉の故事を引いて、自分は重陽の宴から外されてしまったけれども、そのような嘲りには孟嘉と同じように屈することはないと歌ったのである。蘇軾はどうして重陽の宴に呼ばれなかったのか。一つの推測として、役所内の他の官吏との関係がぎくしゃくしていたのだろうということがある。宋選知事そうせんは、蘇軾のことを優遇ゆうぐうしてくれていたが、他の人々がそれを苦々しく思っていたということは大いにあり得る。鳳翔府ほうしょうには蘇軾と同じ年の科挙で合格した張琥ちよう こ [字は邃明あざな すいめい] が先にきていた。張琥は蘇軾が喪に服している間に先に官界に入り、官員としてのキャリアをすでに踏み出していたのに、後からきて官員としての経験が全くない蘇軾の方がより重い役を担い、しかも知事に目をかけられているのでは、あまり愉快ではなかったであろう。後に、張琥は蘇軾を目の敵にし、ついには死罪に陥れようと画策するまでに至るのだが、張琥が蘇軾を憎むようになったのは鳳翔府で始まったと推測されているのである。鳳翔府にいる間は、表面上は2人の間で争いはなかったのだが、重陽の宴に呼ばないくらいの意地悪ならしたのかもしれない。宋選が知事である間は、まだこの程度のことですんでい

たのだが、知事が交代すると、蘇軾は役所内で難しい立場となり、ついには仕事にも差し支えるようなことにもなって、蘇軾の官界人生における最初のつまずきとなるのである]

■ 【02-2-022】 太白詞

【たいはくざん 解題】 めいおうこう 太白山の神を ほう 明応公に みことり 封じるとの 詔 が下り、その廟を修理し、蘇軾は祭祀を行い、この詞と祝文を捧げた。詞には「鳳翔では、日照りの年に太白山に祈るとすぐに必ず応じてくださる。それで、神をお迎えし、お送りするまでの五章からなる一篇の詞を作る」との序文が添えられている。

【訳文】

其一

雷闐闐、[雷がごろごろ]

山昼晦。[昼というのに山が暗くなる]

風振野、[風が野を振るわせ]

神将駕。[いまも神が出で立つところ]

載雲罕、[雲の旗を載せ]

従玉虬。[竜の子を従える]

早既甚、[日照りがひどすぎるのだ]

蹶往救、[つんのめるようにして救いに行こうとするけれど]

道阻修兮。[とにかく道が悪くて遠い]

其二

旌旗翻、[旗が翻る]

疑有無。[見えるか見えないか]

日惨変、[天気がめまぐるしく変わり]

神在塗。[神はいま道の途中]

飛赤篆、[篆書てんしよのような赤い電光を飛ばし]

訴閻闔。[天の門で神は叫ぶ]

走陰符、[伝令を走らせ]

行羽檄、[檄げきを飛ばし]

万靈集兮。よろず[万の神を集めるのだ]

其の三

風為幄、[風を幕としてめくらし]

雲為蓋。[雲を覆いとして]

満堂爛、[堂内いっばいに輝かして]

神既至。[神はここにやってきた]

紛醉飽、[神は供えものの酒に十分に酔い]

錫以雨。[雨を与えてくれる]

百川溢、[百の川が溢れ]

施溝渠、[溝から溝へと水が行きわたり]

歌且舞兮。[歌いかつ舞うのだ]

其の四

騎裔裔、[騎馬はばかばか]

車班班。[車はこころこ]

鼓簫悲、[笛や太鼓は悲しげである]

神欲還。[神はお帰りになるのだ]

轟振凱、[凱歌が轟きわたり]

隠林谷。[林や谷にこたまする]

執妖厲、[悪い妖魔を捉え]

歸献馘、[帰って首切りに処すのだ]

千里肅兮。[千里の彼方まで肅然とするであらう]

其の五

神之来、[神が来るときには]

悵何晚。[何とも遅いと恨めしく思った]

山重復、[山が重なり]

路幽遠。[路は遙かに遠い]

神之去、[神が去るときには]

飄莫追。[ふわりと消えて追うことはできない]

徳未報、[その徳には報いていないと]

民之思、[民は思い続け]

永万祀兮。[永く永く祀り続けるのである]

■ 【02-2-023】 鳳鳴駅記

【ほうしやう 解題】ほうふう 鳳翔府の東の扶風県にほうめいえきかん 鳳鳴駅館と呼ばれる公営の宿泊施設があった。鳳鳴駅館はそうせん 宋選知事によって改修されたばかりで、そのことを記念する文章を扶風県知事の

胡允文こいんぶんに頼まれて蘇軾は執筆した。駅館を利用できるのは官人や外国からの使節、科挙を受けるために移動する受験生などで、蘇軾は6年前に父に連れられて受験のために上京した際に、扶風県で駅館に泊まろうとしたことがあった。そのときの体験から筆を起こしている。

【訳文】

私は丙申へいしんの歳かゆう[嘉祐元年[1056年]]に科挙を受験するために扶風県ふふうを通過し、その際に、管理人に頼んで駅館に入れてもらった。しかし、とても泊まれるような状態ではなかったので、すぐに出て、民間の旅館を捜した。

それから六年、私は鳳翔府ほうしやうに赴任し、数日後に扶風県の駅館で客人を出迎えた。客人のいるところを見ると、必要なものが官の庁舎のように具わり、廟觀びやうかんのように立派に整い、何代も続く裕福な邸宅のようでもあった。四方からここにくる者は我が家に帰ったように楽しく感じ、ここから去りたくないと思うほどで、いざ出発となると、馬さえもぐずぐずと振り返って嘶くのである。

私は駅館の係員に、この変わりようについて尋ねると、

「今の州知事様が新しくされたのでございます。州知事様しんちゆうは辛丑しんちゆうの歳[嘉祐六年[1061年]]の八月に初めてここにお越しになりますと、翌月にはもう改修をお命じになり、五十五日間でこのように完成したのです。延べで三万六千人もの人間が動員され、木は根の数で、竹は竿の数で、瓦や甍しきりせんや坯れんがや釘はそれぞれ枚数で、麦は石で数えますと、合計で二十一万四千七百二十八が集められました。最初は人々は一体何が始まるのかわからなかったのです」

私はそのように聞いて成程と感心した。

その翌年、扶風県の知事こいんぶんの胡允文が駅館の前に石を据え、駅館の改修事業について記念の文章を刻もうとし、私に書こう依頼してきた。私はこれは書き残す意味があると考え、次のように記すものである。

いにしよ
古の君子は居るべきところを選ばず、どこであつても安らかりにいられた。安らかであれば楽しく、楽しければ喜んで仕事ができ、仕える者も喜んで仕事ができた。こうして天下はよく治まったのである。

後世の君子にはいつも何かしら不満なところがあり、居るべきところにも不満を抱えている。不満があれば落ち着かないか、急けてしまうかする。落ち着かなければ仕事は乱れるし、急ければ仕事は進まない。乱れても進まなくても天下はまともには治まらない。こういうことが実際によくあるのだ。

いま宋知事が励み勤しんでいることは、ことごとく世の中が必要としているところのものと合致している。官の仕事で何かをしているときにも不満なところはない。宋知事は扶風の駅館を見て、誰もがそこで安らかりこられるよう細部に至るまで整えた。そのようにするのは駅館に対してだけでなく、もっと小さなことであつても宋知事は心を尽くさないということはない。

いつも肉を食べている者は野菜だけでは満足できない。いつも錦の衣を着ている者は綿の着物だけでは満足できない。いつも大きく費やすことばかりしている者は小さな費えては満足できない。これは世の中によくある困ったことである。

「楽しげている君子は民の父母である」

とは昔からいわれること。楽しげていることよりも貴いのは、居るところを選ばずに安らかであることではないだろうか。安らかであれば楽しく、楽しければ喜んで仕事ができるからだ。

駅館を改修したこと自体は実は書くに足るようなことではない。駅館を改修したことから、宋知事が居るところを選ばずに安らかであること、安らかであれば楽しく、楽しければ喜んで仕事ができるということを、自ら実践し、鳳鳴駅館にくる誰もがそのようにできるよしくしたということがわかる。このことこそがまことに書く価値があるのだ。

【補足】こいんぶん [胡允文がこの文章を蘇軾に依頼したのは、当然、そうせん 宋選知事も承知の上であつたらうから、蘇軾の文才を認める宋選知事との関係は良好であつたと考えられ、重陽の宴に呼ばれなかつたのはやはり同輩たちのなせるわざであつたのだらう]

■ 【02-2-024】 九月二十日微雪、懷子由弟二首

【解題】 九月二十日にわずかに雪が降り、弟のことを想ったという詩。旧暦の9月20日はいまの10月末くらいであろうか。鳳翔府は内陸の気候の厳しいところで冬がくるのが早かったのだろう。

【訳文】

其の一

天は鳳翔の九月に淡い雪をもたらし、
 早くものさびしい年の暮れの心持ちにさせられる。
 昼間が縮み、
 寒さに備えて砧を打つ音がせわしく響くなか、
 役目の薄い役人は、事もなく家の奥に引きこもっている。
 君と別れてからの愁いは酒が消してくれているはずだった。
 秋になってから櫛に北きりと抜けた白髪が付く。
 僕は国境の塞の外の寒さにも耐えるという貂の革の裘を買ってみた。
 それをまとして、宿場ごとに用意される御用の馬を乗りついて、
 西方の国に宝物を探しに行くというのは、どんなものだろうか、
 僕はいま真面目に想っているところなのだ。

【補足】 [(1) 「役目の薄い役人……」の原文は「冷官無事」[冷官事無し]で、本当は忙しくても、文人は詩文の中では閑人であると格好を付けることがよくあるのだが、このころの蘇軾はもしかしたら事実として本当に閑であったのかもしれない。重陽の宴に呼ばれなかったのと同様に仕事でも干されていたのかもしれない。 (2) 西の国に宝を捜しに行きたいと夢想するのは、不快な現実からの逃避であろう]

其の二

都へと向かう船で、君と箱いっぱい の詩を作った——。
都の外で君の馬と東西に分かれたとき、涙が胸にしたり落ちた——。
官人に採用されてから国に報いることはまだ何もできていない。
書物や剣の前で取じ入らねばならない。
こんなことならいっそ帰郷してしまおうかと思もする。
しかし、同僚たちの手前を畏れないわけにはいかない。
また秋なのに、もう年が暮れてしまうのかと驚くばかりだ。
雪景色を寺の二階から眺めよと思っても、
一緒に登ってくれる人はいない。
兄はいまこんな体たらくだ。
君はきっと東の窓辺に机を置いて『易経』の研究に没頭し、
馬車が止まって門を叩こうが一向に応じようともしないであろう。

【補足】[父の蘇洵は、古代の占いの本である『易経』の研究を長年続け、弟はそれを手伝っていた。外の物音に乱されることなく『易経』に没入しているであろう弟を羨ましく思っているのである]

■ 【02-2-025】与李彭年同送崔岐帰二曲、馬上口占

【解題】詩の題は、「李庠 [字は彭年] とともに、崔岐が二曲に帰るのを見送り、馬上で口に唱えて作った」。李庠がどのような人であるかは次の手紙に記されているが、崔岐についてはわからない。「二曲」とは、ちゅうしつ 藍屋いん 県 [→作品番号 02-2-002] の別称で、崔岐の故郷がそこなのであろう。

【訳文】

霜が乾き、木の葉が落ち尽したころ、

秦川しんせん〔鳳翔ほうしょうから長安ちやうあんの間の地〕の風光は愛すべきものがある。

興の発するままに身は軽く、

鳥を追って飛び行くかのようだ。

暮れ行く山に見とれるうちに、

道の遠近を忘れてしまい、

そのまま帰り行く旅人に無理やりついてきて、

いつまでも君と別れまいとする。

この貂てんの裘コートなら雪を冒して形勝地を訪ねることだってできるし、

この優れた馬なら鷹を連れて鳥や獣を撃つことだってできるではないか。

ほら、南溪なんけいの李先生り〔李庠りしやうのこと〕に尋ねてみたらよい、

壮士の心は流れ去る年を追いかけてたりしないのだ、と。

【補足】〔(1) 恐らく崔岐さいきは心に適わないことがあって帰郷するのだらう。終わりの句は、李庠りしやうの励ましに耳を傾けなさいという意味であるのだらう。(2) 貂てんの裘コートがこの詩でも詠まれている。西方に宝を捜しに行くまでもなく、鳳翔のあたりでは必要なものだったのだらう〕

■ 【02-2-026】 与監丞事

【解題】これは8年ほど後の熙寧3年〔1070年〕ごろに書いた手紙。李庠りしやうについて触れているので、ここで読んでおきたい。宛名の監丞事かんじやうじとは官職名で、手紙の内容から寇準こうじゆんの子孫の寇某こうぼうであろうと推測されている。寇準は一時代前の名宰相である〔→作

品番号 01-1-027]。

【訳文】

……終南山しゅうなんざんのあたりにはかつてしばらく住んでいたことがあります[鳳翔府ほうしょうに赴任していたことをいう]。
鄜州ふや虢州かくや二曲にきよくの三つの地域の山川草木は、いま座っていても、はっきりと眼に浮かんできます。
そのとき、李庠君りしやうは監官かんかん[太平宮たいへいきやうの管理人]で、盛んに行き来し合って、よく知る仲でありました。しかし、この人がいまどうしているのか知る由もありません。関中かんちゆう[長安ちやうあんや鳳翔ほうしょうあたり]の豪俊の人としては、その後どのような人がいるのでありましょうか。私はいつも蜀しよくに帰ることばかりを思っていますから、そのときにはきつとあのあたりを通るので、しばらくそこに留まって、昔を懐かしお気持ちを慰めたいと思っています。貴君は名臣の子孫であって、優れた才能がいよいよ明らかになってきたところです。このまま小さな官職で浮沈を繰り返しているままでは決してなく、きつと今を懐かしおよいことになってありましょう。要職に就いたときになって、いま得ていられる閑適をまた求めようとしてもそれはもうできないのです。たまたま李庠君に与えた詩を思い出しました。李庠君はそれを読んで涙を流してくれました。この人は才能がありながらも病気のために志を遂げられず、思うところが多々あったのでありましょう。……

【補足】[ここにりしやうある李庠に与えたという詩が上で訳した詩であるかどうかはわからない。この手紙や上の詩から、人を励ますときに蘇軾がどのような心遣いをしたのか、その特徴が知れてくるであろう]

■ 【02-2-027】 病中聞子由得告不赴商州三首

【解題】この詩の題は、「病中に弟こくが告[朝廷からの許可]を得て、商州しょうには赴かないことになったと聞いた」。1年前せいか前に制科しやうしやうすいかんに合格した後しやうしやうすいかんに弟は商州推官に任命されたのだが、父への孝養を理由に任に就くのを辞退していた。何らかの理由で、そのことがはっきりと決まるまでに時間がかかり、いまに至ってようやく官に就くまでに3年

間の猶予が正式に与えられたのだった。そのことを聞いて蘇軾は3首の詩を詠んだ。なお、この詩と次の詩は、表題の冒頭に「病中」の二文字が置かれている。それによって冬に入って蘇軾が体調を崩したことが知れるのだが、後に何度か似たようなことが繰り返されるので、どうやら蘇軾は秋から冬への移り変わりを苦手とし、そのころに精神的ストレスがかかると体調を崩し、「病中云々」といった詩を詠むようになるようである。

其の一

僕は病のなかにて、
君は商州しょうしゅうへの赴任を免除されたと聞いた。
それによって、君と僕が旅する雁のように翼を並べて飛ぶということはなくなったのだ。
君と別れてから、
官位の高さなどちっともよいものではないと知った。
君のもとに帰ることばかりを思っ、
日々の時間がどうしようもなく長く感じられる。
君に暇がたくさんあるのは、
書物を著すのにまことによいだろう。
僕は官職に就いて何の功績もなく、
意味なく故郷を離れているだけだ。
世間から隠れるのに最もよい場所はどこかといったら、
いま君がおうじょういる王城の地であるのかも知れない。
大海の魚のように万人がうようよしているのだから、
一身を隠すのはわけもないのだ。

其の二

先ごろ僕は章惇君と会った。

章惇君はまさに商州で官に就いていて、

商州の人々は君の赴任を待っているといっていた。

商州というといくつか思い起こすことがある。

昔この地の帰趨を巡って王様をペテンにかけようとした策略家がいいた。

君の真直ぐな言説の前では、そんな連中は赤恥をかいただけだ。

世の乱れを避けてこの地の山に籠った人がいいた。

以来ここでは俗な凡才は嫌われているということだ。

この地には独特の方言があり、余所者はやっと名前が通じるくらいだという。

余計なことはいわないですむのだからまことに結構ではないか。

この地の人には昔から瘤が多くて首と頸の区別もつかないという。

上辺のよしあしにまどわされることがないのでからまことに結構だ。

君が試験で書いたことがお歴々に気に入られなかったのなら、

お上に願って辞退するのではなく、

商州にくることこそが君に最もふさわしかったのではなからうか。

【補足】〔(1) 章惇が商州推官であったことは作品番号 02-2019 ですすでに触れた。

章惇と蘇軾と蘇轍は同じ年の科挙で合格したいわゆる「同年」の間柄である。蘇軾と

長安で会って意気投合した章惇は、その弟が同輩として赴任してくれたらよかったの

にというようなことをいったのだらう。(2) この詩には商州に関わる故事が幾つか引

かれている。「策略家」は張儀〔→作品番号 01-1-037〕のこと。「山に籠った人」は

「商山の四皓」のことで、秦の世の乱れから逃れて商山に隠れ住んだ4人の隠者であ

る。蘇軾は何度となく詩文に引用するので、後に詳しく見ることにする。(3) この詩の結びには、蘇轍の答案が問題視されたことが触れられている]

其の三

官職を辞退した君の本意は誰も知らないだろうから、
役目が低いのを嫌ったと言い立てる連中が出てくるかもしれない。
そんなのはまっておいて、悠々と酒でも飲んでいればよい。
歳月は自然と流れ、髪や髭が自ずと白くなるだけだ。
君の答案が誰かの気にさわったのだ、人々から嫌われたのだ、
そんなことは憂うに足りない。
『易経』^{えききょう}を読めば大きな道理が知れるし、
しかも、家には『易経』の師匠^{そしゅん}がいるのだ[父の蘇洵のこと]。
僕は病中の夢のなかで君を求めてさまよっている、
互いに心を知るのは僕と君だけなのだから。

■ 【02-2-028】 病中、大雪数日、未嘗起観、號令趙薦以詩相属、戯用其韻答之

【解題】蘇軾が病気で伏せっている間に、数日間大雪が続いた。起きて雪を見に行く元気もなく過ごしていると、このときに鳳翔^{ほうしょう}を訪れていた號^{かく}県知事^{ちようせん}の趙薦が雪のため足止めを食らい、たぶん気晴らしに宋^{そう}選知事^{せん}が雪見の宴を催したのだろう、その席上から趙薦の病気見舞いの詩が届けられた。それへの返事。蘇軾は戯れの作だとしている。

【訳文】

これで十日も伏せて、
ひたすら薬と親しくしていると、
どうにもならないほどの寒さを感じた。
つむじ風が窓を鳴らし、
寝床を囲む帳とばりが巻き上げられた。
雪が深く積もったとも知らずにいると、
なんと雪の重みで軒板が落ちたと聞かされた。
そこに西隣から歌や音楽が流れてきた。
寒さをものともせず、
大雪の中に立派な道を通じさせて、
人々が続々と集まったのだろうか。
からっぴになった酒の瓶が次々に横に倒され、
人々の熱気で瓦の上の雪も融けたであろうか。
私はよい酒に近づきたいと思っても、
雪の様子をのぞきに出る気力もない。
いつか夏の暑さのような活気を身の内に取り戻し、
我が体を働かせられたらと思う。
いまは人気のない部屋でひとり憂いに沈んでいて、
いつかこちらから宴に招くようなことをしてみたいものだと思っている。
昔むかしのこと、
友を呼びたくても毛氈もうせんさえないと嘆いた人がいた。
私のところには売って酒代にするくらいの衣類ならある。
しかし、招いても喜んでもらえるとは限らない。

つらつらそのようなことを思っていると、
 寒さがまた一段と厳しくなった。
 これは雪が晴れ上がったためかと身を起こすと、
 半月の月が西にかかっているのが見えた。
 そこに貴公からの詩が届けられた。
 旅人はひとり苦吟するものと決まっている。
 今夜は黙々と詩を作るのがよいのだろう。
 詩人は昔から不遇であるらしく、
 秀句は寒さと飢えから生まれ出る。
 雪はいつか消えるだろう。
 私も病を脱して、昔の詩人の後を追ってみたいものだ。

【補足】〔趙薦^{ちやうせん}の詩を手にして、蘇軾はにわかには活気づいたのだろう、たちまち返しの詩を作って、宴席に届けた。これがきっかけになったのかどうかはわからないが、蘇軾の病は癒え、また、役所の同輩との関係も少しずつ改善されて行ったようである〕

■ 【02-2-029】 妻王氏墓誌銘

【解題】 つまずきながらも蘇軾が最初の官職を勤め上げられたのには、妻の王弗^{おうふつ}の力も大きかったようだ。蘇軾はこれまでもっぱら学問に励み、またいわゆる理系的な人間として事の本質を掴むことに優れていたのだが、人といかに付き合うかの世知については疎いところがあった。だから、簡単に人を信用し過ぎたり、思ったことをうかつにそのまま言葉に出して失敗したり要らぬ摩擦を引き起こしたりして、同輩との関係を悪くしてしまったようだ。蘇軾は徐々に振る舞い方を修正していったのだが、それは妻にアドバイスによるところが大きかったということが、ここで見る文章に記さ

れている。昔の中国では、妻について書き記すことはあまりなく、蘇軾の場合も墓誌銘くらいしか残っていない。少し先走って墓誌銘の一部を読んでおこう。

【訳文】

……軾が官職を得たのに伴って鳳翔に来てからは、軾が外で為すことを、君[妻の王弗]は問うこともなかったのに詳らかに知っていた。

君はこゝいった。

「あなた様はいまお父様から遠く離れています。よく慎まなければなりません」

君は、我が父が私を戒めた言葉を日々に語ってくれた。

軾が客と外で話すのを、君は壁の向こうで聞いていて、客が帰ると客とのやりとりを再現してこのようにいった。

「あの人はいつもどっちつかずのことしかいいません。あなた様がどう思っているかを見て、それに合わせようとしているだけです。そのような人のいうことは聞くに値しません」

あるいは、軾と一生懸命に親しくなろうとしている人がいると、君はこゝいった。

「あの人とはきっと長くは続かないでしょう。すぐに意気投合するような人は、離れるのもきっと速いのです」
いつも君のいった通りになった。……

【補足】[王弗は、義父 [蘇洵] の言葉を引いて蘇軾を戒めただけでなく、義母 [程氏] の言葉を引いて戒めたことがあるのを作品番号 01-2-018 ですで見ている]

■ 【02-2-030】 歳晚相与饋問、為饋歳、酒食相邀、呼為別歳、至除夜、達旦不眠、為守歳。蜀之風俗如是。余官於岐下、歳暮思帰而不可得、故為此三詩寄子由

【解題】年末を迎えて蘇軾は望郷の念を募らせたのか、故郷での年越し行事を回想し、3篇の詩を作って弟に送った。年末の行事として、贈り物をし合うのを「饋歳」、酒食

を用意して招き合うのを「^{べつさい}別歳」、夜明けまで眠らずにいるのを「^{しゅさい}守歳」といい、それぞれについて1首ずつ詠んでいる。

^{きさい}
饋歳

農家は収穫を終えると、

互いに贈り物をし合って年を越す。

これを饋歳という。

あまねく皆に喜びが行き渡らないのを恐れ、

値段の高下など気にすることなく市で^{いち}贈り物を買う。

山と川とでは産物が異なり、

巨大な鯉を板に載せて贈るかと思えば、

兎を籠に入れて贈りもする。

貧富によって多い少ないがあり、

金持ちは華美を誇って、光り輝くばかりに刺繍で飾った織物を見せびらかし、

貧乏人は恥ぢらいながらも、

白を曳く賃仕事で稼いでほんのちょっとしたものを用意する。

僕は役人仕事でここにきて、

官舎にくすぶったまま歳末を過ごしている。

故郷の饋歳の風習を詩に詠んでみても、

聞いてくれる人は一人もいない。

^{べつさい}
別歳

ゆかりの人が千里の旅に出ようとするとき、

ぐずぐずと別れが惜まれる。

人は行ってもまた帰ってくる。

歳というものは行ってしまったらもう追いかけることすらできない。

「歳よ、君はいったいどこに行ってしまうのか」

「遠く天の涯だ。

大河の水が東へと流れ去り、

海に赴いて帰ることがないのと同じだ」

酒食を用意し、帰ることのない歳と別れるのを別歳という。

東隣では、酒がちょうど熟したとふるまい、

西隣では、豚がちょうど肥えたとふるまう。

一日を大いに楽しんで、

一年が終わる悲しみを慰め合う。

今年と別れるのを嘆き過ぎないようにしよう。

新たにくる歳ともいずれは別れることになるのだから。

「歳よ、行くなら振り返らなくてよいぞ。

老いと衰えを君に持って行ってもらいたいから」

しゅさい
守歳

まさに終わろうとしている歳とはいかなるものか。

谷底に赴く大蛇に似ていようか。

すべての鱗が谷深くに消えようとしているときに、

誰がそれを止められようか。

尾を引っ張って頑張ってみたところで、

無益と知るまかではない。

除夜に朝まで眠らずにいるのを守歳という。

子供たちも眠るまいと、

互いに見張ってやかましく夜を過ごす。

暁を告げる鶏は鳴かずにいてくれ、

時を告げる太鼓は鳴らずにいてくれと思っても、

久しく待つうちに燈火は尽き、

北斗七星は斜めに傾いてしまう。

夜が明ければ、新しい歳がこないということはない。

しかし、新しい歳がきたところで、

我が心と我が事には、恐らくはつまずきがあるだろう。

せめてこの夜の思いを尽すことに努めたい。

まだ歳の内である間なら年若いと誇れるのだから。

【補足】[「つまずきがある」と訳したあたりの原文は「心事恐蹉跎」[しんじ おそら 心事 恐くは蹉さ跎]で、来たる年への不安感を詠んでいる。その予感果たして当たったのだろうか]

第2章 最初の赴任地——鳳翔での3年間

[第2章その三]

嘉祐8年 [1063年]、蘇軾28歳。

■ 【02-3-001】 和子由踏青

【解題】年の初めに、弟の蘇轍から、故郷での春の行事を詠んだ二首の詩が送られてきたので、それに和して返した。この第一首は、草が芽生えてきた野に出て遊ぶ「踏^{とう}青^{せい}」を詠んでいる。

【訳文】

東からの春風に、道にわずかな塵が舞うと、
新しい年の華やかさを楽しむとする遊び心が湧いてくる。
閑があるのなら、路傍で飲むのにちょうどよし、
麦はまだ短いから、車輪で踏み敷いてしまっても構わない。
町にちんまり籠っているのに飽きた人たちが、
朝早くからがやがやと、
そこらじゅうをからっぽにして出かけて行く。
歌だ、太鼓だと、野山で騒げば、草も木も動くというもの。
酒だ、料理だと、野原に散らかせば、鳥も鳶もやってこようというもの。
どこの誰やらがいかめしい顔をつくり、
道をささぎって大きな声を張り上げる。
「さて、お立会いの皆々さま、

「我こそは道を極めた達人であります」

右に左にお符ふだを振り上げ、

「これこそは養蚕によろしいもの。

繭を大きな甕かめのようにしますぞ。

これこそは畜産によろしいもの。

羊を大きな籠のろしかのようにしますぞ」

道行く人はそんな言葉を信じるわけではないけれど、

新春の縁起かつぎに買っておこうと思案する。

達人はひとわり銭を稼ぐと、

すぐに酒を買い、酔って倒れて、こいうのだ。

「ほうらみる。このお符はこんなにも効き目がある」

■ 【02-3-002】 和子由蠶市

【解題】 2首目は、養蚕に必要な道具類を売る「蠶市さんし」について詠んでいる。

【訳文】

蜀しよくの人間は、着る物、食う物のためいつも苦勞している。

蜀の人間は、遊樂に出たら帰ってくることを知らない。

蜀の人間は、千人が田畑で仕事をすれば、

蜀の人間は、万人が遊んで食ってられる。

蜀の人間は、一年中働きつめた。

それでも、春ばかりはのんびりして、

養蚕市さんしかりにぎにぎしく開かれると、

いつもの辛苦を忘れて大いに楽しむとする。

去年の霜が降ったところに刈ったおぎ荻で、

蚕を飼うための簾を編んで今年の市で売る。

糸を繰るための瓢ひさごや土釜つちがまを作って並べておく、

金や絹なんかよりも争って買い求められる。

君も僕も童子だった昔は、

勉強をほったらかしにして市へとすっ飛んで行ったものだ。

市の商人は巧みな知恵を働かせ、

その口数の多さに、農家の人々はたいていたまされてしまう。

君の詩がきてそのころを思い出し、

故郷を離れている悲しさよりも、

それだけの歳月が流れてしまった悲しさの方が、むしろ大きいのだと知った。

■ 【02-3-003】 題鳳翔東院王書壁

【**解題**】ほうしょう ふ 鳳翔府のとういん 東院の壁におうい 王維の画があり、この一文をそれに書き添えた。

【訳文】

か ゆう き ぼう 嘉祐癸卯[じゅうげん 嘉祐八年]上元おとういの夜[一月十五日みの夜]、ここにきて王維の筆を観た。時に夜はすでに
更け、消え残りの燈がちらちらと光るなかで、画中の僧がもだもだ蹢躅と動かんばかりである。しばらく我を忘れて
それを見ていた。

■ 【02-3-004】 書摩詰藍田烟雨図

【**解題**】この文章はいつ書かれたのかわかっていないが、おうい 王維の画について論じてい

るので、ここで一緒に見ておこう。題名にある『藍田烟雨図』とは、藍田にあった王維の別荘である輞川荘が雨に煙るありさまを描いた画であろう。

【訳文】

王維の詩は、詩の中に画がある。王維の画は、画の中に詩がある。

このような詩がある。

藍溪白石出、[藍溪には白い石が出て]

玉川紅葉稀。[玉川に紅葉は稀である]

山路元無雨、[山路には元より雨は無いのだが]

空翠湿人衣。[空翠によって人の衣は湿めるのである]

これは王維の詩だとも、そうではないともいわれている。好事家が王維の遺した作品を補ったのであろう。

【補足】[(1) 冒頭の一行は特に有名である。蘇軾は画と詩、さらには書も一体のものであると主張し、王維がすでにそれを実践していたと考えていた。(2) 引用されている詩は、普通は最初の二句が「荆溪白石出、天寒紅葉稀」[荆溪白石出で、天寒く紅葉稀なり]となっている。蘇軾は藍田と結び付けて、ここにあるように記憶していたのだろう。いずれにしても、『藍田烟雨図』の中に詩があり、この詩の中に画があると見たのである]

■ 【02-3-005】和劉長安題薛周逸老亭、周最善飲酒、未七十而致仕

【解題】2月に、何らかの用事があるが蘇軾は京兆府 [長安] に行った。その折に、

知事の劉徹^{りゅうしやう あざな げん ふ} [→作品番号 02-1-015] に会い、薛周^{せつしゅう}の逸老亭^{いつろうてい}に寄せた詩を見せられたので、それに和した。薛周は酒をよく飲む人で、七十歳になる前に致仕^{ちし} [官職から引退すること] していた。一般論として、七十歳以前であれば引退は早いとされていた。

【訳文】

近ごろ聞いたところでは、

薛公子^{せつ}が早くに退いたので尋常の人々を驚かしたと。

庭園を買って野の鶴を招き、

深く井戸^{うが}を鑿^{みずち}って虻を潜ませている。

薛公子は、

「昔、一斗の葡萄酒を賄賂に贈って知事の座を得た大馬鹿者がいた。

酒は飲むべきもの、

酒の中の趣は知事の位よりずっとよいのじゃよ」

と、いって、衣を払って官職から去り、

親しい人が引き留めようとしても聞かなかった。

「隠居に何の楽しみがあるかって、

もとの志をこれによって求めることができるんじゃ。

失うものはほとんどなくて、

得られるものがどれだけあるかわからんじゃろうか」

いまのこの春の陽気が結構なもの薛公子のため、

いまのこの日ざしかのんびりしているのも薛公子のため、

山の鳥は薛公子のために琴や笛を奏し、

野の花は薛公子のためにのどかな美しさを見せている。

「功績や名声からは離れ、

この楽しみはまさに無冠の王者であるのじゃ。

しかし、いまになっても静かな夜の夢に、

頭にかかる冠の重さに驚いて、

はっと飛び起きることもあるのじゃが」

美酒をたっぷり載せて持って行き、

薛公子に大杯をあおらせてみたいものだ。

私はまだ薛公子とは知り合いになっていないので、

リョウ
劉知事を通してともに遊ぶでしょう。

■ 【02-3-006】 中隠堂詩

【解題】京兆府けいちよう [長安ちやうあん] に滞在する間に、王紳おうしん [字は公儀あぎな こうぎ] の中隠堂ちゆういんどうを訪ねてこの詩を詠んだ。このとき王紳は鳳翔府内の岐山きざん県の知事であったので、中隠堂に王紳本人はいなかった。短い序文がある。

【訳文】

岐山きざん県知事の王紳おうしん君の先祖しよくはもとは蜀の人であった。戦乱を避けて長安ちやうあんにきて、そのまま住み着いた。王紳君の邸宅や庭園は長安の中でよく知られている。中隠堂ちゆういんどうと呼ばれているものがそれである。私が長安に行くことになると、王紳君は中隠堂で留守番をしている子弟に手紙で報せ、必ず私を迎えて遊ばせ、詩を乞うことごとくと書いた。それで、この五篇の詩を作ったのである。

其の一

しよく
蜀を去ったのは初めは難を逃れるためだった。

しん
秦に遊ぶうちについに帰らぬままとなったのだ。

ここにあった庭は荒れて高い木が茂り、
建物はあっても昔の人はいなくなっていた。

石を鑿つ清らかな水が勢いよく流れ、
開かれた門から野の鶴が飛び入る。

このようなところに隠れ住むことを私はいつも思っている。

その心に違えることになるのではないかと、
ずっと恐れていなければならぬのかも知れない。

【補足】[かつては世界一の国際都市であった長安は、唐の終わりから宋の初めまで、見る影もなく興廃していた。王紳の先祖は、宋朝の初期のころに蜀で反乱があったときに長安にきたのだらう]

其二

みち
径は蛇のようにくねくねと転じ、

堤は亀のようのにっぞりと伏している。

この樹はいつの時代からあったのか。

この人はこの建物のように高雅で、

いにしえ
古を好んで遅く生まれたことを嘆き、

世に出る苦勞を厭うて閑を偷もうとしている。

おう
王君よ、早く帰って隠れるがよい、

世間の塵が君の上着を汚してしまうから。

其三

もう二月だというのに、
 驚くことに、長安では梅が咲くのが遅く、
 その奥ゆかしい香りが無い。
 この庭にきて初めて、
 梅の花が遠くきた旅人を慰めてくれる。
 梅は白く輝く呉国の娘のようで、
 故郷から遠く離れている恨みを忘れさせてくれるのだが、
 よい季節が過ぎ去ってゆくのを嘆くようになり乍する。
 春が深くなって桃や杏が乱れ咲くころになると、
 独りぼっちで咲いていたと、梅の花は笑われてしまう。

【補足】[「呉国の娘」と訳した原文は「呉妹」で、「秋田美人」とかいうように、「呉妹」は美しい娘の代名詞であった]

其四

鸚鵡のような翠の岩がある。
 この岩はいつのときに海の彼方からきたのだろうか。
 唐朝には遠く南方から貢物が贈られ、
 渭水を遡る船に満載されて長安へと運ばれた。
 岩はかの王子喬や赤松子とともに古い、
 王朝の変遷など気にもかけない。
 漢の武帝が作らせた巨大な銅の仙人像は、
 長安から洛陽に遷されたときに泣いたというが、

この岩ならそのようなことはしないだろう。

【補足】 [王子おうしきやう喬せきしやうしや赤松いにしえ子しは最も有名な古の仙人。蘇軾の詩文にもしばしば登場する]

其五

都あるじの主は何度その姓を変えたことか。

長安ちやうあんのいたるところに壊れた石碑がある。

あるものは古い隧道から、あるものは崩れた崖から出てくる。

都では壮麗な建物を並べ、莫大な金が費やされた。

韓愈かんゆは遙か南方の岫巖山こうらんざんで神禹碑しんうひを見てひどく悲しんだけれど、

わざわざ遠くに行かなくても、

世の変転に思いを馳せるには、

ここに残る石碑で十分ではなからうか。

■ 【02-3-007】 題宝雞県斯飛閣

【解題】 京兆府けいちやう [長安ちやうあん] からの帰路かうけいに宝雞県しひかくにある斯飛閣しひかくに登ってこの詩を詠んだ。

【訳文】

ここより西南には故郷へと帰って行ける道がある。

欄干に寄せる我が身から、

するりと魂が抜け出て、

寂しげなその道をたどって行こうとする。

我が魂が飛んで出たならら、

もう二度と戻ってはこないだろう。

野はあくまでも広く、天はあくまでも長い。

牛や馬は雁や鴨とともに空を飛ぶように見え、

雲の峰は樹木とともに野に生えているように見える。

山の麓は水の気配を運び、春の風が麦の苗を揺り動かす。

農事や漁労に携わずに、

官職を愛して軽々しく故国を去り、

老いの日々まで帰らずに過ごそうとしているのはいったい誰なのか。

■ 【02-3-008】 重遊終南、子由以詩見寄、次韻

【解題】 同じときに再び終南山しゅうなんざんを間近に見上げるあたりを巡り、そのことを弟への手紙に書き記すと、それに基づく詩を送ってきたので、それに次韻した。詩の題に、「重ねて終南に遊び」とあるのは、前年の2月に同じところ巡っていたからである
[→作品番号 02-2-002]。

【訳文】

去年ここに来たとき、

柳が芽をふいて春の巡りを報じてくれた。

今日ここにくると、

柳の花は緑の苔の上に落ちていた。

川の(ほとり)の堂に一人てまた泊まった。

重ねてここに来るまでに何かあったのか。

琴を弾こうとしても、吹きくる風に音が止まってしまう。

杯を手にしても、さしる月の光に酔い^か醒めてしまう。

このようなもの憂い僕であるから、

新しい詩を求める君の期待にはしばらく応えられずにいた。

この詩はこれまでの負債を弁じてくれるだろうか。

■ 【02-3-009】 和子由寒食

【解説】 弟から詩が送られてきたので、上の詩のように詫びないですむよう、今度はすぐにそれに和して返した。現代の日本において、春の訪れとともに人々が何よりも待ち望むものといえば、満開の桜の下での花見であろうか。旧い中国でそれに相当するのが春分から15日目の清明節^{せいめいせつ}で、御馳走を携えて一族総出で先祖の墓参りに出かけた。その少し前、冬至から105日目に寒食節^{かんしょくせつ}があり、その前後は火を使うことが禁じられた。弟の詩は寒食について詠んだものであった。

【訳文】

今年^{かんしよく}の寒食は二月^{みそか}の晦日だった。

緑深い樹林に春の霞がまわりつようになったので、

郊外を巡るのによい駿馬を誰かが貸してくれたなら、

意のままにいたるところの名園を見てまわりたいと思ったりした。

とはいえ、何やら物憂いのはそのまま、

酒は飲むことは飲んでも、杯を重ねるほどでなく、

詩は作ることは作っても、紙に記すほどでない。

ときに、^{もず}鴟の声がしたのに僕は驚かされた。

鴟という鳥は、七月に、農作業に励めよと人に鳴きかける鳥だ。

季節はずれのその声に、
 故郷の川のほとりの農地が荒れ果てていないだろうか、
 いまは誰が耕しているのだろうかと、
 僕の心はちくと痛んだ。

■ 【02-3-010】 記所見開元寺吳道子画仏滅度、以答子由

【**解説**】^{ほうしよう}鳳翔の^{かいげんじ}開元寺には^{ごどうげん}吳道玄〔^{ごどうし}吳道子〕が描いたとされる壁画があった〔→作品番号02-1-018〕。その壁画には、^{しゃか}釈迦が生まれてから亡くなるまでが描かれていた。弟から^{もんじゅぼさつ}文殊菩薩と^{ふげんぼさつ}普賢菩薩の画について詠んだ詩が送られてきたので、それへの返事として、開元寺の壁画を見ての印象を詠んだ詩を作った。

【訳文】

西方の^{しんじん}真人〔^{しゃか}釈迦〕のこの姿を誰が見たのか、
 衣に七種の宝を着け、二頭の獅子を従えている。
 そのころの修行は、大変に苦勞するもので、
 両肘には柳が生じ、肩には鳥が巣をつくるほどであった。
 初めは暗く山に隠れた玉であったものが、
 次第に水から出てきらきら輝く蓮の花になったように、
^{みち}道が成就し、
 そして^{くうめつ}空滅に就いたのだった〔釈迦が亡くなったことをいう〕。
 すると、四海の果てから人も天人も走り集まってきて、
 鳥も飛びきて林や谷を動かすばかりに哀しみの声を響かせ、
 獣も鬼も足摺をして涙を滝のようにほとばしらせた。

その中にまじる、大いなる眉に奥深い眼差しの人^は誰であったのか、
釈迦^{ベツド}の牀を巡りつつ指を叩き、
そのあたりを穏やかな空気で包んでいた。
釈迦が亡くなったのは昼間に月が落ちたようなもの、
光はなおもとのままだに残っているのである。
僕は、春に古い寺に遊び、
壁の塵を払って、遺された釈迦の像を見た。
それは長く香煙に暗く籠められていたもので、
画師の姓名は書かれていないが、
人々は呉道玄^{こどうげん}であると言い伝えてきた。
縦横の筆力^{そんちび どういん}は、孫知微や鄧隱といった画師と比べると、
巨大な鰐が小魚を呑むほどの違いがある。
君からきた詩が誇るところの画と比べてどうなのだろうか、
ここに並べて観たいものである。

■ 【02-3-011】 次韻子由以詩見報編礼公、借雷琴、記旧曲

【**解題**】父の蘇洵^{そじゆん}が雷琴^{らいきん}〔琴の名〕を借りてしばらくぶりに曲を弾き、そのことを弟が詩に詠んだので、兄が次韻した。

【訳文】

琴は長く弾じられることがなく、
琴の上でその音はずっと発せられることはなかったのだが、
琴の中には古^{いにしよ}の意が長く^{こころ}あり続けていた。

曲を覚えておこうと苦心しても、
 昔の道筋はどこであったのかといつも迷ってしまうものなのだが、
 指にまかせてしまうなら、自然と帰り道に足跡を付けて行くようになる。
 父上の琴の音に、
 仙人が樹によって聴き入り、
 瘦せた鶴が風に乗って舞ったという。
 僕が谷川に立つ堂で琴を聞いたときには、
 悲しみのあまり猿が竹を揺り動かしていたのだよ。

【補足】[終わりの部分は、^{たいへいきゆう}太平宮の道士の^{ちようそうゆう}趙宗有 [→作品番号 02-2-002] が琴を弾いたことについて詠んだと、蘇軾自身が注記している]

■ 【02-3-012】送虢令趙薦

【解題】^{かく}虢県知事の^{ちようせん}趙薦 [→作品番号 02-2-028] が他所へ転任することになったので、送別の詩を作った。この詩によれば、趙薦は蜀^{しよく}の人で、それだけではないけれど気の合うところがあったようだ。

【訳文】

ああ、私は故国を長く離れているのを嘆いていたのだが、
 貴君に会って、故国に帰ったかのように思った。
 今、貴君は私を捨てて行ってしまうので、
 これからはよく知る者は稀になってしまう。
 よく知る者が稀になるのが残念なのではない、
 語り合う相手がいなくなるのを恐れるのだ。

佳き人は西方の人、

優れた才気を帯び、

にこやかな乙女のようにある。

そういえば、貴君の家を訪ねたことはなかったが、

家は知らなくても困りはしない、

まぶ玉は潜めていた輝きをきつと光らせるものであるのだから。

【補足】[都では、3月29日に仁宗皇帝じんそうが亡くなって、4月1日に英宗皇帝えいそうが即位するという、国家にとって重大な出来事があった。仁宗皇帝には男子がなく、後継者を定めることをひどく嫌い、宰相以下の人々が皇帝の不興を買うのを覚悟で何度も願った結果、ようやく弟の息子を皇太子にすることに合意したので、皇位の継承はとにもかくにもスムーズに進んだ。しかし、その後すぐに、我々からするとごく些細な問題が、朝廷を二分するような大論争に発展し、国政がほぼマヒ状態に陥ってしまうようになる。それによって、仁宗の晩年に棚上げとなっていた国政の改革がそのまま放置されてしまうのである。そうした中央の動きとは遠く距離を置いた鳳翔府ほうしょうにも皇帝死去の影響は及び、蘇軾もそれに巻き込まれた。皇帝が死ねば立派な墓所を作らなければならない。それに必要となる木材を早急に用意するよう鳳翔府に命令がきて、蘇軾はその実務に関わり、すでに過重な負担に喘いでいる民衆にさらなる苦役を強いることに心を痛めた。蘇軾は、鳳翔の民がどれほど困難な状況に置かれているかという問題をまとめて、墓所建設の総指揮者となった韓琦かんきに宛てて手紙を書いた。その手紙は、蘇軾が地域の実情を的確に掴んでいたことを示すものであるのだが、社会の仕組みに無知である訳者には到底訳せるものではないので、残念ながら割愛せざるをえない]

■ 【02-3-013】 与蒲誠之

【解題】6月ごろに親戚の蒲誠之ほせいし ほうしやうが鳳翔府を過るとの報せがあり、それへの返信。先ごろ亡くなった伯父そかんの蘇渙そふぎには、蘇不欺そふぎ、蘇不疑そふぎ、蘇不危そふきの3人の息子がいて、そのうちの蘇不欺の妻が蒲氏ほで、蒲誠之はその兄弟ないし従兄弟であったようだ。

【訳文】

もう間もなくこちらにお越しになると聞きました。お手紙をいたたかずとも、お会したい気持ちが非常に強くありながら、生来の怠け者であるために、これまで一文字もお返えてきていませんでした。何ともお取ずかしい次第です。

夏の暑さはまた過ぎ去っていないなかでも、御健勝のことを承り、喜びに堪えません。私は恙なく、また、都にいる父も兄も安らかであるとの手紙がこちらにきています。

ただし、近頃きんなん しよく、山南さんなん[蜀しよくのこと]からの手紙で、伯母そかん[蘇渙そふぎの妻ようの楊氏よう]が六月十日に亡くなったと知らせてきました。伯父が亡くなってまだ一年にもならないのに、このように不幸が重なって、心の整理がつきません。従兄である三男が伯母の近くにいましたが、長男も次男も蜀に帰って、伯母を故郷に埋葬することになるであります。人の一生には艱難が半沓のではありませんが、これはその極みであります。悩ましい限りです。

貴君のお仕事は忙しくはないとのことですから、改めて学び直すことができます。同僚の中で楽しみをともしにする者がいることでしょう。こちらでは新しい知事がきています。お会いすれば詳しくお話できるでしょう。

【補足】[(1) 伯父そかんの蘇渙が亡くなったのは前年の8月であった [→作品番号 02-2-019]。 (2) 蒲誠之宛ほせいしの別の手紙から、その後、蒲誠之せいとは成都府知事かんこうの韓絳 [→作品番号 01-2-014] に呼ばれてそちらに赴任したことがわかる。 (3) この手紙の終わりに、鳳翔府ほうしやうに新しい知事がきたと記してある通り、宋選そうせんが去って、新たな上司として陳希ちんき

亮^{りょう}が赴任してきていた]

■ 【02-3-014】 客位仮寐

【解題】これは本来はかなり深刻な詩である。蘇軾はユーモアで包み込もうとしているが、あまり笑えないであろう。そもそもこのような詩を詠んでいるということが、もはや耐えられる限界を超えてしまったということなのだろう。詩の題は「客間での仮寝」で、蘇軾自身の注で、「鳳翔府知事の陳希亮^{ちん きりょう}にお目にかかろうとして作った」と付記されている。

【訳文】

知事殿に会おうと控えて待つ。

いつまでも呼ばれない。

だからといって帰ってしまうわけにもいれないから、

枯れた切り株のようになってじっと座っている。

知事は私のいることなど忘れてしまっているのだろう。

だったら私も私のいることを忘れてしまうのがよい。

そうすれば本当の枯れた切り株がここにあるだけとなる。

人々はそうしたことを理解しないので、

ひげをふるわせて私のために怒ってくれもする。

その昔、謝安^{しゃあん}が当時権勢を振るっていた將軍に会おうとして、

半日待っても呼ばれないことがあった。

一緒にいた王坦之^{おうたんし}がこらえられずに帰ってしまおうすると、

「ほんのひとときの辛抱と命を引き換えにする気ですか」

そいつって、その後も悠然と待ったという。

私には命の心配まではないのだから、

辛抱するまでもなくただの切り株になっていけばよいのだ。

【補足】〔1〕この詩は、執務上の必要性から知事に会おうとして、無意味に長時間待たされているという状況を詠んでいる。前の知事の宋選^{そうせん}は蘇軾の才能を高く評価し、面談を求めればたぶん他の用事を置いても即座に応じてくれていたのだろう。新たに赴任^{ちん きりょう}してきた陳希亮は全く違って、控室で半日待たされるようなことがざらであった。都では歐陽脩^{おうようしゅう}を初めとした多数の名士と交遊関係のあった蘇軾が、このような目に遭うのはきっと初めてのことで、その屈辱感是非常に大きかったと推測される。〔2〕謝安^{あん}は南北朝時代の晋朝の名宰相で、何事にも動じることなく常に平静を保ち、国家と皇室の危機を何度も乗り越えた。この詩に引かれているのは、謝安らしい一つのエピソードである。蘇軾はしばしば謝安を手本としようとしているが、この詩を詠んでしまっているように、内心を露わにすることなく悠然としているということはなかなかできなかった。〔3〕陳希亮との間に何があったのか。邵博^{しょうはく}の隨筆『邵氏聞見後録』^{しょう し ぶんけんこうろく} [→作品番号 02-1-010] が伝えている。これからずっと後までの経過がまとめて記述されているのだが、ここで先に読んでおこう]

【訳文】

しょうはく しょう し ぶんけんこうろく
邵博：『邵氏聞見後録』

ちん きりょう あざむ こうひつ か ちゅう ほうしゅう
陳希亮、字は公弼は、天より与えられた資質として剛にして正であった。嘉裕年間に鳳翔府知事にな
った。

とうば せい か ほうしゅう ふ せんしよはんがんじ りじん
東坡[蘇軾]は制科に合格して拔擢されて、鳳翔府簽書判官事になったばかりで、吏人[下級の役

人]たちは蘇賢良と呼んでいた。陳希亮は、

「府の判官をどうして賢良などと呼ぶのか」

と、怒り、そのような吏人^{じょう}を杖[罰を与える棒]で撃った。

あるいは、東坡が陳希亮^{ちんきりやう}に会おうとしても顔を見ることさえできなかった。それで、東坡の『客位仮寐^{きやくい か が}』の詩には、

雖無性命憂、[性命^{せいめい}の憂^{うれ}い無^なしと雖^{いんど}も]

且復忍須臾。[且^{しば}復^また須臾^{じゆゆ}を忍^{しの}ぶべし]

とある。また、『重九不預会^{ちゆうきゅうふ よ かい}』[→作品番号 02-2-021]の詩には、

憶弟涙如雲不散、[弟^{おと}を憶^{おも}いて涙^{なみだ}は雲^{くも}の如^{ごと}くに散^ちらず]

望郷心似雁南飛。[郷^{きやう}を望^{のぞ}んで心^{こころ}は雁^{かり}に似^にて南^{みなみ}に飛^とぶ]

とある。これほどまでに耐え難いものであったのだ。

さらに、『東坡詩案^{とうば しあん}』[蘇軾が詩文でもって朝政を誹謗したとして裁かれときの調書]にはこのようにある。

「鳳翔府簽判の任にあったときに、中元節^{ちゆうげんせつ}に知事の庁舎に出向かなかつた罰として、銅八斤を科せられた。これもまた陳希亮の裁きであった。

庁舎の祠の神に祈るためのようなちょっとした小文でも、東坡が書いたものを陳希亮は墨で真っ黒に塗って直させ、それが往復すること数回に及ぶこともあった。

しかし、陳希亮のために『凌虚台記^{りやうきょだい き}』[→作品番号 02-3-033]を作ったときには、

『……この高台に託して、虚を凌いで長く久しくあろうとしてもできるものではありません。まさく理に反しているからです。人間世界において得たり失ったりするものは、たちまち来てはたちまち往くだけのものなのではないのでしょか』

と、書いてあったのだが、陳希亮はこれを見て笑い、

「わしは、蘇洵^{そじゆん}を子のように親しく見ている。蘇軾はわし孫のようなものだ」

と、いって、それは一文字も変えることなく、石に刻むよう命じた。……

【補足】[上に書かれているのは、しばらく確執があった後に和解したというストー

リーである。『重九ちようきゆうに会かいに預あずからず』の詩は、陳希亮ちん きりようとの不和から生まれたという解釈に基づいて引用されているのだが、本自由訳では別の考証に基づいて1年前の作品としてすでに訳している]

■【02-3-015】陳公弼伝

【解題】蘇軾に対して種々のパワハラをふるった陳希亮ちん きりようとはいかなる人物であったのか。どうして陳希亮がそのような行為に及んだのか。蘇軾が書いた陳希亮の伝記を見ると、およそのことがわかってくる。この伝記の執筆時期は十数年後であるが、ここで読んでおくのが適切であろう。

【補足】[伝記の冒頭に、陳希亮は眉州青神び せいしん県の出身と記されている。青神県は蘇軾の妻の生地び ざんで、蘇軾と郷里の眉山び ざん県の隣である。また、伝記の終わりに陳希亮の妻は程氏ていとあり、恐らく蘇洵そ じゆんの妻の程氏ていと同族であるのだろう。それで、上に引用した随筆の中で、陳希亮は蘇洵は子このようなものだといったのであろう]

【訳文】

公こうの諱いみなは希亮きりよう、字あざなは公弼こうひつ、眉州青神び しゅうせいしんの出身。先祖けいちちようは京兆ちやうあん[長安]の人で、唐とうの広明年間こうめい[唐朝の終末期で、長安付近はしばしば戦火に見舞われた]に初めて眉州に移った。曾祖父そんそふは延祿えんろく、祖父そふは瓊けい、父けんちゆうは顯忠けんちゆう、みな官に仕えることはなかった。

公は幼くして父を喪い、学問を好み、十六歳のときにきちんとした師について学びたいと考えた。公の兄は思案の末に学資として三十万錢余りを公に貸すこととした。公は錢を受け取ると証文を焼き捨て、町を離れて師のもとに入門した。公は学問を習得すると家に帰り、兄の子に学問を教えた。天聖八年[1030年]、公は兄の子とともに科挙に合格した。これより町の人は公の家のある一角さんしんぼうを三雋坊と呼ぶようになった。三人の雋れた者がここから出たからだ。

公の最初の任地は長沙^{ちやうさ}県^{けん}だった。そこには海印^{かいいん}国師^{こくし}という仏僧^{ぶつそう}がいて、土地の貴人^{きじん}たちと交わり、あぐいもつけをしていた。人々は海印^{かいいん}国師^{こくし}を恐れ、その顔をまともに見ることもできなかった。公は法をもつてその僧を捕え、長沙^{ちやうさ}県^{けん}の人々は公を畏れた。

次いで雩都^{うと}^とに行くと、そこでは老練な吏人^{しじん}〔科挙^{こくきや}によらずに地元で採用される下級役人〕が銭次第で裁判を左右していた。吏人は公がまだ若い^{くみ}のを見て与しやす^{くみ}いと思つた。公はいきなりその吏人に重罪を宣告した。吏人は血が流れ出るまで額を地面に打ち付け、「必ず身を改めます」と詫びた。公は教え諭して後に釈放した。公は町の文化水準を高めるために学校を建てた。釈放された吏人は家財を売って学校建設のための資金を提供し、自分の子弟を入学させた。後にみなよい吏人になり、科挙を受けた者もいた。

この地にはたぐさんのまじない師^しがいて、春になると鬼を祭るためた^たといつて民衆から銭を集めていた。民間には、赤い衣を着た火の神様^{ひいろうじん}、「緋衣老人^{ひいろうじん}」がいるとの言い伝えがあり、まじない師はそれをきちんと祭らないと火災がおこると脅していた。公はその祭りを禁じたが火災はおこらなかった。公は、火の神様以外にもあやしげな神が祀られている数百の祠を壊し、七十余人のまじない師を追放した。村の老人は「出て行かないでくれ」とまじない師を引き止めようとした。まじない師は泣いて「陳公がわしらを捨てるのだ。わしらがなくなれば緋衣老人がまた出てくるだろう」といった。

公は、母が老いたので故郷の近く^{けん}に帰りたいと願ひ出て蜀^{しやく}の劍州^{けんしゅう}に移り、次いで母が亡くなり、喪のために官職から去った。喪が明けると、都で職を得た。

都^{ふくしやうとう}の福勝塔^{ふくしやうとう}が火事で焼け、国は再建のための費用^{ちやうげんこう}を用意した。このとき、西方で趙元昊^{ちやうげんこう}〔夏国の王〕が宋との間に紛争を起こしていたので、その費用は軍の食糧にあてるべきであると公は主張し、塔の再建はとりやめになった。

これより先、趙元昊^{ちやうげんこう}がまだ宋と事を構える前に、青州^{せいしゅう}の趙禹^{ちやうう}は、趙元昊はきつと反乱を起こすであろうから警戒するように朝廷に申し上げていた。宰相はそのようなてたらめをいってはならないと、趙禹をよその土地に追放した。趙元昊が実際に反したので、趙禹は上京して「自分は正しいことをいった」と訴

えた。宰相は怒って趙禹を獄に下した。公は「趙禹に罪はなく、むしろ称賛すべきです」と、宰相と争った。皇帝は公の主張を認め、趙禹は徐州に榮転となった。

皇帝はそのような公を見て、官員の罪を裁く御史に抜擢しようとした。たまたま公の外戚の沈氏の子が強盗殺人の疑いで捕えられて獄中に置かれ、まだ己の罪を認めずにいた。公はその者から直接に実情を聞くとして獄を尋ね、第一問を発すると、その者は恐れあまりその場で死んでしまった。沈氏は公が息子を殺したと訴えた。公および獄の役人が取り調べの対象となった。公は「あの悪者は自分一人が殺した」と、自ら罪を被って罷免となった。

都の西で盗賊が村を襲って役人を殺した。盗賊の勢いはさかんで、房州が次の標的になりそうだった。富弼の推薦で公が房州知事に任命された。公が赴任すると、房州には兵備がなく、民衆は盗賊を恐れて次々に逃げ出していた。公は役場の雑役係や民間人や囚人から数百人を集めて日夜軍事訓練を施し、その号令があたりに響いた。それを聞いて民衆は安堵し、盗賊も房州には近づかなかった。

雷甲という者が朝廷から派遣されてその盗賊の征伐に乗り出した。しかし、雷甲には兵士を統率する力量がなく、兵士は至るところで悪さをした。一方で、別の大盗賊が房州に近づいてきているとの報せが公のもとに入った。公は人々を率いて、その盗賊と川をはさんで対峙した。公は「じっとしたままで動くな」と人々に命じ、一人だけ前に進み出た。新たな盗賊とされていたのは実は雷甲で、雷甲は目の前の相手が盗賊であると誤認して公に向かって矢を放った。公は動かず、ほかの人々もまったく動かなかった。雷甲は人形ではないかと疑った。馬から降りて様子をさぐり、ようやく公であると知った。雷甲は地に伏し、「官軍であるのを知らなかったのです」と詫言った。人々は雷甲を切るべきだといったが、公は民に対して暴虐を為した者十余人だけを捕え、その他の者は許し、「盗賊と戦って己の罪を贖え」と雷甲を放った。

ここに党軍子なる賊の勢いがさかんになった。崔德贇がそれを捕えようとして逃がしてしまった。そこで、崔德贇は、党軍子が一度居座ったことのある向氏という者の屋敷を囲み、その父子三人を殺して、

これぞまさしく党軍子であると偽って、その首をさらしものにした。公はまやかしてあるの見抜き、崔德贇を獄に下した。崔德贇は白状しなかったが、党軍子本人が別のところで捕まった。国は向氏に絹を贈り、その冤罪を晴らし、家の名誉を回復させ、崔德贇を流罪にした。

ある者が、華州の張元が西方の趙元昊に仕えようと逃亡したと訴え出た。張元の一族百余人が捕えられ、房州で取り調べることになった。百余人は嚴重に監視されて房州に連れて行かれた。飢えと寒さのために途中の道でいまにも死にそうになった。公は「張元が趙元昊のもとに走ったかどうかさまだわかっていない。もしそれが本当だとしたら、張元は家を棄てて行ったわけだから、親類一族に罪はない」と考え、お上の意向を秘かに聞いた上で、これらの人々を釈放した。皆は泣いて感謝し、公の画を描いて祠におさめた。いまに至っても公を祀るのを絶やさずにいる。

公を中央で用いようとする声が上がった。しかし、「地方での実践こそが私の願うところだ」といって、公は宿州の知事になった。宿州には汴河が流れ、そこに架かる橋が舟運の邪魔になるというので、水に生きる者と陸に生きる者との間で論争が絶えなかった。そこで公は初めて飛橋というものを造った。飛橋は高く大きな弧を描いて川をまたぎ、橋を支える柱を河中に立てることもないので、船の航行を妨げることはなくなった。それ以来、汴河にかかる橋はみな飛橋になった。……[この後、六つの事績が記される]……

公は鳳翔府の知事となった。そのとき鳳翔府には十二年分もの穀物が貯えられていた。管理する者はそれが腐敗してしまうのを悩んでいた。公が着任した年に飢饉となり、貯蔵庫から十二万石の穀物を放出して民間に貸し出すこととした。役目の者はそれをどう処理したらよいのか頭を抱えてしまい、公が自身で取り行った。翌年は大いに稔り、貯蔵庫の穀物はすっかり入れ替えられ、官民ともによりけりな置だったと受け止めた。

西方の手闐国からの使者が都に行くに際して、鳳翔府が管轄する地域を通過した。そのとき、接待役の者は定め通りに饗応したのだが、使者は甚だ驕慢で、一カ月以上も留まり、駅館の器材はおろか建物までも壊す狼藉を働き、さらには市場に行って飲食物を奪い取りましたので、人々は恐れて昼

間も戸を閉ざし、大騒ぎとなった。公はこのことを聞くと、このようにいった。

「わしはかつて遼国りょうへの使者として向こうに行き、その実情を見た。外国の人間とて初めから暴横なのではない。通訳の者がそのようにさしてしまうのだ。私は通訳の者に対して宋国の法をもって厳しく接したところ、通訳の者は恐れ畏まり、遼国の人間も特におかしなことはしかなかった。まして于闐国は遼国よりずっと小さな国ではないか」

公は気の利く役人を派遣し、通訳の者に向かってこのようにい寄せた。

「我が国境の内側に入ったからには、もしもほんのわずかでも法を犯すようなことがあった場合は、わしはおまえを斬る。軍の定めに従ってそのようにし、于闐国の使者には還ってもらうことになる」

于闐国の使者はもとより公の威名を聞いていたので、庭に並んで公のいる鳳翔府に向かってひれ伏した。公の命令で使者を馳走し、鳳翔府の管轄する境にまでついて行って送り出した。その間、誰一人として騒動を起こす者はいなかった。

そのころ、州郡の知事は訪問客があると酒宴を開いて歓待し、私的な交際相手に対しても普通にそうしていた。しかし、法としてはもとよりよろしくないことなので、きちんと取り締まるようになった。公は貧乏な旅人に酒食を与えていたから、「これは私的な行為であった」と費用を弁済した上で、法を犯したことを自分から朝廷に申し上げ、辞職を願い出た。そのことから官職を去り、その後間もなく六十四歳で亡くなった。

公は程氏ていを娶り、四人の男児ちんしん ちんかく ちんじゅん ちんせうがいた。陳忱、陳恪、陳恂はそれぞれ官職に就いたが、四男の陳慥だけは官に仕えなかった。

公の人となりは清廉かつ寡欲であった。並みの人より背が低く、顔は黒く、目は氷のように光り、普段から心の内を表情に出すことがなく、王公貴人も憚るほどの厳めしきであった。義を行おうと勇んだときには禍福を勘定することなく、必ずその志を果たすまでやめなかった。公が赴任したところでは悪い民や狡猾な役人は心を入れ替えて行為を改めた。そうなかった者は必ず厳罰に処した。それは真心からしたことであったので、厳しくとも残酷ではなかった。学問を教えて士を育成することを熱心に進め、財

産を軽んじて施すことを好み、恩義に厚かった。

若い頃に蜀人の宋輔そうほと親しくして、宋輔が都で死ぬと、老いた母と幼い息子が残されたので、公はその母の面倒をみることにし、自分の娘と宋輔の息子そうたんべいの宋端平とを結婚させ、自分の子どもたちと一緒に勉強させた。宋端平は陳忱と一緒に科挙に合格した。

公は高位に昇った特典で、子弟の幾人かを科挙によらずに官職に就けることのできる恩恵を皇帝より頂戴し、自分の子よりも親類の子の方を優先して官員とした。それで四男の陳慥にはその恩恵が及ばなかった。

公は私の父の蘇洵そじゆんとは一家のような関係にあった。私は風翔で官職に就いたときに、二年にわたって公に仕えた。この時、私は若くて意気盛んで、愚かにも自分の行動を改めようとせず、しばしば公と衝突した。顔色を変えてひどい言葉を発したこともあった。後にそれを後悔した。

ひそかに思うに、公は古の真直まことしじ直くだった人たちの生き残りであったのだろう。国家においてもっと用いられて、もっと大きな仕事を成し遂げることができなかったのを残念に思う。公が没してすでに十四年、当時活躍していた士大夫でも公の事跡をきちんと知る者は少なく、ゆかりのある人も日に日に老いて少なくなっているため、いつか全てが埋もれてしまうのを恐れ、私はその事績を書き残したいと思っていた。しかし、詳しくは知らないため困っていたところ、范鎮はんちんが書いた墓誌を入手したので、それに自分が知っていることを補って、公の伝記を作ることができた。私は普段から伝記や墓碑の類は書かずに今日まで来た。だから、書いたのはただこの文だけである。そうするのは、後の君子に見てもらいたいからだ。

賛に曰く。

年配の諸公からこのように聞いている。

陳希亮の容貌は冷厳で、話し方はじっとり問い詰めるかのようで、面と向かって相手を説き伏せるのを好んだ。士大夫が集まって遊宴しているところに陳希亮が来ると、笑いが消え、話に味がなくなり、酒を飲んでも楽しくなくなるので、座っていた人が次第に消えてしまうのだった。持って生まれた性質と

してそうであったのだ。そして、人を遙かに超えたところに立っていた。漢の時代に、鄭昌有が、「山に猛獸がいて、それを畏れて草木を採る者が入らない」といって、朝廷で厳しく目を光らせていた蓋寛饒のことを讃え、やはり漢の時代に淮南王が謀反したときに、「宰相を説き伏せるのは布をはがす取るくらいに簡単で、憚らねばならないのは汲黯だけだ」と、いった。陳希亮はまさにその二人と同じで、陳希亮は朝廷にあるときには、その威は千里の外にまで及んだのであった。

【補足】〔(1) 途中で省略したところがあったが、陳希亮は年季の入った老練な官員として鳳翔府に赴任したのであった。一方の蘇軾はまだ官員としての経験が2年も満たない未熟者であった。蘇軾が下級役人たちから別称で呼ばれてちやほやされているのを見て、陳希亮はこれではだめだと思ったのだろう。伝記には、陳希亮がまだ官員としては駆け出しだったときに、土地の顔ききや吏人に対して極めて厳しく対処したことが記されている。科挙に合格した者は地方行政の幹部クラスとして赴任するのだが、土地の実情を知らないの、生え抜きの下級役人の支えがなければ何もできない。ともすると、吏人のいいなりになってしまうこともある。吏人は土地の有力者と結び付いて利権を握って不正を行っていることもあり、吏人は官員に利益の一部を供与することで、利権の構造の温存を図ることが多かった。官員はスムーズに事が運べ、なおかつ私財を積むこともできてまことに結構な次第であるのだが、民衆はたまったものではない。陳希亮は蘇軾のまわりに腐臭を感じ取り、徹底的に鍛え直さなければならぬと考えたのだろう。蘇軾の妻が人の付き合い方に注意するようアドバイスしたのも〔→作品番号 02-2-029〕、同様の危うさを夫に感じたからなのかもしれない。〕(2) この伝記は、文中に記されている陳希亮の四男の陳慥に依頼されて書いたもので、蘇軾はパワハラ上司の息子と後に深い親交を結んだのである〕

■ 【02-3-016】 七月二十四日、以久不雨、出禱磻溪。是日宿虢県。二十五日晚、自虢

県渡渭、宿於僧舎會閣。閣故曾氏所建也。夜久不寐、見壁有前県令趙薦留名、有懷其人

【解題】この年も雨が不足し、太公望たいこうぼうが釣りをしていたとの伝承がある磻溪はんけい [→作品番号 02-2-002] で雨乞いをし、その後でその周辺を巡った。陳希亮ちんきりょう知事から離れられる出張に心が浮き立ったのか、五首の詩を詠んでいる。最初の詩の題は、「七月二十四日、長らく雨がなかったので、鳳翔府ほうしょうを出て磻溪で祈ることになり、この日は號県かくに宿った。二十五日に號県いすいより渭水を渡って、遅くに僧舎そうかくの會閣に宿をとった。この閣はもと曾そう氏が建てたものである。夜なかなか眠れずに壁を見ていると、前の號県知事ちようせんの趙薦の名が留めてあったので、その人のことを想った」。趙薦は作品番号 02-3-012などで見ている。

【訳文】

夢に驚き、枕から頭を上げる。

いまはすでに真夜中であろうか、

人気のない寺に、ともしびが消えかかっている。

風の音が、深い谷間に、ざわざわとずっと響いている。

山の峰から月の光が身扎込んできて、

壁に記された詩がぼんやりと浮かび上がる。

消息を聞かないと想っていたままだその人の姓名がある。

その詩を繰り返し吟唱する間に、

そろそろ太公望たいこうぼうに祈りに行く刻限になつたろうかと、

北斗七星の傾き具合を人に尋ねる。

【補足】[翌朝は磻溪はんけいに行つて雨乞いをするので、意識が覚醒して眠りが浅かったの

だろうか]

■ 【02-3-017】 二十六日五更起行、至礪溪、天未明

【解題】上の詩の後、日の出前に宿所を出て、礪溪はんけいに行つて雨乞いをした。

【訳文】

山を照らす松明たいまつに驚いたのか、

猿がどざりと枝から落ちる。

細い月がぽつんと浮かぶ下を、

狭い谷へと入って行く。

川底の岩を洗う川の波が、

暁に向かって、冷たい音を一段と強める。

太公望たいこうぼうは遠い昔に白雲の彼方に飛び去り、

神々しい跡だけがいまここに残っている。

どうかして、太公望によって力を得て、

雷神の後ろに付き従って馬を天へと走らせ、

瓢ひさごを傾けて地上に大いに雨を降らせたいものだ。

■ 【02-3-018】 是日自礪溪、将往陽平、憩於麻田青峰寺之下院翠麓亭

【解題】詩の題は、「この日、礪溪はんけいから陽平鎮ようへいに行こうとして、麻田まの青峰寺せいほうじの下院である翠麓亭すいろくていで休憩した」。雨乞いの後に別の公務で陽平鎮に向かったのだろう。

【訳文】

せいほうじ
青峰寺を目指すもまだまだ着くには至らない。

いすい
渭水のほとりの村にまできて、

すいるくてい
翠麓亭の名と小路のゆかしさにひかれる。

朱の欄干が谷合いにくっきりと映え、

まわりの山を超えて古い木が高くそびえる。

小路は岩の崖に突き当たり、

そこで林が切れ、下に河の流れを見る。

疲れた馬は青い草を舐がって鳴き、

翠麓亭を守る僧が「ここで休まれよ」といつてくれる。

私がきたのは秋の昼さかり、

日照り続きであるから、石の台はことのほか熱くなっている。

どうかして、空を覆う傘のような雲を得て、

盆をひっくり返す雨を降らせることができないだろうか。

山のふもとに広がる田圃の稲が、

いかりにも涼しげに濡れた葉をひるかえす夕べの景色を、

ここで見たいものだ。

■ 【02-3-019】 二十七日、自陽平至斜谷、宿於南山中蟠竜寺

【解題】詩の題は、「二十七日、ようへい陽平鎮からしゃごく斜谷に至り、なんざん南山の中にあるはんりゅうじ蟠竜寺で宿をとった」。褒斜谷ほうしゃごくという長さ百七十里の大きな谷があり、その北の出口を斜口しゃくという。そこで川を渡って山中を進み、び郿県の西南三十里にある蟠竜寺に至ったのだらう。

【訳文】

いかに 横たえて 晩に 碧い 澗の口を 渡り、

馬に 騎って 夜に 南山の谷に 入る。

谷の中の 暗く 見えない ところで 水が 瀧瀧と 響き、

嶺の上で まばらな 星が 煜煜と 輝き出す。

寺は 千万 仞の 巖の底に 隠れ、

路は 山の 腰を 三百回も 曲がり 転じる。

風が 吹き出したのは、 飢えた 虎が 林の奥で 嘯くのか。

月がないこの 暗さは、 竹林の奥に 大きな 鹿を 忍ばせているのか。

門から 入ると、 奥深くに 堂宇が 聳え、

燃え 残りの 灯火が 青く 仏像を 照らしている。

「お取ずかしいことに、

この寺には、 立ち寄られる方をもてなす 酒も 食べ物も ございません。

杉や 松を 切って 谷の 山菜を 煮て しんぜましようか」

かくて、 板張りの 僧舎に 独り 眠って、

旅の 枕に 時折 目 覚めたり するうちに、

暁の 木魚が 鳴らされ、

僧とともに 朝の 粥を 頂戴する。

起って 改めて 堂宇を見ると、 万の 瓦が 重く 重なり 合っている。

目が 眩むばかりの 高さの 巖に、 紅い 花が ちらほらと 咲いている。

門前を 山椒や 茶を 負った 商人が 歩くのは、

山の すぐ 向こうに 連なる 蜀の 地から 来たの だろうか。

いつしか あの 川べりの 田に 帰って 耕す ことがある だろうか。

心は南に飛ぶとり鶡を追いかけて行くとする

■【02-3-020】是日至下馬磧、憩於北山僧舍。有閣曰懷賢、南直斜谷、西臨五丈原、諸葛孔明所從出師也

【解題】詩の題は、「この日、下馬磧げばせきに至り、北山ほくざんの僧舎かいけんかくで休憩した。懷賢閣という建物があり、南は斜谷しゃこくに向かい、西は五丈原ごじょうげんを臨むしょかつこうめい。諸葛孔明はここから出陣したのである。「この日」とあるのはたぶん七月二十八日であろう。五丈原は『三国志さんごくし』ファンでなくてもよく知られている古戦場で、諸葛孔明はここで魏軍ぎに対して短気決戦を挑んだのだが、魏軍によって持久戦に持ち込まれ、決着がつかないままに諸葛孔明は陣没した。

【訳文】

南に斜谷しゃこくの口を望む。

三つの山が犬の牙のように突き立っている。

西に五丈原ごじょうげんを見る。

長く蛇のようにねうねとわたかまっている。

想うのは、諸葛公しょかつが万騎しよくを率いて蜀を出たときのこと。

軍士は水のように静まり返り、

蕭蕭しょうしょうと馬の鞭の音だけが聞えていた。

諸葛公の才さいを魏の王の曹丕そうひと比べたなら、

十倍どころの違いでではなかった。

敵地を睨んだ諸葛公の勢いは、

沙を巻き上げる風のようにであった。

しかし、突如として長星が墜ちた[諸葛孔明の死をいう]ために、
 蜀の妻たちは皆が喪に服さねばならなくなった。
 山の僧はこのようなことなどは知らぬかのように、
 一室で座禅を組みつつ、
 山の霞のなかで老いてゆくのである。
 昔は雲とともに消え去り、
 川に沿う山々は変わることがない。
 私はたまたま来て古を弔うだけであるのだが、
 涙をこぼさずにはいられない。

■ 【02-3-021】 妬佳月

【解題】出張から戻ると、陳希亮知事との関係は一段と悪化し、知事が主催する8月15日の中元節の行事に無断で欠席した罪で銅八斤の罰金を科せられた。その事件と関係しているのだろう、秋の名月にちなむこの詩を詠んでいる。月を蘇軾に、雲を陳知事に譬えていると見ると、かなり悪趣味な詩ということになるが、それだけ不快感を募らせていたのだろう。

【訳文】

雲は佳い月を妬んで猛り狂い、
 飛んで飛んで千里の彼方まで空を真黒にしようとする。
 佳い月は怒りましない。
 月の白さそのものが汚されることは決してないからだ。
 昔、李白が仙界から人間界に降ろされたときに、

月と自分と我が影の三人が友だといった。
今夜は黒い雲のせいで月が見えず、影もない。
その寂しさに、風の神がきてくれないかと思う。
しかし、変わりやすい風の神などあてこしない方がよいたろう。
頬杖をついてしばらく待ってさえいれば、
空にはいづれ何もなくななり、
黄金の丸い盤さんさんが燦々と輝き出して、
その光が青い天空の隅々までも満たすだろう。
星はそのために輝きを失い、
夜露は洗いたての秋の色を宿すであろう。
月がガラスの玉のような光のかけらをまろりと落とせば、
それは我が胸の内へと入ってくる。
永遠にかげることなき光を得て、
私は月の友となるのだ。

■ 【02-3-022】南溪有会景亭、処衆亭之間、無所見、甚不称其名。予欲遷之少西、臨
断岸、西向可以遠望、而力未暇、特為制名曰招隱。仍為詩以告來者、庶幾遷之

【**解題**】これは9月ごろに鳳翔府近郊ほうしょうの南溪なんけいにある会景亭かいけいていに遊んで詠んだ詩。詩の題
は、「南溪に会景亭がある。いくつかある亭あずまやのなかで特別に見るべきところはない。
その名にあまりふさわしくないので、私はそれを少しばかり西に移して、崖に臨むよ
うにしたならば西側を遠くまで望むことができるであろうと考えた。ただそれを行う
暇がまだないので、とりあえず『招隱亭しょういんてい』の名を付け、詩を作ってここに来る者に我
が思いを告げることにした。これが移されることを強く期待するものである」。南溪

の名はすでに作品番号 02-2-002 の詩の題でも見ている。

【訳文】

もしこの亭あずまやを移したならば――

空を飛ぶような檐ひさしが古い道を見下ろし、

高い榜たてふたがここで遊んで行けようとして人に勧めるであろう。

また隠棲するには至らずとも、

そこに行けば、世間の塵を洗い落してくれるだろう。

亭から見えるのは、

まことに野趣豊かなありさま、

茅葺の家がところどころに集まり、

門に沿って炊事の煙がなびき、

林が欠けた先から湖の光が漏れるのである。

この地の人々はゆったりと暮らし、

朱塗りの車に乗った高貴な人ものんびりとやってきて、

帰ろうとしても、山の好きになお留まり、

被り物が風に吹き落とされても、酒に酔って気づかないだろう。

いつの年にか、このように改築してくれるだろうか。

もとの形にこだわることはない。

そのときに訪れる私は老いてしまっているだろうけれど、

座客の一人としてどうか加えていただきたい。

■ 【02-3-023】 扶風天和寺

【**解題**】扶風^{ふふう}県にある天和^{てんわ}寺で詠んだ詩。この詩は石に刻まれ、「癸卯^{きぼう}九月十六日、家族を連れて遊びに来た。眉山^びの蘇軾^{そし}が題す」と添え書きがあったという。

【訳文】

遠くから見たとき、
朱色の欄干や青い瓦が山に映え、
なかなか愛すべき景色であると感じた。
近づこうとすると、
一步登るごとに足を止めて息を継がねばならず、
百回以上も寺を見上げることになった。
川の底には水がなくて石が現れ、
野の上には塵が上がって遠くの町の楼閣は見えない。
風に臨んで声を出すのはよそう。
我が思いのほどを抑えられなくなってしまうだろうから。

■ 【02-3-024】贈楊耆并引

【**解題**】扶風^{ふふう}県を訪れた蘇軾^{そし}は鳳鳴^{ほうめい}駅館 [→作品番号 02-2-023] に泊まったのだろう。そのときに楊耆^{ようき}という人物と会い、一篇の詩を贈った。それから20年ほど後に楊耆と再会し、かつての詩に序文を添えてまた贈った。その作品を見ておこう。序文がある。

【訳文】

西蜀^{せいしやく}の楊耆^{ようき}は、二十年ほど前に会ったときに甚だ貧乏であった。いま会うとやはり貧乏である。昔と何が異なるかという、顔がやつれ白髪になったことだけだ。

女性は容貌の美醜にかかわらず富む者は優美であるという。男子は賢であろうが不肖であろうが貧乏であると田舎びてしまうという。たまたま時代にうまく合うと造作なく当世風の士となる。

かつて扶風ふふうの宿で、夜に外からの歌声を聞いた。はなはだ悲しげであったので、起きて声の主を呼んで尋ねた。すると、その者は、昔は富んでいたがいまは貧乏になってしまったといった。私は身につまされ、一緒に酒を飲み、詩を作った。

今日は冷たい雨が降り続き、かのときのことがまざまざと思い出される。楊君の困窮はもとのままだ。そして私も楊君と同じ故郷を離れた旅の身である。よって、そのときの詩をまたここに書いて楊君に贈る。

小さなこの村にも、

わずかばかりの雨が秋の涼しさを送ってくれたこのときに、

旅の宿では、

夜長に愁いてずっと嘆き続ける人がいる。

眠れぬままに、馬がまぐさを食らうのをただ見つめていると、

虫が悲しげに歌い、それにまた虫が応える。

天候はこれからは寒くなり、

実らなかった穂は畦に横たわるようになるだろう。

歳は暮れようとするが、

機織はたおり機は糸がないためにおなしく壁に立てかけたままとなるのだろうか。

君にもう一杯の酒を勧める。

しじみここで眠ろうではないか。

人間界の貧富など、

どうせ大海の波のようにあてどないものなのだ。

■ 【02-3-025】 和子由聞子瞻將如終南太平宮溪堂讀書

【解題】 弟から、「兄が終南山しゅうなんざんの上清じょうせい太平宮たいへいきゅうの溪堂けいどうに行つて書物を読もうとしていると聞いた」という題の詩が送られてきたので、それに和した。手紙が鳳翔府ほうしょうと都の間を行き来する間に、蘇軾はとつくに太平宮に行つて帰つてきていたであらうけれど、詩は瞬時に送り返したかのように詠まれている。太平宮はすでに作品番号 02-2-002 の旅程の中で見ている。

【訳文】

外なる名に使われると、ただた役目を勤めねばならず、
内なる身に任せると、ただた安楽を偷んでしまう。
まことに愚かて拙い僕は、
名と身の二つをともうまくやりすることができない。
いまさらのように僕は、
官員としての口の利き方、公文書の書き方を学ばなければならなかつたし、
ここにきてようやく罪人の訊問の仕方を会得したばかりだ。
官員というものは、
いま何をすべきか知ろうとしたら、
何はともあれ先例を調べなければならぬ。
官員というものは、
望む地位を得られずにいる間は、得られないことをひたすら憂い、
得られたら得られたで、それを失うことをひたすら憂う。
だからその心は決して落ち着くときがない。
疲れた旅人が道の途中で清らかな流れに出会い、

しまし休んで水を掬って飲んでも飽き足らず、
 塵にまみれたまままた道を進まなければならないのと同じである。
 僕は、春の鳥のさえずりを聞いたところに、
 自然の内へと入ってみたいと思った。
 あれこれ決めかねているうちにいまはもう秋の終わりの。
 御陵造営の期限が迫りきて、府県の役人は仕事の手配に忙しい。
 国家の事業であるから不平をいうべきではないけれど、
 民衆を煩わせることに耳ざらいを覚えなければいけない。
 しかも、いまは日照りの嘆きがある。
 僕は何よりも雨を呼ぶ術を学ばないといけない。
 川の水は涸れ果て、川底の泥まで乾いてしまった。
 一本の木を千人がかりで曳かなければならない。
 人々は十歩進むために八回も九回も息継ぎをする。
 こうしたことを見ていると、食事さえ欲しくなくなり、
 何かをする気力の一切が失せてしまう。
 もしも秋の雨が十分に降ってくれたならば、
 公務の合間に新酒を味わうこともできようかと想像はするのだが、
 いまの骨折りが幸いにも終わったとしても、
 朽ちた自分にはもはや任務に耐えられなくなってしまうことだろう。
 だから、秋の風が僕を丘へと誘い出し、
 せめて一日の楽しみだけでも得て、
 百日の愁いを慰めようと思うのである。

【補足】〔(1) 役人暮らしの鬱屈した思いが率直に歌われている。陳希亮ちんきりょう知事との不

仲は都にも聞こえ、弟は兄の身を案じていた。(2) 御陵造宮とは、この年の3月に亡くなった仁宗皇帝じんそうの陵墓を造る事業で、鳳翔府ほうしょうは大量の木材を期日までに搬出しなければならず、蘇軾は現場監督として山に派遣され、重労働に喘ぐ民衆を実際に見て心を痛めていた。公務が一段落したところで、太平宮たいへいきゆうを訪れたのである]

■ 【02-3-026】 将往終南和子由見寄

【解題】 上清太平宮じょうせいたいへいきゆうに向う前の夜に弟を想って詠んだ詩。

【訳文】

人生はたかたか百年、
髭や髪が白くなるだけの時間しかない。
富貴なんぞは葦の若い茎の中の薄皮ほどのものでしかない。
墨をしたらせて詩文を書くなどという行為は、
酔いつぶれてきれいなお姐さんに介抱されるよりは、
いくらか体裁がよいだけのことだ。
このところ僕は学問をやめたので、
しばらく吹かずにいた笛が詰まって音が出ないようなありさまだ。
今年も残すところ少なくなり、
秋の風がもたらす水のような涼気が身に沁み入る。
明日は南の川に行って鳥や獣を友としようと思っている。
寢床で落ち着かぬまま夜明けを待っている。
昔むかし、一生涯ただ筆だけを弄んで、
鳥のように全身真黒になりたいと願った人がいた。

僕もまったく同じことをいま思っている。

門を閉ざして一日中僧侶のように座り続け、

官爵などは泥のように見下すのだ。

僕はどうしてこもくずくずしているのだろう。

歳月は自分と一緒にくずくず留まっていってはくれない。

もう夜が明けるのか。

僕の馬に^{まぐさ}秣が与えられようとしている。

■ 【02-3-027】 読道蔵

【^{じょうせいたいへいきゆう} 解題】 上清太平宮には道教の^{どうぞう} 經典である道蔵の一式が納められた。蘇軾は道蔵を見ることを一つの目的として太平宮を訪れたのだった。

【訳文】

どのような幸いに恵まれたのか、

この道教の寺にたまたまくることになった。

何かここにあるかという、

千の箱にぎっしりと書物が詰められている。

赤い^{ふくろ}錦の囊に納められ、

青い霞の裾のような紙でくるまれ、

仙人が箱に鍵を掛け、

神がその部屋を守っている。

神の隙を窺って書物を覗こうというのだから、

ゆっくり眺める時間はない。

それでも、真理を知る人は一言で悟れるといし、

^{みち}道は静かな心に集まるともいから、

心^{のどか}を長閑にして蓮のつぼみを想い見るならば、

おのずと純白の大輪を咲かすこともあるのだらう。

かくて俗世を離れて千年の彼方に去れたならば、

その後^{しがいね}に遺した我が屍^{むしろ}を包む蓆に、

我がこの詩がなるであらう。

人はかりそめの身をいい加減に扱って、

土くれ、草きりで養おうとしている。

私は道教の真理を得て我が憂いを除きたいと思っている。

それさえできなくて、

天下を治めることにどうして関わろうなどとしているのだらうか。

■ 【02-3-028】 書太宗皇帝急就章

【**解題**】 ^{じょうせいたいへいきゅう}上清^{たいそうこうてい}太平宮で太宗皇帝が書いた『^{きゅうしゅうしやう}急就章』を見て、この短文を書き添えた。『急就章』は漢^{かん}の時代^{しゆう}の史游の作で、手習いの教本としてよく使われた。太宗は宋^{そう}の二代皇帝である。

【訳文】

私は近^{しゅうなんざん}ごろ終南山の太平宮^{たいへいきゅう}に行って、三^{さんせい}聖^{たいそ}〔太祖皇帝以下の三代の皇帝〕の遺墨を観ることができた。太宗皇帝の『急就章』一卷の章は非常に優れている。

古^{いにしえ}から英主^{しよ}で書に巧みでない者は少ない。『孟子』に、魯国の君主が宋国^{そう}に行ったときのことが記されていて、魯国の君主が門で声を掛けると、門番が「これは吾が君ではないけれど、その声は何と

我が君に似ていることか」といったとある。同じ境遇にある者は自ずと似るといことなのであろう。

蘇軾が記す。

■【02-3-029】上清詞

【解題】冬にまた上清じょうせい太平宮たいへいきゆうに行き、この詞を献じた。太平宮は、太宗皇帝の時に、道士ちゆうしゆしんの張守真のもとに神が降って天の命令を記した符を授けたことから建てられたのであるが〔→作品番号 02-2-002〕、この詞では、張守真が天帝に派遣されて世を鎮めたとして歌っている。

【訳文】

南山なんざんの奥の雲が重なる中、

ここに誰がいるのか。

天帝てんていのかたわらに侍る神君しんくん〔張守真ちゆうしゆしん〕である。

神君はどうしてこの山の奥に、

天の宮殿を顧みつつ久しく淹留していたのか。

どうしてある日ここを去って、

もはや下界を顧みることもなく、

この山の人々を悲ませたのか。

神君が来たときのことはもはや知りようがなく、

去ったときのことももはや尋ねようがない。

——神君が来たときのこと、

天の門が開かれ、

神君は飛ぶ竜にまたがり、

千騎を従え、^{しんせい}辰星と金星を引き連れ、
白昼に雷が鳴り響くなかを、
巖かにも下って来られたのだった。
天帝の庭を発ったのは朝、
この山の宮に着いたのは夕方であった。
このとき妖魔どもが下界を虐げていた。
妖魔どもはおびたたい血が流されるのを愛し、
疫病や害虫を好んでいた。
嘯いて疾風を走らせ、
泣いて大雨を降らせ、
時に乾いた火を吐いて大地を融かしていた。
神君は天帝の命によってそれを討ち、
千仞の鋒を建て、
妖魔のもとに集まってきていたものどもを衝き崩し、
海や山に跋扈していたものどもを走らせ、
天を暗く覆っていた旗を掃い去り、
耳を塞ぐほどに鳴り合っていた剣も掃い去り、
稲妻に乗って逃げまどうものどもを追い、
たちまち跡形なく一掃してしまったのだった。
神君の裁きは必ず正しく、
上帝は決して汝らを容赦しないことを知らしめたのであった。
妖魔どもは天帝の命に従うと約束し、
震えつつ退き、

それから恭しく仕えるようになったのだった。
神君の恩沢は世界を覆うものであったが、
神君は淡然としてその功を誇ることもなく、
ここを去って行った。
天の門はまた開かれ、
神君が宮殿へと入って行くと、
多数の仙人が出迎え、
巖かに前へ導き、ざわざとその後に従った。
神君が玉堂ぎょくどうの階段を昇ると、
天帝が迎えて労った。
神君ははなはた疲れてはいたけれど、
人の世の巖しさを述べ、
天帝に憐憫を下されんことを申し上げた。
かくて立ち並ぶ天の宮殿のうちへと帰り、
万靈に慰勞され、
清静のうちに黙って無為に過ごすこととなった。
ときに宮殿のうちを進んで、
天帝に大事の献策することはあっても、
もはや下界に帰ることはない。
それでも、表裏を貫く光は輝き、
下界をくまなく照らし出しているのである。
時に神君が目を遊ばせて下界を見ると、
五嶽ごかくは高坏たかつきのよう、四海しかげは杯さかずきのようで、

太平宮の千本の柱は毛筋が集まるかのようである。

神君が来るときは楽しみのためではなかったし、

去るときに悲しんだわけでもなかった。

神君はすでに帰ってしまったけれども、

そのお顔はこの像と少しも違わないのであって、

秘殿に昇ってそれを見るならば、

我が胸は高鳴り、

魂は緊張して上に飛び出すかのようである。

私はたちまち気を失い、

そのときに何かを得たのか

沐浴してこの辞を献じることとなった。

これが真実を述べているのかそうでないのか、

私には知ることができない。

【補足】 [これか神君の功績というよりは宋朝の天下統一の偉業を讃えた詩なのだろう]

■ 【02-3-030】 書上清詞後

【解題】 これより24年後、上の『上清詞』を書いて、それに添えた短文があるので、ここで見ておこう。

【訳文】

嘉祐八年冬、私は鳳翔府の官員として、公務で上清太平宮の真君[張守真]にはしばしば詣でて、敬ってこの詞を作り、また弟にも同じ賦すよこした。それから二十四年が経ち、薛紹彭が上清太平

宮の監宮かんきゆうとなり、この二篇を石に刻みたいので書いてほしいといってきた。

元祐二年二月二十八日記す。

■【02-3-031】思治論

【解題】この年に蘇軾は現在の政治の課題と解決に向けての理念を論じたこの文章を書いている。いま何が問題であるかを指摘している冒頭の部分だけを読んでおこう。

【訳文】

いま天下は何に病んでいるのか。初めに正しく見据えておかなければ、何ら成果が上からないだけでなく、ますます立ち行かなくなってしまうだろう。

凡人の気分としては、一度試みて効果がなければ、その方策を疑い、再び同様のことになれば倦み疲れ、三度目にはもはやめてしまう。いまの世の士を見渡して、敢えて為そうとする者がいないのは、忠義の心を強く持っている者がいないからではなく、才術や思慮が優れている者がいないからではなく、成果をすぐに挙げるのが難しく、再度為すことができなくなるのを恐れるからである。決して成果が挙げられないわけではなく、罪は為そうとしないところにあるのだ。為そうとするならきつと成るのである。

いまの世には三つの患わざらいがあって、ついにそれを去ることができずにいる。それが生じてからすでに五六十年になる。

数々の宮殿、神殿を建設し、茶税や塩税の法が破綻し、さらに軍事費が増大してからは、天下は常に財政困難を患ってきた。下には人々が寄り集まってあれこれ論じ合い、上では政治を改め法令を変えて財を豊かにしようとし、実に数えられないほどの策が講じられたのだが、ついに財政は豊かにならなかった。

[大挙して遼国軍が攻めてきた]澶淵せんえんの役から、遼国は和が求めてきたとはえ、ついにそれは要領を得ない結果となり、さらには西の夏国の変も加わって、国境が静かになることはなく、二国はますます

驕ってしまった。戦っても勝てず、守っても固くなく、天下は常に軍備の不足を患ってきた。五六十年の間に、下には人々が寄り集まってあれこれ論じ合い、上では政治を改め法令を変えて軍備を増強しようとし、実に数えられないほどの策が講じられたのだが、ついに軍備は強くならなかった。

科挙を厳格にし、官吏を法によって縛るようになってから、官吏は功名を志さなくなった。官吏を評定する仕組みは壊れ、賢者が推薦されることはなく、不肖の者も恐れ憚るところがなく、天下は常によい官吏がいなくて患うようになった。この五六十年の間、下には人々が寄り集まってあれこれ論じ合い、上では政治を改め法令を変えて、よい官吏を求めようとし、実に数えられないほどの策が講じられたのだが、ついによい官吏が選出されるようにはならなかった。

財政が豊かにならず、軍備が強くならず、官吏がきちんと選ばれない、このようなことでよいはずがないのだ。……[以下、省略]……

【補足】[ここで述べている三つの問題点は、40年以上前に^{はんちゆうえん}范仲淹が指摘したことで本質的には変わっていない。そして、何度か国政を改革しようと試みて失敗してきたこともここに記されている通りである。ではどうしたらよいのか、蘇軾がこの論文で論じていることは抽象的で訳者には理解できないので、残念ながらここに訳出することができない。抽象的であるからといって、必ずしも問題の解決に役立たないわけではないだろう。本質は抽象的に論じてこそ明らかになるものであって、理系的指向のある蘇軾は、根本をまず解き明かそうとする傾向が強くなり、宋代士大夫の多くもまた理屈を言い募るのを好んだ。しかし、抽象的理念と緊密に結びついた具体策がなければ、実効性は期待できない。本質論に基づいた総合的かつ緻密な具体策を蘇軾は残念ながら提案できていない。宋代においてそれができたのは^{おうあんせき}王安石ただ一人であったことを後に見るであろう]

■ 【02-3-032】 稼説

【**解題**】^{ほうしやう}鳳翔府には^{ちやうこ}張琥という「同年」の同僚がいた [→作品番号 02-2-021]。その張琥が鳳翔府での任が満ちて都に帰ることになり、この文を贈った。

【訳文】

富む人の田で穀物がどのように稔っているのか、君は見たことがあるだろうか。富む人の田は良質でしかも広いから、食べるに十分な収穫が得られて余裕がある。広いから交替で田を休ませることができ、地力は完全なままに保たれる。余裕があるから、種を植えるのに時期遅れになることはないし、すっかり熟してから収穫することにもなる。だから、富む人の田では穀物の稔りはいつも上質で、中身がすかさずかの籾は少なく、実が充実して長く保存しても腐ったりしない。

もし私が十人家族で、百畝の田ほしかなかったでしょう。一寸の幅の田からも逃さず収穫を得ようと、日夜それを望んで耕したり均ならしたりする。いつも魚の鱗のように人がびっしり張り付いて仕事をするから、地力は竭き果ててしまう。収穫は家族が食べるのに足りないから、種を植えるのはどうしても時期に間に合わないし、刈り取るのは熟すのを待ってなどいられない。これでどうして上質の穀物が稔ったりするだろうか。

^{いにしへ}古の人は、その才能が今の人よりもずっと優れていたということはないであろう。古の人は普段の暮らしでも、自分の持っているものを自分でよく養い、軽々しく用いるようなことはせずに、十分に熟成するのを待った。それは赤ん坊がゆっくと成長するのを待つと同じようであった。弱いところがあれば養って剛くなるのを待ち、うつろなところがあれば養って充ちるのを待った。

こうして古の人は三十歳になってようやく出仕し、五十歳になって高い地位に就いた。長らく身の内に貯め込んでおいた末に、十分に充実させ、大きく伸ばしてから世の中で用いられたのだ。あるいは、身の内から溢れ出て余りあるまでになってから外に流し出し、あるいは、十分に弓を引いてから放ったのである。これが、古の人々がいまの人々よりもずっと優れていた理由である。

私は子供のころに学問を志し、不幸にして早から成果を得て、君と同じ年に科挙に合格した。君もま

た早くなかったわけではない。私は自分の学問はまだまだ不足していると考えていたかったのだが、まわりの人がむやみと推薦して下さり、今のようなことになった。

君はここを去って後に、どうか学ぶに努めてほしい。広いいろいろなものを学び、肝心なところを掴み取り、厚く積み上げて外に出すのは少しだけにする——私が君に告げるのはこれことだ。

君は都に帰ったら、是非訪ねてほしい人がいる。それは蘇轍、私の弟だ。同じことを弟に君から語ってほしいのだ。

【補足】〔張琥はこの送別の文章を読んでどのように感じたのだろうか。焦らず己を成長させることに努めてほしいとの助言を素直に受け止めたのなら、張琥は立派な士大夫になったであろう。蘇軾は、弟への伝言としてほしいと書き添え、押しつけがましくならないような配慮もしていたから、もしもその通りに張琥が実行していたなら、「同年」である 3 人の友情が長く続くことにもなったであろう。しかし、十数年後に張琥は蘇軾に対してひどい敵対行為をしているので、張琥はこの送別文を読んで、堪えがたい屈辱感を味わったと推測するのも、あながち見当はずれではないだろう。ただし、張琥が蘇軾を死罪にしようと躍起になったのは、私怨ではなくて真実の正義感に駆られての行為であったと弁護する余地も皆無とは言い切れないであろう〕

■ 【02-3-033】 凌虚台記

【解題】陳希亮知事は鳳翔府の官舎の近くに凌虚台という見晴らし台を築き、その完成を記念する文章を書くよう蘇軾に依頼した。不仲の部下、しかもねちねちと文章を添削してきた相手に、記念の文章を執筆させるというのは、なかなか不可解なことであった。上司からの依頼というよりは指令であるから、蘇軾として断るわけにはいかない。このような記念の文章では、先の「鳳鳴馭記」〔→作品番号 02-2-023〕で見たとように、それを作った人の徳を称えて祝意に満ちた文章を書くのが普通である。まし

て、ここで陳知事を少しでも持ち上げた書き方をしておけば、関係改善が期待できるであろうから、何はともあれ陳知事を誉めておくのが穏当なのだが、蘇軾は何を考えたのか、はなはだ無作法な文章を記した。

【訳文】

こ鳳翔ほうしょうは終南山しゅうなんざんの麓に位置し、起居、飲食、常に山と接している。

鳳翔の四方に終南山より高い山はなく、終南山の近くに鳳翔よりも立派な都市はない。互いに近くあって、互いに最高であることを求めるならば、必ず終南山と鳳翔ということになる。

知事陳公ちんこうは鳳翔に住まうようになってからも、終南山がすぐそこにあるのを知らずにいた。山があるのを知らなくても政務にさしわりがあるわけではない。とはいえ、ものの道理として終南山を知らないというはありえない。そもそもが理ことわりに反していることから始まってここに高台は築かれることになったのである。

あるとき陳公はたまたまこのあたりを歩いていて、林の木々の上に山があるのに気付いた。自分が歩くとともに山が林の上を移ろうのを見て、堀の向こうを道行く人の頭が移ろうのと似ていると感じた。

「特に優れた眺望がここに得られそうだ」

陳公はそう思うと、この前面を掘って四角い池とし、その土を盛って家屋の軒より上に出る高させよにせよと人々に指示した。こうして高台を作れば、そこを登る者は、自分が高みへと上がって行くとはあまり意識しないで、終南山が自ら高々と飛び出して来ることに驚くであろうと、陳公は考えた。

「山が中空に突き出る、つまり虚空しゆの りゆうきよを凌ぐ、凌虚という名がよろしかろう」

陳公はそのように高台の名を定め、完成した暁には記念となる文章を書くよう私蘇軾に求めた。

そこで私は次のように申し上げた。

「物があるいはすた廃れ、あるいはおこ興り、あるいはこほ成り、あるいは毀たれるのは必ずしも人の意のままにはなりません。それでも、とどのつまりだけは知ることができます。昔ここが荒れた野であり、わびしい田であり、露や霜に繰り返し覆われ、狐や狸がすみかとしていたときに、いずれ凌虚台が築かれると誰が予想し

たでしょうか。あるいは廃れ、あるいは興り、あるいは成り、あるいは毀たれるという連鎖は無窮に続き、凌虚台が後にまた荒れた野ないしはわびしい田になるということは知らずいようとしてもできるものではありません。

凌虚台が完成しましたら、試みに一緒に高台に登ってみようではありませんか。望み見るのは、東に秦しんの穆王ぼくおうの祈年宮きねんきゆうや橐泉宮たいせんきゆうのあったところ、南に漢の武帝かん ぶていの長楊宮ちやうやうきゆうや五柞宮ご さきゆうのあったところ、北に隋ずいの仁寿宮じんじゆうきゆう、唐とうの九成宮きやうせいきゆうのあったところす。それらが最も盛んであったころには、その規模は宏大、外観は美麗、堅固で動かぬありさまは凌虚台の百倍どころではなかったであります。しかし、王朝の繰返しを経たいま、せめてそのすかが彷彿とさせるようなものを求めようとしても、割れた瓦、崩れた塀さえ存在していません。麦畑いばらや茨の荒野を載せる丘だけががあります。この高台がこれから先にどのようなことになるのか、いまでもありません。

この高台に託して、虚を凌いで長く久しくあろうとしてもできるものではないのです。まさく理に反しているからです。人間世界において得たり失ったりするものは、たちまち来てはたちまち往くだけのものなのではないのでしょうか。

世に誇るべきものを作って自己満足を得ようとするのは大きな過ちです。長く久しくあるとたのむに足るものがあるとしたら、この高台の存亡などとは関わりがないに違いありません」

私は陳公の前から退く、そのままを文章に記した。

【補足】〔(1) 凌虚台りやうきよだいを築意図そのものが愚かしいと、蘇軾は傲然と言いつ放ったのである。陳知事ちんはこれを読むと、一文字も改めさせることなく碑に刻んで凌虚台の下に置いたと、邵博しやうはくの『邵氏聞見後録しやう し ぶんけんこうろく』は伝えている [→作品番号 02-3-014]。これより陳知事と蘇軾の間は改善され、すこぶるよい関係になっていった。『陳公弼伝ちんこうひつでん』[→作品番号 02-3-015]にあった飢餓対策や于闐國うてんの使者への対応などには、蘇軾が関わったと推測される [だからこそ詳しく書かれている]。実は、記念の文章を蘇軾に書かせたのは、陳知事による特別な試験であったのかもしれない。もしも、蘇軾が齒の

浮くような言葉を並べたてて陳知事を褒め讃えでもしたならば、蘇軾は箸にも棒にもからぬ遊蕩児であるとして完全に見捨てられていたのかもしれない。己が正しいと信じてことだけを堂々と述べる姿勢を蘇軾が貫いたので、陳知事はそれを正当に評価したのだらう。一方で、蘇軾はこのころに陳知事の末っ子の陳慥ちんぞうと偶然出会って意気投合していたので、そのことが好影響を与えたということもあったかもしれない。陳慥については後々の章で詳しく記すことになる]

■ 【02-3-034】 十二月十四日、夜、微雪、明日早、往南溪小酌、至晩

【解題】詩の題は、「十二月十四日、夜にわずかに雪が降り、翌朝早くに南溪なんけいに行き、酒を少し飲んで晩に至った」。南溪の名は作品番号02-3-022などにあり。蘇軾はそのこの風光が特に気に入ったようである。

【訳文】

両岸に雪が積もった南溪なんけいの景色は、
 とてもではないが値などつけられない。
 雪の消えないうちにと馬を走らせ、
 木々の間から抜け出て、
 雪の中に道を探して、
 まだ足痕のない朱塗りの橋を一番に渡った。
 興に乗じてなおも行くと、崩れた家があった。
 この家の人は雪に埋もれたままでどうやって眠ったのだろうか。
 さらに小さな村に行き着くと、
 ひっそりとして人の声が全く聞こえない。

人々はすでに飢餓に迫られているのか。

年の暮れの鳥の鳴き声だけがあたりにこだまする。

我が馬の足音に、鳥が驚いて飛び立ち、

枯れた枝からぱらぱらと雪のかけらが落ちてきた。

【補足】〔蘇軾は雪景色を見に南溪なんけいに行ったのだが、人々のわびしい暮らし向きに愕然とし、官員としての務めを果たせていないではないかと、鳥にからかわれたと感じたのだらう。鳳翔府ほうしょうのあたりは雨の少ない年が続き、飢饉が迫りつつあった。そして、ちん陳知事とともに飢餓対策に取り組んだのである〕

■ 【02-3-035】 九月中曾題二小詩於南溪竹上、既而忘之、昨日再遊、見而録之

【解題】 詩の題は、「かつて九月中に二首の小さな詩を南溪なんけいの竹に記した。忘れてしまっていたのだが、昨日、南溪に遊んでそれを見たので記録しておく」。つまり、これは9月に詠んだ詩である。

其の一

湖の上をぱらぱらと雨が通り過ぎてゆく。

堤から水がひなげて蓮の花は終わってしまった。

山の上には夕暮れの雲が横たわり、

人々は家へと帰って行く。

とすると、虎がそろそろ出てくるのだろうか。

其の二

人里離れた家々は、

いずれ虎の住まいになってしまうと、

人は心配している。

虎を追い出すには山を焼けばよいというのだが、

私には千の碧の竹が惜しまれてならない。

【補足】 [実際にこのあたりには虎が出没したようである]

■ 【02-3-036】 南溪之南竹林中、新構一茅堂、予以其所処最為深邃、故名之曰避世堂

【解題】 詩の題は、「南溪の南の竹林の中に新たに茅葺の庵を構えた。私はそこがひどく奥深いので『避世堂』と名付けた」。この題と詩の内容から推測するに、9月に南溪を訪れたときに気に入って庵を建てることにし、12月の雪の朝にその庵を訪ねたのだろう。

【訳文】

この溪川の堂も、

世を避けることがなお浅いのが残念に思われ、

蒼い竹の林をさらに穿って進む。

山水を愛する者は虎を畏れないという。

世を避けようとしてすでに無心であるからだ。

そのような人は、

机に寄り掛かった姿はくんにやりとして病気のようにあるし、

言葉を忘れて黙りにくっているのは口をきけないかのようである。

その住まいは太古の草ぶきの小屋に似て、

当今のお歴々とは一切縁を断っている。

暁には、猿に呼ばれて夢から覚め、
秋には、鳥とともに季節の思いを歌う。
私などはここに来てはし帯を解だけ、
去るたびに今度は夜具を携えてこようと思うのである。
湖のあたりはすでに行き来する人が絶え、
石段には夕暮れの雪が深く積もろうとしている。
かの^{りょくもうせん}緑毛仙人がひょっこり現れて、
戸を叩きそよな霧囲気である。

【補足】[この詩の終わりの部分は、二つ前の詩の題に「晩に至った」とあるのと符合しているのだろう。「^{りょくもうせん}緑毛仙人」とあるのは、唐^{とう}の時代^{ちやうあん}に、長安の南の山に、髪が緑色の大柄の仙人がいたという伝説を踏まえている]

第2章 最初の赴任地——鳳翔での3年間

[第2章その四]

治平元年 [1064年]、蘇軾^{そしよく}29歳。

治平2年 [1065年]、蘇軾 30歳。

■ 【02-4-001】次韻子由種菜久旱不生

【解題】都のあたりでも雨が少なかったようで、弟から、家庭菜園に菜を植えても芽が出てこなくて困っているという詩が届き、それに次韻した。

【訳文】

新たな春がきたころには、

塩漬けの菜の蓄えがすっかり尽き、

甕^{かめ}がひっくり返しになってしまった。

それでも、そのうち階^{きざし}の下あたりに、

筍^{たけのこ}の芽が出てくることだろう。

麦畑のあたりを巡れば、

野の草も芽を出しているだろうから、

それらをちよいと摘んで、

どこか僧坊などを訪れて、

軽く茹でてもらって食べてもよいだろう。

食べられるものはどうせそこらにあるのだから、

菜園に雨の恵みがないと心配しなくたってよいのではないかな。

問題は天候ではなく、
世の中と自分が合わないことだというのなら、
田舎に引っ込んで田畑を耕せばよい。
それこそ食べるに困りはないだろう。
ともあれ、新たな春の恵みを、
菜園おいぐに生来る菜の芽に見たいということなら、
また一つ年を取ったことによって、
頭に自ずと白いものが芽生えるのを見ておけば、
それでよいのではないのかい。

■【02-4-002】自清平鎮遊樓觀、五郡、大秦、延生、仙遊、往返四日、得十一詩、寄
舎弟子由同作

【解題】詩の題は、「清平鎮せいへいちんから樓觀ろうかん、五郡ごぐん、大秦だいしん、延生えんせい、仙遊せんゆうに遊んだ。往復四日
で十一篇の詩を得た。同じ趣旨で詩を作るように弟に寄せる」。この詩の題にある地
名の多くは作品番号 02-2-002 の題および解題ですで見ている。ちょうど 2 年前に訪
れたところをまた見てまわったのである。どのような事情であったのかわからないが、
章惇しょうじゅん [→作品番号 02-2-019] が一緒であった。

【訳文】

其の一 樓觀ろうかん

鳥が騒ぎ、猿が呼びあうこに、
寂しくも昼も門を閉ざし、
古の人[老子のこと]の尊いとほさは忘れられてしまっているのたろうか。

古の仙人^{ていれい} [丁令威のこと] が化した鶴は、
 子孫の様子を見にときどき俗世に来るといふが、
 老子の乗る車を曳いていた青い牛は、
 いまは轅^{ながは}から解放されて自由にしているのだらう。
 山が近くて冷たい風が積雪を吹き上げ、
 空は凍えて夕陽が淡く小さな村の上へと落ちてゆく。
 なぜか今日は大勢の人がやってきて、
 階前の井戸の水を濁らせてしまっているのを、
 道人^{どうじん} [尹喜^{いん}のこと] はいぶかしく思っているであらう。

【補足】 [楼観^{ろうかん}は作品番号 02-2-009 で見たように、老子^{ろうし}から著作^{しやく}を授^{おん}かった尹喜^{いんき}の住まいがあったとされるところ]

其二 五郡^{ごぐん}

ちょうど山の麓の林が切れるところに古い道観がある。
 村人が集まってくるのは、
 その泉の水の甘さにひかれてのことである。
 谷の急流^{いすい}は渭水に向かって争うように北へと下り、
 鳥は急峻な山に出会ってもう南へは飛んで行かない。
 吾等は衣冠を正して天帝に詣でるのだが、
 土地の人々は香を焚いて春の蚕の成長を祈る。
 このような土地でありながら、
 土着の神々^{ちゆうし}は老子の教えを理解できたのだらうか、
 五人兄弟は天帝が告げた符の意味^{しるし}を知ることができたのだらうか。

【補足】[五郡ごぐんとは、五人兄弟が住んでいたところで、五人兄弟は夢ろうしに老子から国家の長久を告げられたと、唐とうの玄宗皇帝げんそうに申し上げた。後にそこが道観だうくわんになったのである]

其三 授経台じゆきやうだい

張旭はりきよく [唐代とうだいの名書家]は剣舞を見て草書の真髓しんすいを得たという。

伯牙はくが [古の琴の名手]は海うみに浮かぶ山やまに遊んで琴の妙技めうぎを得たという。

この台から一覽するなら、山と川はまことに小さい。

経の伝授を待たずして、心こころに空がすでに得られるのである。

【補足】[授経台じゆきやうだいとは、尹喜いんきが老子らうしから五千言を授けられたとされる場所で、蘇軾そしつ自身しんの注によると、南山なんざんのひとつの峰で、建物がそこに築かれていたわけでないとする]

其の四 大秦寺たいしん

平原へいげんを流れる川筋かわすぢをさかのぼり、

それが幻のように消える先に、

斜めに横たわる緑の山裾やますそがある。

行き行けば、山また山となり、

そのまた遙かな奥に、

くっきりと一つの塔たかがそびえている。

足に任せて尋ね入り、

塔の上に立って、風に臨む。

顧みると、海のように原や田かどこまでも広がり、

驚くことに、その全てが東に向かって傾いているのだった。

【補足】[大秦寺は景教、すなわちネストリウス派のキリスト教の寺院。大秦とは東ローマ帝国のこと。景教は唐の時代にかなり流行し、各地に多数の大秦寺が建てられた。宋のころにはすでに勢いを失い、蘇軾がここで見た整屋県の大秦寺など残る寺院わずかとなっていた]

其五 仙遊潭

【補足】[(1) この詩には、蘇軾自身の注で次のように記されている。「仙遊潭のあたりには二つの寺がある。黒水に添って遡って東の路を行くと南寺に至る。黒水を渡って一里余り、馬で北に上がって西の路を行くと北寺に至る。東の路は険しくて馬には乗れない。西の路は仙遊潭を隔てた向こうで、潭の水は測り知れない深さがあり、一本の木をもって橋としていて、私は敢えてそこを通らなかつた。南寺には塔があり、そのよい姿を望み見たのだが、到ることはできなかつた」。(2) 蘇軾は章惇と1月13日に仙遊潭に遊んだことが幾つかの記録に残されている。『宋史』の「章惇伝」にも収録されているので、ここで読んでおこう]

【訳文】

『宋史』卷四百七十一「章惇伝」から

章惇は豪俊の人で、博学かつ学問に優れていた。……商州に赴任していたときに蘇軾と南山に遊び、仙遊潭に至った。潭は万仞の深さの絶壁を臨む下にあり、その上に木が渡されていた。章惇は蘇軾に手招きして、石の壁に字を書いてみようではないかといった。蘇軾は懼れて進まなかつた。章惇はするすると木の上を歩み、樹にかかけられた縄を引いて、衣を掲げて崖を下った。筆に墨を滴らせ、石の壁に大きく、「蘇軾と章惇がここに来た」と書いた。そして戻ってくると、何事もなかつたかのように平然としていた。

蘇軾はその背を叩き、

「君はいつか人を殺すことだってできるんだろ？」

といった。

章惇が、

「ほう、どうしてだ」

と、尋ねると、

「自分の命運を制御できる者は、人を殺すことだってできるのさ」

と、蘇軾がいったので、章惇は大笑いした。

【補足】 [後に政界きってのやり手として辣腕を振るうことになる章惇の将来を予言したものと、このエピソードは語り継がれてきた]

【訳文】

ミドリ
翠の壁の下には路がない。

いつの年の雷がこの潭^{たん}を穿ったのか。

いわお
巖の上の寺に光が揺れ、

ふち
潭の深い影の中には天がある。

昔、犀の角を燃やして深い水の底を覗き込んだ人がいたというが、

この潭の底には竜が宝玉を抱いて眠っているのだろうか。

どこの僧が、突き出た岩の上に座って禅定に入るのか。

其六 なんじ 南寺

東に行くには石を攀じ登らなければならない。

西に行くには一本の木の橋を渡らなければならない。

みどり ふち

碧の潭は降りてみよといっているかのようで、

南の白い塔はねんごろに招き寄せるかのようである。

野外ではわずかばかりのもてなしもできないので、

村で酒を買って君しょうじゅん[章惇]の寂寥を慰めるとしようか。

しかしながら、路はもはや窮まって人手の入らぬところまできてしまい、

松や桂の木々が天おかを干すまでに聳えている。

【補足】[前の詩の自注にあったように、道が険しくて南寺なんじには至ることはできなかった]

其七 北寺

とう

唐の初めからこの北寺はあったと聞く。

唐の終わりの世の乱れを経て、

寺はさびれ、当時の石碑すら残っていない。

どこも虎を恐れて早々と門を閉ざし、

近くに村はなく、米を得ることもできない。

山の泉かめで甕を満たすことならできて、

野の草では腹を満たすことができない。

ここはまことに美しいところだが、

長くここにいるためには、

飢えを忍ぶことを学ばなければならない。

【補足】[南寺なんじには行けなかったなので、進路を変えて北寺ほくじに来てみたら、荒れ果てていたのだった]

其八 ば ゆうせきしつ 馬融石室

【補足】ごかん [後漢の時代にば ゆう馬融はなんざん南山の隠者に従って学問に励んだ。その馬融の住居跡だとされるところがあった。この詩は馬融の事績を踏まえて詠まれていて、それを理解するにはあれこれ勉強しないとまらないのだが、馬融について蘇軾は作品番号 01-2024 で嘲っていたので、ここで敢えて労力を注ぐ必要はないだろう。というわけで結びの二句だけを訳す]

【訳文】

吾がこの詩は決して石には刻んではならない。
猿も鶴も君がみっともないことをしたと笑うであろう。

其の十 愛玉女洞中水、既致両瓶、恐後復取而為使者見給、因破竹為契、使寺僧藏其一、以為往来之信、戲謂之調水符

【補足】ぎょくじょどう [其の九と其の十は玉女洞で詠んだもの。玉女洞については作品番号 02-2007 ですで見ている。其の九は訳者には理解不能であるので割愛する。其の十の題は、「私は玉女洞の水を愛し、ふたつのかめ瓶に汲み取った。後で使いの者にその瓶を取りにこさせたときに欺かれるのを恐れ、竹を割ってしるし契として、寺の僧にその片割れを預け、往き来の証拠の品とした。戯れにこれを『調水符』と呼んだ。』

【訳文】

欺謾は世の常で、
閑所でも市場でも印の札やら布やらがあるのだが、
まさかなんざん南山の下で水を取って符を置くとはい……。

いにしえ　し　すい　めんすい
 古の人は、溜水と瀝水の味を、
 けり
 鶴と亀の脚の長さにくらいに明確に見分けたというが、
 私はこの符の有無を視なければ、
 ぎょくじょどう
 玉女洞の水の真偽を知ることができないので、
 水を汲む人の智恵に出し抜かれてしまうのを恐れるものである。
 考えてみたら、
 いくら防ごうとしても無駄であって、
 符などは投げ捨ててしまうのがよいのだらう。

其の十一 自仙遊回至黒水、見居民姚氏山亭、高絶可愛、復憩其上

【補足】 [この詩の題は、「仙遊潭から巡って黒水に至り、この地に住む姚氏の山亭を見た。抜きん出て高いところにあるのにひかれて、またその上で休憩した」。北寺で一泊してから黒水に戻って再び山亭にきたのだらう]。

【訳文】

からす
 山の鴉は暁に谷から出て、
 起きるよう旅人に報せにきてくれたのだらう。
 ほくじ
 北寺の門を出てしまえば顧みるのは、
 我が故郷を去るような重い気分である。
 道は険しくまた曲がくねり、
 この先どれだけ続くのだらうか。
 溪のほとりに高く構えた亭あずまひがあり、
 帰る一行を押しとどめようとする。

この山の中の人こそ慕わしく、
俗世間を遠離れた仙人のようである。
私はもとより独り往くことを好み、
官爵などは草履くらいにしか思っていないので、
この溪が何とも知れず私を待っていてくれるかのようである。
しかし、国恩にまだ少しもまた報いていないのであるから、
このようなことを思うのを取じて冷や汗が流れる。
遠くからの風に臨めば、
万世も一つの道筋のうちにあるとの悲しみが湧いてくる。
何れの年にか冠や官印を捨てて、
仙薬をもって歳月の速やかさを留めたいものだ。

■ 【02-4-003】 二月十六日、与張李二君遊南溪、酔後相与解衣濯足、因詠韓公山石之篇、慨然知其所以樂而忘其在数百年之外也。次其韻

【解題】 この詩の題は、「二月十六日、張君と李君とともに南溪に遊んだ。酔って後に衣を解いて足を濯ぎ、韓愈の『山石』の詩を詠じた。たちまち韓愈が楽しみとしたところを知り、その詩が数百年の昔のものであるのを忘れ、それに次韻した」。李君は李庠 [→作品番号 02-2-025]、張君は張杲之 [→作品番号 02-2-002] であろうと推測されている。

【訳文】

しょうなんざん たいはくざん
終南山、太白山の山並みが横たわる。

それを見るまでもなく我が心は南へと飛んで行く。

古くゆかしい町を抜けて山麓に並行して進むと、
 野の水は清く滑らかで魚は肥えている。
 すぐに溪を渡って乱れた石を踏むようになり、
 山の光が近くなって行く人は稀になる。
 奥深さを探っていよいよ好く、
 ますます突き進んでもなお意は飢えたように満たされない。
 巨大な岩に滝が落ちる音が聞こえ、
 百歩離れた人家の扉をふるふる震わすばかりである。
 向き合うことができないほどに跳ぶ波、注ぐしぶき、
 それは散って白い霧となってあたりに漂う。
 吾等は酔って束縛されるものを棄て去り、
 二人を顧みて帯を解かせる。
 衣をかきあげて試しに両足を水に入れると、
 浪が激しく衝き上がってくる。
 さあ見るがよい、
 鹿は、豊かに繁る草に隠れるのであって、
 黄金の飾りがついた轡に繋がれる馬を羨んだりしない。
 人が生きる上で、このような楽しみに換えられるものがあるだろうか、
 天下の人よ、私とともに自然に帰るがよい。

【補足】〔(1) 次韻という行為はすこぶる社会的なものであって、場を同じくする人と詩を贈答し合って親交を深める手段とされていた。昔の人の詩に次韻することはほとんどなく、韓愈かんゆの詩に次韻したこの作品はその珍しい例である。蘇軾には、自分は時空を隔てた韓愈の孫弟子であるというような意識があるので、自然と次韻する気に

なったのだろう。(2) 終わりの部分にある「君看麋鹿隱豊草」[君よ看よ麋鹿は豊かな草に隠れる]の句は記憶に留めておきたい。鹿は、蘇軾にとって自然のなかで己の本性に従って生きるものの象徴的イメージとされ、後に自身の本性は鹿であると頻繁に歌うようになる]

■ 【02-4-004】 溪堂留題

【解題】 上の詩と同じときであるかはわからないが、南溪の避世堂で詠んだ詩。

【訳文】

木や草が覆いかぶさるくねくね道の奥、
千の峰の上に出た朝日の光が、
ここにも射し込んでくる。
湖のあたりは稲を植えて蜀に似ていようか、
高い楼閣は雲に連なって渚宮に似ていようか。
残雪がきらきらと山に輝き、
軽やかな氷が水を隠すようにしてゆらゆら流れて来る。
溪のあたりで、
鶴は人に衝き当たって飛び上がると、
そのまま南の山の幾つもの重なりを越えて行く。

【補足】 [渚宮は作品番号 01-2-024 で訪れている]

■ 【02-4-005】 大老寺竹間閣子

【解題】 鳳翔の町の東北五里に李茂貞 [→作品番号 02-1-018 の第七首] の建てた竹間閣

があり、後に大老寺たいらうじとなった。そこで詠んだ詩。

【訳文】

残り少なくなった花は葉の暗さに隠され、
 新しい筍の香りが林から出てくる。
 汗水けんすいの黄色味を帯びた流れは、
 竹陰の緑に覆われて見えない。
 丘を離れた鳥はこの木の高さたかさに思わず身を傾け、
 河の魚は掘り下げた池の深さふかみにおのずと落ちてしまう。
 寺の樹林を育てる仕事はまことに苦勞が多いのたろう、
 寺の僧は痩せてすっかり腰が曲がっておられる。

■ 【02-4-006】 周公廟

【**解題**】7月の初めに、周公しゅうこうを祀った周公廟しゅうこうびやうで詠んだ詩。この詩には、「周公廟きは岐山ざんの西北八ないし九里のところにある。廟の後ろ百歩ばかりのところ、山に依って泉が湧き、その水は非常に清冽である。これは、世が乱れると水が涸れる泉、世にいう『潤徳泉』である」との添え書きがある。周公は孔子が敬愛してやまなかった人物で、晩年に「久しく周公の夢を見ない」と、学問への情熱の衰えを嘆いた [→作品番号 01-2-016]。この詩の第一句はそのことを踏まえて詠まれている。

【訳文】

私しごときが周公しゅうこうを夢に見るはずはないのだが、
 それでも、秋の訪れとともに、

周公の故宮にこられたのを喜ぶものである。

太平の鳥である鳳は、

昔から南の山の奥にいるという。

この清らかな泉は、

世の中の変化に応じて流れたり涸れたりしている。

旅人は、宮殿が虚しく畑地となったのを嘆く古の歌にいまも心を傷め、

この地の人は、遠征から帰ってきた兵士を労う古の詩をいまも詠んでいる。

廟に酒を供える者はなく、

夕暮れとともに鳥は飛び去り、

無数の白楊が風にしきりに叫び声をあげている。

■ 【02-4-007】 和子由記園中草木十一首

【解題】 弟は都の家の庭を「南園」と呼んでいろいろな木や草を植え、その一つ一つを主題にした10篇の詩を作った。その全てに和した上で、もう1篇を加えて弟に返した。

其の一

光り輝く帝王の都の大路を、

目にもまぶしい人々が行き来している。

そこで君は何をしているのかと問えば、

「門を閉ざして草や木を観ているのです」

と、答える。

微々たる草や木など観て何になるのか。

「物の変化を飽きることなく観ているのです」

藤の品種けんぎゅう たての牽牛、蓼の品種きりゅうの葵蓼を育て、

君はそれを言葉に変換して摘み採り、

詩巻の中に納めた。

昔しやあん、謝安は引退後に自然の内に遊ぶのを好んだけれど、

いつも妓女を引き連れ、酒を傍らに置いた。

そうしたものの力を借りなければ、

富貴を忘れ、心を慰めることができなかったのだらう。

いまの君はそんなことはなく、

富貴などは蔓がまとわりつくくらいしか見ていない。

自分の内側に抱いている宝に満足しているから、

あえて高潔さを示すような植物を植えることはない。

僕は早く君のもとに帰りたいと思っている。

年末まで待てないどうか嘆かないでほしい。

僕の方こそ早く願っているのだから。

【補足】[「年末」というのは、この年の12月で鳳翔ほうしょうでの3年間の任期が満ちるからである]

其の二

僕の官舎の庭はごく狭いものだが、

ろくに手入れをしないので、

草や木がいつの間にやら林のようになってしまう。

春の雨がひとたびあまねく降り注ぐと、

美しいのも醜いのも我がもの顔に伸び上がる。

ぶどう
葡萄は自立できないから棚にしがみつこうとし、

ざくろ
石榴は破れた赤い布のような花を咲かせ、

あひい
葵は美しい花をつけるが髪にさすには茎が短すぎ、

たて
蓼の赤は秋の終わりまで待たなければならない。

物はそれぞれ時節に感応して生きているのであって、

君はこのようなことから物の変化の本質を観て、

人間界の興廃も同じあると見ているのだろう。

草や木が勢いを得て盛んになるのは、

草や木の持つ能力によるのではなく、

草や木が枯れて散るのも、

やはり自分で自由にできることではないのであろう。

其の三

はく
柏[日本のカシワではない針葉樹]を植えてその成長を待つ。

柏が大きくなったときには人はすでに老いてしまう。

だったら、竹を植えたほうがまだ。

春に植えれば秋には倒れるまでに成長する。

自然の陰陽は物を選び好みしない。

美と悪は人の意に随って造られる。

柏はくかん苦艱に耐えて生きるといが、

それとて天の巧みを費やしているのだろう。

天はどれほどの巧みを持っているのか、

それを柏だけのために使いきることはないだろう。

あかざ まめのは
藜とか藿とかの雑草を見ればわかる、

いつだって生意せいいが充満してぐいぐい伸びているのだから。

其の四

けんそう
萱草[忘れ草]の花は微小であるけれど、

自ずと他から秀でている。

無数の葉が乱れる中であって、

一つまた一つと花が開くのである。

けんざう
牽牛[藤の一種]は何かを畏れているのか、

芽ばえたときから曲がかりくねっている。

昔から約束しているかのよう、

他の草を尋ねまわって寄り掛かろうとする。

君の南の書齋は書物を読むのによいところ、

滴り落ちるような緑の中にある。

ただ、秋の雨を貯えすぎるので、

毎年、垣根が壊れてしまうのだ。

其の五

あし ろ じゆん
蘆の初めは竹に似て、蘆筍の名がある。

葉が開き出すと、それは蒲かまのようである。

春には節かぶごとに甲かぶに抱かれ、

成長するにつれて根に鬚が生じる。

夏の緑の盛んなころに愛らしさはないが、
秋になって枯れてくるありさまはなかなか風情がある。
黄色い葉が風や雨によって倒れると、
白い花が江や湖に揺れ動く。
都にいては江や湖にはいけないで、
君は苦勞して蘆を庭に移植した。
とはいえ、二羽の鴨が飛び来て、
画のような情趣溢れる図を成すわけではないだろう。

其の六

行楽を満喫しようとする、
春が去りゆくのが惜しまれ、
秋の風が早くも吹き出すのに苦しまされる。
春との離別は惜しまれるのだが、
秋になれば瓜が熟すのを喜びもする。
秋の瓜が霜や霰の季節を感じるころには、
茎や葉はすぐに枯れてしまう。
官員となった僕はいつ帰るとも知れず、
この身は繋がれた馬と同じである。
僕は千里の彼方の君を思いつつ、
まだまだ果たすことのできない志を空しく抱き続けている。
僕のことは、まあ心配してくれなくてよい、
君の黒髪を白く変えてしまつたらうから。

其の七

僕の官舎にはひとむれの竹があり、
 その根のもともんしゅうちようは問囚庁〔囚人の吟味をする役所〕のあたりにある。
 人が行き来する小径は、
 地面が堅く、筍は出てこない。
 僕は吏卒りそつ〔役場の用務員〕に言いつけて、
 枝を挿して中庭に竹が入り込まないようにしているのだが、
 遠くの石段を持ち上げてしまったり、
 塀のあたりにまで茎を走らせたりしてしまう。
 僕はいつも枕ちげのむしると 簞たねを持ってきて、
 竹の青い陰のもとで憩やすみうことしている。
 臥したまま日が暮れても去ることなく、
 窓より入る涼しい風の音を聴いているのである。

其の八

芎藭きゆうきゆう〔水辺の香草の一種〕は蜀しよくの道から、
 白芷はくし〔水辺の香草の一種〕は長江ちやうこうの南から、
 これらの草は漂い流れてここに到り、
 なおその甘い芳かぐわしさを失わずにいる。
 清らかな露にひたって、
 翠みどりの茎がいっばいに伸びて、
 まだ実が結ばないうちに摘み取って、

籠に入れて香りを愛でる。

厳しい寒さには耐えることができなくて、

秋になるとすぐに枯れてしまう。

根を切ってその実を取るときには、

僕もまた遠く来た者であるけれども、

この草にも及ばない存在であると恥じらうのである。

其の九

僕はここに来てから、

南の山に二度遊んだ。

山の中に何かあるかという、

草や木がえもいぬ奥深さをかもしだしている。

仙人の食べ物とされる菖蒲は、

人に知られないところの、

岩が乱れころがる溝に生じている。

そこは山高く、霜や雪の厳しい場所で、

その葉を抜き取りに行くのは難しい。

根は千年を経て、蛇のように蟠^{わたかま}っている。

いつも山の神に守られていて、

徳の薄^{おす}い者は決して偷むことができない。

其の十

【補足】[この詩には、蘇軾自身の注で、「八月十一日夜、府学^{ふがく}に泊まってこれらの詩

は和した。その夜の夢に弟と南山^{なんざん}に遊び、弟は数十篇の詩を出して見せてくれた。僕は夢の中でそれを非常に愛でたのだが、目覚めて記憶していたのは、『蟋蟀^{しつしつ しゅうきく}悲秋菊^{かな}』
[蟋蟀^{しつしつ しゅうきく}秋菊^{かな}に悲しむ]の一句だけだった」と、添え書きがある。その句に寄せて詠んだのがこの詩である。府学は鳳翔府が運営する学校で、蘇軾^{ほうしやう}はそこで時々学生を教えていた]

【訳文】

夢から覚めると、

目にはまだ南の山の緑が^{ありあり}と残っていた。

心は白雲とともに飛び去り、

山の麓のあたりを巡り歩いていたのだ。

君もまたどこかからかやってきて、

白い歯を輝かせてにっこりと笑い、

懐から新しい詩を取り出した。

その詩句は山の景観をしのぐすばらしさだった。

いま君の詩を思い出そうとして、

秋の菊を詠んだということ以外ぼんやりしてしまった。

昔、薪を採りに山に入った人が、

洞穴の中で仙人が奏でる琴の音を耳にし、

里に帰ってから、わずかに記憶に残るところを人に聞かせると、

人間界のあらゆる曲より優れていた。

君の詩もきっとそのようなものであろうから、

断片だけでもいいからどうか教えてほしい。

其の十一

秋の谷川に野菊が開いた。

菊の花の心を知るのは菊の花自身だけで、

そこには、

菊の花を見て、早くも一年が過ぎ行くと驚くような人間はいない。

かたわらに秘かに悲しむ蟋蟀こおろぎがいる。

谷川のほとりで開いた菊の花は、

谷川の汀なぎさに誰にも知られずに落ちる。

菊が枯れると蟋蟀は土に帰り、

また来年に会おうと約束する。

昔むかしのある多感な人は、

秋の風に心を痛ませ、

夕べには悲しみのあまり落ちた菊の花を食べたと、

詩に詠んだけれど、

僕が思うに、

菊の花を拾い集めたところで、

朝飯前の腹の足しにもならないだろうに。

■ 【02-4-008】 次韻和子由聞予善射

【**解題**】宋の西方には夏国かがあり、たびたび宋との間に武力衝突を起こしていた [→ 作品番号 01-1-001]。鳳翔は夏国との国境に近く、それへの備えが必要であることを改めて実感したのだろう、蘇軾は自ら武芸の鍛錬に励んだ。そのことを弟が詠んだ詩

に和したものを。

【訳文】

都のお偉いさんは、

繁華の地で羽振りよく振る舞うのに熱心で、

遠い国境で戦の太鼓が鳴ったりすることなど思ってもみない。

鄙びた武将が文学を論じるのが得意でないように、

雅な文人は弓を射るのは得意でない。

だけど僕は、

楊の細い枝先に百発百中で射当てても、

「いやいや、なんのこれしき、特段の腕前ではありません」

と笑ってみせたり、

高い城壁の上に立って隼を射落としてから、

すぐさまひらりと馬にまたがり、

敵の馬群を蹴散らしてみせたりしてやろうと、

心の内でずっと考えているのだ。

しかし、君こそは長身であるのだから、

弓を学ぶのにもっともとうってつけて、

かの関羽だってきつと追い抜くことになるだろう。

【補足】〔関羽はいうまでもなく三国時代の有名な武将。蘇軾兄弟の腕前が関羽に迫り得たとは考えにくいだが、蘇軾には少年の頃は非常に敏捷であったと回想する詩があり、身体能力はそれなりに高かったものと推測される〕

■ 【02-4-009】 次韻子由論書

【解題】 前の詩とは一転してこれは書が主題の詩で、弟が書について論じた詩に和した。

【訳文】

僕は書がうまいわけではない。

だけど、僕以上に書がわかっている者はいないのではないかと思ったりもする。

書が何たるかがわかっているれば、もう学ばなくてもよい。

美しい人は顔をしかめても美しい、

美しい玉は歪んでいても美しい。

書もそうで、

端正な中に崩れたところがあってもよいし、

剛健な中にあだつまいところがあってもよい。

字の態勢は大らかであるのがよく、

筆の収まる場所は細心であるべきだ。

そうはいってもその通りのできるものではないから、

字を書いても、端から捨てることになる。

ところが、僕の書がよいなどと、

手に入れようとしてくれる人がいたりするのは、

一体どういう勘違いなのだろうか。

君がくれた詩では僕の書をほめてくれているけれど、

贅辞が過ぎて、僕の実力はそれに耐えるものではない。

このごろ僕は弓を学んでいて、

やはり力不足で、弓の強さに僕の腕は耐えられずにいる。

あれこれ好むものがたくさんあっても、

何も成就しなければ意味がない。

いっそ全てを捨て去って、

怠け放題にした方がよいのかもしれない。

昔の書法では、

早馬はのろ馬に及ばないといったものだ。

今の世俗の筆は気持ちが外に出過ぎて、

多くは無理があって安らかでない。

昔の書家は遠く去って、

僕の考えは今の時流には合わないのだろうか。

【補足】[蘇軾は後に宋代の第一級の書家と目されるようになり、書に関するおびただしい数の詩文を作って書論を縦横に展開する。この詩はその初めとなるもの]

■ 【02-4-010】次韻和子由欲得驪山澄泥硯

【解題】書に一家言ある者は、硯にも墨にも紙にもそれぞれの思い入れがある。弟が、驪山の澄泥硯という硯を手に入れようとしているとの詩に詠んだので、それに次韻した。驪山は長安の東にある山で、その産する石で作った澄泥硯は、唐代に天下第一品とされていた。

【訳文】

魏の都の鄴で焼かれた瓦は、

世を挙げてその堅さを賞賛し、

それで作った硯は百金を費やしたところで一枚だって買えない。

おう 王先生[王頤のこと]は物好きにも、

りんどう 臨潼県の繡嶺山[驪山の南の山]から自分で石を採ったところ、

火を経たものなのか、地脈の暖かさがおも残っている上に、

しこうてい 始皇帝をこの山に葬ったときの涙がおも籠っているという。

君はその硯について詩を寄せてくれたけれども、

いまの僕には無用である。

僕は筆硯を捨てて、戦場で功を挙げようと思っているのだから。

【補足】[(1) 王頤は同じ時代の官員で、本章の終わりに登場する。(2) 蘇軾兄弟は仲がよく、弟が右という、兄は敢えて左ということが多。ここでも兄はわざと硯など無関心であるといっているのである]

■ 【02-4-011】 和子由木山引水二首

【解題】弟が木山 [山ほくざんの形に見える木] を盆中に置いて水を灌ぎ、それを詠んだ詩に和した。この木山は父の蘇洵そじゆんがかつて各地を旅していたときに得たもので、蘇洵はそれについて一文を記していた。それを先に読んでおこう。

【訳文】

そじゆん 蘇洵: [木ほく山かざん記]

木となって生まれても、不幸にして、ひこばえのままで終わってしまうのもあれば、人の腕ぐらいいになったところで枯れてしまうもある。幸いにも家の棟木むねぎになるくらいにまで成長したところで、人の手で伐られてしまうもある。あるいは、不幸にして、風に倒され、水に流されるのもあり、そして碎けて腐ってしまうのもあれば、幸いにも碎かれ腐ることから免れても、人に拾われ、木材として使うために斧で伐られ、鋸のこぎで切

られてしまうこともある。最も幸いなのは、浅瀬に流れ着いて砂の下に埋もれ、何百年か後になって、好事家に掘り出され、その形が山に似ているとかで愛玩され、斧や鋸で傷付けられずにすむものであろう。そのようなものでも、遠い辺鄙な地にあつたのでは、好事家の目に触れる機会はなく、結局は薪にされてしまうであろう。最も幸いなものになりかけて、不幸なものになってしまうのである。

我が家には三つの峰を持った木仮山がある。それを見るたびに、運命とはいかなるものであるかを私は疑わずにはいられない。この木は生まれて、ひこばえのままで終わってしまうことはなく、人の腕ほどで枯れてしまうこともなく、家の棟木になるくらいまで成長して伐られてしまうこともなく、風に倒され水に流されてからも碎かれて腐ることもなく、木材として使うために斧で伐られ鋸で切られることもなく、浅瀬に流れ着いて砂の下に埋もれ後に薪にされてしまうこともなく、こうして我が家に来たのである。こうなつたのは、単なる偶然ではなく何か理由があるのではないだろうか。

私がこの木仮山を愛するのはただ形が山に似るからだけではない。運命の玄妙さに感じる場所があるからだ。そしてただ愛するだけではなく、この木を敬う気持ちもある。

三つの峰の中央は、大きく険しく、まことに重々しく、左右の峰を従えるような勢いがある。左右の二つの峰は、中央の峰に勢いでは服しているように見えても、鋭く威厳のあるありさまは、犯すべからざるものがある。二つ峰には決して中央の峰におもねる気持ちはない。そのようであるから、三つの峰からなるこの山を敬い、感じる場所があるのだ。

【補足】[三つの峰とは、容易に推測できるように、蘇洵、蘇軾、蘇轍を象徴するものである。蘇洵は人に知れないままに空しく薪として焼かれてしまうことを厭い、独学で一代の文章家になったのである]

【訳文】

其の一

故郷の蜀江の波をもう長らく見ていないので、

江の上かわを行くいかだ様を、君は盆中に引き寄せようとしたのか。

昔、故郷を離れるときに、懐かしい品を三頭の牛に満載して運んだ人がいたというから、故郷の江の風光を見るためなら、せっせと水を汲むくらいは何でもないのだろう。

物好きな者のする苦労は、人から見たらお笑い草であって、何事にも淡泊であるのが、気持ちをのんびりさせてよいのだろう。

遠く僕は君を想う、

夕べの納涼に、窓からの細い月が君の心を照らしているのを。

其の二

千年の古木は、倒れ臥して、枝もなくなり、
浪にもまれ、沙ひきこに巻かれて、瓢のように漂い流れた。

何度も秋を過こして苔が生え、

いまも潮の満ち引きに応じるようこして湿ったり乾いたりしている。

竜が吐き出したかのようにつやつやとしていて、

切断された箇所は雷に焦がされたところなのか。

大きすぎる才は用いられにくいと昔からいわれている。

木山ぼくざんはまさにそうであって、

山に生える苗を慕う必要はないのである。

【補足】 [この第二首は父の『木ぼく仮か山ざんの記』を念頭に置いて詠んでいるのだろう]

■ 【02-4-012】 竹飴

【解題】 竹を食べる動物といえばパンダだが、竹ちくりゅう飴という竹の根を食べる鼠がいるという。

【訳文】

土地の人が竹鬮ちくりゅうを持ってきてくれた。

「道の横っちょで、網などなしに

ひよと獲ったのでございます」

腰は盆ひらくらいの大きさがあり、

腹きけふくは酒囊さけふくよりもぱんぱんのつるつるで、

ぶくぶくした混沌こんどんじゅう獣じゅう〔空想上の獣〕だってこいつの前では瘦せて見えるだろう。

二本の牙は長く出てはいても、

四本の足はわずかに生えているだけ。

人を見るとびくりにしてつまずき、

まるでおむつをはずした赤ん坊のようになってしまう。

こんな取り柄のないやつだからから、

わざわざ刀あやを曲げて殺めるまでない。

慌てふためいて捕まってしまったものを、

食べたのではこっちの取こなるというもの。

南の山には熊くまがいるといふから、

そいつこそ捉とえて掌てのひらを舐ねるべきであらう。

【補足】〔この詩の内容からすると、竹鬮ちくりゅうはモグラの仲間なのだろうか〕

■ 【02-4-013】 漢陂魚

【解題】鄠こ県の西五里びひに漢陂ひという周囲十四里の堤に囲まれた池があり、そこではよい魚が獲れたという。鄠こ県は鳳翔府ほうしやうから東に100kmほど離れている。その知事が

特別な計らいで新鮮な魚を贈ってくれたので、その返礼にこの詩を詠んだのだろう。

【訳文】

霜を経た竹を細かく裂いて作った二つの籠、
その中に剣のように長い魚が入っている。
気の毒にも、紫の茎を腮えらに通されてしまっているが、
遠く携えられてきたのに、なおも鱗ひれは動き、
紅い鱗はあたりを照らすばかりに輝いている。
早速それを煮にて、
仕上がるのが待てずに指をつっこんで味見をする。
集まった客人の喜ぶ顔は、
籠城する兵士によく米がたっぷり届けられたときと変わらない。
かつて荊州けいしゅうのあたりを旅したときには、
川べりの店で何度となく新鮮な黄魚こうぎょを食べたものだ。
魚などはいくらでも取れるので、
一尺以下のものは惜しみなく棄てられていた。
西の地に来てからは、魚を煮るなど長らくできずにいた。
鯊魚さうぎょは小さくて生臭いし、
しかも、骨だらけで痛い目に遭いもする。
だから、客人を迎える俎板には久しく載せるものが何もなかった。
遠く贈ってくださる友人に何をもって礼をいったらよいのやら、
言葉が浮かばないうちに、また贈ってくださるということになりかねない。
それもまた悪くはないのかもしれない、

魚にぴったりの塩漬けの菜は、いつでも隣の家からもらえるのだから。

■ 【02-4-014】 凌虚台

【解題】 11月のある日、陳希亮^{ちん きりょう}知事は凌虚台^{りょうきょだい} [→作品番号02-3-033] で酒宴を開き、この詩を詠んだ。あるいは、蘇軾の任期が満ちるのに合わせた送別の宴であったのかもしれない。このころには陳知事とのわだかまりは完全に解消していた。

【訳文】

陳知事は氣位高く、激しやく、
 何事も真直くてなければ気がすまないので、
 交際を求めて近づく者はまずいない。
 知事も人と付き合うよりは、
 この凌虚台に登り、
 客人として山々を迎え入れ、
 杯を挙げる方がよいと考えている。
 青い山々は遠くにあっても、
 知事が凌虚台からその顔をのぞかせると、
 たちまちとたばたと駆けてきて、
 他の誰にも見せないいい姿を惜しむことなく披露する。
 今日は、ここに人々が集い、
 礼儀作法などは忘れ、自由に振る舞ってよいとの、
 知事の思し召してあるから、
 大いに気分をよして、高らかに歌声を上げた。

そこうするうちに、夕日がするすると落ちて、流れる雲にさしかかり、
淡い光を緑の壁に投げかけるようになった。

今年もここに暮れようとし、

綿入れの衣にも雪が降りかかるような寒さを覚えるまでになった。

知事は、ではこれまでと、人々とともに凌虚台を下った。

私は山とともに少し残っていると、

一人の客人が勇ましげに登ってきた。

このとき、雁の群れが台の上のはるか高くにさしかかった。

客人はきらびやかな飾りの付いた弓を手にし、

ひょと、天空に向かって矢を放った。

矢は雁とともに遠く天上の涯に落ちて行った。

客人はからからと笑い、

青い山々はその声に驚いて凌虚台から立ち去った。

【補足】 [(1) 宴の後に現れて弓を引いたのは誰だったのか。想像上のシーンであったのかしれないし、陳知事の四男の陳慥^{ちんどう}であったのかもしれない。(2) 陳知事は蘇軾^{ほうしやう}が鳳翔府を去ったすぐ後にやはり鳳翔府から去り、その翌年の4月に亡くなっている。66歳であった。最晩年に蘇軾を鍛えたのは陳知事の立派な業績と見てもよいのかもしれない。(3) 蘇軾と陳知事の間にあったとされる不思議なエピソードを弟の蘇轍が記しているのだから読んでおこう]

【訳文】

蘇轍^{りゅうせんりやくし}:『竜川略志』

我が兄はかつて鳳翔府で官職に就いていた。開元寺には古い絵画がたくさんあった。兄は若いとき

から画を好み、しばしば馬に乗って開元寺に行き、一日中壁画を見て過ごした。

あるとき二人の老僧が出てきて、丁寧に挨拶し、

「私どもの小院が近くにあります。一度お越し願えませんか」

と、いった。兄は喜んで誘いを受けた。

小院に行く僧はいった。

「愚僧どもは日頃から薬術を好んでおりまして、朱砂しゅさを淡金たんきんに変化させ、さらに純金にする一つの方法を得ました。老いて人に伝えたいと思っているのですが、伝えるべき人がいなくて困っておりました。貴公こそは伝えるべき人であると知り、一度お会いしたいと思っていたのです」

兄はいった。

「私はそのような術を好む者ではありません。術を得ましても、使うことができないでしょう」

「この方法は知っていても、実際には為すべきものではありません。貴公が使うことがないとおっしゃるのが、まさしく伝えるべき人であるのです」

このときの鳳翔府ほうきやうの知事ちじは陳希亮ちんきりやうで、かねてから黄白こうはくの術[鍊金術]にひどく凝り、この僧にその方法を求めていたのだが、僧は与えずにいた。

兄はそのことを聞くと、

「陳知事殿が求めても与えず、かえって求めもしないのに私に与えようとするのはどうしてなのでしょうかと、尋ねた。

「愚僧どもは陳知事様を嫌っているわけではありません。陳知事様はその方法を得て、為さずにいることができないのを畏れているのです。愚僧どもはかつてある人に授けたことがあるのですが、その人は用いたためにたちまち死んでしまいました。あるいは、災難に遭った者もいれば、官職を失った者もいます。それで、軽々しくは人に授けないようにしているのです」

そして、一卷の書物を出し、

「この中にいろいろな方法が書いてあります。その一つが金を作るものです。貴公は決して軽々しく作り

ませんように。また、軽々しく人に授けませんように。陳知事様のような人には慎んで伝えませんように」
兄はどうも承諾して受け取った。

家に帰ってからその方法と読むと、淡金一両から一分を除き、それに丹砂^{たんさ}一錢を加え、諸薬とともに鍋に入れて焼^とき、鎔けたところを取り出すと、金と砂は減ることなく、色がまただに混在するようになり、再びこれを煮ると、色が等しくなって完成するとあった。

後にたまたま陳知事に会うと、話がその僧のことに及び、兄はにわかに、

「近ごろその方法を得ました」

と、口走ってしまった。

陳知事は驚き、

「どうして君はそれを得られたのか」

と、尋ねた。兄は老僧が軽々しく人に伝えてはならないといったことを伝えて、その方法を教えなかったのだが、陳知事が強く求めてやまかったので、仕方なくそれを与えた。

陳知事はそれを試してみると、良い験^{しるし}があった。

兄は悔やんで、

「私はこの方法を惜しむものではありません。あの老僧にいわれたことに背きたくないだけなのです。どうかこの方法を使うのを慎んでください」

と、陳知事にいうと、知事はしばらく考えて、

「わかった」

と、応えた。

後に、陳知事は罪に坐して官職から去ったので、兄はこの方法を使ったためなのではないかと疑い、さらに深く悔やんだのだった。

後に、兄は黄州^{こう}に流されると、陳知事の息子の陳慥^{ちんぞう}がそこにいた。

兄は陳慥に尋ねた。

「御父上はかつてあの方法を使われたのでしょうか」

「吾が父は官職を失って洛陽らくやうに移り、家を買うお金がなかったので、大いにあの方法を使ってみたの
でした。そのためついには病気になるまで死んでしまったのです」

老僧がいったことは正しかったのである。

【補足】[錬金術は、当時は知的探求心をすこぶる刺激するごく真面目な行為であった。理系人間の蘇軾は実験好きで、仙薬を作ってみたり、黄金を作ってみたりしているのを後に何度か見ることになる。陳希亮ちん きりやうが錬金術を試して死んだというのは事実かどうかはわからないが、硫化物たん さ [丹砂] を使って化学反応を起こせば、当然のことながら有毒ガスが発生するので、それに中あたって死ぬのは何ら妖しい出来事ではないだろう]

■ 【02-4-015】 和子由苦寒見寄

【解題】 弟から、厳しい寒さを詠んだ詩が送られてきたので、それに和した。

【訳文】

人生というもの百年に満たない。

君と別れてからそのうちの三年を費やしてしまった。

その三年は僕等にとってどれほどのものだったのだろうか。

捨て去ったものは、もう帰ってくる道理がない。

僕がいつも恐れているのは、

別離の間にただ髪がますます白く、顔がますます衰えてしまうことだ。

かつて僕は喜んでものを書いたのだが、

君と別れてからはろくなものが書けない。

書こうとしてものを考えると、
君との楽しさが思い出されて、
結局は憂い味が湧き上がってきしまうのだ。
たとえ天下の士人を自分のもとに従えるようになったところで、
君と喜びを一つにした方がずっとよい。
うらやましいのは、君が外には出ないで、
座り続ける敷物に風が湧いても気付かないほどに、
書物に没頭していることだ。
男子たるもの出处進退はまことに重い。
三年の期が満ちる僕は、退かずに進むべきだと思っている。
折しも西方の国々は互いの恨みを解消して一つになろうとしている。
それは我が方に侵入してくるためではなかろうかと、
勇猛果敢な士人は恐れている。
朝廷は戦を望んでいない。
しかし、敵はいつだって天を欺いて攻め込んでくるのだ。
この土地の人々は、
衣服を買うよりも戦いに使える馬を買い、
身を飾るよりも刀を飾ることを好む。
いつかこの人々を率いて、
敵との駆け引きをしたいものだと僕はいま思っている。

【補足】 [このような勇ましい詩は、作品番号02-4-008とともに蘇軾の詩の中では異色の存在である]

■【02-4016】司竹監焼葦園、因召都巡検柴貽島左藏、以其徒会獵園下

【解題】^{ほうしょう}鳳翔府の郊外にある竹林の管理者が葦原を焼くというので、このあたりを視て回っている役人の^{さい い きよく}柴貽島を招いて、その部下たちとともに葦原で獵を行い、この詩を詠んだ。冬の楽しい遊びの歌である。

【訳文】

官園の葦を刈り取った後には枯れた株が残る。

冬の盛りに火を放つと紅い煙に包まれる。

株は焼き尽くされても根が残り、

春の雨にひとたび洗われると一斉に芽が萌え出る。

狐や兔は最も賢くて素早いから、

ほかの獣たちをいつも出し抜いて、

葦原を我がものとして過ごしている。

ところが、毎年焼かれてしまう災難があるのは、

一向に覚らないのだから、

この葦原に大勢集まって暮らしている。

風が巡って焰が巻いて、尾が熱くなってくると、

狐や兔はようやく穴から出ようとするのだが、

空には鷹が狙って待っている。

土地の者がいには、

「これほど楽なことはありません。

手ぶらで暁に出て行くと、

帰りには獲物が車にてんこ盛りですからな」

近くの村にちょうどきていた將軍^{さいい きよく}[柴貽勗のこと]を誘ったところ、
武器を手にした部下を従えてやってきた。
兵士たちは長らく閑にしていたので、
ちょうど訓練によいと、
凍りついていた陣太鼓を打ち鳴らした。
心は雄々しくも南の谷で虎を撃とうとするばかり、
陣の並びは縦にも横にも自在に変化する。
火の烈しさに霜はたちまち乾き、
獣たちは路なきところを飛び走り、
叫びつつ牙をむきだしにする。
人がきたら噛みついてやろうと構えているのを矢で射抜き、
犬を避けようと走り去るのを網で捕らえる。
獲物を撃ち、馬を走らせて追い、まだまだ満足しないうちに、
早く日が落ちて行き、鳥が帰れとせかすように鳴く。
旗を倒し、太鼓をおさめて、獲物を数え上げる。
雉や兔は鞍に掛け、鹿は肩に担う。
主人[蘇軾]は酒を置いて、人々を集める。
たちまち酔ってにぎやかに語り出し、
夜になってますます^{やかま}楽しい。
毛をおしり、肉を焼くのが間に合わないほどで、
飲みかつ食らうありさまは太古の人々のようである。
昔、雲夢^{うんぼう}の湿地で獵にふけて国を乱した王がいて、
嘲りの詩に詠まれてしまったのだが、

その湿地だってせいぜいこの百倍の広さだろう、
 閑をかこつ役人がこうして山の麓を駆け巡って、
 勝手気ままをしているのと、
 はたしてどちらがましのやら。
 とはいえ、農事も工事を全て終わった年の暮れであるのだから、
 まことに結構な顔ぶれがここに揃ったものである。
 酒たけなわ 酣のときに馬に上り、
 別れも告げずに去ろうではないか、
 冷たくびゅうびゅう吹く風に帽子を飛ばされないようこしながら。

■【02-4-017】 亡伯提刑郎中挽詩二首、甲辰十二月八日鳳翔官舎書

【解題】詩の題は、「亡き伯父の挽詩二首。甲辰こうしんの歳としの十二月八日、鳳翔府ほうしょうの官舎で書く」。伯父おやの蘇そ渙かんが2年前の8月に亡くなったことは作品番号02-2-019で見ている。鳳翔府を去る直前に、伯父の死を悼むこの詩と、伯父の墓に捧げる祭文を蘇軾は作った。もしかすると、郷里の方に行く人があって託したのかもしれない。

其の一

才ある賢人は世に幾人いるのだろうか、
 そのような人を朝廷は軽々しく扱ってはならない。
 伯父は生きておられる間に重く用いられることがなく、
 いまになって人々は残念がっている。
 故郷の山の松は無数に青く繁り、[伯父の墓所のありさまをい]う
 史書にはあたまの人々の事績が記されている。[伯父の名がそここゝにないのを嘆]

同郷の老人たちは、

伯父の名を聞いたびに涙を流してくれる。

其の二

手を振って都の東の門で別れたとき、

伯父の顔はつやつやし、髪に白いものはなかった。

そのときのありさまが夢のように思われ、

亡くなったのがいまだに信じられずにいる。

後に遺されたのは千余篇の詩と文。

新たに作られたのは天の彼方の墓。

昔むかし恩人の息子が困窮しないですむように、

皇帝の前で物まね芸を披露した人がいたが、

いまそれをするのはいったい誰なのだろうか。

【補足】 [(1) 終わりの部分は祭文 [→作品番号 02-2-019] で見たのと同じ故事を用いている。大黒柱を失った伯父の一家を援助するためなら何でもしようという意味である。(2) 遙か後の元祐^{げんゆう}3年 [1088年] に弟の蘇轍^{ぼひょう}が伯父の墓表^{ぼひょう}を書いている。兄弟にとって伯父は極めて大きな存在であったから、墓表の概略をここで見ておきたい]

【訳文】

蘇轍^{そてつ ぼひょう}:『伯父墓表』

蘇氏^そは唐の世に初めて眉州^びに住み、唐の後の五代十国時代には官に仕えることはなかった。そのとき、蘇氏に限らず、眉州^{したいふ}の士大夫は家において身を修め、郷里を治めることに関わり、出仕しようとする者はいなかった。宋の真宗皇帝^{そう しんそう}のときに眉州から初めて孫堪^{そんかん}が科挙に合格した。孫堪は世に目

立った働きをする前に亡くなった。眉州の士大夫はやはりもとのままに安んじ、進取の気にはやる者はいなかった。このとき公^{こう}[伯父]は独り発奮して学問に励み、科挙に合格した。公は官僚となり、法に基づいて民衆を指導し、行く先々で循良^{じゅんりょう}であるとの評判を得た。

公の諱は渙、字は始めは公群であったが、晩年に文父と改めた。公は少年のころから賢く、その父[蘇序]は家のことは自分で全て行い、公には学問に専念させ、司馬遷の『史記』や班固の『漢書』を筆写させた。公はまだ少年であったけれど、交際するのは年長の有徳者ばかりで、文や詩はそれらの人々と優劣がなかった。天聖元年[1023年]に科挙の一次試験を受験した。眉州の知事の蔣堂は公の文章を見て、その巧みであることに感心し、「君は眉州で第一番だ」といった。すると公は「眉州にはたくさん年長者がおります。とくに楊異、宋輔とは学び合う仲間で、二人に先じるのは私の願うところではありません」と答えた。蔣堂はますます公は賢い考え、「それなら君は第三番としよう。それで君の名を輝かせよう」といった。翌年、公は科挙の最終試験にも合格し、郷里の人々は皆喜び、公が帰郷したときには出迎えの者が百里にわたって並ぶほどであった。

公は鳳翔府宝鶏県の主簿となり……[中略]……

閬州^{ろく}の通判になったが、当時閬州では、官が必要とする物資を集めて運搬する労役を民衆に課す定めがきちんと運用されておらず、争い事が絶えなかった。公は閬州に来ると、規約をきちんと定め、争いは止んだ。公の政治は極めて寛大であり、しかし法で決めたことは必ず守らせた。そのため官吏は畏れ、民は安心できた。閬州の人の鮮于侁^{せん うえん}は若くて篤学であったので、公は厚遇し、科挙を受けられるよう支援し、それによって合格した。鮮于侁が初めて官僚になったとき、公は法を守ることを教えた。後に鮮于侁は朝廷の大官となり、名臣と讃えられるまでになった。公の父は、公がどのような政治をしているのか、眉州から閬州にまで見に行った。よくやっているのを見て喜び、数カ月間滞在して帰った。たまたま近隣の州で兵乱があり、閬州の人々は恐れ慄いた。このとき州知事が不在であったので、公が州政府を指揮して兵乱への備えをしつつ、同僚を連れて樓台に登って酒宴を開き、民衆の心を鎮めた。兵乱は内部で異変があつて崩れ、州境に影響が及ぶことなく終わった。……[中略]……

祥符県の知事になると、祥符県には富貴の家が多くあったのだが、公は徭賦[民間に課せられる勞役と物的負担]を公平に負担させ、争いをなく、民衆はそのやり方をよしとして安心した。郷書手[徭賦の手配をする土地の有力者]の張宗という者は、それまではずるかしこく振る舞って利益を得ていたのだが、公を畏れ、病気になったと称してその職務から去り、代わって自分の息子に引き継がせようとした。公は、その息子は不適格であるとして、法に基づいて認めなかった。張宗はもともと権貴の人々と通じていたので、開封府[首都近辺を治める府政府]に訴え出た。開封府から祥符県に実情を視察する役人が派遣された。公はあくまでも張宗の息子を処罰したところ、次に都から宦官[宮中の仕事をする特殊な役人]が来て、皇帝の意向たとして、張宗の息子を郷書手にせよといった。公は法を根拠にそれには従えないと応えた。するとまた別の宦官が来て、「法にはずれても張宗の息子を郷書手にせよ」と迫った。公は開封府知事の李絢に向かって、「一人の民間人がこのように法を乱そうとしていて、府政府はそれでよしとするのか。あなたも是法を守ってはいけないといわれるのか」といった。李絢は愧じ、「明日、朝廷に参上してこの件を申し上げる」と答えた。李絢が言上すると、皇帝は「これは朕の意ではない。祥符県の知事は誰であるのか」といわれた。李絢は公の名を告げると、皇帝は褒め称えた。そして皇帝はどうしてこのようなことになったのか調査させた。しかし、当時皇帝に最も寵愛されていた張貴妃の一族の誰かが張宗から賄賂を受けてしたことであったらしく、深くは追求することができなくて、偽の皇帝の命令を伝えた者だけが処分された。包拯[中国の大岡越前のような超有名人]が公に会って、「貴君は一県令としてよくぞこのようなことをした。朝廷の諫官[官僚の紀綱を取り締まる役目の者]も遠く及ばない」と感嘆した。公はある日のこと、ぼろぼろの衣服を身に付け、水を背負う娘を見た。娘は振り返り、「ああ、蘇士曹様ではございませんでしょうか」といった。公は不思議に思って娘に尋ねると、「わたしは廖戸曹の娘にございます。いまは流落して人に使われる婢となっておりませう」といって泣き崩れた。公がかつてある町で士曹の職にあったときに、戸曹の職に就いていた廖という同僚がいた。公は悲しみに沈み、娘の主人を訪ね、金を出して娘を家に引き取った。そして家の中で礼儀正しい者を選んでその娘に礼儀作法を教え、元の同僚仲間の家に嫁がせた。……[中略]…

...

利州路の提点刑獄ていてんけいごくに抜擢され、赴任する道すから閬州に通るかかると、公を見ようとする民衆が続々と集まって来た。子供たちが公の周りを囲み、公が手を振って払おうとしても去ろうとしなかった。公はいった。「私がここを去ってももう二十年になる。諸君等はやもや私のことは知るまいに。子供らは答えた。「父や祖父からあなたさまの政まつりごとについて伺っております。家にはあなたさまの画が飾っております。あなたさまがまたこられると聞いて、ぜひ見たいと思ってこのように来たのです」。公は笑い、「なんとまあ、こういことになっているとは。……[中略]……」

公は嘉祐七年八月乙亥きののいに、病気でまなかつたのに俄かに亡くなった。役所の人々も民衆も皆声を失い、閬州では市を閉ざし、ともに市中で仏事を行って、公の恩に報いようとした。享年は六十二であった。……[中略]……

公が亡くなって二十七年が経ち、公の子の不危ふきが公の事績の記録を従弟の轍くわに授け、このようにいった。「父が亡くなり、その後、二人の兄も亡くなりました。いまは私がいるだけです。きちんと記録を残しておきませんと、いつかは散逸してしまいます。それよりも大きな不孝はありません」。私轍は生まれて九年にして郷里で初めて公に会い、後に雍丘ようきゅう[都の近郊]で公に会った。公が話すのを聞いているし、公の遺烈いれつを記憶してはいるけれど、公のされたことのわずかに一つか二つしか知らなかった。そこで慎んで公の事績をまとめ、墓碑に記すことにした。

私轍と兄の軾せきは幼いときに伯父上にお会いし[蘇序が亡くなったので帰郷したときのこと]、このように話されるのを伺った。「私は子供の頃から読書に励み、師を煩わさず自分で学んだ。少し成長すると、毎日文章を書くことを日課とし、完成するまで止めなかった。外に出歩くときには、礼法に合致するようにし、家の中にいるときにも、姿勢を崩すことはなかった。私だけがそうしていたのではなく、私の仲間も皆そうであった。そうないと、郷里の者から、『なんだ、あれで儒学を学んでいるなどといえるのか』と後ろ指をさされた。だからこの当時は、学問はする者は多くなかったけれど、誤った行動をとる者がいるとは聞かなかった。私は都に出て官職に就いてから三十年になった。帰って来て我が郷里を見るに、

琴の音が響き、詩を唱える声が聞こえ、儒者の服を着る者が他郷よりもたくさんいる。それを私は嬉しく思った。諸君等も人に遅れることなく、私が過ちが少ないのを見習うようにしてほしい。私たちは「謹んでお教えを受けます」と頭を下げた。……[中略]……

伯父が亡くなり、後から生まれた者は老成の人の言葉を聞けなくなった。師と仰ぐべき指針がなければ俗に流れてしまう。私轍は子弟が日々に怠るようになるのを恐れ、伯父について聞いたところをこのように記し、後の戒めとする。

■【02-4-018】寄題興州晁太守新開古東池

【解題】蘇軾は鳳翔府ほうしょうにいる間に、文同ぶんどう [字は与可あざな よ か]と初めて知り合い、後の章で詳しく見るように終生の親友となった。その文同から、興州知事の晁仲約ちやうちゆうやくが古東池ことうちを新たに開いたことを聞き、池の風光を詠んだ詩を見せられたので、それにこの詩を書き添えた。

【訳文】

百畝の新しい池が、
城郭に添って斜めに広がっている。
町の人々がここで遊んでいる様子を、
旅の人は、さも自分のことのように誇らしげに語る。
「知事殿しやれいとうんは実はかの謝靈運なのでしょうか、
興州こうの風光を永嘉えいがとそっくりしてしまったのです。
気ままに飲んで、
座中に白い帽子を置いたまま、
山の奥へと尋ね入り、

そこで桃の林に出会ったのです。

山の鳥が『ききよ帰去』『ききよ帰去』『ききよ帰なさい』と鳴くの聞いて、
故郷を思って居ても立っても居られなくなったということです

【補足】〔(1) 謝靈運しやれいゆんは南北朝時代の人で、故郷の永嘉えい かの自然をこよなく愛して多数の詩を詠んだ。(2) 「桃の林」は陶淵明とう えんめいの桃花源とう か げん [ユートピア] のイメージである〕

■ 【02-4-019】和董伝留別

【解題】蘇軾そ せきは、恐らく鳳翔府ほうしやうに赴任してまだ日の浅いころだったのだろう、董伝とう でんの訪問を受けた。董伝ちゆうしつは藍屋あいなや県に住み、詩をもってその名を知られ、かつて梅堯臣ばいぎやうしんとも親交があった。科挙を目指していたがまだ合格しておらず、生活は苦しかった。蘇軾が鳳翔を去るにあたって別れを告げにきたので、それに応じてこの詩を詠んで渡した。

【訳文】

たとえ身に粗末な衣服を纏ったまま生涯を送っても、
詩文を納めた腹の内はいつでも華やかである。
行く行くは落ち葉を拾い集めて豆を煮て暮らすような老学者となるのを嫌い、
科挙の合格者の中に身をまじえて春の花盛りを満喫しようと思っている。
かつて、春の野を駆け廻る馬を用意する銭が懐になく、
婿選びをする大官が目を止めてくれないかと虚ろにあたりを見回したこともあった。
我が意を得られさえすれば、きっと世間に誇れるはずだ。
朝廷に召そうと、黒々と記された詔書が必ずや届くであろう。

【補足】〔いつか必ず科挙に合格するであろうと励ましたのである〕

■ 【02-4-020】 記董伝論詩

【解題】 執筆の時期はわからないが、董伝^{とうでん}について記した短文。

【訳文】

友人の董伝^{とうでん}はよく詩を論じた。

私は、

「杜甫^{とほ}もときには平凡な表現を使ったものです。例えば、

『已知仙客意相親^{すで し せんきゃく こころ あ した}][已に知る仙客の意の相い親しむを]、

更覚良工心独苦^{さん 好ほ りよすこう こころ ひと くる}][更に覚える良工の心の独り苦しむを]』

これなどはごく平凡ではありませんか」

董伝は笑って次のようにいった。

「この句は、ほとんど貴君のために発したようなものです。(何かを表現するのに)深いところにまで心を巡らせましても、それをわかってくれる人はほとんどありません。ですから、『独り苦しむ』と詠んだのです。それは画だけに限るものではないのです」

【補足】 [ここに引用されている杜甫^{とほ}の句は、李尊師^{りぞんし}という人物が描いた松の画に添えた詩にある。仙客^{せんきゃく} [つまり李尊師] が私と親しくしてくれる心が知れ、さらには良工は独り心を苦しめるものであることもわかったという意味で、そこには、独り心を苦しめるのは杜甫自身もそうであるとの思いが籠められている。このとき蘇軾はこの句は平凡すぎると思っていたのだが、董伝^{とうでん}の考えを聞いたのが印象に残ったのだろう、ずっと後になって別の文章でこの句を引用している。董伝は独り心を苦しめるのは蘇軾も同じであろうといったのだが、本当に心を苦しめていたのは董伝の方であった。董伝がこの後どのようになったのかは次の章で見ることになる]

■ 【02-4-021】書所作字後

【解題】蘇軾は12月17日に鳳翔府ほうしやうでの公務を終え、都ちやうあんに向かって出発した。長安で石蒼舒せきそうじよ [字は才翁あざな、さいおう]、王頤おうい [字は正父せいふ] といった人々に歓待され、年明けまで過ごした。石蒼舒は書の収集家、王頤は画の収集家で、石蒼舒の求めに応じてこの短文を記して渡した。王頤の名は作品番号02-4-010ですで見ている。

【訳文】

王献之おうけんしがまだ年少のときのこと、書を学んでいると、父の王羲之おうぎし [中国の最も優れた書家とされ、書聖と呼ばれる人]が後ろからその筆を取り上げようとした。しかし、王献之の筆を握る力が強く、王羲之は筆を取ることができなかった。それで、息子は成長すれば書をもって世に名を顕すと知った。よく知られるこの逸話は、いさか違っていると私は考えている。書を知るとは、筆をしっかりと持つことにあ
るわけではない。筆の行こうとしているところを心に聴いて、それに任せて法度を失わないのなら、書を
会得したということになるだろう。王羲之が重んじたのは、筆を取ろうとしてできなかったことではなくて、子
供でありながら意こころを用いるのが精妙であって、それが筆を持つ手に現れていたことにあったのだろう。王
献之の意は筆を強く握ることにあったのではないのだ。

もしもそうでなかったならば、天下の人で大力のある者なら必ず書の名人になるはずである。

治平甲辰十二月二十七日、鳳翔府を罷めて、石蒼舒君のもとを訪れたところ、数幅の書を強く求め
られた。私は書に通曉する者ではなく、石蒼舒君はこのあたりでは最高の名書家である。できれば私
のこの書は出して人に見せないようにしてもらいたい。人に笑われてしまうであろうから。

蘇軾書く。

■ 【02-4-022】跋醜道士図

【**解題**】^{おうい}王頤はひどく酔っ払った道士を描いた画を蘇軾に見せ、画に貼り足した紙に^{ばつぶん}跋文を記すよう求めた。

【**訳文**】

私はもともと酒を喜ぶ者ではない。^{おうい}王頤の持つ『^{すいどうしず}酔道士図』を見て、私はこの^{しつはいじじおう}執杯持耳翁をはなはだ恐ろしく思った。

【**補足**】〔(1) わずかこれだけの文章であるが、蘇軾と酒の関係がよくわかる。蘇軾は酒を好み、酒にまつわる詩文もたくさんあるが、実はアルコールにはさほど強くなかった。「^{しつさいじじおう}執杯持耳翁」はたぶん蘇軾の造語で、意識すれば^{とつくりぶぎょうおやじ}「德利奉行親爺」で、つまり、やたらに「呑め、呑め」と強いるアルハラおじさんである。(2) これから数年後に、再び^{ちやうあん}長安にきた際にこの画を見ると、蘇軾の跋文の後に^{しやうじゆん}章惇の書き込みがあったので、蘇軾は次のように書き添えた〕

^{きねい}熙寧元年[1068年]十二月二十九日、私は^{ちやうあん}長安にきてある人を訪ねたところ、^{おうく}王頤がわざわざ『^{すいどう}酔道士図』を携えてやってきて、弟や幾人かの友人の前にそれを広げて披露した。私がかつて記した一文の脇に、^{しやうじゆん}章惇が「大いに笑わせてもらった」と書き記したのを見て、皆が私のことを笑った。

私はこの画の^{じじおう}酔道士ばかりでなく、世の持耳翁全てを畏れるのだが、章惇といえば、持耳翁にいくら「呑め、呑め」といわれたところで、まだまだ呑み足りないと思えるに違いない。

酒にはたさんの味わいがある。残念なのはそれを知る者が少ないことだ。持耳翁はたたさん呑むのがよいと思っている。

私は山水を巡り歩くのを好む。しかし、章惇と同行したときに^{せんゆうたん}仙遊潭の深い崖を渡ることしななかった。やたらどこどこにも行けばよいというものではないからだ。

私はもともと酒を多く呑むことをしない。持耳翁などと深く付き合ったりしないのである。

[^{しょうじゆん}章惇と^{せんゆうたん}仙遊潭で遊んだことは作品番号02-4-002の第五首で見ている。人々が見守る中で跋文にこのように記してから、^{ふち}潭から帰ってきた章惇に向かって「人だって殺せるだろう」といったのだと語り、それが種々の書物に記録されたのだろう。とすると、その逸話は蘇軾自身が面白く脚色したものともみるべきであろう]

■ 【02-4-023】 題魯公草書

【^{しょう}解題】書の^{せきそうじよ}収集家は石蒼舒だけでなく、^{ちやうあん}長安では^{あんしぶん}安師文という人物にも^{がん}会って、^{しんけい}顔真卿の草書を見せてもらい、それにこの短文を書き添えた。顔真卿は^{とう}唐の時代に政治的に重大な役目を果たすとともに、書の名家でもあった。蘇軾が顔真卿の書をどのように評価していたのかということは後に詳しく見ることになる。安師文は官員としては蘇軾の先輩で、顔真卿の書を学んで、その妙所を得たと評されていた。

【訳文】

昨日、^{ちやうあん}長安の^{あんしぶん}安師文が所蔵する^{がんしんけい}顔真卿が^{ていじやうぐんおう}定襄郡王に与えた数枚の手紙を見せてもらった。この草書は顔真卿の他の書と比べても特に優れている。手にまかせてごく自然に筆を走らせ、動きといい姿といいまことにみごとである。俗に黄金よりも瓦の破片が優れることもあるというが、顔真卿でもそのようなことがあったのだろう。

【^{ほぞく}補足】[終わりの部分は少々わかりにくいですが、瓦の破片とは賭け事に使うものであるらしい。一発勝負に勝てば瓦の破片が莫大な黄金に化けることもある。短時間に急いで書いた手紙の方が、心を籠めてじっくり書いたものよりも優れることがあるということを、賭け事の比喩で言い表そうとしたのだろう。顔真卿のこの手紙は、草書の傑作として、現在でも書道家の手本として珍重されている。ただし、蘇軾が見た現物は失われ、石に刻んだ拓本が伝えられている]

■ 【02-4-024】 驪山三絶句

【解題】蘇軾は長安^{ちやうあん}で新しい年を迎え、治平^{じへい}2年〔1065年〕1月の初めに長安を発ち、驪山^{りざん}の下を通過してこの詩を詠んだ。驪山には温泉があり、玄宗皇帝^{げんそう}がしばしば楊貴妃^{ようきひ}を連れて遊んだことで知られている。三首のうちの第一首を訳す。

【訳文】

其の一

功が成ったならば、
その満ちた状態を保つよう努めるのが最もよい。
嘆くべきは、かつての王たちが、
太平^{たいの}を恃んでほしいままに振る舞ったこと。
驪山^{りざん}の下で民衆はどれほどの労苦を重ねたことか。
始皇帝^{しこうてい}のために阿房宮^{あぼうきゆう}を造ったかと思えば、
玄宗皇帝^{げんそうこうてい}のために華清宮^{かせいきゆう}を造らなければならなかったのだ。

【補足】[時の権力者が民衆から搾取して壮麗な建築物を作ることを蘇軾は常に批判している]

■ 【02-4-025】 華陰寄子由

【解題】華州^かに立ち寄って胡允文^{こいんぶん}〔鳳鳴^{ほうめい}駅^{えき}記〕〔→作品番号 02-2-023〕の執筆を依頼してきた人〕に会うなどした。これは華州を過ぎたあたりで弟に送った詩。

【訳文】

この三年の間、帰ることを思わない日はなかった。

夢の中で家に戻り、

しばらくしてから、現実でないと感じたこともあった。

十二月の祭日に、酒を酌んで寒さを忘れようとしたときも、

ただ家に帰ることばかりが思われてならなかった。

一月のこの旅では、春を呼ぶ東風が吹いているはずなのに、

雪が衣にまとわりついてくる。

いま僕は、天に浮かぶ華山かざんの三つの峰の下を通り過ぎつつある。

じきに、潼関とうかんの四つの扉が日を浴びて開かれるのを見ることになるだろう。

そうすれば、都までの一里塚を全て数え尽くすのを妨げるものはもう何もない。

だから、君はますますにも、家の御馳走を携えて、

僕を迎えに出るのがよいのではないのかな。

【補足】[潼関とうかんは長安ちやうあんのある盆地かんちゆう]と、その東側の平野部との境目にある難所。

この詩でいう「家」は故郷こきやうの眉山びざんではなく、都に住まう父と弟の家である。

■ 【02-4-026】華陰老嫗

【解題】上の詩で「天に浮かぶ華山かざん」と歌われていたのは、古来有名な靈山である。

その靈山のふもとに華陰県か いんがあり、そのあたりはいろいろ不思議なことが起こると言われていて、この短文に記されているのもその一例。この話に登場する孫抃そんべんは眉州眉山び びざん県の先輩で副宰相まで務め、この前の年の11月に69歳で没している。執筆の時期は不明だが、華陰にちなんでここで読んでおこう。

【訳文】

眉^び州^{しゅう}の彭^{ほう}山^{さん}県^{けん}の宋^{そう}箒^{しゅう}は、夢^むの中^{ちゆう}で、も^もの副^ふ宰^{さい}相^{さう}の孫^{そん}抃^{べん}ととも^{とも}に科^か挙^{きよ}を受^うける旅^{りょ}に出^いて、華^か陰^{いん}県^{けん}に至^{いた}った。大^{だい}雪^{せつ}のな^なか、ま^まだ夜^やが明^あけな^ないう^うち^ちに華^か山^{さん}の下^かを^を通^{つう}過^{くわ}す^すると、「毛^{もう}女^{じよ}峰^{ほう}」と記^きしてある^{ある}堠^{こう}[一^い里^り塚^{さか}]があ^あった。見^みると、堠^{こう}の下^かに一^い人^{にん}の老^{らう}婆^ぱが座^ざって^ていた。髪^{かみ}はま^まさ^さに雪^{ゆき}のよ^よう^うに真^まっ白^{ぱく}で、し^しか^かし、寒^{さむ}が^がつ^つて^てい^いる^る様^{よう}子^しはな^なか^かった。こ^この^のと^とき^き道^{みち}に^には^はま^まだ^だ行^いき^き来^きす^する^る者^{もの}はな^なく、雪^{ゆき}の中^{ちゆう}に^には^は足^{あし}跡^{あと}がな^なく、ど^どこ^こか^から^らそ^のの^の老^{らう}婆^ぱが^がや^やつ^つて^てき^きた^たの^のか^かわ^わか^から^らな^なか^かった。宋^{そう}箒^{しゅう}と孫^{そん}抃^{べん}は^は数^{すう}百^{ひやく}歩^ぽほ^ほど^ど離^りれ^れて^てい^いて、宋^{そう}箒^{しゅう}が^が先^まに^にそ^のこ^こを^を通^{つう}過^{くわ}し、怪^{あや}しく不^ふ思^し議^ぎに^に思^{おも}つた^たが、顧^こみ^みる^るこ^ことは^はな^なか^かった。孫^{そん}抃^{べん}は^は立^たち^ち止^とま^まつて^て老^{らう}婆^ぱと^と話^わし、馬^{うま}の^の鞍^{あん}に^に掛^かけ^けて^てあ^あつた^た数^{すう}百^{ひやく}銭^{せん}を^をす^すべ^べて^て与^よつた^た。孫^{そん}抃^{べん}は^は宋^{そう}箒^{しゅう}に^に追^おい^いつ^つと^とそ^のこ^こを^を話^わし、宋^{そう}箒^{しゅう}は^は後^ご悔^{かい}して^{して}す^すぐ^ぐに^に戻^もつた^たの^のだ^だが、す^すで^でに^に老^{らう}婆^ぱの^の姿^{すがた}は^はな^なか^かつた。

この年、孫抃は第三位の成績で及第し、宋箒は老いて死ぬまで成すことがなかった。

このことは蜀の人々のあいだでよく知られている。

【補足】 [(1) 老婆は神の使いであったのだろうか。科挙は人生の一大事であったから、科挙に合格するような人には何かしら神の加護があるとされ、数多くの不思議な話が語られてきた。(2) 華山の下で、蘇軾自身にも不思議なことが起こったと、李廌の随筆『師友談記』 [→作品番号 01-2-005] が伝えているのでここで読んでおこう]

李廌:『師友談記』

公[蘇軾]が鳳翔府の官を罷めて都に行く途中で、華山の下を通った。

すると随行の一人の兵卒が祟りに遇ったのか突然狂い出し、着ている物を自分で次々に剥ぎ取り始め、止まらなくなった。公は他の者に命じて、その兵卒を布で縛らせたのだが、その布は勝手に落ちてしまった。

人々は口々に、

「これは華山の神様がお怒りなのです」

と、いった。

そこで公は祠に詣でて、このようにいった。

「私はかつてここを通ったときにも祈らず、いま帰るときにも祈らずにいました。たまたま公用で急ぎつつ祠の下を通りかかったただけであって、敢えてこの祠に詣でまいとしたわけではありません。随行の一人の兵卒が狂を發したのは祟りに遇ったためなののでしょうか。土地の人々は神の怒りに触れたと申します。果たしてそうなののでしょうか。この兵卒はいわば蟻や虱のようなもの、神の威霊をわざわざ煩わすべき相手であるのでしょうか。たとえこの者に隠れた悪事があるとしても、それは果たして何なののでしょうか。急いで神に非礼を働いたのでしょうか。祠から何か盗んだりしたのでしょうか。いずれにしても小さな罪であって、わざわざ神の威霊をもって責めるようなことなのでありましょうか。抛っておいても構わないのではないのでしょうか。竊かに思いますに、山がこの地を鎮めることは重く、山に隷属するところは甚だ広く、その範囲には力がある者も富んだ者もいて、中にはお上に対して悪事を為して隠している者もいることでしょう。そのような者には神は敢えて威霊を示さず、この一兵卒だけに怒りを加えるようなことがあってよろしいのでしょうか。私は小さな官職にある者で、一人が病むだけでも事に不自由いたします。願わくば、怒りをおさめていただけないでしょうか。私の愚直に免じて、この願いを聞いていただけませんか」

公が廟から出ると、馬の前で一陣の風が巻き、急に大風となって天地を震わせるばかりに吹き、沙や石が飛ぶほどになった。

公はいった。

「神がますます怒ろうと、私は恐れはしない」

風を冒して進み、風はますます強くなり、公を追って行こうとしても人も馬も辟易して足を進めることができなかった。

ある人は、

「お祓いをして謝るのがよろしいのではないのでしょうか」

と、いうと、公はいった。

「禍福を定めるのは天である。神が怒るのなら勝手に怒らせておけばよい。私は進み続けて止まりは

ない。私を止めることはできないのだ」

すると風は止み、何事もなく終わった。

第2章 原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

■ 【02-1-001】 賀歐陽枢密啓

■ 【02-1-002】 次韻水官詩

引

浄因大覚璉師、以閻立本画水官、遺編礼公。公既報之以詩、謂軾汝亦作、軾頓首再拜次韻、仍録二詩為一卷以獻。

高人豈学画、用筆乃其天。

譬如善遊人、一一能操船。

閻子本逢掖、疇昔慕雲淵。

丹青偶為戲、染指初嘗鼃。

愛之不自已、筆勢如風翻。

伝聞貞觀中、左衽解椎髻。

南夷羞白雉、仏国貢青蓮。

詔令擬王会、別殿写戎蛮。

熊冠金絡額、豹袖擁幡旒。

伝入応門内、俯伏脱劍脊。

天姿儼竜鳳、雜沓朝鵬鱣。

神功与絶跡、後世両莫扳。

自從李氏亡、群盜竊山川。
長安三日火、至寶隨飛煙。
尚有脫身者、漂流出東關。
三官豈容獨、得此今已偏。
吁嗟至神物、會合當有年。
京城諸權貴、欲取百計難。
贈以玉如意、豈能動高禪。
信忝一篇詩、皎若畫在前。

■ 【02-1-003】 形勢不如德論

■ 【02-1-004】 孟子論

■ 【02-1-005】 樂毅論

■ 【02-1-006】 韓非論

■ 【02-1-007】 留侯論

■ 【02-1-008】 賈誼論

■ 【02-1-009】 教戰守策

■ 【02-1-010】 答李端叔書

■ 【02-1-011】 空塚小兒

■ 【02-1-012】 馬正卿守節

■ 【02-1-013】 辛丑十一月十九日、既与子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之

不飲胡為醉兀兀、此心已逐歸鞍發。

歸人猶自念庭闈、今我何以慰寂寞。

登高回首坡壟隔、但見烏帽出復沒。

苦寒念爾衣裘薄、獨騎瘦馬踏殘月。

路人行歌居人樂、童僕怪我苦悽惻。

亦知人生要有別、但恐歲月去飄忽。

寒燈相對記疇昔、夜雨何時聽蕭瑟。

君知此意不可忘、慎勿苦愛高官職。

■ 【02-1-014】 和子由澠池懷旧

人生到处知何似、應似飛鴻踏雪泥。

泥上偶然留指爪、鴻飛那復計東西。

老僧已死成新塔、壞壁無由見旧題。

往日崎嶇還記否、路長人困蹇驢嘶。

■ 【02-1-015】 次韻和劉京兆石林亭之作、石本唐苑中物、散流民間、劉購得之

都城日荒廢、往事不可還。
惟余故苑石、漂散尚人間。
公來始購蓄、不憚道里艱。
盡從塵埃中、來對冰雪顏。
瘦骨拔凜凜、蒼根漱潺潺。
唐人惟奇章、好石古莫攀。
盡令屬牛氏、刻鏿紛班班。
嗟此本何常、聚散實循環。
人失亦人得、要不出區寰。
君看劉李末、不能保河關。
況此百株石、鴻毛於泰山。
但當對石飲、万事付等閑。

■ 【02-1-016】 書黃州詩記劉原父語

■ 【02-1-017】 與楊濟甫

■ 【02-1-018】 鳳翔八觀

叙

鳳翔八觀詩、記可觀者八也。昔司馬子長登會稽、探禹穴、不遠千里、而李太白亦以七沢之觀至荊州。二子蓋悲世悼俗、自傷不見古人、而欲一觀其遺迹、故其勤如此。鳳翔當秦、蜀之交、士大夫之所朝夕往來此八觀者、又皆跬步可至、而好事者有不能遍觀焉、故作詩以告欲觀而不知者。

石鼓

冬十二月歲辛丑、我初從政見魯叟。
旧聞石鼓今見之、文字郁律蛟蛇走。
細觀初以指画肚、欲誦嗟如箝在口。
韓公好古生已遲、我今況又百年後。
強尋偏旁推点画、時得一二遺八九。
我車既攻馬亦同、其魚維鱖貫之柳。
古器縱橫猶識鼎、衆星錯落僅名斗。
模糊半已似癡疥、詰曲猶能弁跟肘。
娟娟欠月隱雲霧、濯濯嘉禾秀稂莠。
漂流百戰偶然存、獨立千載誰与友。
上追軒頡相唯諾、下揖冰斯同穀穀。
憶昔周宣歌鴻雁、當時籀史變蝌蚪。
厭乱人方思聖賢、中興天為生耆耆。
東征徐虜闕虜虎、北伏犬戎隨指麾。
象胥雜沓貢狼鹿、方召聯翩賜圭卣。
遂因鼓鼙思將帥、豈為考擊煩蒙瞍。
何人作頌比嵩高、万古斯文齊岫嶽。
勲勞至大不矜伐、文武未遠猶忠厚。
欲尋年歲無甲乙、豈有名字記誰某。
自從周衰更七国、竟使秦人有九有。
掃除詩書誦法律、投棄俎豆陳鞭杻。

当年何人佐祖竜、上蔡公子牽黃狗。
登山刻石頌功烈、後者無繼前無偶。
皆云皇帝巡四国、烹滅強暴救黔首。
六經既已委灰塵、此鼓亦當遭擊剖。
伝聞九鼎淪泗上、欲使万夫沈水取。
暴君縱欲窮人力、神物義不汙秦垢。
是時石鼓何処避、無乃天公令鬼守。
興亡百變物自閑、富貴一朝名不朽。
細思物理坐嘆息、人生安得如汝寿。

詛楚文

崢嶸開元寺、仿佛祈年觀。
旧築掃成空、古碑埋不爛。
詛書雖可誦、字法嗟久換。
詞云秦嗣王、敢使祝用瓚。
先君穆公世、与楚約相捍。
質之於巫咸、万葉期不叛。
今其後嗣王、乃敢構多難。
剗胎殺無罪、親族遭圍絆。
計其所称訴、何啻桀紂亂。
吾聞古秦俗、面詐背不汗。
豈惟公子卬、社鬼亦遭謾。
遼哉千載後、發我一笑粲。

王維吳道子画

何処訪吳画、普門与開元。

開元有東塔、摩詰留手痕。

吾觀画品中、如二子尊。

道子実雄放、浩如海波翻。

当其下手風雨快、筆所未到氣已吞。

亭亭雙林間、彩暈扶桑暎。

中有至人談寂滅、悟者悲涕迷者手自捫。

蛮君鬼伯千万万、相排競進頭如鼇。

摩詰本詩老、佩芷襲芳蓀。

今觀此壁画、亦若其詩清且敦。

祇園弟子尽鶴骨、心如死灰不復温。

門前兩叢竹、雪節貫霜根。

交柯乱葉動無數、一一皆可尋其源。

吳生雖妙絕、猶以画工論。

摩詰得之於象外、有如仙翮謝籠樊。

吾觀二子皆神俊、又於維也斂衽無間言。

維摩像、唐楊惠之塑、在天柱寺

昔者子輿病且死、其友子祀往問之。

跼蹐鑿井自嘆息、造物將安以我為。

今觀古塑維摩像、病骨磊嵬如枯龜。

乃知至人外生死、此身变化浮雲隨。
世人豈不碩且好、身雖未病心已疲。
此叟神完中有恃、談笑可卻千熊羆。
當其在時或問法、俯首無言心自知。
至今遺像兀不語、与昔未死無增虧。
田翁里婦那肯顧、時有野鼠銜其髭。
見之使人每自失、誰能与結無言師。

東湖

吾家蜀江上、江水綠如藍。
爾來走塵土、意思殊不堪。
況当岐山下、風物尤可慚。
有山秃如赭、有水濁如泔。
不謂郡城東、數步見湖潭。
入門便清奧、恍如夢西南。
泉源從高來、隨流走涵涵。
東去触重阜、盡為湖所貪。
但見蒼石螭、開口吐清甘。
借汝腹中過、胡為目眈眈。
新荷弄晚涼、輕棹極幽探。
飄搖忘遠近、偃息遺佩簪。
深有龜与魚、淺有螺与蚶。
曝晴復戲雨、戢戢多於蠶。

浮沈無停餌、倏忽遽滿籃。
 糸緡雖強致、瑣細安足戡。
 聞昔周道興、翠鳳棲孤嵐。
 飛鳴飲此水、照影弄毳毼。
 至今多梧桐、合抱如彭聃。
 彩羽無復見、上有鸛搏鷗。
 嗟予生雖晚、考古意所攸。
 函書已漫漶、猶復訪僑郊。
 卷阿詩可繼、此意久已含。
 扶風古三輔、政事豈汝諳。
 聊為湖上飲、一縱醉後談。
 門前遠行客、劫劫無留驂。
 問胡不回首、毋乃趁朝參。
 予今正疏懶、官長幸見函。
 不辭日遊再、行恐歲滿三。
 暮歸還倒載、鐘鼓已喑喑。

真興寺閣

山川与城郭、漠漠同一形。
 市人与鴉鷲、浩浩同一声。
 此閣幾何高、何人之所嘗。
 側身送落日、引手攀飛星。
 当年王中令、斫木南山楨。

写真留閣下、鉄面眼有稜。
身強八九尺、与閣兩崢嶸。
古人雖暴恣、作事今世驚。
登者尚呀喘、作者何以勝。
曷不觀此閣、其人勇且英。

李氏園

朝遊北城東、回首見修竹。
下有朱門家、破牆圉古屋。
拳鞭叩其戶、幽響答空谷。
入門所見夥、十步九移目。
異花兼四方、野鳥喧百族。
其西引溪水、活活轉牆曲。
東注入深林、林深窓戶綠。
水光兼竹淨、時有獨立鵠。
林中百尺松、歲久蒼鱗蹙。
豈惟此地少、意恐闕中獨。
小橋過南浦、夾道多喬木。
隱如城百雉、挺若舟千斛。
陰陰日光淡、黯黯秋氣蓄。
尽東為方池、野雁雜家鷺。
紅梨驚合抱、映鳥孤雲馥。
春光水溶漾、雪陣風翻撲。

其北臨長溪、波声卷平陸。
北山臥可見、蒼翠間磽秃。
我時來周覽、問此誰所築。
云昔李將軍、負險乘衰叔。
抽錢算間口、但未權羹粥。
當時奪民田、失業安敢哭。
誰家美園圃、籍沒不容贖。
此亭破千家、鬱鬱城之麓。
將軍竟何事、蟻虱生刀韜。
何嘗載美酒、來此駐車轂。
空使後世人、聞名頸猶縮。
我今官正閑、屢至因休沐。
人生嘗居止、竟為何人卜。
何當弃一身、永与清景逐。

秦穆公墓

橐泉在城東、墓在城中無百步。
乃知昔未有此城、秦人以泉識公墓。
昔公生不誅孟明、豈有死之日而忍用其良。
乃知三子徇公意、亦如齊之二子從田橫。
古人感一飯、尚能殺其身。
今人不復見此等、乃以所見疑古人。
古人不可望、今人益可傷。

■ 【02-1-019】 次韻子由除日見寄

薄宦驅我西、遠別不容惜。
方愁後會遠、未暇憂歲夕。
強歡雖有酒、冷酌不成席。
秦烹惟羊羹、隴饌有熊腊。
念為兒童歲、屈指已成昔。
往事今何追、忽若箭已積。
感時嗟事變、所得不償失。
府卒來驅灘、叢鑠驚遠客。
愁來豈有魔、煩汝為攘磔。
寒梅與凍杏、嫩萼初似麥。
攀條為惆悵、玉蕊何時折。
不憂春艷晚、行見棄夏核。
人生行樂耳、安用聲名籍。
胡為獨多感、不見膏自炙。
詩來苦相寬、子意遠可射。
依依見其面、疑子在咫尺。
兄今雖小官、幸忝佐方伯。
北池近所鑿、中有泚水碧。
臨池飲美酒、尚可消永日。
但恐詩力弱、鬥健未免馘。
詩成十日到、誰謂千里隔。

一月寄一篇、憂愁何足擲。

■ 【02-2-001】 鳳翔到任謝執政啓

■ 【02-2-002】 壬寅二月、有詔令郡吏分往屬縣減決囚禁。自十三日受命出府至、寶雞、虢、郿、盩厔四縣。既畢事、因朝謁太平宮、而宿於南溪溪堂、遂並南山而西、至樓觀大秦寺、延生觀、仙遊潭。十九日乃歸。作詩五百言以記凡所經歷者寄子由。

遠人罹水旱、王命釈俘囚。

分縣伝明詔、尋山得勝遊。

蕭条初出郭、曠蕩夷消憂。

薄暮來孤鎮、登臨憶武侯。

崢嶸依絶壁、蒼茫瞰奔流。

半夜人呼急、橫空火氣浮。

天遙殊不弁、風急已難收。

曉入陳倉縣、猶余壳酒樓。

煙煤已狼藉、吏卒尚呀咻。

雞嶺雲霞古、竜宮殿宇幽。

南山連大散、歸路走吾州。

欲往安能遂、將還為少留。

回趨西虢道、卻渡小河洲。

聞道磻溪石、猶存渭水頭。

蒼崖雖有跡、大釣本無鉤。

東去過郿塢、孤城象漢劉。

誰言董公健、竟復伍孚仇。
白刃俄生肘、黃金漫似丘。
平生聞太白、一見駐行騶。
鼓角誰能試、風雷果致不。
巖崖已奇絕、冰雪更雕鏤。
春早憂無麥、山靈喜有湫。
蛟龍懶方睡、瓶罐小容偷。
二曲林泉勝、三川氣象侔。
近山麩麥早、臨水竹篁修。
先帝膺符命、行宮晝冕旒。
侍臣簪武弁、女樂抱箜篌。
秘殿開金鎖、神人控玉虬。
黑衣橫巨劍、被髮凜雙眸。
邂逅逢佳士、相將弄彩舟。
投篙披綠荇、濯足亂清溝。
晚宿南溪上、森如水國秋。
繞湖栽翠密、終夜響飈飈。
冒曉窮幽邃、操戈畏炳彪。
尹生猶有宅、老氏旧停輜。
問道遺蹤在、登仙往事悠。
馭風歸汗漫、閱世似蜉蝣。
羽客知人意、瑤琴繫馬鞦。
不辭山寺遠、來作鹿鳴呦。

帝子伝聞李、巖堂髣髴緜。
輕風幃幔卷、落日髻鬟愁。
入谷警蒙密、登坡費挽攬。
乱峰攙似槩、一水淡如油。
中使何年到、金竜自古投。
千重横翠石、百丈見遊儻。
最愛泉鳴洞、初嘗雪入喉。
滿瓶雖可致、洗耳嘆無由。
忽憶尋蟻培、方冬脱鹿裘。
山川良甚似、水石亦堪儔。
惟有泉旁飲、無人自獻酬。

■ 【02-2-003】 新葺小園二首

其一

短竹蕭蕭倚北牆、斬茅披棘見幽芳。
使君尚許分池綠、隣舍何妨借樹涼。
亦有杏花充窈窕、更煩鶯舌奏鏗鏘。
身閑酒美誰來勸、坐看花光照水光。

其二

三年輒去豈無鄉、種樹穿池亦漫忙。
暫賞不須心汲汲、再來惟恐鬢蒼蒼。
忘成庾信吟枯柳、誰記山公醉夕陽。
去後莫憂人剪伐、西隣幸許庇甘棠。

■ 【02-2-004】 鳳翔太白山祈雨祝文

■ 【02-2-005】 太白山下早行、至橫渠鎮、書崇壽院壁

馬上統殘夢、不知朝日開。

亂山橫翠幃、落月淡孤燈。

奔走煩郵吏、安閑愧老僧。

再遊忘眷眷、聊亦記吾曾。

■ 【02-2-006】 留題延生觀後山上小堂

溪山愈好意無厭、上到巉巖第幾尖。

深谷野禽毛羽怪、上方仙子鬢眉纖。

不慚弄玉騎丹鳳、忘逐嫦娥駕老蟾。

澗草巖花自無主、晚來蝴蝶入疏簾。

■ 【02-2-007】 留題仙遊潭中興寺、寺東有玉女洞、洞南有馬融讀書石室、過潭而南、山石

益奇、潭上有橋、畏其險、不敢渡

清潭百尺皎無泥、山木陰陰谷鳥啼。

蜀客曾遊明月峽、秦人今在武陵溪。

獨攀書室窺巖竇、還訪仙姝款石闥。

猶有愛山心未至、不將雙腳踏飛梯。

■ 【02-2-008】 留題仙遊潭中興寺

清潭百尺皎無泥，山木陰陰谷鳥啼。
蜀客曾遊明月峽，秦人今在武陵溪。
獨攀書室窺巖竇，還訪仙姝款石闥。
猶有愛山心未至，不將雙腳踏飛梯。樓觀

■ 【02-2-009】 樓觀

門前古碣臥斜陽，閱世如流事可傷。
長有幽人悲晉惠，強修遺廟學秦皇。
丹砂久窖井水赤，白朮誰燒廚竈香。
聞道神仙亦相過，只疑田叟是庚桑。

■ 【02-2-010】 郿塢

衣中甲厚行何懼，塢裏金多退足憑。
畢竟英雄誰得似，臍脂自照不須燈。

■ 【02-2-011】 礪溪石

墨突不暇黔，孔席未嘗暖。
安知渭上叟，跪石留雙趺。
一朝嬰世故，辛苦平多難。
亦欲就安眠，旅人譏客懶。

■ 【02-2-012】 石鼻城

平時戰國今無在，陌上征夫自不閑。

北客初來試新險、蜀人從此送殘山。
獨穿暗月朦朧裏、愁渡奔河蒼茫間。
漸入西南風景變、道邊修竹水潺潺。

■ 【02-2-013】 太白山神

■ 【02-2-014】 真興寺閣禱雨

太守親從千騎禱、神翁遠借一杯清。
雲陰黯黯將噓遍、雨意昏昏欲醞成。
已覺微風吹袂冷、不堪殘日傍山明。
今年秋熟君知否、應向江南飽食粳。

■ 【02-2-015】 余自城中還道中、雲氣自山中来、如群馬奔突、以手掇開籠收其中。歸家雲

盈籠開而放之、作攬雲篇
物役会有時、星言從高駕。
道逢南山雲、欬吸如電過。
竟誰使令之、袞袞從空下。
竜移相排撈、鳳舞或頽亞。
散為東郊霧、凍作枯樹稼。
或飛入吾車、偃仄礙肘膝。
搏取置笥中、提攜反茅舍。
開緘乃放之、掣去仍變化。
雲兮汝歸山、無使達官怕。

■ 【02-2-016】 代宋選奏乞封太白山神狀

■ 【02-2-017】 次韻子由岐下詩

引

予既至岐下逾月、於其廡宇之北隙地為亭。亭前為橫池、長三丈。池上為短牆、屬之堂。分堂之北厦為軒窓曲檻、俯瞰池上。出堂而南、為過廊、以屬之厅。廊之兩旁、各為一小池。三池皆引泝水、種蓮養魚於其中。池辺有桃李杏梨棗櫻桃石榴檉槐松檜柳三十余株。又以斗易牡丹一叢於亭之北。子由以詩見寄、次韻和答、凡二十一首

北亭

誰人築短牆、橫絕擁吾堂。
不作新亭檻、幽花誰為香。

橫池

明月入我池、皎皎鋪絳綺。
何日變成緇、太玄吾嬾草

短橋

誰能鋪白簟、永日臥朱橋。
樹影欄邊轉、波光版底搖。

軒窓

東隣多白楊、夜作雨声急。
窓下独無眠、秋虫見燈入。

曲欄

流水照朱欄、浮萍乱明鑑。
誰見檻上人、無言觀物泛。

雙池

汧流入城郭、疊疊渡千家。
不見雙池水、長漂十里花。

荷花

田田抗朝陽、節節臥春水。
平鋪乱萍葉、屢動報魚子。

魚

湖上移魚子、初生不畏人。
自從識鉤餌、欲見更無因。

牡丹

花好常患稀、花多信佳否。
未有四十枝、枝枝大如斗。

桃花

争開不待葉、密綴欲無條。
傍沼人窺鑑、驚魚水濺橋。

李

不及梨英軟、応慚梅萼紅。
西園有千葉、淡佇更纖穠。

杏

開花送余寒、結子及新火。
閑中幸無梅、汝彊充鼎和。

梨

霜降紅梨熟、柔柯已不勝。
未嘗鑷夏渴、長見助春冰。

棗

居人幾番老、棗樹未成槎。
汝長才堪軸、吾歸已及瓜。

桜桃

独遶桜桃樹、酒醒喉肺乾。
莫除枝上露、從向口中溥。

石榴

風流意不尽、独自送残芳。
色作裙腰染、名随酒盞狂。

檮

自昔為神樹、空聞蜩鳴。
社公煩見輟、為爾致羊羹。

槐

采擷殊未厭、忽然已成陰。
蟬鳴看不見、鶴立赴還深。

檜

強致南山樹、來經渭水灘。
生成未有意、鴉鵲莫相干。

松

依依古松子、鬱鬱綠毛身。
每長須成節、明年漸庇人。

柳

今年手自栽、問我何年去。

他年我復來、搖落傷人意。

■ 【02-2-018】 喜雨亭記

■ 【02-2-019】 讀開元天寶遺事

其一

姚宋亡來事事生、一官銖重萬人輕。

朔方老將風流在、不取西蕃石堡城。

其二

潭裏舟船百倍多、広陵銅器越溪羅。

三郎官爵如泥土、爭唱弘農得寶歌。

琵琶弦急哀梁州、羯鼓聲高舞臂鞦。

破費八姨三百万、大唐天子要纏頭。

■ 【02-2-020】 祭伯父提刑文

■ 【02-2-021】 壬寅重九、不預會、獨遊普門寺僧閣、有懷子由

花開酒美盃不歸、來看南山冷翠微。

憶弟淚如雲不散、望鄉心與雁南飛。

明年縱健人忘老、昨日追歡意正違。

不問秋風強吹帽、秦人不笑楚人譏。

■ 【02-2-022】 太白詞

岐下頻年大旱、禱於太白山輒応、故作迎送神詞一篇五章。

其一

雷闐闐、山昼晦。

風振野、神將駕。

載雲罕、從玉虬。

旱既甚、蹶往救、道阻修兮。

其二

旌旗翻、疑有無。

日慘變、神在塗。

飛赤篆、訴閭闔。

走陰符、行羽檄、万靈集兮。

其三

風為幄、雲為蓋。

滿堂爛、神既至。

紛醉飽、錫以雨。

百川溢、施溝渠、歌且舞兮。

其四

騎裔裔、車班班。
鼓簫悲、神欲還。
轟振凱、隱林谷。
執妖厲、歸猷馘、千里肅兮。

其五

神之來、悵何晚。
山重復、路幽遠。
神之去、飄莫追。
德未報、民之思、永万祀兮。

■ 【02-2-023】 鳳鳴馭記

■ 【02-2-024】 九月二十日微雪、懷子由第二首

其一

岐陽九月天微雪、已作蕭條歲暮心。
短日送寒砧杵急、冷官無事屋廬深。
愁腸別後能消酒、白髮秋來已上簷。
近買貂裘堪出塞、忽思乘傳問西琛。

其二

江上同舟詩滿篋、鄭西分馬涕垂膺。
未成報國慚書劍、豈不懷歸畏友朋。

官舍度秋驚歲晚、寺樓見雪與誰登。
遙知誦易東窓下、車馬敲門定不応。

■ 【02-2-025】 与李彭年同送崔岐婦二曲、馬上口占

霜乾木落愛秦川、與癸身輕逐鳥翮。
貪看暮山忘遠近、強陪歸客更流連。
貂裘犯雪觀形勝、駿馬隨鷹搏野鮮。
為問南溪李夫子、壯心應未逐流年。

■ 【02-2-026】 与監丞事

■ 【02-2-027】 病中聞子由得告不赴商州三首

其一

病中聞汝免來商、旅雁何時更著行。
遠別不知官爵好、思歸苦覺歲年長。
著書多暇真良計、從宦無功謾去鄉。
惟有王城最堪隱、萬人如海一身藏。

其二

近從章子聞渠說、苦道商人望汝來。
說客有靈慚直道、逋翁久沒厭凡才。
夷音僅可通名姓、瘠俗無由弁頸腮。
答策不堪宜落此、上書求免亦何哉。

其三

辞官不出意誰知、敢向清時怨位卑。
万事悠悠付杯酒、流年冉冉入霜髭。
策曾忤世人嫌汝、易可忘憂家有師。
此外知心更誰是、夢魂相覓苦參差。

■ 【02-2-028】 病中、大雪数日、未嘗起觀、號令趙薦以詩相属、戲用其韻答之

經旬臥齋閣、終日親劑和。
不知雪已深、但覺寒無那。
飄蕭窓紙鳴、堆压檐板墜。
風颯助凝冽、幃幔困軒簸。
惟思近醇醲、未敢窺璨瑳。
何時反炎赫、卻欲躬白磨。
誰雲坐無氈、尚有裘充貨。
西隣歌吹發、促席寒威挫。
崩騰踏成逕、繚繞飛入座。
人飲瓦先融、飲雋瓶屢臥。
嗟余独愁寂、空室自困坷。
欲為後日賞、恐被遊塵沓。
寒更報新霽、皎月懸半破。
有客独苦吟、清夜默自課。
詩人例窮蹇、秀句出寒餓。

何当暴雪霜、庶以躡郊賀。

■ 【02-2-029】 妻王氏墓誌銘

■ 【02-2-030】 歲晚相与饋問、為饋歲、酒食相邀、呼為別歲、至除夜、達旦不眠、為守歲。

蜀之風俗如是。余官於岐下、歲暮思歸而不可得、故為此三詩寄子由

饋歲

農功各已收、歲事得相佐。

為歡恐無具、佞物不論貨。

山川隨出產、貧富稱小大。

寘盤巨鯉橫、殽籠雙兔臥。

富人事華靡、彩繡光翻座。

貧者愧不能、微摯出春磨。

官居故人少、里巷佳節過。

亦欲拳鄉風、獨倡無人和。

別歲

故人適千里、臨別尚遲遲。

人行猶可復、歲行那可追。

問歲安所之、遠在天一涯。

已逐東流水、赴海歸無時。

東隣酒初熟、西舍麩亦肥。

且為一日歡、慰此窮年悲。

勿嗟旧歲別、行与新歲辭。
去去勿回顧、還君老与衰。

守歲

欲知垂尽歲、有似赴壑蛇。
修鱗半已没、去意誰能遮。
況欲繫其尾、雖勤知奈何。
兒童強不睡、相守夜歡嘩。
晨雞且勿唱、更鼓畏添過。
坐久燈燼落、起看北斗斜。
明年豈無年、心事恐蹉跎。
努力尽今夕、少年猶可誇。

■ 【02-3-001】 和子由踏青

春風陌上驚微塵、遊人初樂歲華新。
人閑正好路旁飲、麥短未怕遊車輪。
城中居人厭城郭、喧闐曉出空四隣。
歌鼓驚山草木動、簞瓢散野鳥鳶馴。
何人聚衆稱道人、遮道壳符色怒嗔。
宜蠶使汝繭如甕、宜畜使汝羊如麋。
路人未必信此語、強為買符禳新春。
道人得錢徑沽酒、醉倒自謂吾符神。

■ 【02-3-002】 和子由蠶市

蜀人衣食常苦艱、蜀人遊樂不知還。
千人耕種萬人食、一年辛苦一春閑。
閑時尚以蠶為市、共忘辛苦逐欣歡。
去年霜降斫秋荻、今年箔積如連山。
破瓢為輪土為釜、爭買不啻金與紈。
憶昔與子皆童丱、年年廢書走市觀。
市人爭誇鬪巧智、野人暗啞遭欺謾。
詩來使我感旧事、不悲去國悲流年。

■ 【02-3-003】 題鳳翔東院王書壁

■ 【02-3-004】 書摩詰藍田烟雨圖

■ 【02-3-005】 和劉長安題薛周逸老亭、周最善飲酒、未七十而致仕

近聞薛公子、早退驚常流。
買園招野鶴、鑿井動潛虬。
自言酒中趣、一斗勝涼州。
翻然扞衣去、親愛挽不留。
隱居亦何樂、素志庶可求。
所亡嗟無幾、所得不啻酬。
青春為君好、白日為君悠。
山鳥奏琴筑、野花弄閑幽。

雖辭功与名、其樂實素侯。
至今清夜夢、尚驚冠压頭。
誰能載美酒、往以大白浮。
之子雖不識、因公可与游。

■ 【02-3-006】 中隱堂詩

岐山宰王君紳、其祖故蜀人也。避乱来長安、而遂家焉。其居第園、有名長安城中、号中隱堂者是也。予之長安、王君以書戒其子弟邀予遊、且乞詩甚勤、因為作此五篇。

其一

去蜀初逃難、遊秦遂不歸。
園荒喬木老、堂在昔人非。
鑿石清泉激、開門野鶴飛。
退居吾久念、長恐此心違。

其二

徑轉如修蟒、坡垂似伏鰲。
樹從何代有、人与此堂高。
好古嗟生晚、偷閑厭久勞。
王孫早歸隱、塵土污君袍。

其三

二月驚梅晚、幽香此地無。

依依慰遠客、皎皎似吳妹。
不恨故園隔、空嗟芳歲徂。
春深桃杏亂、笑汝益羈孤。

其四

翠石如鸚鵡、何年別海堧。
貢隨南使遠、載壓渭舟偏。
已伴喬松老、那知故國遷。
金人解辭漢、汝獨不潸然。

其五

都城更幾姓、到處有殘碑。
古隧埋蝌蚪、崩崖露伏龜。
安排壯亭榭、收拾費金貲。
岫嶺何須到、韓公浪自悲。

■ 【02-3-007】 題寶雞鼎斯飛閣

西南歸路遠蕭條、倚檻魂飛不可招。
野闊牛羊同雁鶩、天長草樹接雲霄。
昏昏水氣浮山麓、泛泛春風弄麥苗。
誰使愛官輕去國、此身無計老漁樵。

■ 【02-3-008】 重遊終南、子由以詩見寄、次韻

去年新柳報春回、今日殘花覆綠苔。
 溪上有堂還獨宿、誰人無事肯重來。
 古琴彈罷風吹座、山閣醒時月照杯。
 懶不作詩君錯料、旧逋応許過時陪。

■ 【02-3-009】 和子由寒食

寒食今年二月晦、樹林深翠已生煙。
 繞城駿馬誰能借、到處名園意盡便。
 但掛酒壺那計盞、偶題詩句不須編。
 忽聞啼鴉驚羈旅、江上何人治廢田。

■ 【02-3-010】 記所見開元寺吳道子画仏滅度、以答子由

西方真人誰所見、衣被七宝從雙狻。
 當時修道頗辛苦、柳生兩肘烏巢肩。
 初如濛濛隱山玉、漸如濯濯出水蓮。
 道成一旦就空滅、奔会四海悲人天。
 翔禽哀響動林谷、獸鬼躑躅淚迸泉。
 龐眉深目彼誰子、繞牀彈指性自円。
 隱如寒月墮清昼、空有孤光留故躔。
 春遊古寺扞塵壁、遺像久此覆香煙。
 画師不復写名姓、皆云道子口所伝。
 縱横固已蔑孫鄧、有如巨鰐吞小鮮。
 來詩所誇孰与此、安得携掛其旁觀。

■ 【02-3-011】次韻子由以詩見報編禮公、借雷琴、記旧曲

琴上遺声久不彈、琴中古意本長存。

苦心欲記常迷旧、信指如歸自著痕。

忘有仙人依樹聽、空教瘦鶴舞風騫。

誰知千里溪堂夜、時引驚猿撼竹軒。

〈〈過終南日，令道士趙宗有彈琴溪堂。〉〉

■ 【02-3-012】送號令趙薦

嗟我去国久、得君如得歸。

今君捨我去、從此故人稀。

不惜故人稀、但恐晤語非。

佳人西方子、佩服貝与璣。

宛兮若処女、未始識戶扉。

何必識戶扉、潜玉有光輝。

■ 【02-3-013】与蒲誠之

■ 【02-3-014】客位仮寐

謁入不得去、兀坐如枯株。

豈惟主忘客、今我亦忘吾。

同僚不解事、慍色見髯鬚。

雖無性命憂、且復忍須臾。

■ 【02-3-015】 陳公弼伝

■ 【02-3-016】 七月二十四日、以久不雨、出禱礮溪。是日宿虢県。二十五日晚、自虢県渡渭、宿於僧舍會閣。閣故曾氏所建也。夜久不寐、見壁有前県令趙薦留名、有懷其人
龕燈明滅欲三更、欹枕無人夢自驚。
深谷留風終夜響、乱山銜月半牀明。
故人漸遠無消息、古寺空來有姓名。
欲向礮溪問姜叟、僕夫屢報斗杓傾。

■ 【02-3-017】 二十六日五更起行、至礮溪、天未明

夜入礮溪如入峽、照山炬火落驚猿。
山頭孤月耿猶在、石上寒波曉更喧。
至人旧隱白雲合、神物已化遺踪蜿。
安得夢隨霹靂駕、馬上傾倒天瓢翻。

■ 【02-3-018】 是日自礮溪、將往陽平、憩於麻田青峰寺之下院翠麓亭

不到峰前寺、空來渭上村。
此亭聊可喜、修徑豈辭捫。
谷映朱欄秀、山含古木尊。
路窮驚石断、林欠見河奔。
馬困嘶青草、僧留薦晚飧。
我来秋日午、旱久石牀温。

安得雲如蓋、能令雨瀉盆。

共看山下稻、涼葉晚翻翻。

■ 【02-3-019】 二十七日、自陽平至斜谷、宿於南山中蟠竜寺

橫槎晚渡碧澗口、騎馬夜入南山谷。

谷中暗水響瀧瀧、嶺上疏星明煜煜。

寺藏巖底千萬仞、路轉山腰三百曲。

風生飢虎嘯空林、月黑驚麋竄修竹。

入門突兀見深殿、照仏青燐有殘燭。

愧無酒食待遊人、旋斫杉松煮溪藪。

板閣独眠驚旅枕、木魚曉動隨僧粥。

起觀万瓦鬱參差、目乱千巖散紅綠。

門前商賈負椒旻、山後咫尺連巴蜀。

何時歸耕江上田、一夜心逐南飛鵠。

■ 【02-3-020】 是日至下馬磧、憩於北山僧舍。有閣曰懷賢、南直斜谷、西臨五丈原、諸葛

孔明所從出師也

南望斜谷口、三山如犬牙。

西觀五丈原、鬱屈如長蛇。

有懷諸葛公、万騎出漢巴。

吏士寂如水、蕭蕭聞馬樞。

公才与曹丕、豈止十倍加。

顧瞻三輔間、勢若風卷沙。

一朝長星墜、竟使蜀婦髭。
山僧豈知此、一室老煙霞。
往事逐雲散、故山依渭斜。
客來空弔古、清淚落悲笳。

■ 【02-3-021】 妬佳月

狂雲妬佳月、怒飛千里黑。
佳月了不嗔、曾何污潔白。
爰有謫仙人、拳酒為三客。
今夕偶不見、汎瀾念風伯。
毋煩風伯來、彼也易滅沒。
支頤少待之、寒空淨無跡。
粲粲黃金盤、獨照一天碧。
玉繩慘無輝、玉露洗秋色。
浩瀚玻璃盞、和光入胸臆。
使我能永延、約君為莫逆。

■ 【02-3-022】 南溪有會景亭、處衆亭之間、無所見、甚不稱其名。予欲遷之少西、臨斷岸、西向可以遠望、而力未暇、特為制名曰招隱。仍為詩以告來者、庶幾遷之
飛檐臨古道、高榜勸遊人。
未即令公隱、聊須濯路塵。
茅茨分聚落、煙火傍城闌。
林欠湖光漏、窓明野意新。

居民惟白帽、過客漫朱輪。
山好留歸屐、風回落醉巾。
他年誰改築、旧制不須因。
再到吾雖老、猶堪作坐賓。

■ 【02-3-023】 扶風天和寺

遠望若可愛、朱欄碧瓦溝。
聊為一駐足、且慰百回頭。
水落見山石、塵高昏市樓。
臨風莫長嘯、遺涕浩難收。

■ 【02-3-024】 贈楊耆并引

引

西蜀楊耆、二十年前、見之甚貧。今見之亦貧、所異於昔者、蒼顏華髮耳。女無美惡、富者妍、士無賢不肖、貧者鄙。使其逢時遇合、豈減當世之士哉。頃宿扶風馭舍、聞泣者甚怨。問之、乃昔富而今貧者、乃作一詩。今以贈楊君。

孤村微雨送秋涼、逆旅愁人怨夜長。
不寐相看惟蹙馬、悲歌互答有寒螿。
天寒滯穗猶橫畝、歲晚空機任倚牆。
勸爾一杯聊復睡、人間貧富海茫茫。

■ 【02-3-025】 和子由聞子瞻將如終南太平宮溪堂讀書

役名則已勤、徇身則已媮。
 我誠愚且拙、身名兩無謀。
 始者学書判、近亦知問囚。
 但知今当為、敢問向所由。
 士方其未得、唯以不得憂。
 既得又憂失、此心浩難收。
 譬如倦行客、中路逢清流。
 塵埃雖未脱、暫憩得一漱。
 我欲走南澗、春禽始嚶呦。
 鞅掌久不決、爾來已徂秋。
 橋山日月迫、府県煩差抽。
 王事誰敢愬、民勞吏宜羞。
 中間罹旱暵、欲学喚雨鳩。
 千夫挽一木、十步八九休。
 渭水洄無泥、菑堰旋插修。
 对之食不飽、余事更遑求。
 近日秋雨足、公余試新篘。
 劬勞幸已過、朽鈍不任鍤。
 秋風迫吹帽、西阜可縱遊。
 聊為一日樂、慰此百日愁。

■ 【02-3-026】 将往終南和子由見寄

人生百年寄鬢鬚、富貴何啻葭中莖。

惟將翰墨留染濡、絕勝醉倒蛾眉扶。
我今廢學如寒竽、久不吹之洪欲無。
歲云暮矣嗟幾余、欲往南溪侶禽魚。
秋風吹雨涼生膚、夜長耿耿添漏壺。
窮年弄筆衫袖烏、古人有之我願如。
終朝危坐學僧趺、閉門不出聞履屨。
下視官爵如泥淤、嗟我何為久踟躕。
歲月豈肯為汝居、僕夫起餐秣吾駒。

■ 【02-3-027】 誦道藏

嗟予亦何幸、偶此琳宮居。
宮中復何有、戢戢千函書。
盛以丹錦囊、冒以青霞裾。
王喬掌閔鑰、蚩尤守其廬。
乘閑竊掀攪、涉獵豈暇徐。
至人悟一言、道集由中虛。
心閑反自照、皎皎如芙蕖。
千歲厭世去、此言乃籙籒。
人皆忽其身、治之用土苴。
何暇及天下、幽憂吾未除。

■ 【02-3-028】 書太宗皇帝急就章

■ 【02-3-029】 上清詞

南山之幽、雲冥冥兮。

孰居此者、帝側之神君。

君胡為兮山之幽、顧宮殿兮久淹留。

又曷為一朝去此而不顧兮、悲此空山之人也。

來不可得而知兮、去固不可得而訊也。

君之來兮天門空、從千騎兮駕飛龍。

隸辰星兮役太歲、儼昼降兮雷隆隆。

朝發軫兮帝庭、夕弭節兮山宮。

曠有妖兮虐下土、精為星兮氣為虹。

愛流血之滂沛兮、又嗜瘡癘与螟虫。

嘯盲風而涕淫雨兮、時又吐旱火之熾融。

銜帝命以下討兮、建千仞之修鋒。

乘飛霆而追逸景兮、歛春掃滅而無蹤。

忽崩播其來會兮、走海嶽之神公、竜車獸鬼不知其數兮、旗纛晦靄而冥蒙。

漸俯偃以旅進兮、鏘劍佩之相聳。

司殺生之必信兮、知上帝之不汝容。

既約束以反職兮、退戰栗而愈恭。

沃充塞於四海兮、独淡然其無功。

君之職兮天門開、款閭闔兮朝玉台。

群仙迎兮塞雲漢、儼前導兮紛後陪。

歷玉階兮帝迎勞、君良苦兮馬脛頹。

閱人世兮迫隘、陳下土兮帝所哀。

返瓊宮之嵯峨兮、役万靈之喧阗。
默清静以無為兮、時節狩於鬥魁。
詣通明而獻黜陟兮、軼蕩蕩其無回。
忽表裏之煥霍兮、光下燭於九陔。
時遊目以下覽兮、五嶽為豆、四溟為杯。
俯故宮之千柱兮、若毫端之集埃。
來非以為樂兮、去非以為悲。
謂神君之既返兮、曾顏咫尺之不違。
升秘殿以內悸兮、魂凜凜而上馳。
忽寤寐以有得兮、敢沐浴而獻辭。
是耶非耶、臣不可得而知也。

■ 【02-3-030】 書上清詞後

■ 【02-3-031】 思治論

■ 【02-3-032】 稼說

■ 【02-3-033】 凌虛台記

■ 【02-3-034】 十二月十四日、夜、微雪、明日早、往南溪小酌、至晚

南溪得雪真無值、走馬來看及未消。
独自披榛尋履跡、最先犯曉過朱橋。

誰憐破屋眠無處、坐覺村饑語不囂。
惟有暮鴉知客意、驚飛千片落寒條。

■【02-3-035】九月中曾題二小詩於南溪竹上、既而忘之、昨日再遊、見而錄之

其一

湖上蕭蕭疏雨過、山頭靄靄暮雲橫。
陂塘水落荷將盡、城市人歸虎欲行。

其二

誰謂江湖居、而為虎豹宅。
焚山豈不能、愛此千竿碧。

■【02-3-036】南溪之南竹林中、新構一茅堂、予以其所處最為深邃、故名之曰避世堂

猶恨溪堂淺、更穿修竹林。
高人不畏虎、避世已無心。
隱几頽如病、忘言兀以瘖。
茅茨追上古、冠蓋謝當今。
曉夢猿呼覺、秋懷鳥伴吟。
暫來聊解帶、屢去欲携衾。
湖上行人絕、階前暮靄深。
忘逢綠毛叟、扣戶夜抽簪。

■【02-4-001】次韻子由種菜久旱不生

新春堦下筍芽生、廚裏霜齏倒旧罍。
時繞麦田求野薺、強為僧舍煮山羹。
園無雨潤何須嘆、身與時違合退耕。
欲看年華自有處、鬢間秋色兩三莖。

■ 【02-4-002】 自清平鎮遊樓觀、五郡、大秦、延生、仙遊、往返四日、得十一詩、寄舍弟子
由同作

其一 樓觀

鳥噪猿呼昼閉門、寂寥誰識古皇尊。
青牛久已辭轅軛、白鶴時來訪子孫。
山近朔風吹積雪、天寒落日淡孤村。
道人應怪遊人衆、汲盡堦前井水渾。

其二 五郡

古觀正依林麓斷、居民來說水泉甘。
亂溪赴渭爭趨北、飛鳥迎山不復南。
羽客衣冠朝上象、野人香火祝春蠶。
汝師豈解言符命、山鬼何知託老聃。

其三 授經台

劍舞有神通草聖、海山無事化琴工。
此台一覽秦川小、不待佗經意已空。

其四 大秦寺

晃蕩平川尽、坡陀翠麓橫。
忽逢孤塔迴、独向乱山明。
信足幽尋遠、臨風卻立驚。
原田浩如海、袞袞尽東傾。

其五 仙遊潭

翠壁下無路、何年雷雨穿。
光搖巖上寺、深到影中天。
我欲然犀看、竜応抱宝眠。
誰能孤石上、危坐試僧禪。

其六 南寺

東去愁攀石、西來怯渡橋。
碧潭如見試、白塔苦相招。
野饋慚微薄、村沽慰寂寥。
路窮斤斧絶、松桂得干霄。

其七 北寺

唐初伝有此、乱後不留碑。
畏虎関門早、無村得米遲。
山泉自入甕、野桂不勝炊。
信美那能久、応先学忍飢。

其八 馬融石室

未忘將軍聘、初從季直游。
絳紗生不識、蒼石尚能留。
豈害依梁冀、何須困李侯。
吾詩慎勿刻、猿鶴為君羞。

其九 玉女洞

洞裏吹簫子、終年守獨幽。
石泉為曉鏡、山月當簾鉤。
歲晚杉楓盡、人歸霧雨愁。
送迎忘鄙陋、誰繼楚臣謳。

其十 愛玉女洞中水、既致兩瓶、恐後復取而為使者見給、因破竹為契、使寺僧藏其一、以
為往來之信、戲謂之調水符
欺謾久成俗、闕市有契繻。
誰知南山下、取水亦置符。
古人辨淄澠、皎若鶴與鳧。
吾今既謝此、但視符有無。
常恐汲水人、智出符之余。
多防竟無及、棄置為長籬。

其十一 自仙遊回至黑水、見居民姚氏山亭、高絕可愛、復憩其上

山鴉曉辭谷、似報遊人起。
 出門猶屢顧、慘若去吾里。
 道途險且迂、繼此復能幾。
 溪邊有危構、歸駕聊復柅。
 愛此山中人、縹緲如仙子。
 平生慕獨往、官爵同一雇。
 胡為此溪邊、眷眷若有俟。
 國恩久未報、念此慚且泚。
 臨風浩悲咤、萬世同一軌。
 何年謝簪紱、丹砂留迅晷。

■ 【02-4-003】 二月十六日、与張李二君遊南溪、醉後相与解衣濯足、因詠韓公山石之篇、慨然知其所以樂而忘其在數百年之外也。次其韻

終南太白橫翠微、自我不見心南飛。
 行穿古鼎並山麓、野水清滑溪魚肥。
 須臾渡溪踏亂石、山光漸近行人稀。
 窮探愈好去愈銳、意未滿足枵如飢。
 忽聞奔泉響巨碓、隱隱百步搖窓扉。
 跳波濺沫不可嚮、散為白霧紛霏霏。
 醉中相与棄拘束、顧勸二子解帶圍。
 褰裳試入插兩足、飛浪激起衝人衣。
 君看麋鹿隱豐草、豈羨玉勒黃金鞿。
 人生何以易此樂、天下誰肯從我歸。

■ 【02-4-004】 溪堂留題

三徑縈回草樹蒙、忽驚初日上千峰。
平湖種稻如西蜀、高閣連雲似渚宮。
殘雪照山光耿耿、輕冰籠水暗溶溶。
溪邊野鶴衝人起、飛入南山第幾重。

■ 【02-4-005】 大老寺竹間閣子

殘花帶葉暗、新筍出林香。
但見竹陰綠、不知汧水黃。
樹高傾隴鳥、池浚落河魴。
栽種良辛苦、孤僧瘦欲尪。

■ 【02-4-006】 周公廟

廟在岐山西北八九里。廟後百許步，有泉依山，湧冽異常，國史所謂「潤德泉」，世亂則竭者也。

吾今那復夢周公、尚喜秋來過故宮。
翠鳳旧依山磳兀、清泉長与世窮通。
至今遊客傷離黍、故国諸生詠雨蒙。
牛酒不來烏鳥散、白楊無数暮号風。

■ 【02-4-007】 和子由記園中草木十一首

其一

煌煌帝王都、赫赫走群彥。
嗟汝独何為、閉門觀物變。
微物豈足觀、汝独觀不倦。
牽牛与葵蓼、采摘入詩卷。
吾聞東山傳、置酒携燕婉。
富貴未能忘、声色聊自遣。
汝今又不然、時節看瓜蔓。
懷宝自足珍、藝蘭那計畹。
吾歸於汝処、慎勿嗟歲晚。

其二

荒園無数畝、草木動成林。
春陽一已敷、妍醜各自矜。
蒲萄雖滿架、困倒不能任。
可憐病石榴、花如破紅襟。
葵花雖粲粲、蒂淺不勝簪。
叢蓼晚可喜、輕紅隨秋深。
物生感時節、此理等廢興。
飄零不自由、盛亦非汝能。

其三

種柏待其成、柏成人已老。
不如種叢篔、春種秋可倒。

陰陽不扞物、美惡隨意造。
柏生何苦艱、似亦費天巧。
天工巧有幾、肯盡為汝耗。
君看藜与藿、生意常草草。

其四

萱草雖微花、孤秀能自拔。
亭亭乱葉中、一一芳心插。
牽牛独何畏、詰曲自牙蘂。
走尋荆与榛、如有宿昔約。
南齋讀書处、乱翠暎如澗。
偏工貯秋雨、歲歲壞籬落。

其五

蘆筍初似竹、稍開葉如蒲。
方春節抱甲、漸老根生鬚。
不愛当夏綠、愛此及秋枯。
黃葉倒風雨、白花搖江湖。
江湖不可到、移植苦勤劬。
安得雙野鴨、飛來成画圖。

其六

行樂惜芳辰、秋風常苦早。

誰知念離別、喜見秋瓜老。
秋瓜感霜霰、莖葉颯已槁。
宦遊歸無時、身若馬繫皁。
悲鳴念千里、耿耿志空抱。
多憂竟何為、使汝玄髮縞。

其七

官舍有叢竹、結根問囚片。
下為人所徑、上密不容釘。
殷勤戒吏卒、插棘護中庭。
遠砌忽墳裂、走鞭瘦踰屣。
我常携枕簟、來此蔭寒青。
日暮不能去、臥聽窓風冷。

其八

芎藭生蜀道、白芷來江南。
漂流到閩輔、猶不失芳甘。
濯濯翠莖滿、悒悒清露涵。
及其未花實、可以資筐籃。
秋節忽已老、苦寒非所堪。
屬根取其實、對此微物慚。

其九

自我來閔輔、南山得再遊。
山中亦何有、草木媚深幽。
菖蒲人不識、生此亂石溝。
山高霜雪苦、苗葉不得抽。
下有千歲根、蹙縮如蟠虬。
長為鬼神守、德薄安敢偷。

其十

我歸自南山、山翠猶在目。
心隨白雲去、夢繞山之麓。
汝從何方來、笑齒粲如玉。
探懷出新詩、秀語奪山綠。
覺來已茫昧、但記說秋菊。
有如采樵人、入洞聽琴筑。
歸來寫遺聲、猶勝人間曲。

其十一

野菊生秋澗、芳心空自知。
無人驚歲晚、唯有暗蛩悲。
花開澗水上、花落澗水湄。
菊衰蛩亦蟄、與汝歲相期。
楚客方多感、秋風詠江籬。
落英不滿掬、何以慰朝飢。

■ 【02-4-008】 次韻和子由聞予善射

中朝鶩鶩自振振、豈信辺隅事執藝。
 共怪書生能破的、也如驍將解論文。
 穿楊自笑非猿臂、射隼長思逐馬軍。
 觀汝長身最堪學、定如髯羽便超群。

■ 【02-4-009】 次韻子由論書

吾雖不善書、曉書莫如吾。
 苟能通其意、常謂不學可。
 貌妍容有顰、壁美何妨橢。
 端莊雜流麗、剛健含婀娜。
 好之每自諉、不独子亦頗。
 書成輒棄去、繆被傍人裹。
 體勢本闊落、決束入細麼。
 子詩亦見推、語重未敢荷。
 爾來又學射、力薄愁官筈。
 多好竟無成、不精安用夥。
 何當盡屏去、萬事付懶惰。
 吾聞古書法、守駿莫如跛。
 世俗筆苦驕、衆中強嵬●。〔●は馬＋我〕
 鍾張忽已遠、此語与時左。

■ 【02-4-010】 次韻和子由欲得驪山澄泥硯

拳世爭稱鄴瓦堅、一枚不換百金頒。
豈知好事王夫子、自採臨潼繡嶺山。
經火尚含泉脈暖、弔秦宥有淚痕潛。
封題寄去吾無用、近日從戎擬學班。

■ 【02-4-011】 和子由木山引水二首

其一

蜀江久不見滄浪、江上枯槎遠可將。
去國尚能三犢載、汲泉何愛一夫忙。
崎嶇好事人忘笑、冷淡為歡意自長。
遙想納涼清夜永、窓前微月照汪汪。

其二

千年古木臥無梢、浪捲沙翻去似飄。
幾度過秋生蘚暈、至今流潤忘江潮。
泫然疑有蛟龍吐、斷處人言霹靂焦。
材大古來無適用、不須鬱鬱慕山苗。

■ 【02-4-012】 竹飴

野人獻竹飴、腰腹大如盎。
自言道旁得、採不費置網。
鴟夷讓凹滑、混沌慚瘦爽。

兩牙雖有余、四足僅能仿。
逢人自驚蹶、悶若兒脫襁。
念此微陋質、刀几安足枉。
就禽太倉卒、羞愧不能饗。
南山有孤熊、捩獸行舐掌。

■ 【02-4-013】 漢陂魚

霜筠細破為雙掩、中有長魚如臥劍。
紫荇穿腮氣慘淒、紅鱗照坐光磨閃。
携來雖遠鬣尚動、烹不待熟指先染。
坐客相看為解顏、香粳飽送如填塹。
早歲嘗為荆渚客、黃魚屢食沙頭店。
涇江易采不復珍、盈尺輒棄無乃僭。
自從西征復何有、欲致南烹嗟久欠。
遊儻瑣細空自腥、乱骨縱橫動遭砒。
故人遠饋何以報、客俎久空驚忽贖。
東道無辭信使頻、西隣幸有庖齏醜。

■ 【02-4-014】 凌虛台

才高多感激、道直無往還。
不如此台上、拳酒邀青山。
青山雖云遠、似亦識公顏。
崩騰赴幽賞、披豁露天慳。

落日銜翠壁、暮雲点煙鬢。
浩歌清興發、放意末礼刪。
是時歲云暮、微雪灑袍斑。
吏退跡如掃、賓來勇躋攀。
台前飛雁過、台上雕弓彎。
聯翩向空墜、一笑驚塵寰。

■ 【02-4-015】 和子由苦寒見寄

人生不滿百、一別費三年。
三年吾有幾、棄擲理無還。
長恐別離中、摧我鬢与顏。
念昔喜著書、別來不成篇。
細思平時樂、乃謂憂所緣。
吾從天下士、莫如与子歡。
羨子久不出、誦書虱生氈。
丈夫重出处、不退要当前。
西羌解仇隙、猛士憂塞壩。
廟謀雖不戰、虜意久欺天。
山西良家子、錦緣貂裘鮮。
千金買戰馬、百宝妝刀環。
何時逐汝去、与虜試周旋。

■ 【02-4-016】 司竹監燒葦園、因召都巡檢柴貽勗左藏、以其徒会獵園下

官園川葦留枯槎、深冬放火如紅霞。
 枯槎烧尽有根在、春雨一洗皆萌芽。
 黃狐老兔最狡捷、壳侮百獸常矜誇。
 年年此厄竟不悟、但愛蒙密争來家。
 風回焰卷毛尾熱、欲出已被蒼鷹遮。
 野人來言此最樂、徒手曉出歸滿車。
 巡邊將軍在近邑、呼來颯颯從矛叉。
 戍兵久閑可小試、戰鼓雖凍猶堪搗。
 雄心欲搏南澗虎、陣勢頗學常山蛇。
 霜乾火烈声爆野、飛走無路号且呀。
 迎人截來春逢箭、避犬逸去窮投置。
 擊鮮走馬殊未厭、但恐落日催棲鴉。
 弊旗仆鼓坐數獲、鞍掛雉兔肩分麕。
 主人置酒聚狂客、紛紛醉語晚更嘩。
 燎毛燔肉不暇割、飲啖直欲追羲媧。
 青丘雲夢古所咤、与此何啻百倍加。
 苦遭諫疏說夷羿、又被賦客嘲淫奢。
 豈如閑官走山邑、放曠不與趨朝衙。
 農工已畢歲云暮、車騎雖少賓殊嘉。
 酒酣上馬去不告、獵獵霜風吹帽斜。

■ 【02-4-017】 亡伯提刑郎中挽詩二首、甲辰十二月八日鳳翔官舍書

其一

才賢世有幾、廊廟忍輕遺。
公在不早用、人今方見思。
故山松鬱鬱、旧史印累累。
惟有同鄉老、聞名尚涕洟。

其二

揮手東門別、朱顏鬢未霜。
至今如夢寐、未信有存亡。
後事書千紙、新墳天一方。
誰能悲楚相、抵掌悟君王。

■ 【02-4-018】 寄題興州晁太守新開古東池

百畝新池傍郭斜、居人行樂路人誇。
自言官長如靈運、能使江山似永嘉。
縱飲坐中遺白蛤、幽尋盡處見桃花。
不堪山鳥号歸去、長遣王孫苦憶家。

■ 【02-4-019】 和董佖留別

粗繪大布裹生涯、腹有詩書氣自華。
厭伴老儒烹瓠葉、強隨舉子踏槐花。
囊空不弁尋春馬、眼乱行看挾婿車。
得意猶堪誇世俗、詔黃新濕字如鴉。

■ 【02-4-020】 記董佖論詩

■ 【02-4-021】 書所作字後

■ 【02-4-022】 跋醉道士圖

■ 【02-4-023】 題魯公書草

■ 【02-4-024】 驪山三絕句

其一

功成雖欲善持盈、可嘆前王恃太平。

辛苦驪山山下土、阿房纔廢又華清。

其二

幾變雕牆幾變灰、拳烽指鹿事悠哉。

上皇不念前車戒、卻怨驪山是禍胎。

其三

海中方士覓三山、萬古明知去不還。

咫尺秦陵是商鑑、朝元何必苦躋攀。

■ 【02-4-025】 華陰寄子由

三年無日不思歸、夢裏還家旋覺非。

臘酒送寒催去國、東風吹雪滿征衣。
三峰已過天浮翠、四扇行看日照扉。
里堠消磨不禁盡、速携家餉勞驂騑。

■ 【02-4-026】 華陰老嫗